

団体営土地改良総合整備事業樋口地区に先立つ緊急発掘調査

荒神山おんまわし遺跡

—第Ⅰ次・第Ⅲ次発掘調査—



1990

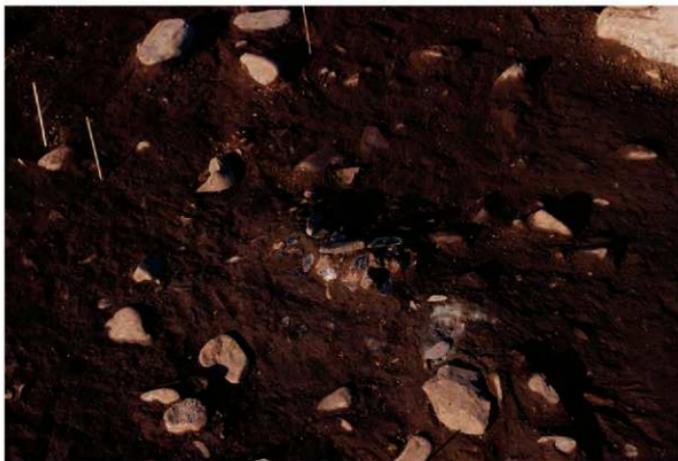
長野県辰野町教育委員会

29

荒神山おんまわし遺跡

1990

長野県辰野町教育委員会



第1号ブロック



第2号ブロック

卷頭図版2



第27号住居址



第26号住居址

卷頭図版 4



第2号周溝墓



第64号住居址(1)

卷頭図版 6



第64号住居址 (2)



第37号住居址出土遺物



第26号住居址出土遺物

卷頭図版 8



第64号住居址出土遺物

序

辰野町は、伊那谷の玄関口に位置し、北部では谷が迫り、山間部が面積の大半を占める地形となっています。しかし南部では天竜川の流れも大きく蛇行し、伊那谷の広がりを見せるようになります。

樋口地区は、この平野部が広がり始める荒神山の南麓地点に位置し「荒神山おんまわし遺跡」の名前が示すとおり、平安時代頃の牧の存在が推定されている地でもあります。さらには江戸時代に辰野町付近を治めていた、上伊那十三騎と呼ばれる土豪の騎馬大将である、樋口七郎右衛門が支配していた地域でもあります。

また、昭和48年度に、中央自動車道の建設に先立って行なわれた調査では、縄文時代中期の拠点的な集落が発見されたのをはじめ、弥生時代の集落が出土するなど、町内屈指の内容となる遺跡が発見されました。また、中世の居館跡も調査され、樋口七郎右衛門との関係が目まぐるしく注目されています。

今回、団体営は場整備事業に先立って実施された発掘調査の整理が進み、その成果が明らかになるにつれ、あらためてこの地域の歴史の深さを認識したところです。

現場作業を終え、その成果を公開できないまま既に20年を超える年月を経てしまいました。調査を行なった事さえも歴史の流れの中に埋もれようとしているかに見えませんが、その内容は色あせることなく、貴重な資料として人々の営みを語り続けています。

ようやく上梓することができたこの成果をぜひ活用していただき、未来に向かう力とさせていただきますよう、お願い申し上げます。

末筆になりましたが、関係各位のご努力により、報告書を刊行することができ、ようやく調査を終了することができましたことに、篤く感謝を申し上げます。

平成24年3月

辰野町教育委員会

教育長 古村 仁士

例 言

1. この報告書は団体営園地整備事業樋口地区に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字樋口2161番地他に所在する荒神山おんまわし遺跡第1次および第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は、第1次調査を平成元年6月15日から平成元年12月28日までと、平成2年6月12日から8月9日まで、第3次調査を平成3年5月27日から9月12日までの間現場の作業を行い、平成元年6月から平成24年3月26日までの間、遺物整理及び報告書の作成を断続的に実施した。
4. 発掘現場における記録は小木曾清・福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は大森淑子、上島直彦が行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、板倉裕子、大槻直子、大森淑子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、福島永が行った。なお、土器復原は福沢幸一氏にお願いした。
5. 石器実測のほとんどを、緊急雇用創出事業の補助金も得ながら、株式会社シン技術コンサルおよび株式会社ワイドに委託した。なお、角張淳一氏（株式会社アルカ）のご好意により、同氏のサンプリングによる石器の産地分析を、沼津工業高等専門学校の望月明彦氏に行なっていただくことができ、その成果を巻末に掲載することができた。
6. 調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会で保管している。

発掘調査関係者名簿

1. 荒神山おんまわし遺跡発掘調査団

調 査 団 長 友野良一（日本考古学協会会員・発掘担当者）

調 査 員 小木曾清（日本考古学協会会員・宮田村）

福島 永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）

発掘調査協力者 赤羽信雄、板倉たせ子、植村 翠、大貫勝也、大森淑子、長田作衛、垣内 諭、上島直彦、倉田 守、桑沢とよ子、小松祐二、城倉けさみ、茅野安男、中谷あき子、中谷雅美、根橋辰男、宮沢英子、松田あつ子、松田晴美、百瀬茂久、矢島郁夫、安川義教、山崎馨、山崎君男、山崎長雄、山崎誠、山崎良之助、福沢幸一

整理作業協力者 赤羽弘江、板倉裕子、宇治ひろあ、大槻直子、大森淑子、工藤信子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、田畑三千代、早川裕美子、平沢正子、村上茂子、矢島 尚

2. 辰野町教育委員会事務局（発掘調査当時）

教 育 長 小林晃一

社会教育課長 小松弘茂（～H. 元）三浦正義（～H. 2）赤羽武榮（H. 3～）

文 化 係 長 平泉栄一

文 化 係 三浦孝美・田畑幸雄・福島 永

目 次

序	
例 言	
第I章 位置と環境	1
1. 地形・地質	1
2. 歴史的環境	2
第II章 調査の契機と経過	6
1. 保護協議の経過	6
第III章 発掘調査	8
1. 調査の方法	8
第IV章 遺構と遺物	11
1. 住居址	11
2. 周溝墓	179
3. 土坑	191
4. 堅穴	192
5. 出土銭貨	197
6. 集石	197
7. 柱穴	199
8. 竈群	209
9. その他の遺構と遺物	288
第V章 まとめ	289
1. 各時代の成果と課題	289
2. 科学的分析	292
付 編	293
写真図版	301
報告書抄録	449
付 図	

挿 図 目 次

第1図	辰野町段丘画区分図	1	第46図	第3号住居址出土遺物(1)	53
第2図	荒神山のローム層	2	第47図	第3号住居址出土遺物(2)	54
第3図	遺跡位置図	3	第48図	第4号住居址遺構平面図	56
第4図	周辺道路分布図	5	第49図	第4号住居址出土遺物(1)	57
第5図	圃場整備事業前地形図	7	第50図	第4号住居址出土遺物(2)	58
第6図	調査区位置図	9	第51図	第4号住居址遺物出土状況図	59
第7図	樋口区周辺の弥生時代の遺跡	10	第52図	第5号住居址遺構平面図	61
第8図	第37号住居址遺構平面図	11	第53図	第5号住居址出土遺物(1)	62
第9図	第37号住居址出土遺物(1)	12	第54図	第5号住居址出土遺物(2)	63
第10図	第37号住居址出土遺物(2)	13	第55図	第5号住居址出土遺物(3)	64
第11図	第37号住居址出土遺物(3)	14	第56図	第6号住居址遺構平面図	65
第12図	第37号住居址出土遺物(4)	15	第57図	第6号住居址出土遺物	66
第13図	第37号住居址出土遺物(5)	16	第58図	第7号住居址遺構平面図(1)	67
第14図	第37号住居址遺物出土状況図	17	第59図	第7号住居址遺構平面図(2)	68
第15図	第42号住居址遺構平面図	18	第60図	第7号住居址出土遺物	68
第16図	第42号住居址遺物出土状況図	19	第61図	第8号住居址遺構平面図	70
第17図	第42号住居址出土遺物	20	第62図	第9号住居址遺構平面図	71
第18図	第23・24号住居址遺構平面図	22	第63図	第6・9号住居址出土遺物	72
第19図	第24号住居址出土遺物	23	第64図	第13号住居址遺構平面図	74
第20図	第25号住居址遺構平面図	24	第65図	第13号住居址出土遺物	75
第21図	第25号住居址出土遺物	25	第66図	第14号住居址遺構平面図(1)	76
第22図	第26号住居址遺構平面図	27	第67図	第14号住居址遺構平面図(2)	77
第23図	第26号住居址出土遺物(1)	28	第68図	第14号住居址出土遺物(1)	79
第24図	第26号住居址出土遺物(2)	29	第69図	第14号住居址出土遺物(2)	80
第25図	第26号住居址遺物出土状況図(1)	30	第70図	第15号住居址遺構平面図	81
第26図	第26号住居址遺物出土状況図(2)	31	第71図	第15・16号住居址出土遺物(1)	82
第27図	第27・28号住居址遺構平面図	32	第72図	第15号住居址出土遺物(1)	83
第28図	第27号住居址出土遺物	33	第73図	第15号住居址出土遺物(2)	84
第29図	第27号住居址出土遺物	34	第74図	第15号住居址出土遺物(3)	85
第30図	第27・28号住居址出土遺物(2)	35	第75図	第16号住居址遺構平面図	86
第31図	第27・28号住居址遺物出土状況図	36	第76図	第17号住居址遺構平面図	87
第32図	第29号住居址遺物出土状況図及び 遺構平面図	38	第77図	第17号住居址出土遺物(1)	85
第33図	第29号住居址出土遺物	39	第78図	第17・19号住居址出土遺物	89
第34図	第30号住居址遺構平面図	40	第79図	第18号住居址遺構平面図	90
第35図	第30号住居址出土遺物(1)	41	第80図	第18号住居址出土遺物	91
第36図	第30号住居址出土遺物(2)	42	第81図	第19号住居址遺構平面図(1)	92
第37図	第31号住居址遺構平面図	43	第82図	第19号住居址遺構平面図(2)	93
第38図	第31号住居址出土遺物	44	第83図	第20号住居址遺構平面図	94
第39図	第1号住居址遺構平面図	46	第84図	第20号住居址出土遺物	95
第40図	第1号住居址出土遺物(1)	47	第85図	第21号住居址遺構平面図	97
第41図	第1号住居址出土遺物(2)	48	第86図	第21号住居址出土遺物	98
第42図	第2号住居址遺構平面図(1)	49	第87図	第22号住居址遺構平面図	99
第43図	第2号住居址遺構平面図(2)	49	第88図	第22号住居址出土遺物	100
第44図	第2号住居址出土遺物	50	第89図	第23号住居址遺構平面図(1)	101
第45図	第3号住居址遺構平面図	52	第90図	第23号住居址遺構平面図(2)	102
			第91図	第23号住居址出土遺物(1)	103

第922图	第23号住居址出土遺物 (2).....	104	第140图	第62号住居址遺構平面図.....	156
第932图	第23号住居址出土遺物 (3).....	105	第141图	第62号住居址出土遺物.....	157
第941图	第23号住居址出土遺物 (4).....	106	第142图	第63号住居址出土遺物.....	158
第950图	第23号住居址出土遺物 (5).....	107	第143图	第63号住居址遺構平面図.....	159
第960图	第32号住居址遺構平面図.....	108	第144图	第63号住居址出土遺物.....	160
第970图	第32号住居址出土遺物.....	109	第145图	第62・63号住居址遺物出土状況図.....	161
第980图	第33号住居址遺構平面図.....	111	第146图	第64号住居址遺構平面図 (1).....	163
第990图	第33号住居址出土遺物.....	111	第147图	第64号住居址遺構平面図 (2).....	164
第1000图	第34号住居址遺構平面図.....	112	第148图	第64号住居址出土遺物 (1).....	166
第1010图	第34・35号住居址出土遺物.....	113	第149图	第64号住居址出土遺物 (2).....	167
第1020图	第35号住居址遺構平面図.....	114	第150图	第64号住居址遺物出土状況図.....	168
第1030图	第36号住居址遺構平面図.....	115	第151图	第65号住居址遺構平面図.....	169
第1040图	第36号住居址出土遺物.....	115	第152图	第65号住居址出土遺物.....	170
第1050图	第38号住居址遺構平面図.....	116	第153图	第66・67号住居址遺構平面図 (1).....	172
第1060图	第38号住居址出土遺物.....	116	第154图	第66号住居址遺構平面図.....	173
第1070图	第39・40号住居址遺構平面図.....	118	第155图	第66・67号住居址出土遺物.....	174
第1080图	第40号住居址出土遺物 (1).....	119	第156图	第65・66・67号住居址遺物出土状況図~175	175
第1090图	第40号住居址出土遺物 (2).....	120	第157图	第68・69・70号住居址出土遺物.....	176
第1100图	第39・40号住居址遺物出土状況図.....	121	第158图	第68・69号住居址遺構平面図.....	177
第1110图	第41号住居址出土遺物 (1).....	122	第159图	第61・69号住居址遺物出土状況図.....	178
第1120图	第41号住居址遺構平面図.....	123	第160图	第2号周溝墓出土遺物.....	179
第1130图	第41号住居址出土遺物 (2).....	124	第161图	第1号周溝墓遺構平面図.....	181
第1140图	第51号住居址遺構平面図.....	125	第162图	第2号周溝墓遺構平面図.....	182
第1150图	第51号住居址出土遺物 (1).....	126	第163图	第3号周溝墓遺構平面図.....	183
第1160图	第51・52号住居址出土遺物.....	127	第164图	第4号周溝墓遺構平面図.....	184
第1170图	第52号住居址遺構平面図.....	129	第165图	第5号周溝墓遺構平面図.....	185
第1180图	第53号住居址遺構平面図.....	130	第166图	第6号周溝墓遺構平面図.....	186
第1190图	第53号住居址出土遺物.....	131	第167图	第7・8号周溝墓遺構平面図.....	187
第1200图	第53・54号住居址出土遺物.....	133	第168图	第9・16号周溝墓遺構平面図.....	188
第1210图	第51・53号住居址遺物出土状況図.....	134	第169图	第10号周溝墓遺構平面図.....	189
第1220图	第54号住居址遺構平面図.....	135	第170图	第15号周溝墓遺構平面図.....	190
第1230图	第55・56号住居址遺構平面図.....	136	第171图	土坑遺構平面図 (1).....	193
第1240图	第57号住居址遺構平面図.....	138	第172图	土坑遺構平面図 (2).....	194
第1250图	第55・56・57号住居址出土遺物.....	139	第173图	第8号土坑出土遺物.....	194
第1260图	第57号住居址出土遺物.....	140	第174图	土坑遺構平面図 (3).....	194
第1270图	第54・57号住居址遺物出土状況図.....	141	第175图	竅穴遺構平面図.....	195
第1280图	第58号住居址遺構平面図.....	142	第176图	調査区内出土銭貨.....	196
第1290图	第59号住居址遺構平面図 (1).....	143	第177图	集石遺構平面図.....	198
第1300图	第59号住居址遺構平面図 (2).....	144	第178图	柱穴遺構平面図 (1).....	199
第1310图	第59号住居址出土遺物 (1).....	145	第179图	柱穴遺構平面図 (2).....	200
第1320图	第59号住居址出土遺物 (2).....	146	第180图	柱穴遺構平面図 (3).....	201-202
第1330图	第60号住居址遺構平面図.....	148	第181图	柱穴遺構平面図 (4).....	203-204
第1340图	第60号住居址出土遺物.....	149	第182图	柱穴遺構平面図 (5).....	205-206
第1350图	第59・60号住居址遺物出土状況図.....	150	第183图	柱穴遺構平面図 (6).....	207
第1360图	第61号住居址遺構平面図.....	152	第184图	柱穴遺構平面図 (7).....	208
第1370图	第61号住居址出土遺物 (1).....	153	第185图	第1号礫群遺構平面図.....	211-212
第1380图	第61号住居址出土遺物 (2).....	154	第186图	第2号礫群遺構平面図.....	213-214
第1390图	第62号住居址出土遺物.....	155	第187图	第2号礫群内遺物出土状況図.....	215

第188図	第2号礫群出土遺物分布図(因部割図)-----	216	第223図	第1号ブロック出土石器(5)-----	256
第189図	第2号礫群出土遺物分布図(1)-----	217	第224図	第2号ブロック出土石器(1)-----	257
第190図	第2号礫群出土遺物分布図(2)-----	218	第225図	第2号ブロック出土石器(2)-----	258
第191図	第2号礫群出土遺物分布図(3)-----	219	第226図	第2号礫群出土石器(1)-----	259
第192図	第2号礫群出土遺物分布図(4)-----	220	第227図	第2号礫群出土石器(2)-----	260
第193図	第1次調査北部調査区出土押型文(1)---	221	第228図	第2号礫群出土石器(3)-----	261
第194図	第1次調査北部調査区出土押型文(2)---	222	第229図	第2号礫群出土石器(4)-----	262
第195図	第1次調査北部調査区出土押型文(3)---	223	第230図	第2号礫群出土石器(5)-----	263
第196図	第1次調査北部調査区出土押型文(4)---	224	第231図	第2号礫群出土石器(6)-----	264
第197図	第1次調査北部調査区出土押型文(5)---	225	第232図	遺構外出土石器(1)-----	265
第198図	第1次調査北部調査区出土押型文(6)---	226	第233図	遺構外出土石器(2)-----	266
第199図	第1次調査北部調査区出土押型文(7)---	227	第234図	遺構外出土石器(3)-----	267
第200図	第1次調査北部調査区出土押型文(8)---	228	第235図	遺構外出土石器(4)-----	268
第201図	第1次調査北部調査区出土押型文(9)---	229	第236図	遺構外出土石器(5)-----	269
第202図	第1次調査北部調査区出土押型文(10)---	230	第237図	遺構外出土石器(6)-----	270
第203図	第1次調査北部調査区出土押型文(11)---	231	第238図	遺構外出土石器(7)-----	271
第204図	第1次調査北部調査区出土押型文(12)---	232	第239図	遺構外出土石器(8)-----	272
第205図	第1次調査北部調査区出土押型文(13)---	233	第240図	遺構外出土石器(9)-----	273
第206図	第1次調査北部調査区出土押型文(14)---	234	第241図	遺構外出土石器(10)-----	274
第207図	第1次調査北部調査区出土押型文(15)---	235	第242図	遺構外出土石器(11)-----	275
第208図	第1次調査北部調査区出土押型文(16)---	236	第243図	遺構外出土石器(12)-----	276
第209図	第3号集石直下出土押型文-----	237	第244図	遺構外出土石器(13)-----	277
第210図	第2号礫群出土土器(1)-----	238	第245図	遺構外出土石器(14)-----	278
第211図	第2号礫群出土土器(2)-----	239	第246図	遺構外出土石器(15)-----	279
第212図	第2号礫群出土土器(3)-----	240	第247図	遺構外出土石器(16)-----	280
第213図	遺構外出土器(1)-----	241	第248図	遺構外出土石器(17)-----	281
第214図	遺構外出土器(2)-----	242	第249図	遺構外出土石器(18)-----	282
第215図	遺構外出土器(3)-----	243	第250図	遺構外出土石器(19)-----	283
第216図	遺構外出土器(4)-----	244	第251図	遺構外出土石器(20)-----	284
第217図	遺構外出土器(5)-----	245	第252図	遺構外出土石器(21)-----	285
第218図	遺構外出土器(6)-----	246	第253図	遺構外出土石器(22)-----	286
第219図	第1号ブロック出土石器(1)-----	252	第254図	遺構外出土石器(23)-----	287
第220図	第1号ブロック出土石器(2)-----	253	第255図	B F - 6 試掘グリッド遺物出土状況図→	288
第221図	第1号ブロック出土石器(3)-----	254	第256図	B F - 6 試掘グリッド出土遺物-----	288
第222図	第1号ブロック出土石器(4)-----	255			

写真図版

- 図版1 遺跡遠景(1)／遺跡遠景(2)
図版2 第1次調査南区全景(1)
図版3 第1次調査南区全景(2)
図版4 第1次調査南区全景(3)／第1次調査北区
全景(1)
図版5 第1次調査北区全景(2)
図版6 第1次調査北区ピット群／平成2年度調査区
(1)
図版7 平成2年度調査区(2)／平成2年度調査区
(3)
図版8 第3次調査南区(1)／第3次調査南区(2)
図版9 第3次調査北区(1)／第3次調査北区(2)
図版10 第3次調査北区(3)／第3次調査北区(4)
図版11 第1号住居址
図版12 第2号住居址
図版13 第3号住居址
図版14 第4号住居址
図版15 第5号住居址／第6号住居址
図版16 第7号住居址／第8号住居址
図版17 第6・9号住居址／第13号住居址
図版18 第14号住居址
図版19 第15号住居址
図版20 第16号住居址／第17号住居址
図版21 第18号住居址
図版22 第19・20号住居址／第19号住居址
図版23 第20号住居址
図版24 第21号住居址
図版25 第23・24・34号住居址／第23号住居址
図版26 第24号住居址
図版27 第25号住居址
図版28 第26号住居址(1)
図版29 第26号住居址(2)
図版30 第27・28号住居址(1)
図版31 第27・28号住居址(2)
図版32 第27・28号住居址(3)
図版33 第29号住居址／第30号住居址(1)
図版34 第30号住居址(2)
図版35 第30号住居址(3)
図版36 第31・32・33号住居址
図版37 第31号住居址
図版38 第32号住居址／第34号住居址
図版39 第36号住居址
図版40 第37号住居址(1)
図版41 第37号住居址(2)
図版42 第38号住居址
図版43 第40号住居址(1)
図版44 第41号住居址
図版45 第42号住居址(1)
図版46 第42号住居址(2)
図版47 第51号住居址
図版48 第52号住居址
図版49 第53号住居址
図版50 第54号住居址
図版51 第55号住居址／第55・56号住居址
図版52 第56号住居址
図版53 第57号住居址
図版54 第57・61号住居址(1)
図版55 第57・61号住居址(2)
図版56 第58号住居址
図版57 第59号住居址
図版58 第60号住居址
図版59 第62号住居址
図版60 第63号住居址
図版61 第64号住居址(1)
図版62 第64号住居址(2)
図版63 第65号住居址
図版64 第66・67号住居址
図版65 第68号住居址
図版66 第69号住居址
図版67 周溝墓
図版68 周溝墓・集石
図版69 第1号礫群
図版70 第2号礫群
図版71 土坑(1)
図版72 土坑(2)
図版73 第37号住居址(1)
図版74 第37号住居址(2)
図版75 第37号住居址(3)
図版76 第42号住居址／第42号住居址付近出土縄文土
器／第42号住居址
図版77 第24号住居址出土遺物(2)／第25号住居址
出土遺物
図版78 第26号住居址
図版79 第27号住居址／第28号住居址
図版80 第29号住居址／第30号住居址(1)
図版81 第30号住居址出土遺物(2)／第31号住居址
出土遺物／第32号住居址出土遺物／第2号周
溝墓出土鉄剣
図版82 第1・2号住居址
図版83 第3号住居址
図版84 第4号住居址／第5号住居址(1)
図版85 第5号住居址(1)

- 図版86 第5号住居址(2)/第5号住居址(3)
図版87 第6号住居址/第7号住居址
図版88 第8号住居址/第9号住居址
図版89 第13号住居址
図版90 第14号住居址
図版91 第16・17・18号住居址
図版92 第19号住居址/第20号住居址
図版93 第21号住居址/第22号住居址
図版94 第23号住居址(1)
図版95 第23号住居址(2)
図版96 第23号住居址(3)
図版97 第33号住居址
図版98 第34・35・38号住居址
図版99 第36号住居址/第41号住居址(1)
図版100 第41号住居址(2)
図版101 第42号住居址
図版102 住居址出土鉄器
図版103 第51号住居址
図版104 第52号住居址/第54号住居址/第55号住居址
図版105 第53号住居址
図版106 第56号住居址/第57号住居址
図版107 第59号住居址
図版108 第60号住居址
図版109 第61号住居址(1)/第62号住居址(1)
図版110 第61号住居址(2)/第62号住居址(2)
図版111 第63号住居址
図版112 第64号住居址(1)
図版113 第64号住居址(2)
図版114 第65号住居址/第66号住居址/第67号住居址/第68号住居址/第69号住居址
図版115 縄文時代早期土器(1)
図版116 縄文時代早期土器(2)
図版117 縄文時代早期土器(3)
図版118 縄文時代早期土器(4)
図版119 縄文時代早期土器(5)
図版120 縄文時代早期土器(6)
図版121 縄文時代早期土器(7)
図版122 縄文時代早期土器(8)
図版123 縄文時代早期土器(9)
図版124 縄文時代早期土器(10)
図版125 縄文時代早期土器(11)
図版126 縄文時代早期土器(12)
図版127 縄文時代早期土器(13)
図版128 縄文時代早期土器(14)
図版129 縄文時代早期土器(15)
図版130 縄文時代早期土器(16)
図版131 縄文時代早期土器(17)
図版132 縄文時代早期土器(18)
図版133 縄文時代早期土器(19)
図版134 縄文時代早期土器(20)
図版135 縄文時代早期土器(21)
図版136 縄文時代早期土器(22)
図版137 縄文時代早期土器(23)
図版138 縄文時代早期土器(24)
図版139 第1号ブロック
図版140 第2号ブロック/雑群出土石器(1)
図版141 雑群出土石器(2)/遺構外出土石器(1)
図版142 遺構外出土石器(2)
図版143 遺構外出土石器(3)
図版144 遺構外出土石器(4)
図版145 遺構外出土石器(5)
図版146 産地分析試料

第I章 位置と環境

1. 地形・地質

(1) 地形

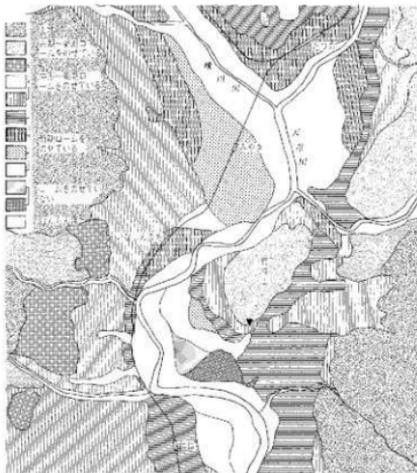
辰野町は、長野県のほぼ中央部、北は松本平、東は諏訪盆地に接し、西は木曾山脈を経て木曾谷へと通じる南北約70kmの伊那谷の最北部に位置する。町内を取り囲む山は、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳(標高2,296.3m)より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境にして南部は標高700m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町でも最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれた最低部を、南北に町を縦断するように南流している。また、天竜川の西部では、横川川や、町内の天竜川の支流としては横川川に続く流路距離を誇る小横川川の上流部に、横川渓谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでおり、下流では川幅がひろがって小規模な谷底平野・段丘・崖錐が発達している。さらに、西山の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に楡沢山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

さらに、辰野町の境界付近を含む権兵衛峠～経ヶ岳～牛首峠～善知鳥峠の連なりは南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

また、辰野町のほぼ中央部に位置する荒神山は、その両側を河川の浸食によって削り取られた、いわゆる残丘で、天竜川はこの残丘の西部を迂回するように南流している。このため、山麓には小規模ながら河岸段丘が発達しており、大きく4段(南麓は詳細には6段)に区分することができる。

今回調査を実施した荒神山おんまわし遺跡は、この荒神山の南麓、天竜川左岸の段丘のいわゆる木の下段丘2または羽場駅面とされるものと、木の下段丘3または下田a面と呼ばれる、第2・第4段丘面に立地しており、現在は水田として利用されている。発掘区の標高は、低位面で704m、高位面で約710mであり、天竜川との比高は約10m～14mである。



第1図 辰野町段丘面区分図

(2) 地質

長野県は東部にフォッサマグナが存在し、その西縁には日本を代表する大断層である糸川-静岡構造線がはしっている。また、南部には中央構造線が東西に縦走り、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯、いわゆる領家帯の東端部にあたる。このため、赤石山地は辰野町南部で途切れ、木曾山脈の花崗岩についても辰野町付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁部で形成された堆積岩を基層とし、その上部に領家花崗岩がのり、その後、諏訪湖ができる以前に流入してきた、いわゆる塩嶺累層と呼ばれる礫層や、辰野地域南部からのいわゆる赤羽層や唐沢礫層といった礫が流入した。なお、塩嶺累層が不整合に赤羽累層や唐沢累層を覆っている様子が町内各地で観察されている。その後、霧ヶ峰方面の火山活動が活発化し、溶岩や火砕流、土石流が流入し、この地域の地質的な構造ができあがった。

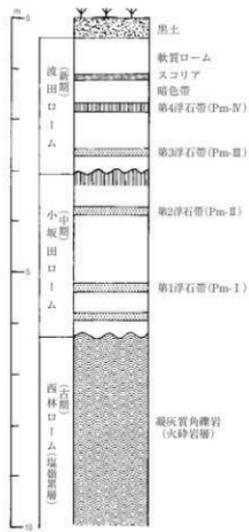
また、南方プレートや、東方プレートの押し寄せる力によって隆起を始めた木曾山脈や赤石山脈の衝突境界としての構造盆地として形成された町中央部の谷に、約20万年前に急上昇した木曾山脈を中心とした砂礫が堆積して現在の平地を形成している。辰野地域ではこの堆積層は浅く、100m未満といわれている。

また、伊那谷は西部や東部の山麓に大きな断層が走っており、辰野町内でも各所において断層地形や、露頭による観察が行われている。代表的なものとしては上島、宮所、高畑、天狗坂、赤洗地籍を結ぶ赤洗断層や、唐木沢、上辰野、下辰野公園を結ぶ上辰野断層等があげられる。これらの断層の中でも、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層群」と呼ばれ、昭和4年に春日琢美によって新町区の上水道水源地の掘り割り地点で、テフラ層が山地側に約2.3m上昇している断層が観察されたのをはじめ、後山地籍においては断層によって尾根が孤立し、稜塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西側の明神山に古い扇状地が活断層によって持ち上がった様子が確認されるなど、多くの断層が存在することをうかがわせている。

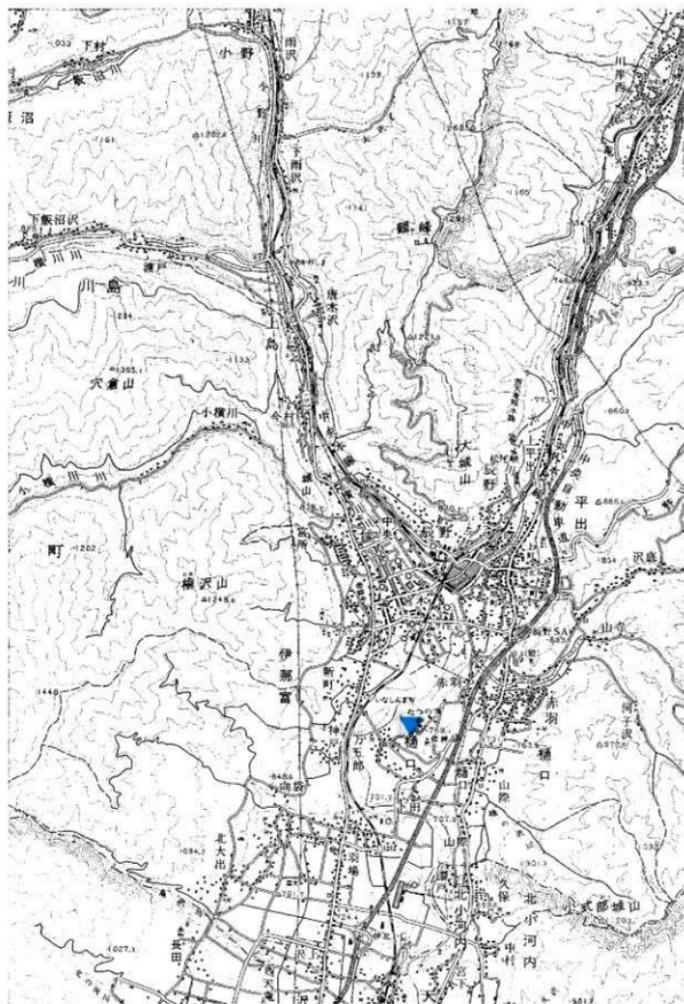
なお、横川川や小横川川は奈良井川と同様に北に流れる川であったものが、断層の横ずれによって南流するようになった様子が流路や地形から何うことができる。

また、辰野町のほぼ中央付近に位置する荒神山は上伊那北部の高位段丘荒神山面の模式地として知られている。荒神山は荒神山火砕岩層とも呼ばれるいわゆる塩嶺累層の上に、古期～新期の風成テフラが覆っている。

遺跡の立地する樋口区下田耕地は前述のとおり荒神山の南麓に位置しており、これらのテフラの内、新期テフラの上層を若干乗せている第2段丘面を最高地点として、テフラを全く乗せていない第4段丘面までわたって展開している。このうち、第2段丘面からは、縄文時代早期の押型文が集中して出土している。



第2図 荒神山のローム層 (原田 清水 1982)



第3図 遺跡位置図

2. 歴史的環境

荒神山おんまわし遺跡の存在する樋口地区は町内でも有数の遺跡密集地帯である。特に弥生時代の遺跡は今回調査を実施した荒神山おんまわし遺跡をはじめ、中央自動車道の建設に先立って発掘調査が実施された樋口五反田遺跡や樋口内城遺跡等があげられる。

樋口五反田遺跡(186)は、前述のように昭和47・48年に中央自動車道の建設及び、圃場整備事業に先立って調査が実施され、縄文時代中期後半の住居址8基をはじめ、後期前半の土器片や土偶、晩期後半の配石墓16基等が出土し、配石墓内からは火熱をうけた鹿角片が出土している。また、弥生時代後期の遺構として、住居址24基が出土したほか、時期を前後して2基の方形周溝墓が発見されている。また、C16号住居址からは0.6m程の炭化米が出土し、石包丁の出土と共に米作りとの関係が注目された。一方C4号、C16号住居址の炉内からは、火熱をうけたシカ、イノシシ、カモシカ、シバイヌの骨片が出土している。ほかに古墳時代の住居址1基が出土している。また、この一帯の地名は元禄3年(1690)の検地帳に「五反田」「八反田」「村前」「山きわ」「矢沢」「窪畑」等がみえ、農地の開発は古くから行われていたらしく、昭和63年の試掘調査でも新旧3枚の水田面が確認されている。

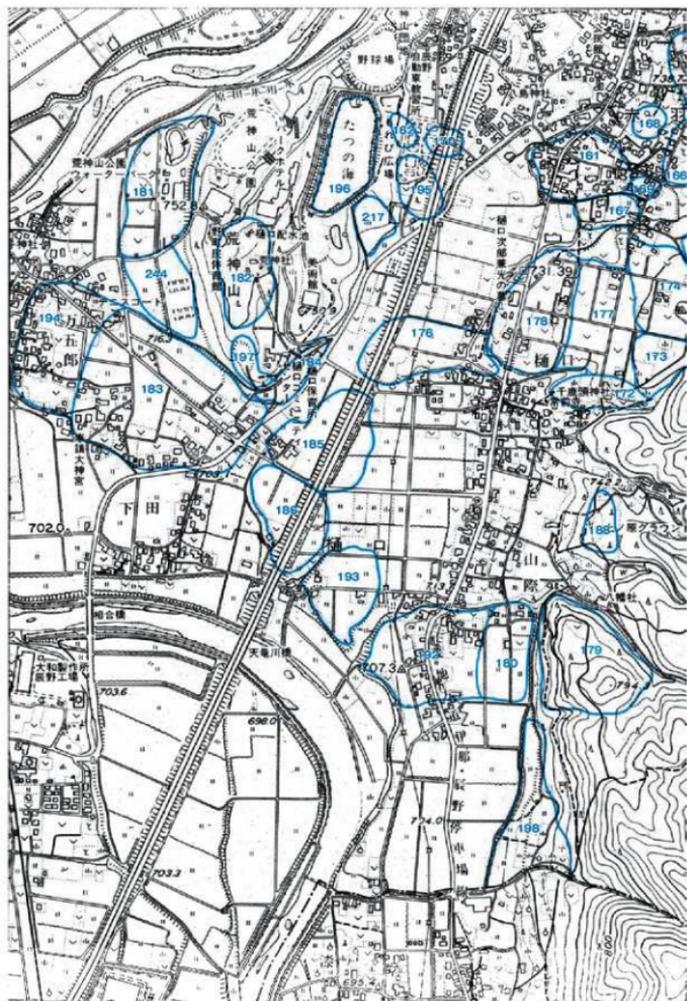
荒神社矢沢遺跡(185)は樋口五反田遺跡と樋口内城遺跡の間に存在し、中央自動車道建設事業の際発掘調査され、縄文時代中期の4基の住居址が確認されたが、この内、新橋線寄りの方の3基は地形的にも時期的にも樋口五反田遺跡に含まれると考えられる。なお、調査時の所見として遺跡内の土層は灰褐色粘質土が厚く堆積していたり、腐食質の粘質土があったりして、湿地帯の特徴をよく示していたという興味深い報告がある。

樋口内城遺跡(176)は矢沢原の扇状地から西へ続く舌状の段丘上にあり、中央自動車道建設及び、圃場整備事業に先立って実施された調査によって、縄文時代中期の住居址57基、同土坑85基、弥生時代の住居址66基が発掘され、町内の遺跡としては最大規模の集落調査となっている。特に弥生時代の第5号住居址出土の炭化ムギの存在は樋口五反田遺跡の炭化米とは対照的である。また、柱状片刃石斧や、偏平片刃石斧、磨製石鎌や、その未成品等も出土している。磨製石鎌の出土は樋口地区でもこの遺跡に限られており、他の弥生時代の遺跡との関係についても注目される遺跡である。さらに古墳時代の住居址2基、平安時代の住居址8基も出土している。また、中世の城館跡をほぼ完備している事例としても注目される遺跡で、矢沢原を掘り区画し、段丘の南北に腰郭が作られた本格的な居館址で、地下式坑や、堅穴建物、柱穴列等が検出され、礎石と考えられる石も検出されている。また、内耳土器・天目茶碗といった15世紀～16世紀代を中心とした遺物も出土している。

八反田遺跡(192)は、樋之沢川左岸の段丘状にあり、圃場整備事業中に弥生時代後期の埋炭炉が多数発見され、大規模な集落址である事が確認された。

矢沢原遺跡群は南を矢沢川、北を板橋川、二洞川によって挟まれた25haに及ぶ広大な扇状地に、富士浅間(174)、矢沢原(177)、矢沢西原(178)、宮の窪(173)、千鹿頭白山(172)の5遺跡が密集している。原始・古代の各時代と、中世以降の遺物など多数が採集されている。このうち、富士浅間遺跡では、個人住宅用地の造成に先立って試掘調査を行っているが、耕作地の区画整理事業が行われていたようで、遺構・遺物等は確認できなかった。しかし、矢沢遺跡では、老人健康保健施設の建設に先立っての発掘調査によって、古墳時代や平安時代の住居址、落し穴等が出土し、遺跡群の中でも区画整理時に破壊を免れている地点があることが判明している。

また、今回調査を実施した荒神山おんまわし遺跡は、板橋川をはさんで樋口五反田遺跡の西側段丘上に広がる大きな遺跡で、昭和初期の区画整理事業では平安時代末期の土器敷点が採集されている。



第4図 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 調査の契機と経過

1. 保護協議の経過

辰野町は、伊那谷の中でも圃場整備事業が始まるのが遅く、昭和61年度に、今村地籍の圃場整備が行われたのを皮切りに、本格的な開発ラッシュが始まった。

昭和60年9月に開かれた埋蔵文化財保護検討会では、樋口区下田の圃場整備事業及び引道と地-辰野線整備事業が計画されていることが判明した。これに対して、同年12月に辰野町教育委員会は町農政課に対して圃場整備事業予定地内には荒神山おんまわし遺跡他4遺跡が含まれており、事前の試掘調査が必要である旨を回答している。

昭和61年7月には「昭和62年度の農業基盤整備事業に係わる埋蔵文化財について」長野県教育委員会からの通知を受けて照会したところ、団体営土地改良総合整備事業として、樋口地区約50,000㎡の開発について回答がよせられた。この回答によると、昭和62年7月から昭和63年にかけて事業を実施する計画であった。しかし、昭和61年9月2日に長野県教育委員会文化課、考古学研究者の友野良一氏をまじえての保護協議により、昭和62年度の事業地区に埋蔵文化財が存在していなかったことが確認された。しかし、昭和63年度以降の工事予定地域については、遺跡の分布範囲が含まれており、遺跡の存在する可能性が高い地域であることから、試掘調査を実施して遺跡の状況を把握した後に、再度協議を行うことで合意した。なお、発掘通知（法第57条3）は昭和62年4月13日付で町農政課から提出されている。また、昭和62年10月1日から昭和63年3月25日までと、昭和63年5月から6月にかけて、昭和63年度に事業を実施する予定の地区について試掘調査を実施した。その結果、樋口五反田遺跡の範囲内と考えられた昭和63年度工事実施区域は板橋川の氾濫原上を水田化した地点であり、遺跡は確認されなかった。そのため、本調査は実施していない。

昭和63年6月30日に長野県教育委員会から送付された「昭和64年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財について」の通知文書に対し、辰野町農政課から、平成元年7月から平成2年3月までの予定で、約60,000㎡の「団体営土地改良総合整備事業（区画整理型）樋口地区」の計画が提出され、同年8月20日に3者による保護協議を実施した。その結果、平成元年度事業対象地区内には、荒神山おんまわし、窪畑、荒神社矢沢の3遺跡約56,000㎡が存在しており、まず開発範囲すべてに試掘調査を実施し、範囲内の遺跡の存在を確認した後、設計変更を検討した上で、実施設計上の掘削部分について本調査を実施することとした。

翌平成元年5月8日から試掘調査を実施した結果、当該年度の対象地域のほぼ全面に遺跡が分布することが判明し、計画設計図面上の盛土地点と切り盛りなしとされた部分（表土除去のみとの確認済）を除き、全面本調査を実施することとした。なお、遺跡の概要が判明した5月31日には、樋口中央公民館において試掘調査の概要と今後の調査方針について説明会を実施している。

また、平成2年にはいって圃場整備の実施箇所に変更があり、新たに樋口字2237番地の1,487㎡が整備対象地区となった。このため同年3月26日に発掘届が提出されたのを受け、掘削部分について6月12日より本調査を実施している。

さらに、同年6月11日付の「平成3年度の農業基盤整備事業等に係わる埋蔵文化財の保護について」の報告が辰野町農政課より7月12日付で提出された。この報告によると、「団体営土地改良総合整備事業 万五郎地区」

1. 保護協議の経過

として、工事対象面積49,000㎡を平成3年8月～平成4年3月の予定で実施する計画であった。これを受けて平成2年10月22日に長野県教育委員会の指導主事を招いて3者での保護協議を実施している。この席上で、この事業が大きく土を動かすことがなく、区画整理程度であることが判明し、地下の遺構に影響がないと判断され、掘削地点および、ルートの変更、および新設される道路の部分について調査対象とし、試掘調査を実施することとなった。翌年の平成3年4月10日には再度辰野町農政課と町教育委員会で保護協議を実施し、試掘調査にむけての調整を行い、4月19日～5月18日の間試掘調査を行った。なお調査中の4月23日には万五郎公民館において遺跡調査についての地元説明会を行っている。5月18日に試掘調査が終了したため、同月24日に再度保護協議を実施し、掘削部と、道路予定地区の東部において遺構が発見されたため、本調査が必要であることを説明している。この協議を受けて、5月27日より本調査を開始している。また、同事業地内において存在している、下田遺跡内の農道部分においても遺構が発見されたため、本調査を行うことも説明した。



第5図 圃場整備事業前地形図 (S=1/5,000)

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の方法

荒神山おんまわし遺跡は、荒神山の南山裾から天竜川の第2段丘までのおよそ7.6haにわたる遺跡であり、弥生時代の密集する樋口地区に存在することもあって、遺跡の規模の大きい事が予想された。このため、従来から当町で実施しているグリッドによる試掘調査法によって遺跡の内容を確認する事とした。第Ⅰ次調査の保護協議では、計画図面しか農政課から提示されなかったため、開発対象地区のすべてにわたって試掘坑を開坑し、第Ⅲ次調査の際の保護協議では、掘削箇所が判明していたため、遺跡の破壊が懸念される地点のみ試掘調査を実施している。

試掘坑は100mに2m×2mの1グリッドの試掘坑を基本として設定し、必要と判断された地区には随時試掘箇所を増設していった。試掘はすべて手掘りで行い、それぞれ北壁と西壁について土層断面の測量を実施し、遺構が確認された地点においては、必要に応じて平面図を作成した。試掘調査は第Ⅰ次調査地点は平成元年5月8日から同年6月14日まで実施し、この結果を基にして実施設計図の切り盛りと照らしあわせ、破壊が懸念される地点について本調査を実施する区域を設定し、第Ⅲ次調査地点では平成3年4月19日から同年6月29日まで試掘調査実施し、調査範囲を絞り込んだ。本調査は、第Ⅰ次調査地点は平成元年6月17日より実施し、実施箇所変更地点（2237番地）については試掘調査を行わず、直接本調査を平成2年6月12日より行っている。第Ⅲ次調査地点は平成3年5月27日より実施した。

本調査は重機により耕作土を除去し、その後さらに掘削の必要が生じた地点については、再度重機によって掘削を行っている。遺構検出面が現れたところで、ジョレン等を使用して遺構検出作業を行い、遺構が確認された時点からは移植ゴテ等を使用して掘り下げた。

遺構の調査時には住居址等には土層観察あぜを設定し、土坑については半割して土層を確認しながら掘り進め、掘り上がった遺構から実測図を作成し、記録につとめた。

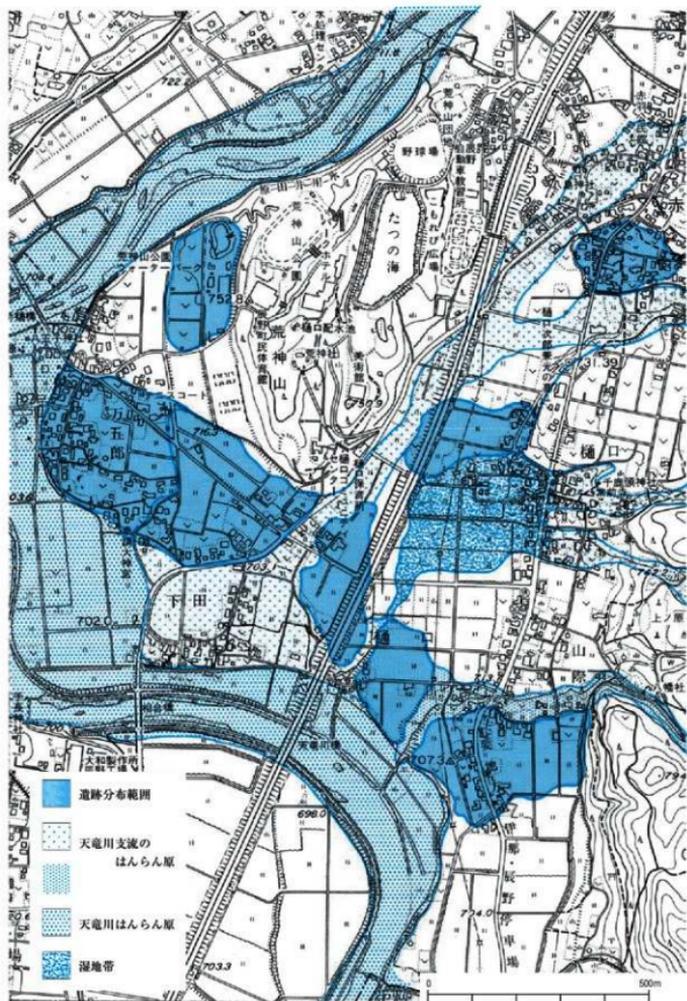
出土遺物の取り上げ、遺構平面図の作成に際しては磁北を基準線として任意に設定した2m×2mのグリッドを基準として行い、必要に応じて写真撮影等を行った。遺構測量は、1/20の平板測量を基本とし、遺構によってはピンボールに水系を張り、1/10の簡易造り方測量を実施している。

遺物整理段階では遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡名（略称、荒神山おんまわし遺跡第Ⅰ次調査：KOM-I、同第Ⅲ次調査：KOM-Ⅲ）と遺物番号を記註した。

現場での写真撮影には一眼レフカメラを2台使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影にはデジタル一眼レフカメラを使用した。



第6図 調査区位置図 (S=1/2,500) (註: 第1次調査、網: 第2次調査)



第7図 樋口区周辺の弥生時代の遺跡 (『原野町誌歴史編』1990)

第IV章 遺構と遺物

1. 住居址

(1) 縄文時代

第37号住居址 (第8図、第14図)

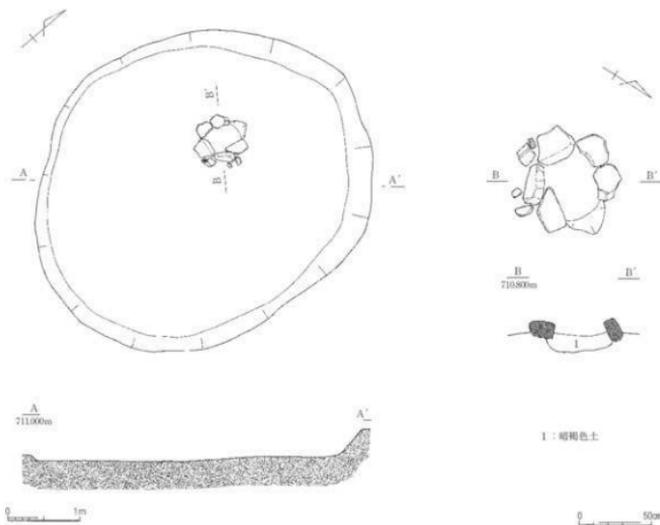
この住居址はC L-15より検出されている。遺構検出作業中に、縄文土器が集中して出土している地点があり、調査を進めた所、住居址となった遺構である。プランは4.2m×5.0mの楕円形で、深さは約30cmを測る。遺構内からはおびただしい数の遺物、礫が出土し、土層断面図を記録することができなかった。なお、床面には明確な硬化面を検出する事はなかった。

炉は住居址中央部やや北寄りから出土し、直径20cm～30cm程度の礫を使用して円形に築かれていた。

遺物 (第9図～第13図)

総じて縄文時代中期中葉末期の遺物であるが、前期末葉の土器片や中期初頭と考えられる土器片も混入している (第12図22、第13図24・27)。

この住居址で器形が判明した土器は第10図7・11～13、第11図1・2であり、多くは破片資料であった。



第8図 第37号住居址遺構平面図

第V章 遺構と遺物

第10図2～3は半載竹管状工具による平行沈線を横位に施文した後に、その間を縦位の平行沈線を密接に引いている。また、3には縦位の隆帯も見られる。第10図11は口縁部を無文とし、頸部には粘土紐により波状文を、体部には縦位の平行沈線を施文している。

この沈線を施文した後に、隆帯による曲線文が貼付されている。口縁部上端部から貼付された隆帯上にはキザミが施され、先端は渦巻き文で構成されている。これらの土器は若干時期が新しくなる可能性もある。そのほか、第11図3・8、第13図1・5・13の破片も同時期と考えられる。

5～7は中期中葉末期の土器と考えられる。横位の文様区画を基本とし、口縁部に粘土紐をU字状に貼り付け、その周辺を粘土紐や、沈線によって梯子状の文様を充填している。その下部には縦位の沈線の施文や、斜格子状に粘土紐を貼り付けている。7の体部下には、粘土紐によるU字文や斜格子、梯子状の文様が施され、口縁部には8ヶ所小突起が作り付けられている。他に、第11図5も同類と考えられる。

8～10、13・14はいわゆる櫛形文の土器である。8は口縁部の破片であるが、矢羽根状に粘土紐を貼り付けた突起を区画とした、褶曲文がみられる。また、13は口縁部には粘土紐で構成された格子目文があり、体部には粘土紐を縄状に巻いて橋状に貼り付けた把手が作られている。14は口縁部上部に無文部を残した土器で、隆帯で区画した中を平行沈線で充填している。体部の張りも弱く、直線的に底部に向かう器形である。文様も、体部に無文部を持ち、その上部の文様帯は縦位の隆帯によって区画された内部に丸みを帯びたX字状の隆帯を貼り付けた後に平行沈線文を充填している。この土器は他の土器とは異なるタイプと考えられる。褶曲文の施された土器片は他に第11図6・9・10、第12図10、第13図2と考えられ、櫛形文をもつ破片は第11図12～15である。

第10図12は箱形大型把手を持つ土器である。住居址の床面から破片で出土し、復原したが、把手2個と、体部が1/3個程度出土したにすぎない。口縁部は太い粘土紐を貼り付け、立体的に作られているのに対して、体部は縦位の平行沈線で施文されている。

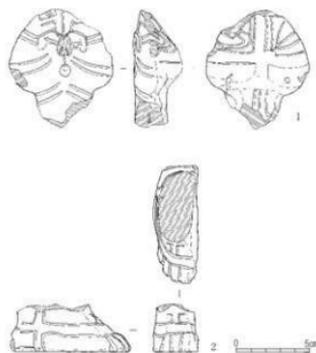
第11図1は4ヶ所に振幅の大きな波状口縁を持つ土器で、北裏c式の影響がうかがえる。なお、体部には櫛形文が施文されている。また、第12図1の把手は同一個体の可能性がある。

第11図2は、剥離が激しいものの、口縁部には粘土紐によって縦位文や曲線文が施されている。曲線文内には横位の単線が貼り付けられ、梯子状の文様としている。体部下には櫛形文ではなく、縦位の沈線文が施文されている。

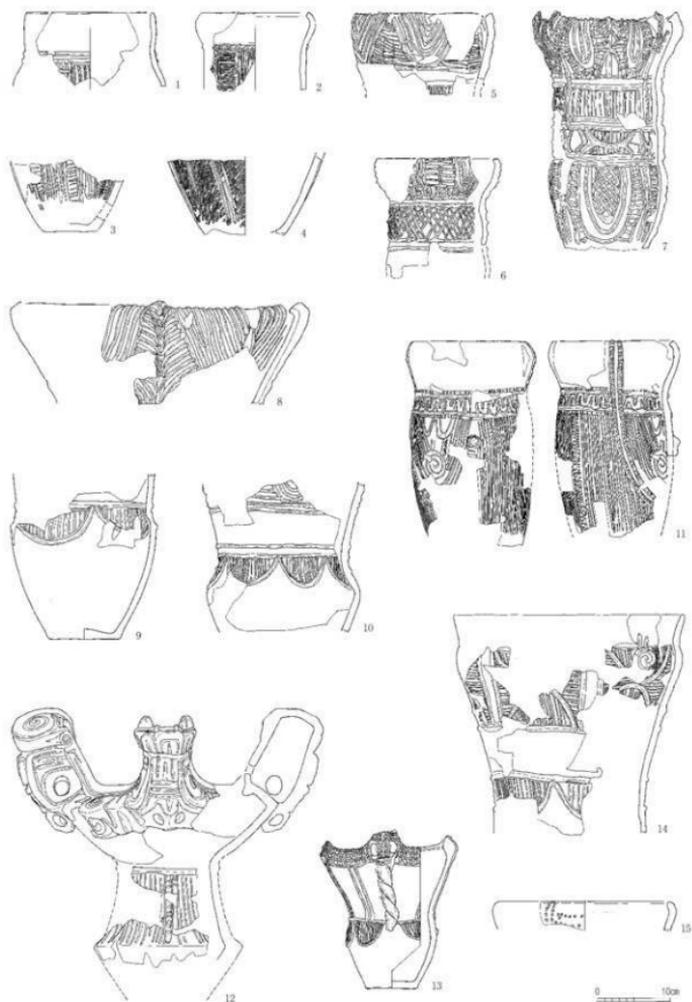
第10図15は、列点状に刺突文が施されている。

第12図3・7は棒状の工具を使用して連続刺突文を施文している。曲線の隆帯を貼付した後に、その脇に兩垂れ状に連続して刺突を加えている。また、7の体部には縦位に密接に充填されている。

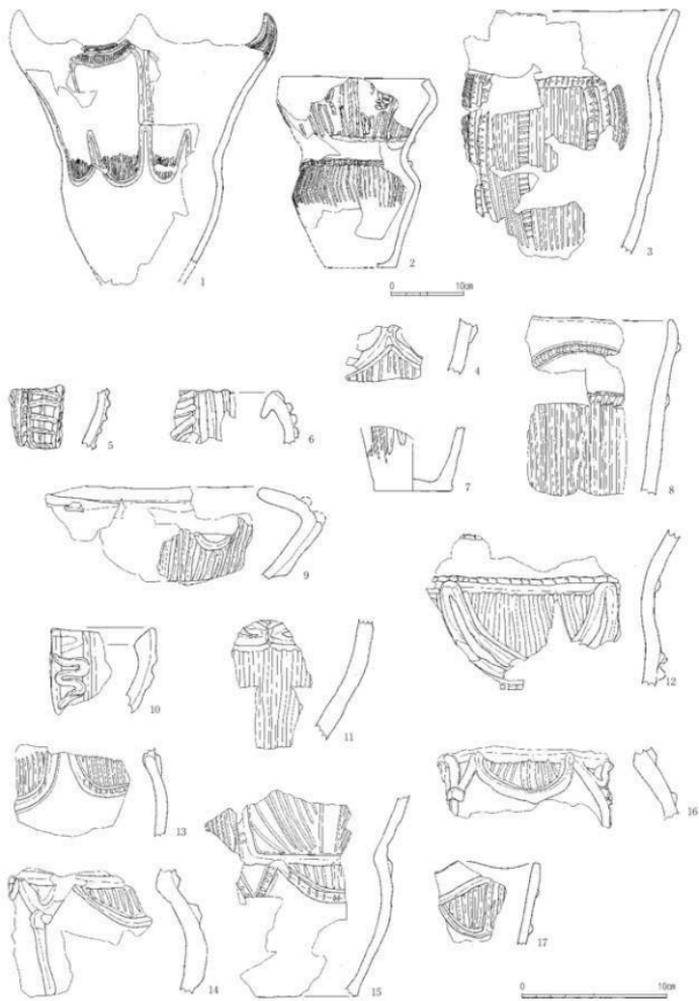
そのほか、半載竹管状工具による押引文が施文された土器片(第12図4・15・17・21)や、隆帯により蕨手状の文様を施文した破片(第13図10・18)も見られる。



第9図 第37号住居址出土遺物(1)



第10图 第37号住居址出土遗物(2)

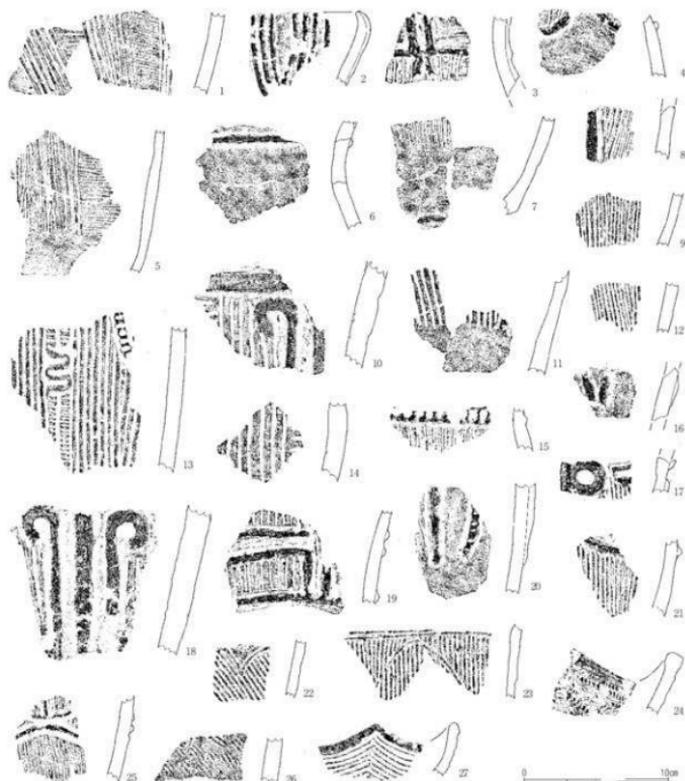


第11図 第37号住居址出土遺物(3)(1・2・5-16)

1. 住居址

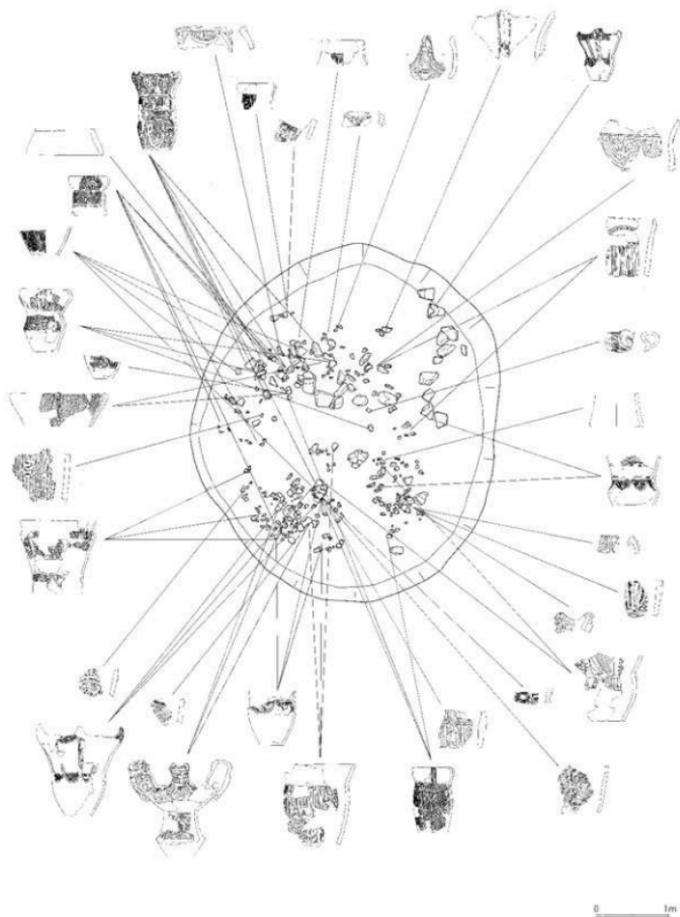


第12图 第37号住居址出土遗物(4)



第13図 第37号住居址出土遺物 (5)

第9図1・2は土偶である。1の顔部は、頭部に膨らみを持ち、顔は平面的に作られている。この平面的な顔の目と鼻の部分に粘土紐を貼付して膨らみをもたせ、口は刺突によって表現している。2の足部は踵の部分が欠損している。沈線によって指先と考えられる表現がなされている。



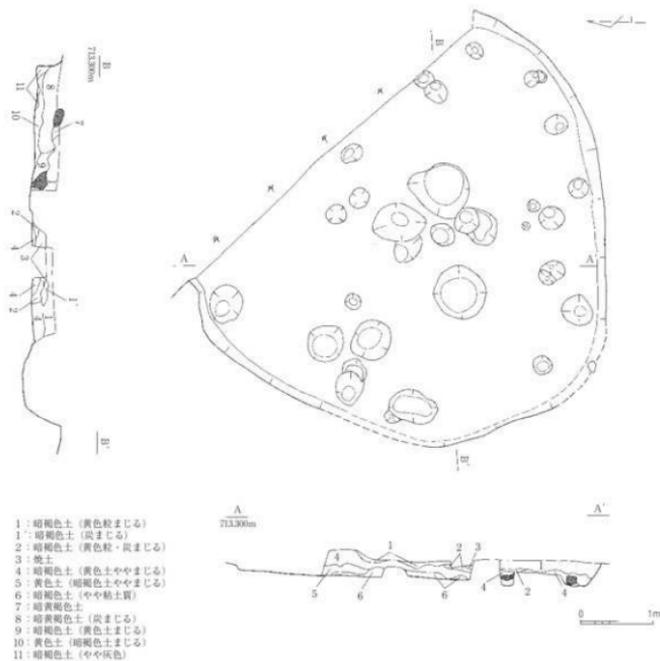
第14图 第37号住居址遺物出土状況图

第42号住居址 (第15図、第16図)

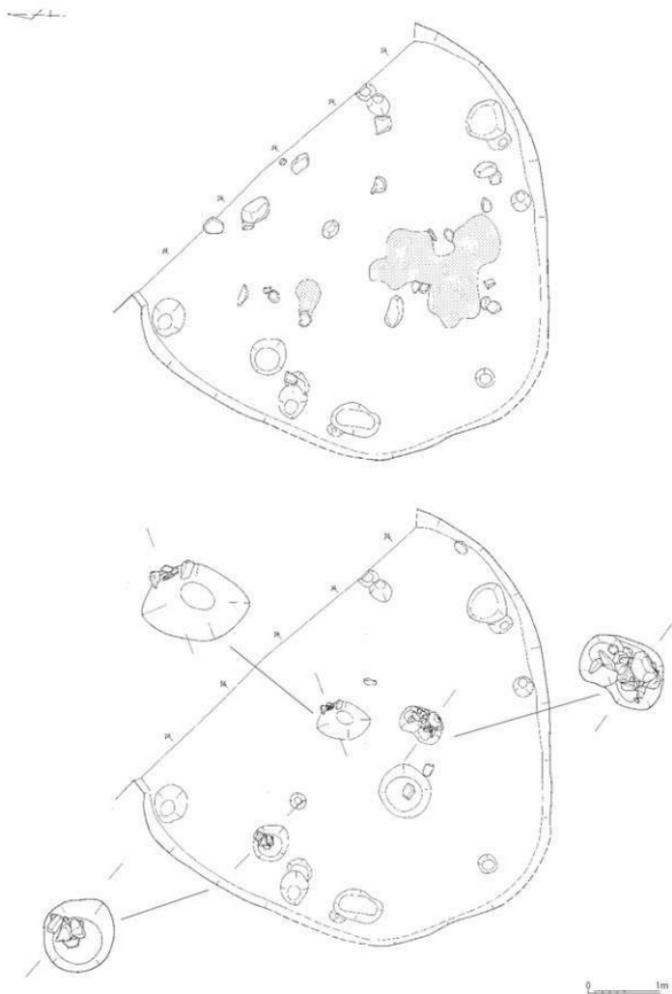
この住居址はBG-39より出土している。黒色土内での検出のため、プランが把握できず、規模を明確にできなかった。このため、住居址として取り扱うのが適当なのか判断に迷うが、壁の周囲にピットが検出され、縄文土器も出土するなど住居の要素も見られるため、縄文時代の住居址として掲載した。住居址中央部付近に、石と土器が出土しており (図版46) ここが炉の可能性が高いが明確にできなかった。

遺構検出中には焼土や礫が出土し、周辺からは器形の復元できる土器 (第17図9・10) も検出された。なお、土器の出土する地点を重複した住居址として遺構番号を付し、調査を行ったが、プランを把握できず、下層からは土坑が検出されたのみであった。

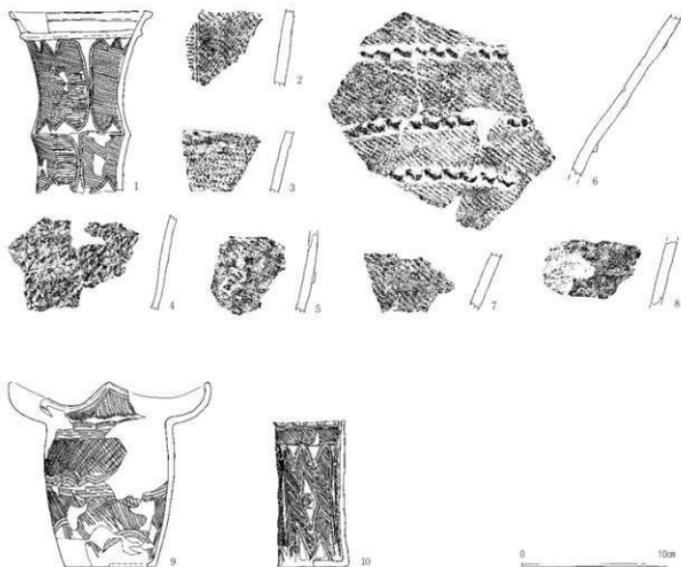
床面には多数のピットと土坑が検出された。ピットは南壁を中心に壁の周辺から出土しており、これらが柱穴の可能性が高い。また、住居址中央付近からは土坑が検出された。これらの土坑の上層からは礫が出土しており、調査中に検出状況を詳細に観察していないため明確ではないものの、この住居址に伴うものかは疑問である。



第15図 第42号住居址遺構平面図



第16图 第42号住居址遺物出土状況图



第17図 第42号住居址出土遺物 (1・9・10: S=1/4)

遺物 (第17図)

この住居址からは少量の遺物が出土している。1は住居址内の炉と考えられる地点から出土した。体部下部に屈曲を伴う、ラッパ状に開く器形である。口縁部の上下を横位の隆帯で区画して無文帯とし、体部全体に横位の並行沈線を密接施文した後、区画のための曲線の平行沈線を引いている。

2～8は破片で、覆土中から出土した。6は口縁部の破片で、縄文を地紋として施文後、波状隆帯を添付している。3は6と同様に縄文を地紋に持ち、その上にヘラ切りによる結節浮線文を施文している。4～7は縄文を施文した破片である。8は無文である。

9・10は周辺から出土した土器である。両者共に並行沈線で器面を装飾している。9は振幅の大きい4単位の波状口縁を持ち、横方向の沈線によって3段に文様帯を区画し、口縁部と体部下半は縦位、体部上部には格子目状に施文している。胎土は比較的白味が強い。10は口縁部が欠損している。直線の体部から大きく開く口縁部につながる器形と推定される。縦位の文様区画を基本構成とし、1単位の並行沈線で区画を行っている。また、区画外の空白部については印刻を行っている。区画内は斜位の並行沈線を充填し、1ヶ所に縦位の玉抱き三叉文の様な文様が施文されている。いずれも中期初頭と考えられる。

(2) 弥生時代

第24号住居址 (第18図)

CM-20より出土している。平安時代の住居址 (第23号) と切り合い、住居址のプランは明確にすることができなかったが、東部の切り合い部分において、第23号住居址のカマドの付近で壁の屈曲部分と考えられる地点が確認できることから、正方形のプランの可能性が高い。

なお、柱穴等は明確に把握できなかった。覆土は、黒色味をおびた暗褐色系の土が中心であった。硬化面は床面全体に広がり、住居址壁際寄りに埋裏灰が検出されている。埋裏灰内の覆土は暗褐色で、焼土は混入しておらず、周囲の土に焼土の混入が認められた。また炉北部床に被熱箇所が検出されている。

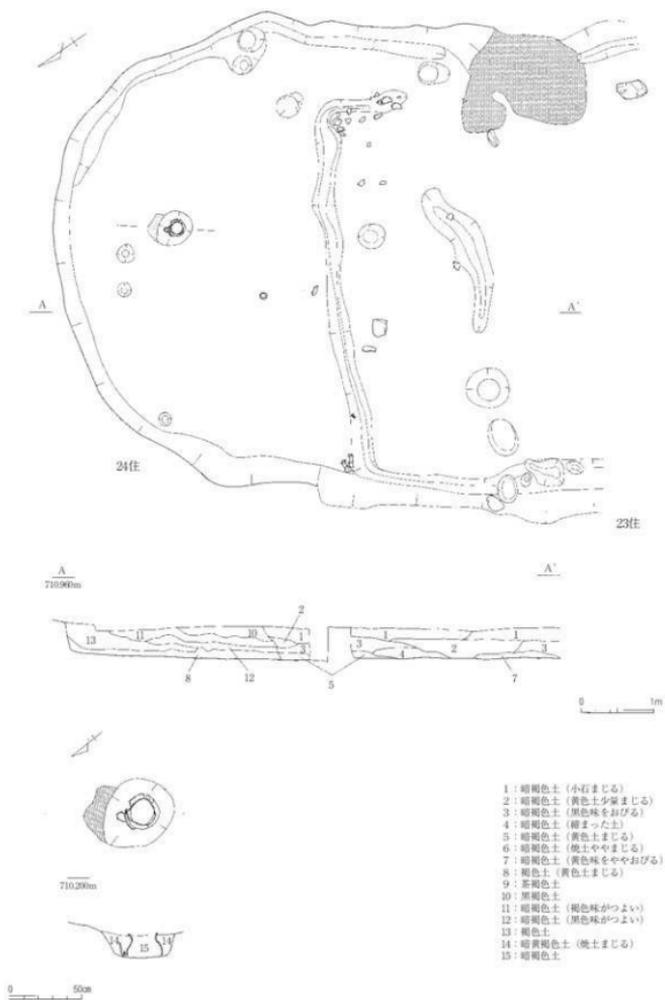
なお、規模は短辺で約6.5mを測り、現存の壁高は約45cmであった。

遺物 (第19図)

1～3は口径にばらつきがあるものの、頸部がなだらかな屈曲を持った甕である。1は埋裏灰として使用されていた甕である。振幅の少ない9条1単位のクシ描波状文を上部から下部の施文順位で2段施文した後、間隔の不規則な糜状文を頸部中央付近に引き、再び下部に2段、波状文を施している。文様は密接しており、断絶が数ヶ所確認できる。また口縁部はクシ状の粗い工具での調整の後、横位のヨコナデ調整を施し、体部は粗いヘラミガキ調整が横位に施されている。内面は一面に横位のミガキが緻密に施されている。なお、この住居址で器形が判明する甕はこの土器のみであり、他は器形復原を行っている。3は振幅のある5条1単位のクシ描波状文が2段みられるが、内外面ともにナデ調整を行っているだけである。また、2にも調整痕は確認できない。4～6は比較的口径の小さい甕である。4は口唇部にキザミが施文されており、内外面にはミガキ調整が行われている。6は口縁部上部以外に、8条1単位の、振幅の少ないクシ描波状文が右から左方向に、上段から下段の順に密接して施文されている。内面の口縁部上端部はヨコナデ調整、他は縦位のナデ調整を行なっている。これらの甕も、1～6同様に頸部はなだらかな屈曲を描いていると考えられる。7は頸部が強く屈曲しており、頸部にくびれが見られない。外面に粗いクシ描波状文が2段みられ、内面にはクシ状工具による横位のナデ調整痕をとどめている。8は体部上部に最大径を持つ「く」字状に若干口縁部が折れ曲がった、比較的厚手の甕である。内面にはヘラ状工具による縦位のナデ調整の痕跡がある。9は直線的に頸部が立ち上がり、口唇部を若干つまみ出すようにして屈曲させている。体部が欠損しているため、器種は不明であるが、甕の可能性が高い。10・11は甕である。10は口縁部が受け口状に折り曲げて作られている。11は8条1単位のクシ状工具によって等間隔に糜状文が4段施文され、その下部には扇状文が施文されている。なお、11の内面は器面の剥離が著しい。12は高杯の脚部である。内面には絞り込んだような縦位の皺がみられる。13は小形丸底甕(ひさご甕)である。外面底部は板状工具によって丸く整形されており、口縁部から体部にかけてはナデ調整が行われている。なお、内面底部は器壁が薄くしあげられている。

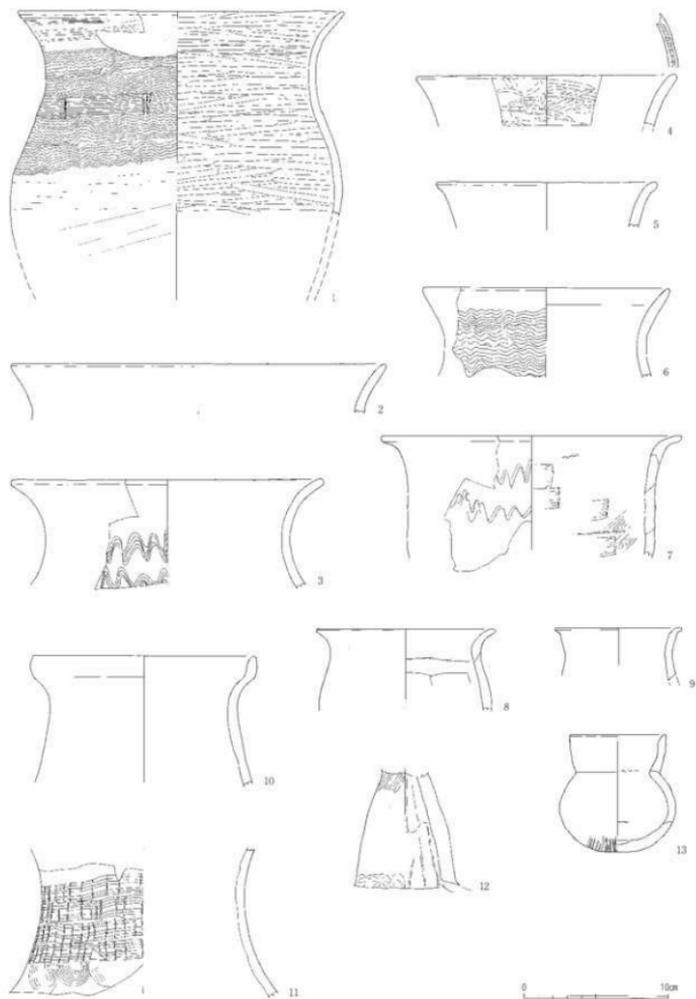
第25号住居址 (第20図)

CK-25より出土している。長辺7m、短辺5.5mの長方形で、現存の壁高は約45cmを測る。覆土は上層に黒色系の土が堆積している。床面には長軸にそって柱穴が多数検出されたが、主柱穴はP1(深さ33cm) P2(47cm) P3(62cm) P4(35cm)と考えられ、北部の柱穴間に埋裏灰が設置されている。炉体は甕の上半部を使用し、内部は黒色土で占められていた。また周囲は暗黄褐色土であったが、炉の周辺も含めて、焼土や被熱地点は確認できなかった。

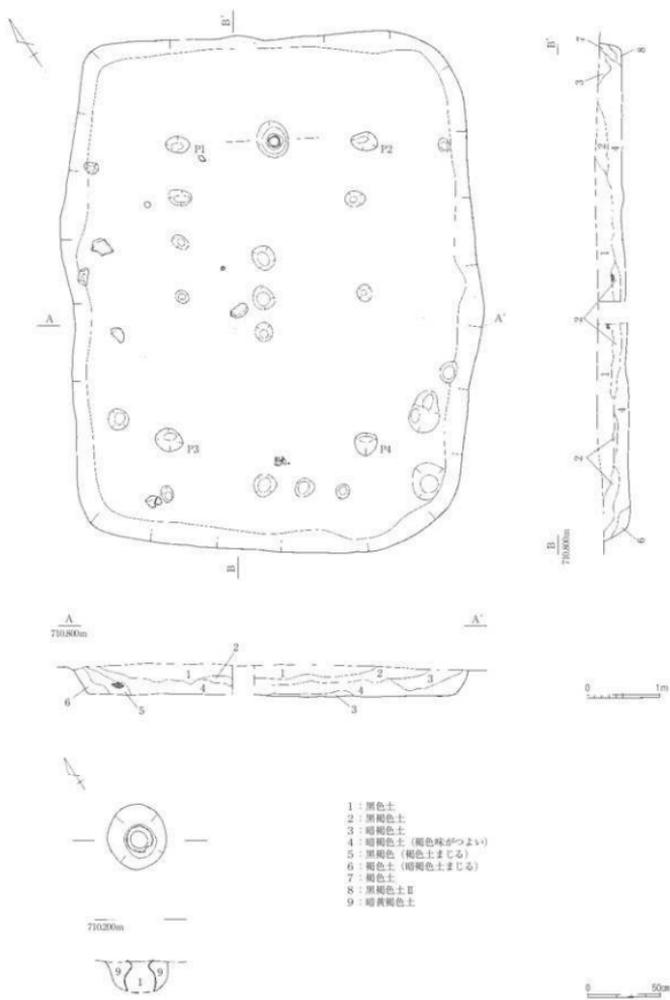


第18図 第23・24号住居址遺構平面図 (伊: S=1/30)

1. 住居址



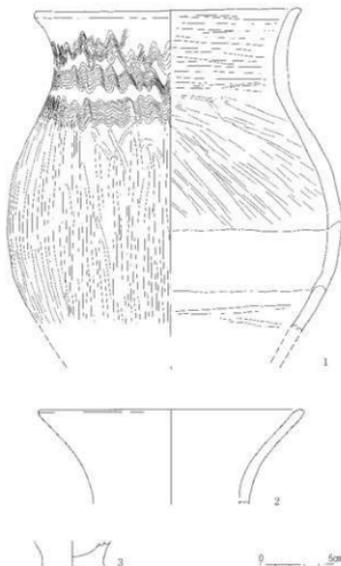
第19图 第24号住居址出土遗物



第20図 第25号住居址遺構平面図 (原: S=1/30)

遺物(第21図)

1は埋壺炉の炉体で使用された甕である。口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、9条1単位のクシ描波状文を頸部から口縁部にかけて、左から右に3段、中段の後に上・下段の順に施文している。またクシ描波状文を施文した後には体部には比較的密にミガキ調整が施されている。内面は口縁部を横位に、体部上半は斜位にヘラミガキ調整が若干粗く施されていた。体部下半はナデ調整のみであり、接合痕をとどめている。なお、口唇部は若干外反気味に作りだしている。2は壺の口縁部と考えられる。小片の反転復原のため、器形等誤差があると考えられるが、外面の口縁部上部と内面の口縁部下部に指圧調整痕を残りながら、内外面共にナデ調整痕がみられる。3は小形の土器底部である。外面にはヘラミガキ調整が施され、内面も丁寧なナデ調整がみられる。



第21図 第25号住居址出土遺物

第26号住居址(第22図、第25図、第26図)

CQ-17より出土している。この住居址は火災住居址と考えられ、調査中に炭化物や焼

土が大量に出土し、床面から器形の復原できる土器が出土している。プランは長辺約7m、短辺約5mの長方形で、現存する壁高は約45cmであった。柱穴と考えられるピットが長軸に合わせて掘り込まれており、このうち主柱穴はP1(深さ126cm)、P2(189cm)、P3(152cm)、P4(162cm)と考えられる。また、北部の柱穴間に埋壺炉が築かれており、炉体周辺の南西部には焼土が検出されている。

床面はほぼ全面に硬化面が確認されている。覆土は中層付近を中心に黒色味を帯びた暗褐色系の土で占められていた。

器形の復原できる土器は、床面の短辺壁際に集中して出土していた。また、検出段階では把握できなかったが、古墳時代の遺物がまとめて出土している事が判明し、遺物整理段階で住居址が重複している事が判明した。土層断面図で見ると、上層に黒褐色土が堆積していることから、この部分が住居址であった可能性が高い。

遺物(第23図、第24図)

第23図、第24図が出土した遺物である。第23図1～5は床面から出土している。1はやや肩の張った球形の体部で、直立気味に口縁部が立ち上がる器形である。外面には頸部～口縁部にかけて、8条1単位と考えられる振幅の小さいクシ描波状文が、頸部の重複した波状文も含めて4段施文され、その後口縁部上端部と体部にヘラミガキ調整が行われている。なお、クシ描文の施文方向は右から左であった。また、内面は全面に横位のヘラミガキ調整が施されているが、下部では観察できなかった。2は焼成の良い甕である。上部に最大径

を持つ体部に、外反する口縁部を持つ器形で、頸部から、口縁部下にかけて振幅の小さいクシ描波状文と簾状文が施文されている。文様は、2単位で1セットとなる簾状文を右から左方向に施文後、上下に広げようとして波状文を施文しており、口縁部上部および体部にはハケ調整痕も確認できる。なお、ヘラミガキ調整はクシ描文を施文後に丁寧に施されており、口縁部では横位に、体部では縦位に施され、最下部の波状文を一部消している。内面はハケ調整が頸部から口縁部にかけて確認でき、その後には横位の丁寧なヘラミガキ調整を行っている。なお、口唇部にはキザミがみられる。3は焼成の良好な小型の甕である。頸部から体部上部にクシ描文が見られる。最上段のクシ描文は簾状文であるが、一部で振幅の少ない波状文となっている。体部上部にはクシ描波状文が2段施文されている。体部下半部には縦位のヘラミガキ調整が綿密に施され、底部の成形痕にまで及んでいる。内面は横位のヘラミガキ調整で、底部付近にはクシ状工具によるクモの巣状の調整痕が確認できる。4は小型の甕である。体部中部に最大径を持ち、直立気味の口縁部を持っている。口縁部はヨコナデ調整で、頸部に振幅の大きなクシ描波状文が1段施文されているのみで、他の調整痕は確認できない。内面も同様に調整痕は確認できなかった。なお、内外面共に底部に指圧調整痕をとどめている。5は中型の甕である。体部上部に最大径のある器形で、やや外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部と、頸部にそれぞれ1段のクシ描波状文があり、波状の振幅は上段が小さく、下段は大きい。粗雑な印象を受ける文様である。体部には粗い縦位のヘラミガキ調整が施されている。内面はナデ調整が施され、底部付近では成形痕をとどめている。6は体部上部に最大径を持つ器形の甕である。頸部付近に2段のクシ描波状文を施文している。2段共振幅の大きな波状であるが、上段は振幅の幅が一定ではない。体部は内外面共にナデ調整を施している。7～9は甕の口縁部破片である。7には8条1単位の振幅の小さいクシ描波状文がみられ、口唇部にはキザミが施されている。

第24図1はいわゆるハケ甕の上半部である。体部から屈曲気味に口縁部にいたる器形で、口縁部及び体部には、斜位のクシ状工具によって彫りの深い、いわゆるハケ調整を行い、頸部は縦位に施文している。また、口唇部は体部と同一工具と考えられる道具を使用してキザミをいれている。内面は痕跡程度ではあるが、いわゆるハケ調整が行われているのが確認できる。2は埋壺形の甕体である。外面は間隔の開いた斜位のハケ調整の後に、やや太めの工具による単位の短いヘラミガキ調整が施されている。内面にも同様に横位のハケ調整の後、頸部は横位、体部は斜位のヘラミガキ調整が確認できる。3は壺の口縁部である。やや焼成が甘く、黄褐色を呈している。外面は現存で3段のクシ描波状文が施され、その後には頸部中央部に簾状文が施文されている。内面は全体にナデ調整痕が確認でき、口縁部上部には横位のナデ調整の後に、9条1単位のクシ描短線文が施文されている。

10は石包丁である。石器の中央上部に1ヶ所穿孔がみられる。全体に丁寧な作りである。

4は住居址床面より出土している直口壺である。細い板状の工具を使用して、口縁部は斜位に密接に、体部には斜位と横位に粗くナデ調整痕をとどめている。なお、底部には指圧調整痕が残されている。内面はヨコナデ調整痕が観察できる。

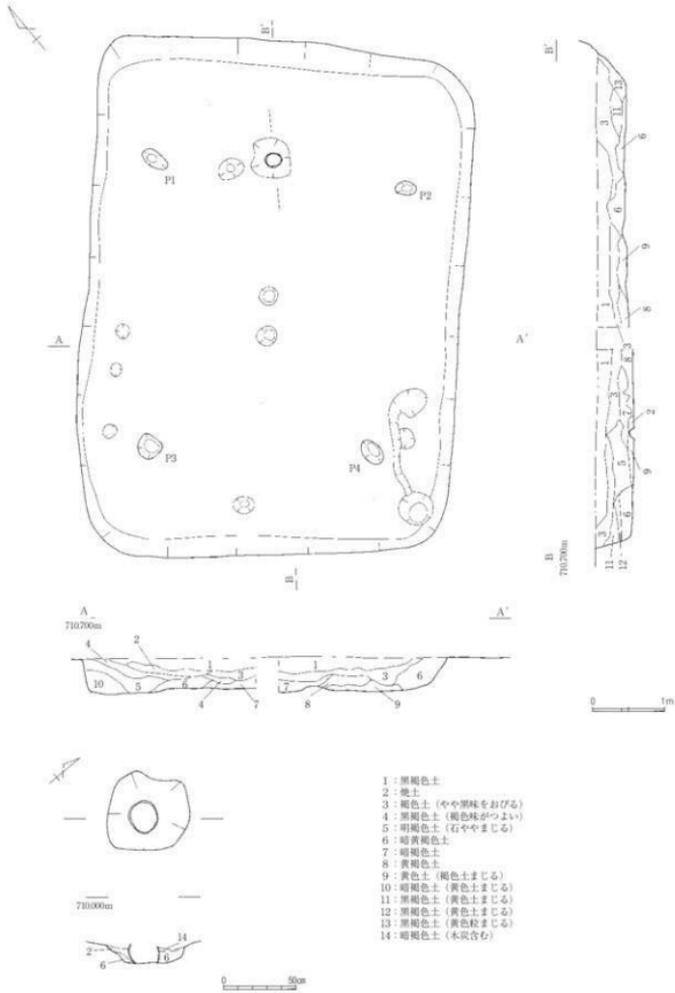
5～9は古墳時代の遺物と考えられる。5～7・9は高杯の脚部及び裾部、8は壺の底部である。

第27・28号住居址（第27図、第31図）

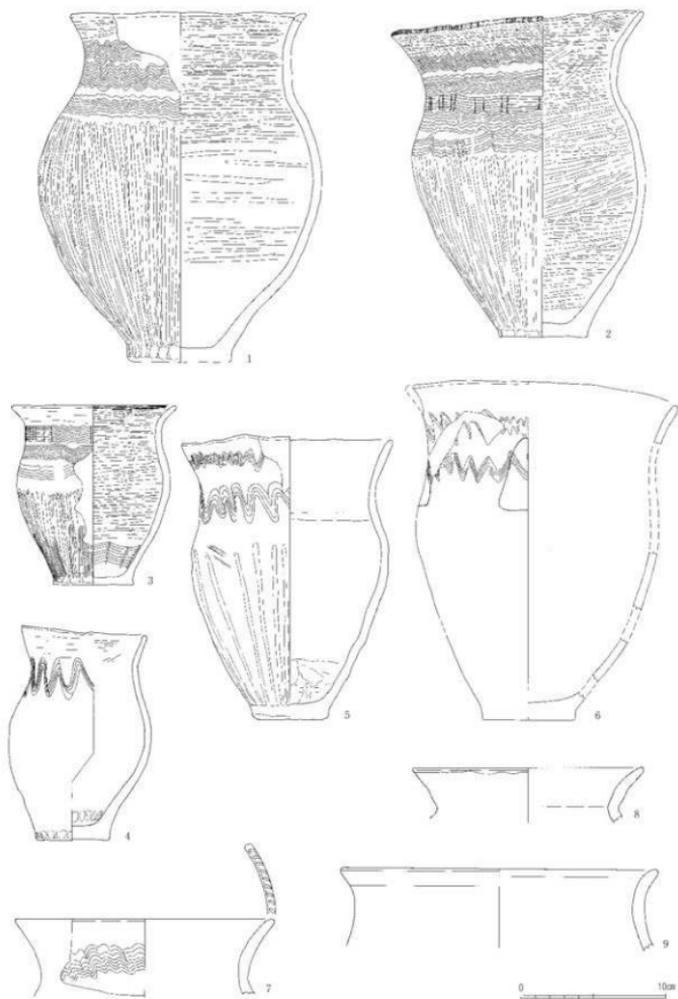
これらの住居址はCK-30から出土した。西半部は調査区域外となっており、遺構全体を調査することはできなかった。

第27号住居址は、1辺が約5m、深さ約55cmを測る。ピットは8ヶ所検出され、このうち柱穴と考えられる

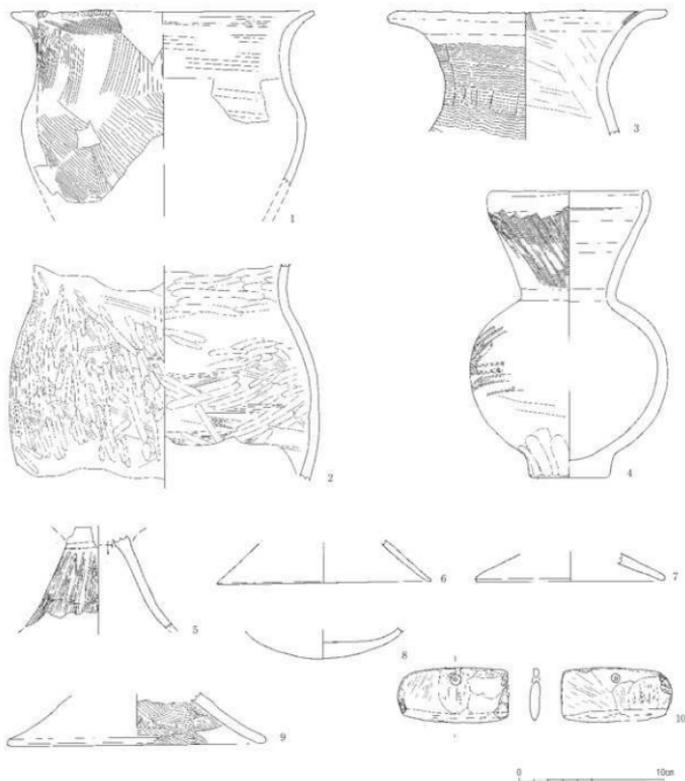
1. 住居址



第22図 第26号住居址遺構平面図



第23図 第26号住居址出土遺物(1)



第24図 第26号住居址出土遺物(2)

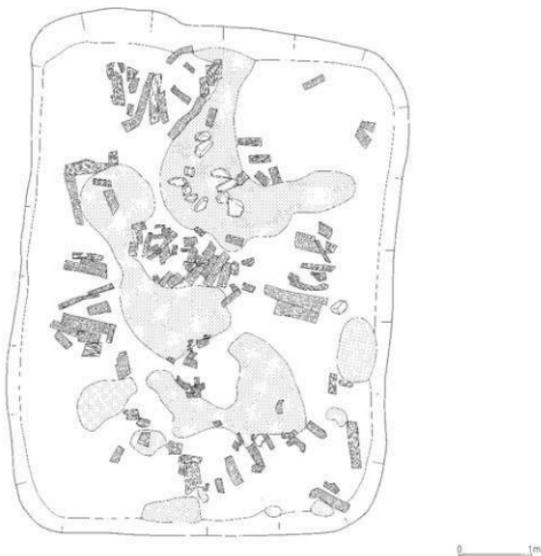
ものはP 1(深さ29.2cm)、P 2(15.6cm)と考えられる。覆土は中央部の上層に黒褐色系の土が堆積し、一部暗黄褐色系の土が含まれている。

第28号住居址は第27号住居址によって掘り込まれており、規模は明確にすることはできなかったが、深さは第28号住居址と同様で約55cmを測った。覆土は全体的に黒褐色系の土が堆積していた。

なお、両住居址内からは床面付近を中心として器形の判明する土器が出土している。

遺物(第28～30図)

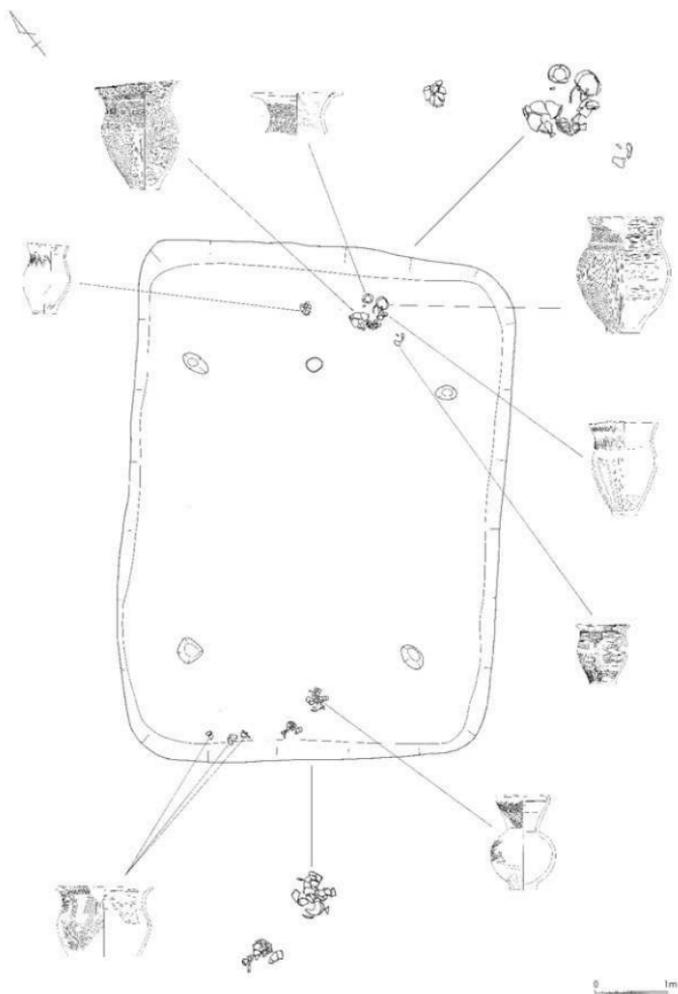
第28図・第29図は第27号住居址より出土している遺物である。1～4は小型の甕である。1は底部より直線



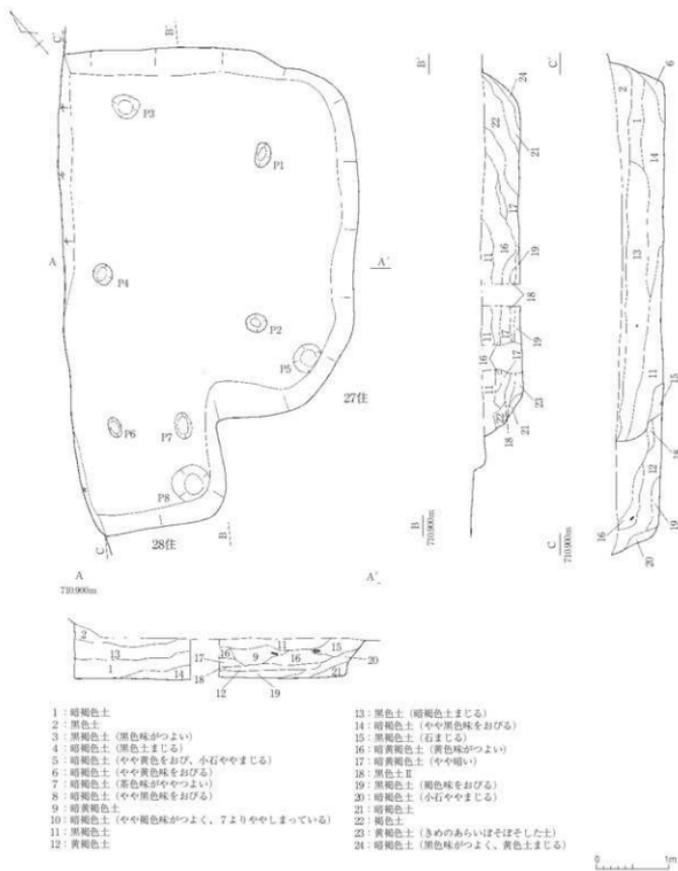
第25図 第26号住居址遺物出土状況図(1)

的に広がる器形と考えられ、口縁部上部をゆるやかに折り曲げている。また、口縁部には8条1単位かと考えられるクシ播波状文が粗雑に3段ほど施文されている。内面には横位のハケ調整痕をとどめている。2は口縁部に最大径をもち、頸部が若干くびれる器形である。内外面共に斜位のヘラミガキ調整が施され、その後外面の頸部に横位のヘラミガキ調整が施されている。3は体部が「く」字状に屈曲する器形で、外面には4条1単位かと思われる粗いクシ播波状文が数段施文されている。4は外面にススが附着している。体部下部に最大径を持つずんぐりとした器形で、口縁部が強く屈曲している。作りは粗雑で、内面にはナデ調整の痕跡があり、一部にハケ調整痕をとどめている。7・8は中型の甕である。7は頸部が「く」字状に屈曲する器形である。体部上部に最大径があり、内外面共にヘラミガキ調整が施されている。外面のヘラミガキ調整は体部を中心に縦位に施文され、内面は口縁部を中心に横位に施文されている。8は頸部がゆるやかに外反する器形で、外面は口縁部から頸部にかけて縦位に、その後体部では横位にハケ調整を行った後、8条1単位のクシ播波状文を右から左方向に、4段ほど下から上の順で断絶を伴いながら施文していると考えられる。また、体部には斜位の粗いヘラミガキ調整が最終的に施されている。内面では、口縁部は斜位に、体部には横位に施されたハケ調整痕を一部にとどめている。また、体部下半部で横位のヘラミガキ調整を密に施文した後に、口縁部から体部上半部にかけて横位または斜位のヘラミガキ調整を行っている。

第28図10・11、第29図は甕である。10・11は受け口状に口縁部端部に粘土紐を貼り付けて成形している。10



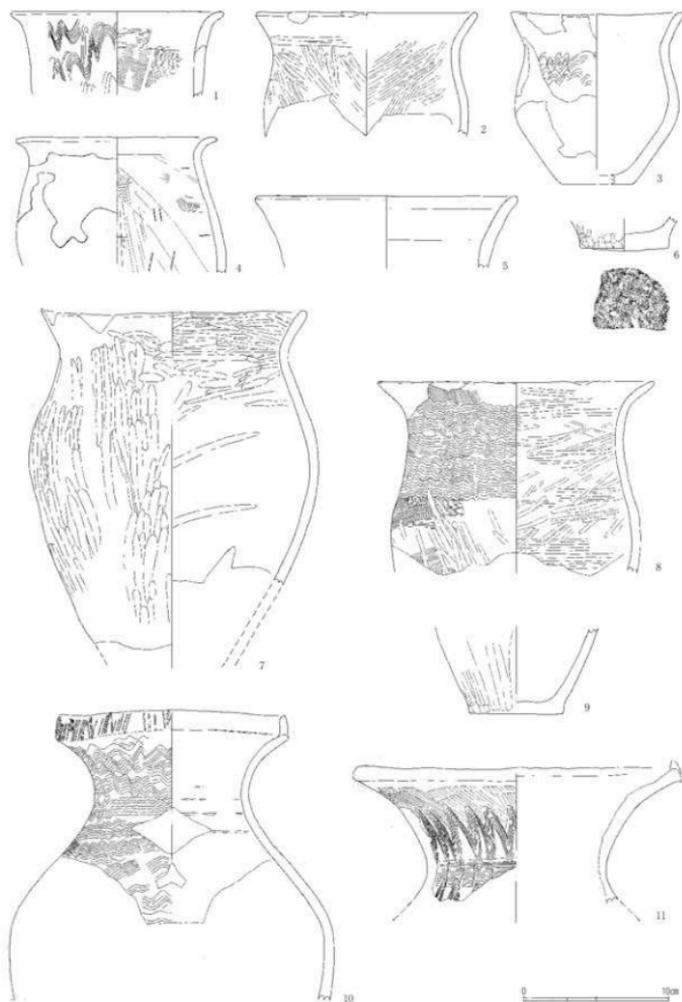
第26图 第26号住居址遺物出土狀況图(2)



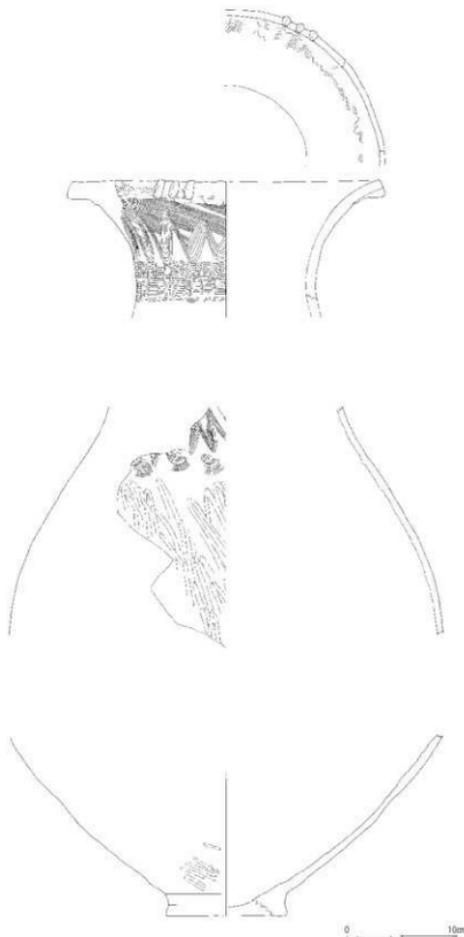
第27図 第27・28号住居址遺構平面図

は口縁部端部の上に粘土紐を載せるようにして受口口縁とし、その外面に縦位のヘラ描沈線を描文している。口縁部から体部上部にかけては比較的密にクシ描波状文を描文しているが、頭部の一部で振幅の小さい丁寧な描文がみられるのみで、全体的に粗雑な描文である。なお、体部のクシ描文は、波状の短線を斜位に施文している可能性もある。内面は調整が比較的雑で、接合痕をみることができる。11は口唇部のほとんどが欠損しているが、残存部から口縁部端部にかぶせるように粘土紐を貼り付け、受口口縁としていることがわかる。内

1. 住居址



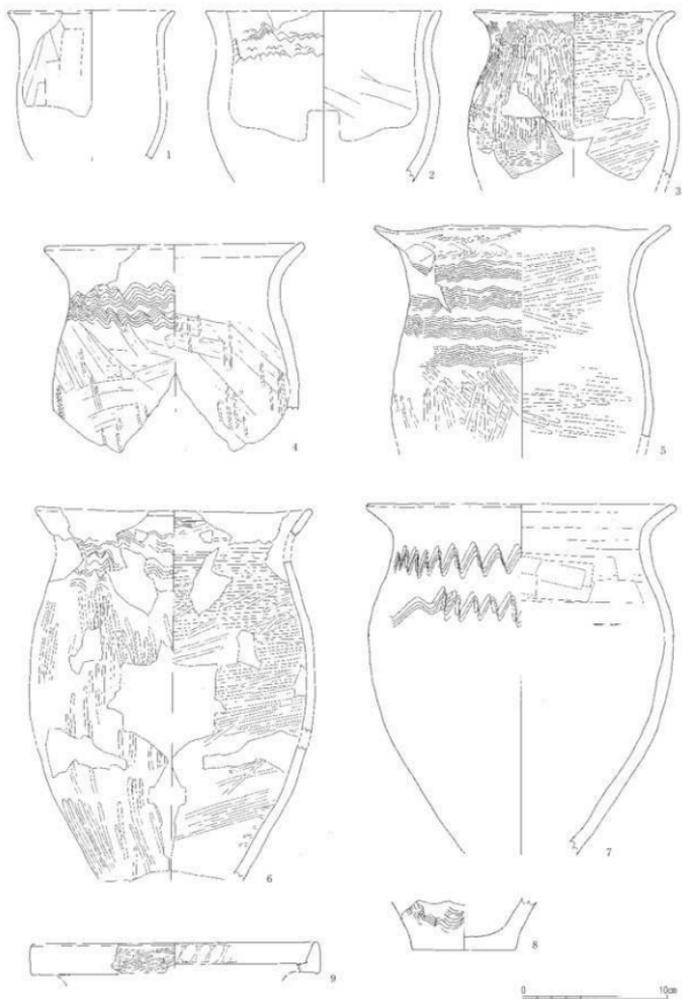
第28图 第27号住居址出土遗物



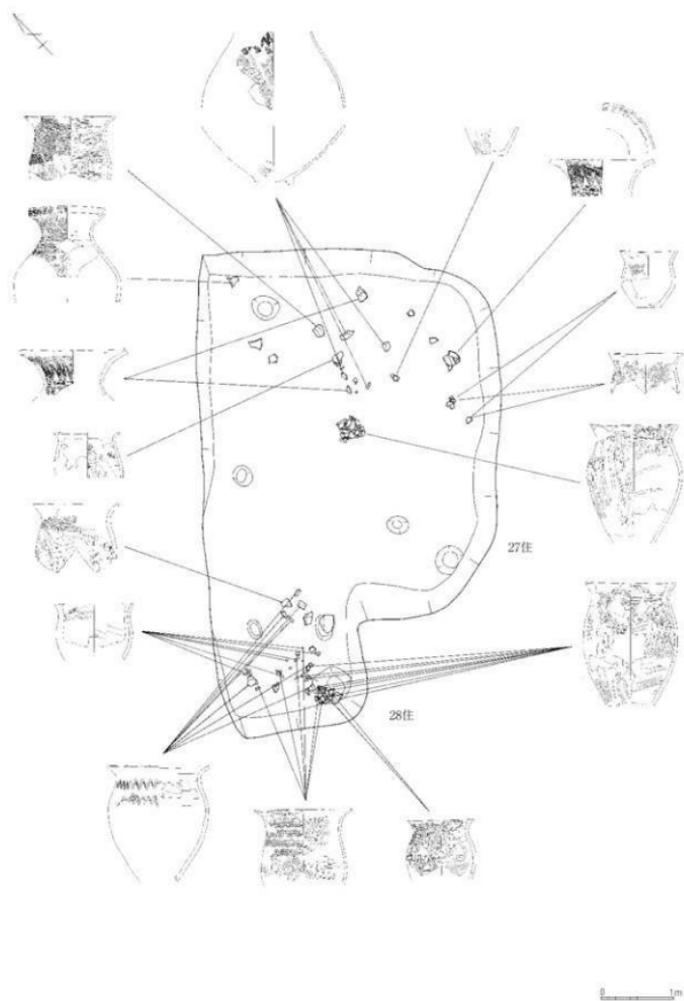
第29図 第27号住居址出土遺物

面は剥離が著しく、調整については観察することができなかった。外面は、口縁部に上から下に向かって縦位に施された丁寧なハケ調整痕をとどめ、その後頸部の等間隔に止められたクシ描波状文、そして振幅の大きいクシ描波状文を上下に施文している。第29図は同一個体と考えられる破片である。口縁部端部下に粘土を貼り付けて端部を肥厚させ、縦位に3本粘土紐を貼り付けて装飾しその間にクシ描波状文を充填している。外面は口縁部上部に斜位のハケ調整が施され、その後等間隔に止められた籬状文が残存で3段階施文され、その後振幅の大きいクシ描波状文が施されている。体部にはクシ描波状文の下端に扇状文が施され、その下部から底部にかけて粗い斜位のヘラミガキ調整が行われている。内面は剥離が著しく、調整を観察することができない。なお体部の最大径はやや下半部にある。

第30図は第28号住居址より出土している遺物である。1～3は小型の甕である。1は無文で、外面に板状工具を使用しての縦位のナデ調整痕をとどめる。内面の調整ははっきりしない。2は頸部に痕跡程度のクシ描波状文が1段施文されている。また、一部に板状工具による斜位のナデ調整痕が観察される。内面には斜位のナデ調整が施されている。3は外面の口縁部は上から下に向かって、体部では横位にハケ調整を行い、縦位のヘラミガキ調整を施している。内面は全面に横位のヘラミガキ調整を行っている。4の外面は、板状工具による斜位のナデ調整を行った後に7条1単位と考えられるクシ描



第30图 第27・28号住居址出土遺物(2) (1~4、6~9:28住、5:27・28住)



第31図 第27・28号住居址遺物出土状況図

1. 住居址

波状文を2段施文している。また、体部には縦位のヘラミガキ調整がまばらに施されている。内面には外面と同様に板状工具によるナデ調整の後にまばらなヘラミガキ調整を行っている。5～7は中型の甕である。5は第27住居址と、第28号住居址より出土している。頸部はやや伸長し、8条1単位のクシ描波状文が多くの断絶を伴いながら4段、右から左方向に、下段から上段の順に施文されている。口縁部には板状工具による斜位のナデ調整がみられ、その後に斜位・横位にヘラミガキ調整を行い、クシ描波状文を施文している。体部は斜位から縦位のヘラミガキ調整が行われている。内面は全面に横位のヘラミガキ調整がみられる。6は体部の張り弱い器形である。頸部に粗雑な6条1単位のクシ描波状文が施文され、体部には縦位のヘラミガキ調整が行われている。内面は横位のヘラミガキ調整が施されている。7は体部上部に最大径を持つ、肩の張った甕である。頸部から体部上部にかけて4条1単位の振幅の大きなクシ描波状文が2段施文されている。内面は調整痕が明瞭に見られないが、頸部付近には板状工具による横位のナデ調整痕が残されている。8は甕の底部と考えられる。クシ描波状文が見られる。

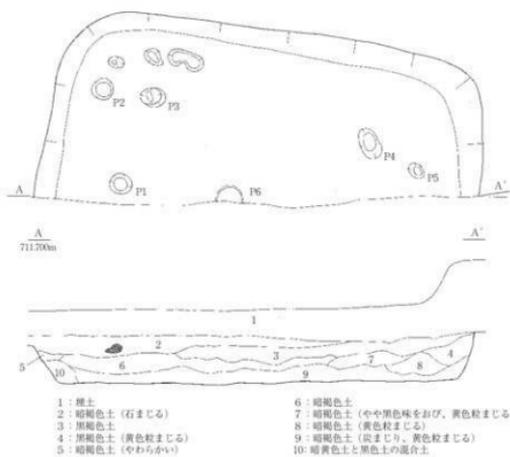
9は壺の口縁部である。口縁部端部に粘土紐を載せて垂直に立ち上がるように成型された器形である。外面には横位のヘラミガキ調整が行われ、内面には指圧調整痕が見られる。

第29号住居址 (第32図)

この住居址はCR-13より出土している。東半部は調査区域外のため詳細は確認できなかった。この住居址は1辺が約6mで、深さは約55cmを測る。覆土は暗褐色系の土を中心として、上層の一部に黒褐色系の土が堆積していた。なお、床付近からは炭化材が出土している。このことから火災住居の可能性が高い。ピットはP1～P5が検出され、このうち主柱穴はP1(7.9cm)、P4(31.9cm)と考えられるが、配置からするとP1のみの可能性もある。床面はほぼ全面硬化面であった。炉は明確に検出できなかったが位置からするとP6の可能性もある。

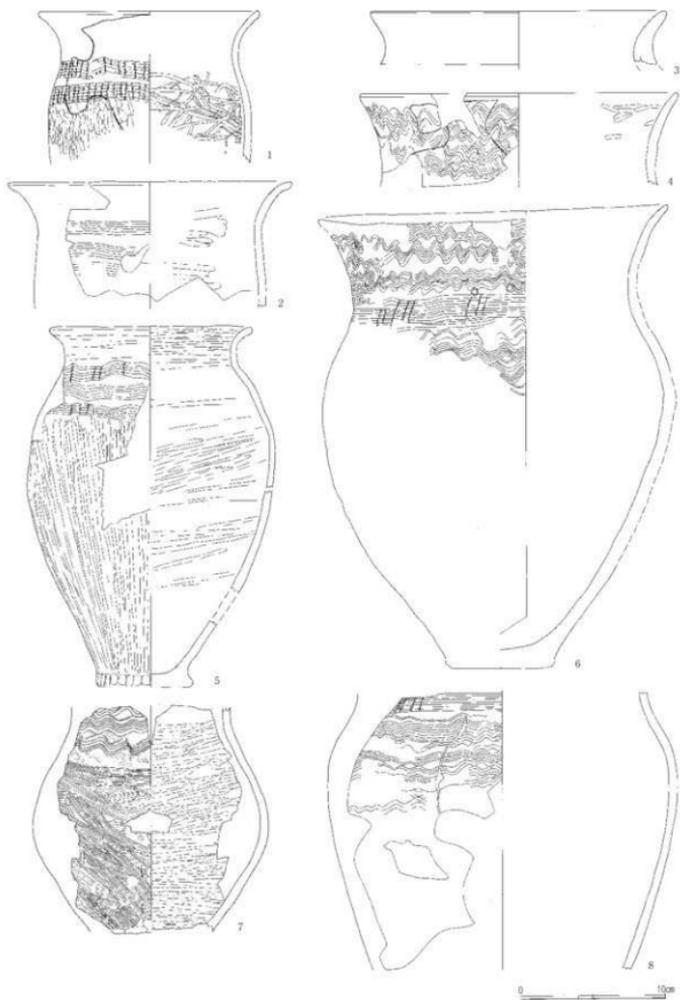
遺物 (第33図)

1は小型の甕で、頸部に7条1単位の等間隔に止めたクシ描波状文が2段施文されている。波状文を施した後、体部に単位の短い縦位のヘラミガキ調整を行っている。内面には体部上部を中心に、粗雑な横位のヘラミガキ調整が施されている。なお、外面口縁部から体部上部にかけてススが付着している。2・3・5・7は中型の甕である。2は口縁部が大きく外半する器形である。外面には頸部に6条1単位のクシ描直線文(振幅の小さい波状文か?)が2段施文されている。また、その下部には横位の短線文と考えられる文様も見られる。3は口縁部の破片である。5は口縁部が小さく立ち上がる器形で、最大径が体部中部にある甕である。頸部から、体部上部にかけてクシ描波状文が施文されているが、上下の波状文は施文具を施文途中で止めて波状文の文様を構成している。なお、口縁部はヨコナデ調整、体部はクシ描文の後に縦位のヘラミガキ調整が行われている。内面は粗い横位のヘラミガキ調整である。7は体部の破片である。反転復原で作図している。体部中部がそろばん玉状に張り出す器形と考えられる。外面はハケ調整を行った後、板状工具による斜位のナデ調整を体部に行い、上部には7条1単位のクシ描波状文が3段、下から上の順位に施されている。内面は全面横位のヘラミガキ調整である。4・6・8は大型の甕である。4は直立気味に立ち上がる口縁部で、6条1単位のクシ描波状文が多数の断絶を伴って多段施文されている。内面には横位のヘラミガキ調整が若干施されている。6は頸部に間隔を置いて止められたクシ描波状文を1段施文した後、口縁部上端部まで4と同様に多くの断絶を伴ってクシ描波状文が下段から上段の順に多段施文されている。内面は、底部はヘラ状工具によるナデ調整を行ない、体部は縦位のハケ調整のち、横位のヘラミガキ調整を行なっている。また、



第32図 第29号住居遺物出土状況図及び遺構平面図

0 1m



第33图 第29号住居址出土器物

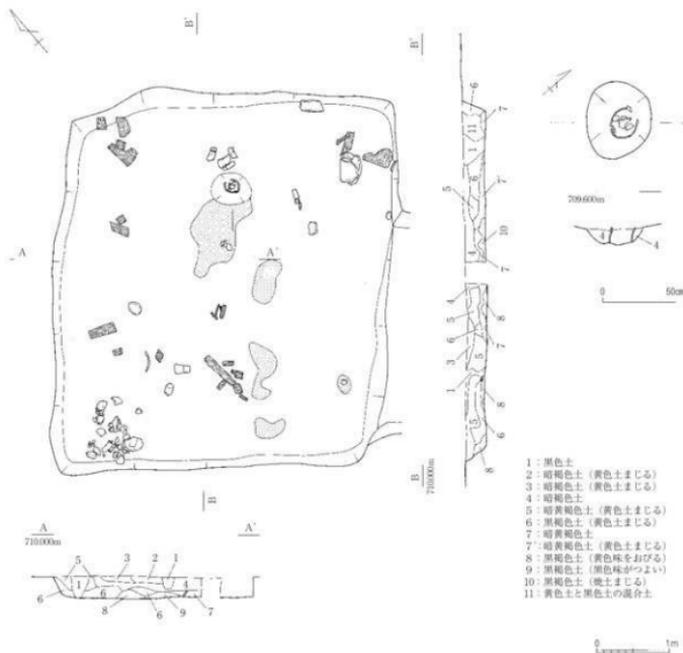
第IV章 遺構と遺物

口縁部は横位のハケ調整の後、粗い横位のヘラミガキ調整を施している。8は体部上半部の破片である。頸部下半部に間隔を置いて止められたクシ描線状文を右から左方向に施し、その下部に、多数の断絶を伴うクシ描波状文が施文されている。なお、調整痕は確認されなかった。

第30号住居址 (第34図)

この住居址は第Ⅱ次発掘調査報告書にすでに掲載しているが、今回の遺物整理段階で出土遺物に誤認があったため、あらためてここに報告することにした。したがって、本報告を正式なものとする。

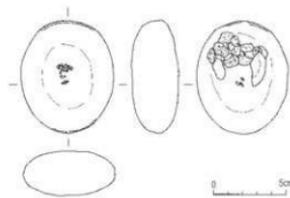
この住居址はCT-30より出土している。プランは5m×4mのややゆがみのある長方形である。深さは35cmを測る。この住居址は表土直下から検出されている。覆土は全体的に黒褐色系の土で占められていた。また、床面付近からは炭化材が出土しており、火災住居の可能性が高い。硬化面は床全面に広がっており、炉は北東壁寄りに埋堿炉が存在する。柱穴は明確に検出することができなかった。また、西部隅付近に大型の壺の破片が集中して出土している。



第34図 第30号住居址遺構平面図

遺物(第35図、第36図)

第36図1～3は中型の甕である。1はいわゆるハケ甕である。体部中部が欠損しているため、同一個体の破片を復原して図化している。口縁部にキサミを施し、同一工具のクシ状工具によって、器面全面に縦位にいわゆるハケ目を施文している。また、体部中部は斜位・縦位にヘラミガキ調整が施されている。内面は口縁部を中心に横位に調整を行っている。なお、外面にはススが附着している。2・3は埋甕炉の炉体及びその内部から出土した甕である。3は



第35図 第30号住居址出土遺物(1)

やや伸長した頸部の外面に8条1単位の振幅の小さいクシ描波状文を3段、左から右に施文している。体部には細くて粗い縦位のヘラミガキ調整が施されている。内面は細いもの比較的密に横位のヘラミガキ調整が施されている。この甕は炉体として使用されていた土器である。2は炉内上部で出土した土器である。粗雑な印象の土器で、数条を1単位にしたクシ描波状文が5段ほど確認できる。内面は斜位を中心としたミガキ調整が行われている。

4・5は小型の甕である。4は無文の甕で、体部上部に最大径を持つ器形である。外面の調整痕は確認できないが、内面にヘラ状工具による縦位のナデ調整が施されている。5は底部から口縁部に向かってラッパ状に開く、頸部の締まりが弱い甕である。頸部に振幅の大きい6条1単位のクシ描波状文が1段施文されているほか、調整痕は確認できない。

10・11は壺の破片である。体部はほぼ球形で、体部上部に6条1単位のクシ描波状文が施文されている。

12は石製紡錘車である。成形時のスリの痕跡が確認できる。13は石包丁である。砂岩系の石を使用しているため、剥離が激しく成形痕は把握できない。端部に1ヶ所穿孔が確認できる。第35図、第36図14は磨石である。第36図14の表裏面には打撃による浅い窪みがみられる。第35図は楕円形で、全面スリによって滑らかになっている。なお、上下縁辺部には填打の痕跡が残されている。

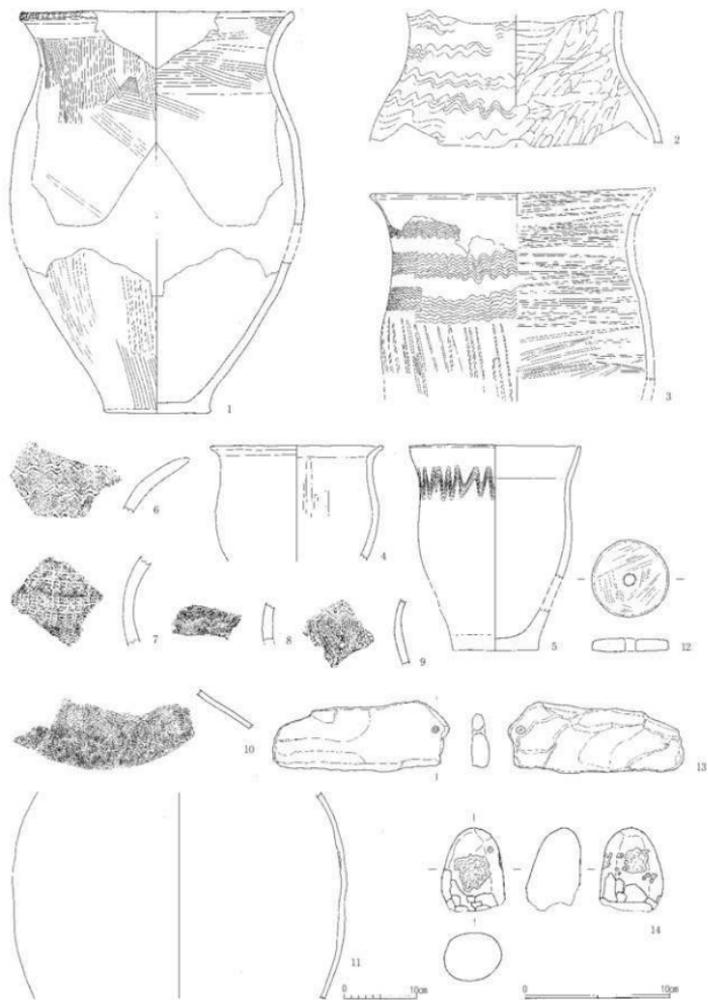
第31号住居址(第37図)

C P-34より出土している。この住居址は第31号住居址によって南壁を一部破壊されている。プランは平面7.5m×5.8mで、深さ約40cmを測る。覆土は黒褐色系の土を中心に堆積していた。ピットはP1～P5であり、柱穴はP1(深さ25.9cm)とP4(21.1cm)と考えられる。北西壁寄りには埋甕炉が出土している。

遺物(第38図)

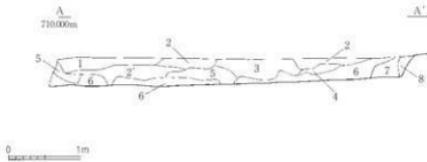
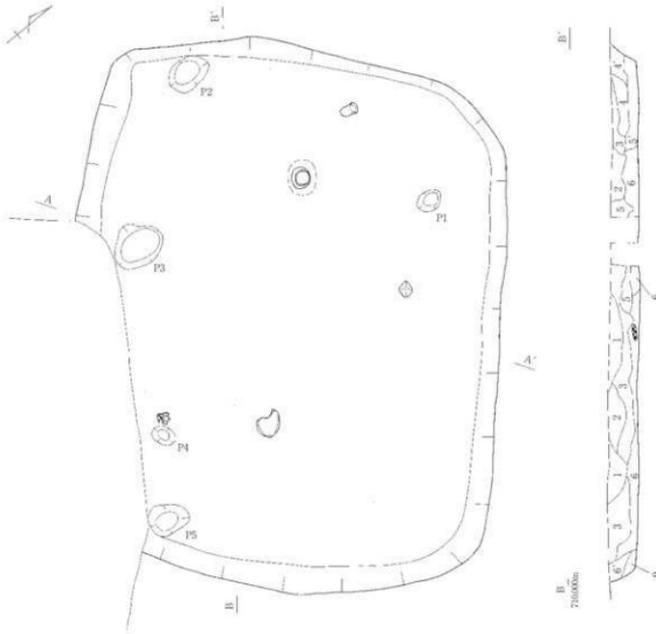
この住居址からは甕が出土した。2は口縁部から体部にかけてナデ調整痕が確認できる。3は床面から出土している。口縁部は板状工具による縦位のナデ調整が施され、その後頸部付近に4条1単位のクシ描波状文が3段施文されている。また、体部にはナデ調整後に縦位のヘラミガキ調整を行っている。

4は埋甕炉の炉体である。体部上部のみ残存している。外面は斜位のハケ調整の後縦位に密にヘラミガキ調整を行っている。内面は頸部付近に斜位のハケ調整を施し、体部は斜めにナデ調整を施している。



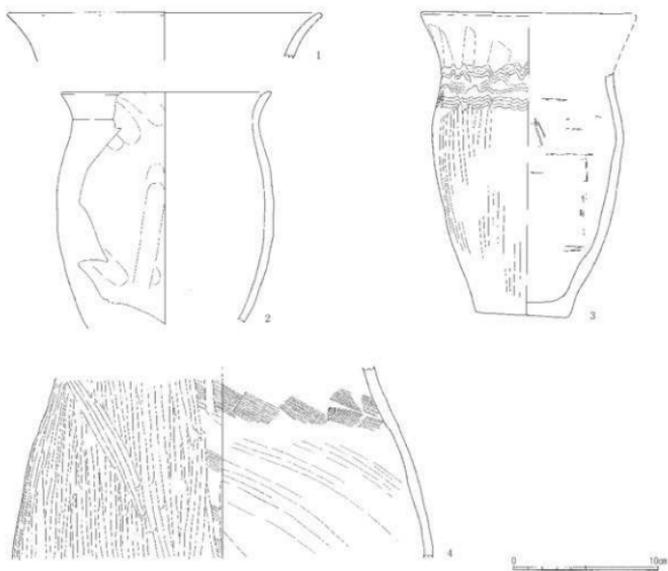
第36図 第30号住居址出土遺物(2) (11: S-1/6)

1. 住居址



- 1: 暗褐色土
- 2: 黒褐色土 (暗褐色土まじる)
- 2': 黒褐色土 (黒色味がよく、暗褐色土まじる)
- 3: 黒褐色土
- 4: 褐色土
- 4': 褐色土 (黒色味をおびる)
- 5: 暗褐色土 (黒色味をおびる)
- 5': 暗褐色土 (褐色土まじる)
- 6: 暗黄褐色土
- 6': 暗黄褐色土 (褐色味がよい)
- 7: 暗黄褐色土 (褐色味がよい)
- 8: 黄色土 (ローム)
- 9: 黄褐色土

第37図 第31号住居址遺構平面図



第38图 第31号住居址出土遺物

(3) 平安時代

第1号住居址 (第39図)

B Y-99より出土している。北西半部は調査区域外で、カマド付近のみ調査することができた。プランは4.1mで、深さは約30cmを測る。壁際には調査できた部分のすべてに周溝が巡らされていた。覆土は黒褐色系の土で占められていた。

カマドは住居址壁から外周に暗灰色粘土を貼って築造され、焚口付近も床との境を粘土で盛り上げ、灰等が床面にこぼれ出さないようにしている。床面はほぼ全面が硬化面であった。また、カマド底面および住居址内のカマド周囲には焼土が広がっている。

遺物 (第40図、第41図)

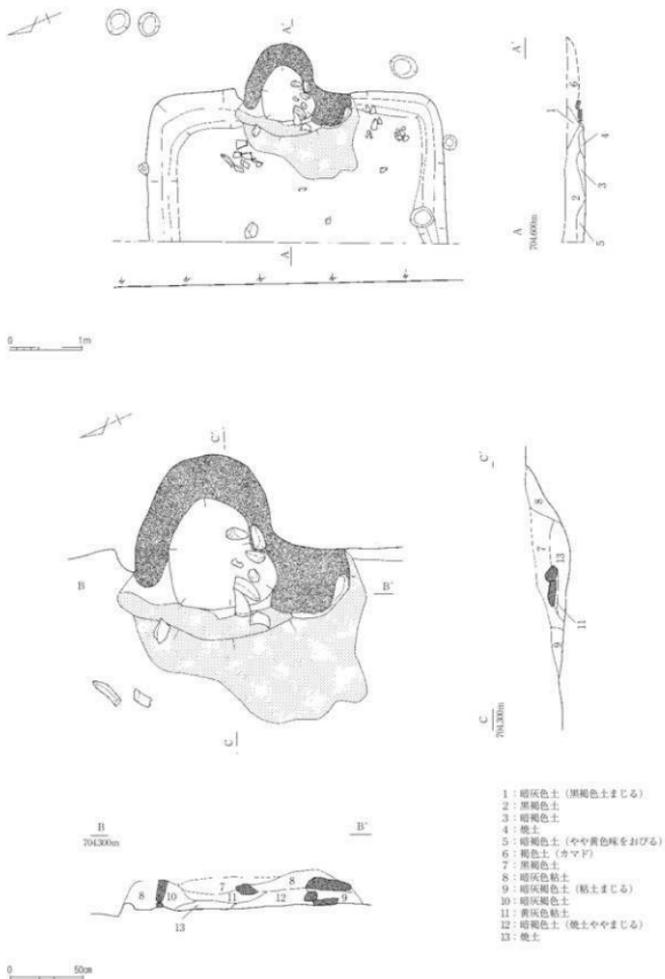
第40図、第41図がこの住居址から出土した遺物である。第40図1～6は須恵器である。1・2は無蓋の壺である。1は焼成状態がやや悪く、断面で見ると、中心部が褐色を呈している。小片からの固化である。2は焼成不良の須恵器で、1/4個体以下の破片である。3～6は蓋坏である。3は坏蓋で、カマド内からの出土である。口縁部が欠損し、天井部が1/2個体残存している。天井部のケズリ方向は図上の左から右方向であった。内面にはヨコナデ調整が観察できる。4～6は坏身である。4・5は小片からの復原であり、外面には薄く自然釉が付着している。6はカマド内からの出土である。口縁部が1/2ほど欠損している。内外面共にヨコナデ調整が行なわれ、外面底部は、中心部以外の糸切痕をケズリ取っている。4は口径約12cmを測り、5・6は口径12.5cm前後、6の器高は4cmであった。

7～10はいわゆる甲斐型坏である。いずれも褐色を呈した焼成の堅緻な土器である。7は1/3程度、8は1/2程度の残存率で、それぞれ器形が復原できた。両者共に外面は上半部に比較的粗い横位のミガキ調整を施し、内面の体部は縦位の、見込部には放射状のミガキ調整が見られる。底部は糸切りの後、ヘラケズリを行い、さらにミガキ調整を行っている。また、9はおおよそ1/2個体残存しているが、見込部は一部しか残存していない。10は体部の1/3個体からの復原である。外面は上半部に横位の細いミガキ調整を施し、その後下半部に斜位のヘラケズリを行っている。内面は上下に往復する縦位のミガキ調整が施されている。9はカマド内からの出土である。体部は粗いミガキ調整を行っているが、見込部にはみられない。10は内外面ともに密にミガキ調整が施されている。

11～15は壺である。11～13は内外面共にナデ調整が行われている。なお、11と12の外面には縦位のハケ目調整の痕跡がみられ、内面にも横位のハケ目調整の痕跡が残されている。13は外面にヨコナデ調整を行っている。胎土に多くの雲母が混入し、内外面にススが付着している。14はいわゆる武蔵型壺と考えられる破片で、カマド内からの出土である。口縁部の内外面共に横位のナデ調整を施し、体部外面はヘラケズリ調整、内面にはヘラ状工具による縦位のナデ調整の後に、ヨコナデ調整を行っている。器壁は薄く、混入物も少なく、焼成も良好であった。15は壺の底部である。外面には粗いミガキ調整が施されている。また、全面にススが付着している。第41図1～8は須恵器製の破片である。カマド内からの出土資料も見られることから、カマド築造の際の構造材として混入していた可能性もある。9・10はカマドから出土している礫である。加工痕は確認できないが、藁手石の可能性が考えられる。

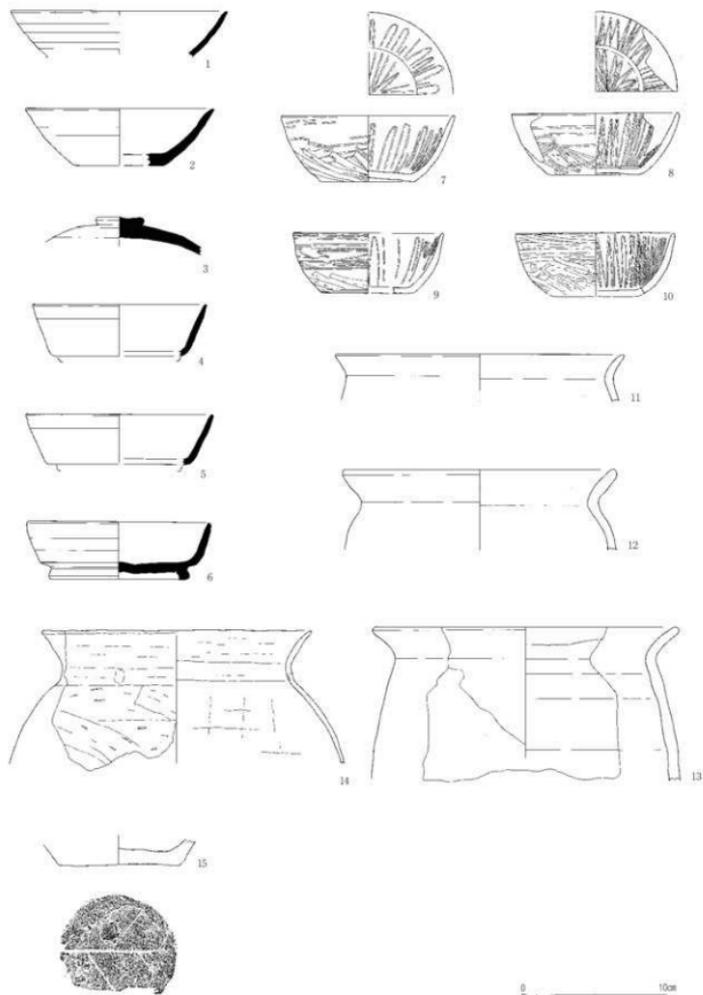
この住居址は、灰釉陶器の出現以前であることから6期と考えられる。

第五章 遺構と遺物

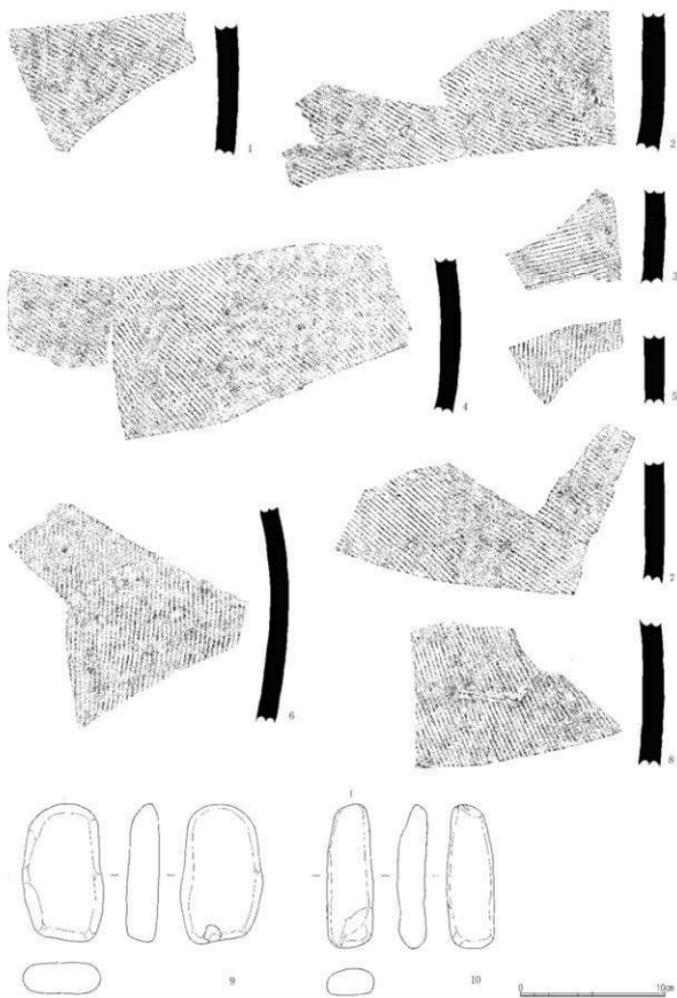


第39図 第1号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

1. 住居址



第40图 第1号住居址出土遺物(1)



第41図 第1号住居址出土遺物(2)

第2号住居址 (第42図、第43図)

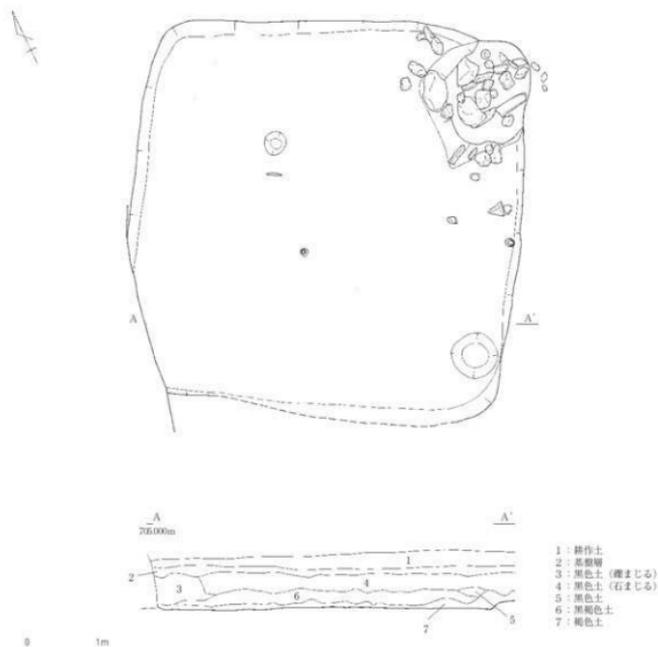
B T-96より出土している。1辺5.5mの正方形を呈し、深さは約70cmを測る。住居址西部は調査区外となっており、若干未調査部分を残す形となってしまった。覆土は黒色系の土で占められ、カマドは東部隅に築造されていた。

カマドは石組み粘土カマドであり、暗黄褐色系の粘土を軸石の外側に貼り付けてあり、焚口部は暗褐色土で区画されていた。底部には焼土が確認された。

柱穴は明確に検出することができなかった。

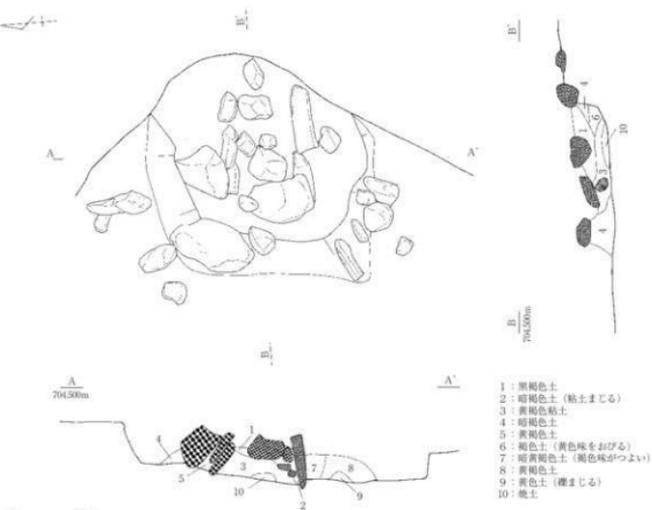
遺物 (第44図)

第44図が出土している。1～3は床面付近より出土している。1は土師器である。時期的に新しいと考えられるため、皿か坏か明確にできないが、坏の可能性が高い。口縁部が一部欠損している。法量は直径10.4cm、器高19cmである。2・3は灰軸陶器碗の下部である。高台径が6～7cmあることから、いわゆる深碗の可能性はある。2は胎土内に黒色粒が混入し、釉薬はほとんど施されていない。また、3は胎土内には混入物がほ

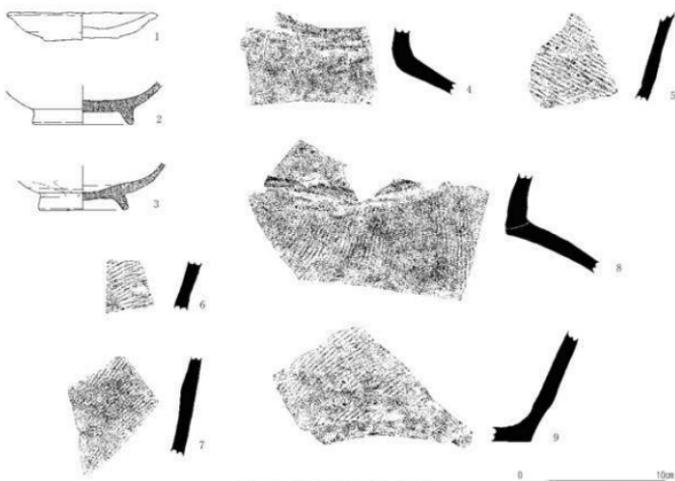


第42図 第2号住居址遺構平面図 (1)

第四章 遺構と遺物



第43図 第2号住居址遺構平面図(2)



第44図 第2号住居址出土遺物

とんどみられず、非常になめらかであった。釉薬は非常に薄く、光沢がない。また、高台の接合も雑であった。
4～9は須恵器の甕の破片である。4・8は頸部付近、9は底部である。いずれも平行叩き目がみられる。
この住居址は、出土した土師器から14期頃と考えられる。

第3号住居址（第45図）

この住居址はBW-92より出土している。4.7m×4.5mの方形プランで、深さは約20cmを測る。覆土は焼土の混入した黒褐色系の土が中心であった。壁直下には周溝が巡らされていたが、西壁部の一部が途切れていたことから、この地点が出入り口と推定される。ピットは5ヶ所検出できたが、柱穴は特定できなかった。また、北東隅部からは、灰が堆積した土坑が出土している。

カマドは東部壁中央やや南寄りに築造されている。カマド内外に礫が出土せず、袖部に青灰色粘土が存在していることから、粘土カマドと考えられる。天井部は火口部付近をのぞいて一面に焼土が検出され、カマド内の覆土には焼土が混入していた。また、カマド袖部内等より須恵器の破片が出土しており、築造の際に混入したと考えられる。

遺物（第46図、第47図）

第46図、第47図が出土している。第46図1～7は須恵器である。1・2はともに小片からの復原である。1の口縁部には、重ね焼きの痕跡をとどめている。2にはいわゆる火罨が9内外面にみられ、底部に糸切り痕を残す。また底部外縁部から体部最下部にヘラケズリ調整が行われている。3はカマド内より出土している。内外面共にヨコナデ整形で、底部には糸切り痕が残る。口径13.2cm、器高2.8cmであった。4・5は蓋で、小片からの復原である。4は胎土に雲母を含み、やや焼成不良である。6は床面付近より出土した坯身であり、口縁部が約1/4ほど欠損している。口径12.2cm、器高4.2cmを測る。器壁は薄く、底部には糸切り痕を残す。焼成がややあまいのか、酸化焰による焼成が一時行なわれたためか、内面が褐色味を帯びている。7は蓋坯の坯身の小片の資料である。高台部と体部、口縁部に火罨の痕跡がみられる。なお、焼成は良好である。

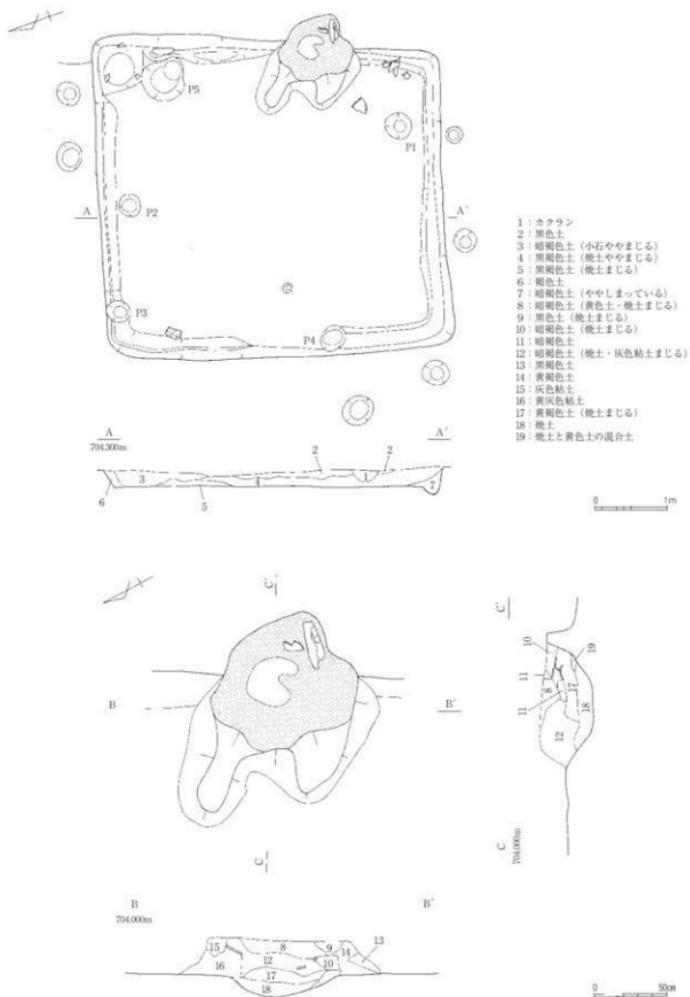
8は灰釉陶器の小片である。焼成があまく釉薬も薄いものの、胎土は緻密であった。混入品の可能性が高い。9は小型甕の小片で、外面と、内面の口縁部付近にススが附着している。

10・11は外面の体部にヘラケズリ調整を行っている甕で、いわゆる武蔵型甕と考えられる。10は体部下部の破片で、外面に縦位の下から上方向へのヘラケズリ調整を行い、内面はナデ調整がみられる。底部はケズリ調整の後にヘラ状工具によるミガキ状の調整を行っている。焼成はややあまい。11は頸部直下の体部との境界部分に段を有し、それより下部は横位（右から左方向）のヘラケズリ調整、上部はヨコナデ調整を施している。内面は、口縁部付近については指によるヨコナデ調整、体部についてはヘラ状工具によるヨコナデ調整を施していると考えられる。

12・13は長胴甕である。12は強く屈曲して外反する口縁部を持ち、体部外面はヘラ状工具による縦位（上から下方向）のナデ調整が頸部の屈曲部から施されている。内面は粗雑な作りで接合痕を残している。口縁部はハケ目調整の後にヨコナデ調整を施していると考えられる。また、体部上部は横位や斜位の弱いハケ目調整が確認できる。13は口縁部外面のヨコナデ成形後に、縦位のハケ目調整を口縁部下半部から体部にかけて縦位に施している。内面は口縁部に横位のハケ目調整を行い、体部にも断絶をもつ横位のハケ目調整を行なっている。なお、この甕には外面にはススが附着し、内面の口縁部には炭化物が附着している。

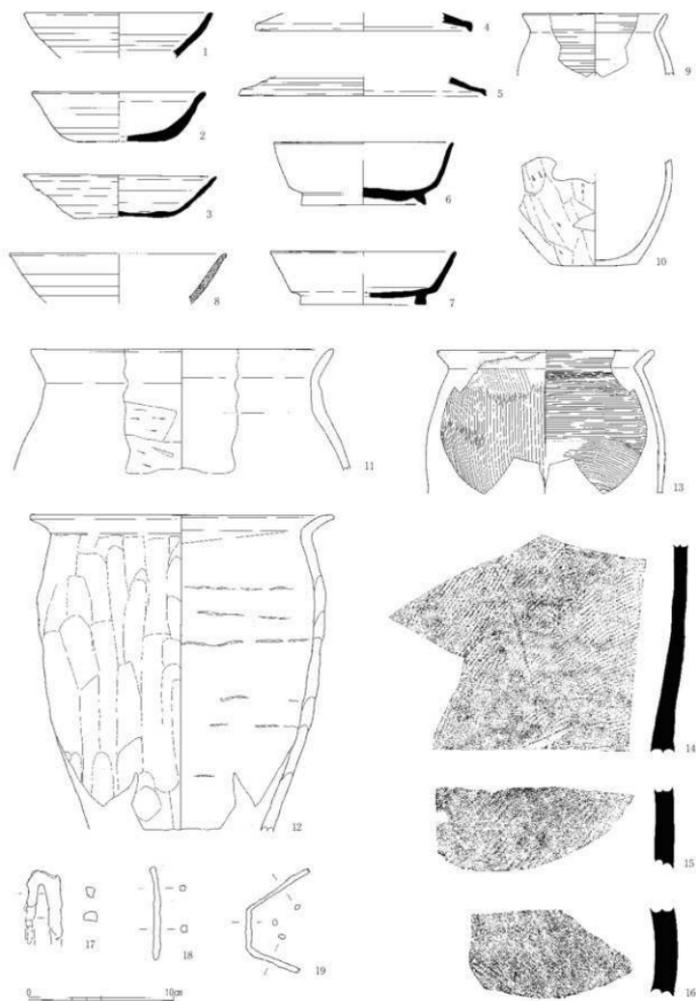
14～16、第47図は須恵器甕の破片である。外面に平行叩き目が見られる。なお、第46図15・16と第47図2は完全な還元焰焼成ではないようで、焼成はそれほど悪くないものの若干褐色味をおびた明灰色であった。

第IV章 遺構と遺物

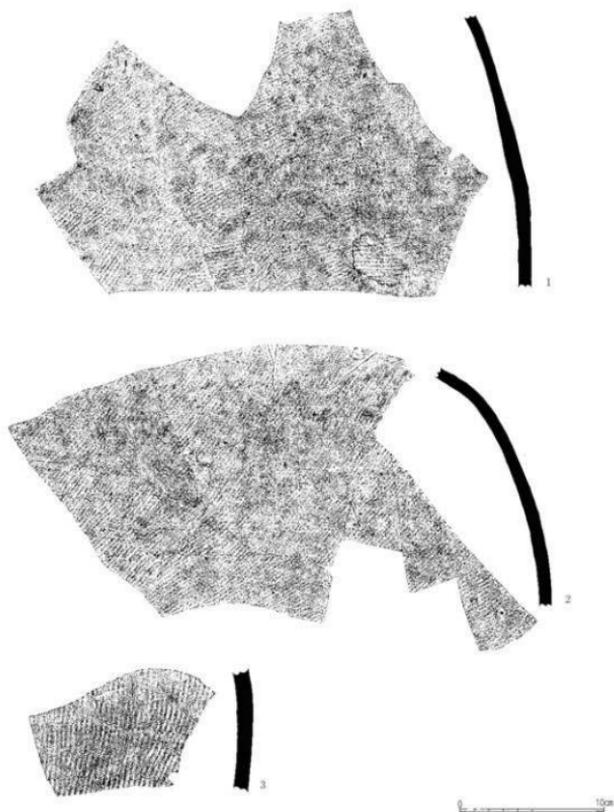


第45図 第3号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

1. 住居址



第46图 第3号住居址出土遺物(1)



第47図 第3号住居址出土遺物(2)

第46図17～19は鉄製品である。遺物取り上げ後、保存処理を行うまでに時間が経過してしまったために錆化が進んでしまい、用途を特定することができない。17は「U」字状に屈曲している。これら鉄製品は、この住居址の上層にカクランが存在している点を考えると、混入品の可能性が高い。

なお出土遺物から、この住居址は6期と考えられる。

第4号住居址(第48図、第51図)

この住居址はC-C-91より出土している。5.6m×4mの隅丸方形で、深さは30cmを測る。北・西・南壁に細い周溝が検出された。覆土は全体に黒色系の土で覆われていた。

カマドは東部壁中央部に構築され、壁際の天井石は残存していたものの、袖石は右袖部のみ存在していた。袖は暗褐色系の土を積み上げ、その上部に暗黄色粘土を貼り付けている。なお、柱穴は明確に検出することができなかった。

遺物(第49図、第50図)

第49図1・2は須恵器坏である。いずれも小片からの復元である。

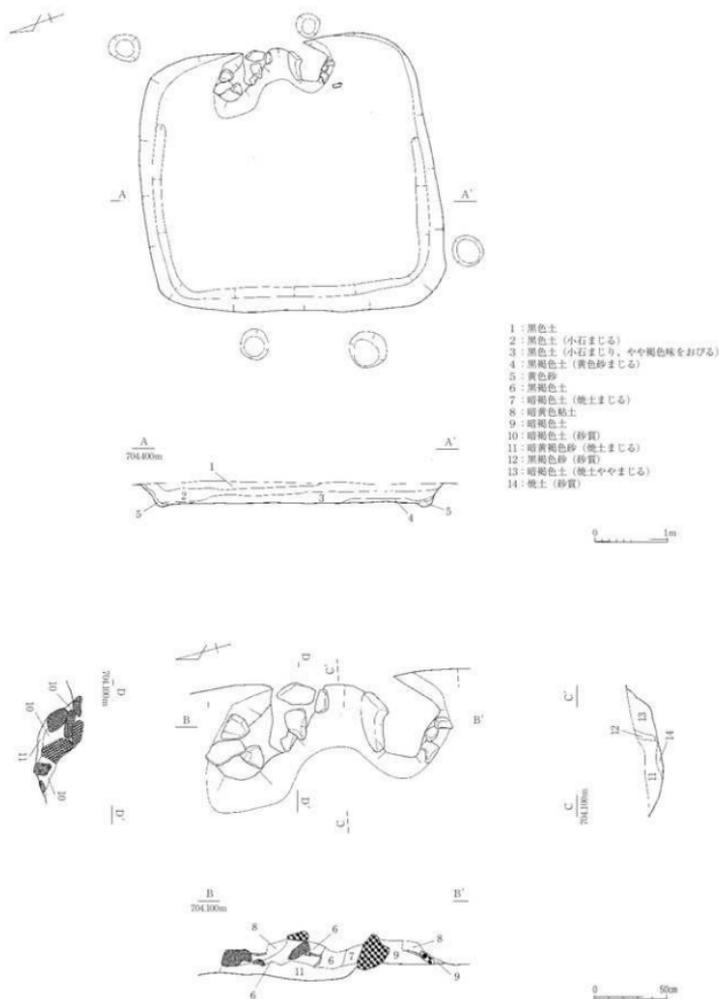
3～6は内黒土器の坏である。口径は14cm前後である。3は小片からの復元である。内面のミガキ調整を緻密に行っている。4は1/4個体程度の破片からの復元で、口径13.8cmを測る。内面の黒色処理がやや抜けており、器壁に小剥離がみられる。なお、外面にはススが付着している。5も1/4程度残存した個体の復元である。外面にはススの付着が見られる。内面は口縁部に横位の幅の広いミガキ調整を施した後、縦位のミガキ調整を施している。口径13.8cm、器高4.4cmを測る。6は小片からの反転復元のため、口径に誤差が生じている可能性がある。体部上半部に弱い屈曲を持つ器形で、内面のミガキは比較的確であった。また、外面にススの付着がみられる。

7は須恵器の壺である。頸部と体部に接合関係はないが、胎土等から同一個体と判断し、図上復元している。頸部はほぼ残存しているが、体部は2/3程度の残存である。

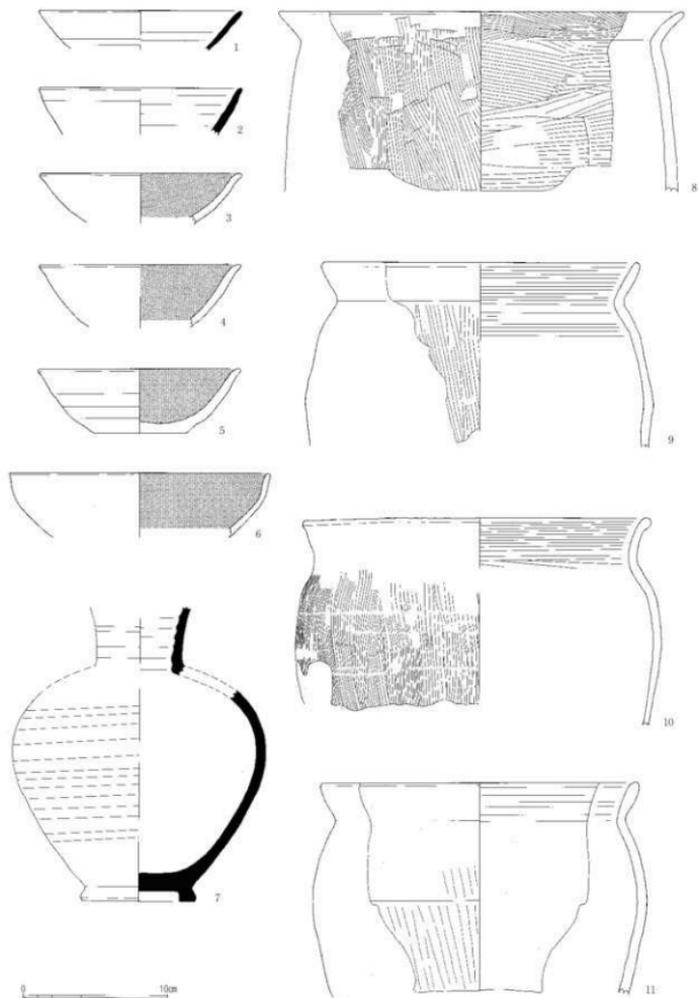
第49図8～11、第50図1・2は長胴甕である。第49図8の外部は体部から口縁部の一部にかけて縦位(上から下方向)のハケ目調整を行い、口縁部にヨコナデ調整を行い、ハケ目をナデ消している。内面には口縁部の後、体部の順に、横位(右から左方向)に不規則なハケ目調整を施している。なお、内面の一部にはススが付着している。9は外面の体部に縦位のハケ目調整が行われ、その後口縁部のヨコナデ調整を施している。内面は口縁部と体部上部に横位のハケ目調整が施されている。この甕も外面にススがみられる。10は口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、色調は全体に赤褐色である。外面の体部に縦位のハケ目調整が行われているが、この調整が口縁部までは届いておらず、やや粗雑な印象を受ける。またハケ目調整の後、ヘラ状工具を使用して、横位に数段ハケ目をナデ消している。内面は口縁部だけに横位のハケ目調整がみられる。11は板状工具による縦位のナデ調整によって、極浅いハケ目調整状の痕跡を残し、その後、体部上部では横位のヨコナデ調整を行なっている。内面は口縁部に工具を使用した横位のヨコナデ調整が行われ、体部はヨコナデ調整を施している。第50図1は外面の体部上部から縦位(上から下方向)にハケ目調整を行い、体部上部から口縁部にかけて、ナデ調整によってハケ目を消している。内面は口縁部に斜位のハケ目調整、体部上部に粗い横位のハケ目調整がみられる。なお、体部には縦位のナデ成形痕が確認できる。2は体部に縦位のハケ目調整が施され、口縁部のヨコナデ調整によってハケ目上端部がナデ消されている。内面は口縁部および体部上部は横位のハケ目調整である。この住居址から出土している長胴甕は口縁部がやや直立気味であり、最大径が体部にあるものが多い。

第50図3・4は小型甕である。3は外面の体部に横位のカキ目が施され、内面の口縁部も横位のハケ目調整が見られる。なお、口縁部付近の内外面にはススが付着している。4は体部下部の破片である。外面は横位のカキ目が施されている。内面はナデ調整が施されている。この甕も体部の内外面にススの付着がみられる。5～8の石に加工痕は確認できないが、形状から菰手石と考えられる。5は234g、6は228g、7は68g、8は92gであった。

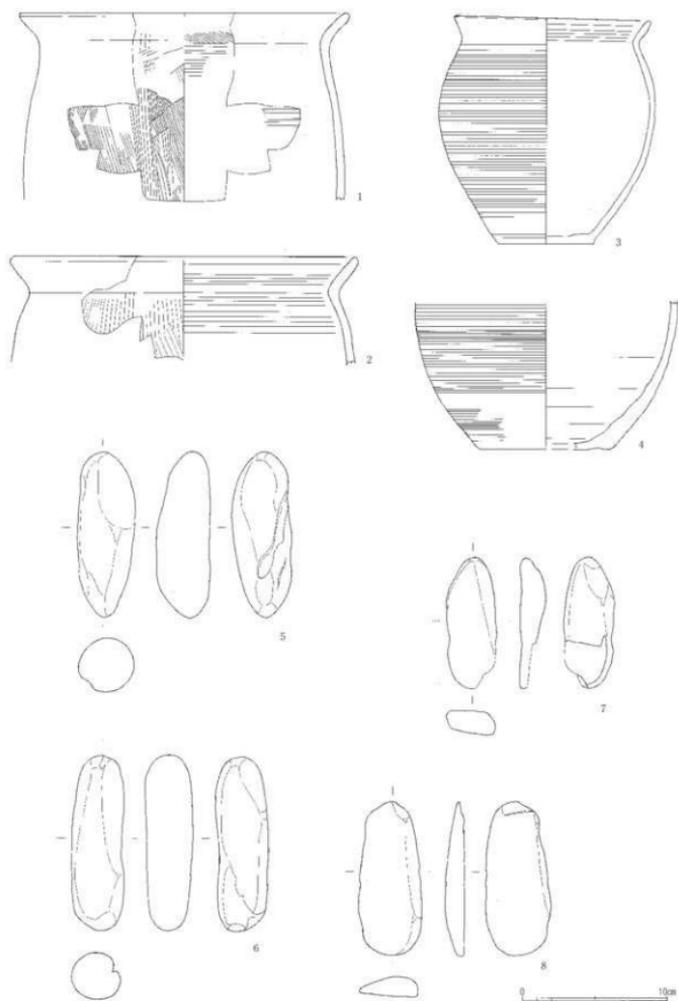
第五章 遺構と遺物



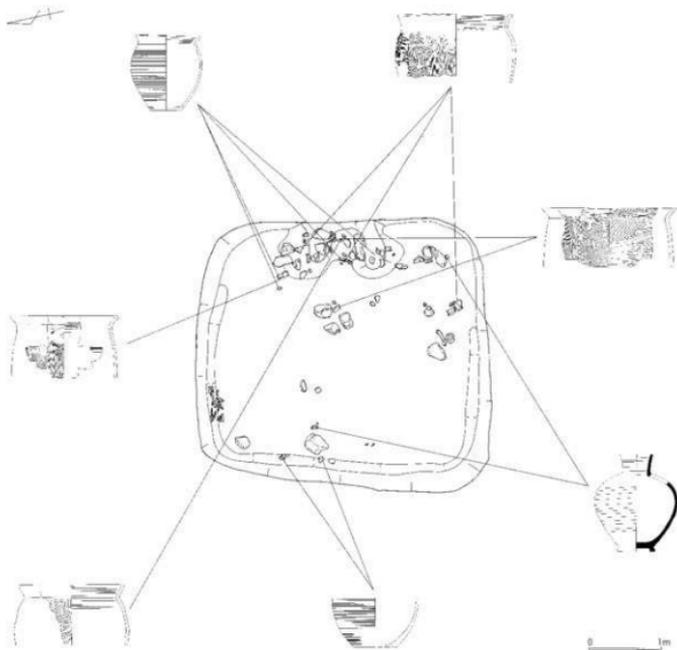
第48図 第4号住居址遺構平面図 (カメラ: S=1/30)



第49图 第4号住居址出土遗物(1)



第50図 第4号住居址出土遺物(2)



第51図 第4号住居址遺物出土状況図

第5号住居址 (第52図)

CD-94より出土している。プランは4.1m×4.1mの方形で、深さ約60cmを測る。覆土は黒色系であり、東壁中央部にカマドが築かれている。なお、柱穴は検出できなかった。周溝は西壁と南壁で検出されている。

カマドは袖部と奥壁部に暗灰色系の粘土を使用して形を作っており、粘土内にはやや小型の礫が混入していたが、袖石となりうるものは出土していない。

遺物 (第53図～第55図)

第53図1～16は須恵器坏である。口径12cm前後のもの(3・4・8・10・11・13・15)と、13cm前後(1・2・5～7・9・12・14・16)の2種類が確認できる。2～4は1/2個体の復原である。3・4は焼成がややあまい。1・5～9・12・14は小片から復原である。1・12は軟質須恵器の小片である。5・8は胎土がやや白色味をおびた小片である。6は外面にヘラ状工具によって横位に鋭い沈線が引かれている。9・14はやや焼成が不良である。10は1/3程度残存した破片からの復原であり、焼成がややあまい。16は大型の坏で、軟質須恵器である。3/4ほどの残存率である。なお、11は床面付近より出土しており、1～3には外面体部に墨書がみられる。

17～26は内黒土器である。口径は、須恵器と同様に、口径12cm前後、器高4.1cm（20・21）と、口径13cm前後、器高4.5cm前後（17～19・22～25）の2種類が見られる。全体的に内面のミガキ調整は密に施されている。17・19・21・22は小片からの復原であり、17～20・23・25は黒色処理が抜けている。また、21・24の外面にはススが付着している。なお、24は床面付近からの出土で、底部にはヘラケズリ調整が施されており、墨書がみられる。25は外面体部下半部にヘラケズリ調整を行い、底部も24と同様にヘラケズリ調整を施している。

26の体部には墨書が確認できる。口径は13cm、器高3.5cmを測る。

第53図27・28と、第54図1～6は小型甕である。第53図27・28は小片からの復原である。28の口縁部には内外面にススが付着している。第54図2・3は底部の破片である。2の内面にはススが付着している。また、第54図2以外の小形甕は体部に横位のカキ目が見られる。第54図1は1/3ほど残存している破片を反転復原したもので、体部上部には、沈線が螺旋状に施文している。第54図4・5は同一個体である。

第53図29・30は底部である。29には外面底部と体部にはヘラケズリ調整（体部は上から下方向の縦位のヘラケズリ調整）が施されている。また、内面にはクシ状工具による押し引き整形によって、クモの巣状のハケ目調整を行っている。30は底部に糸切り痕を残し、外面体部下部にヘラケズリ調整を行っている。

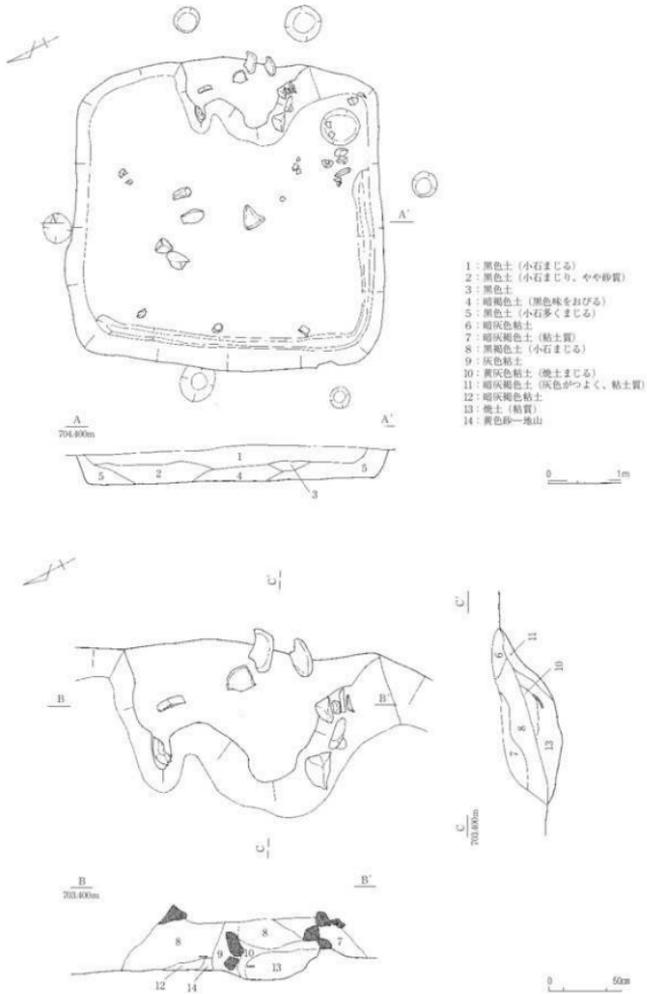
第54図7～16、第55図1～8は長胴甕である。第54図7・10は外面に体部から口縁部下にかけて工具端部が強く器面に食い込んだ斜位のハケ目調整を施し、その後口縁部はヨコナデ調整を行っている。口唇部には明瞭ではないものの沈線が確認できる。内面の調整痕はほとんど確認できず、成形痕を明瞭にとどめている。なお、この2個体は胎土・色調も近似しており、同一個体の可能性もあるが、器形が若干異なっているため、2個体として扱っている。8・9・11・12は口縁部から体部にかけて密接に縦位のハケ目調整を施し、その後口縁部にヨコナデ調整を行っている。内面は口縁部から体部上部にかけて横位のハケ目調整がみられる。これらの甕はハケ目は明瞭であり、間隔も密接で、非常に丁寧な作りであり、内面体部のナデ調整も丁寧な仕上げとなっている。なお、8と12はやや赤味を帯びた色調であり、工具も同一の物を使用していると考えられる。また、9と11も同様に、同一工具による調整と考えることができる。9の体部内外面にはススが付着している。

第55図9～12は須恵器甕の破片である。

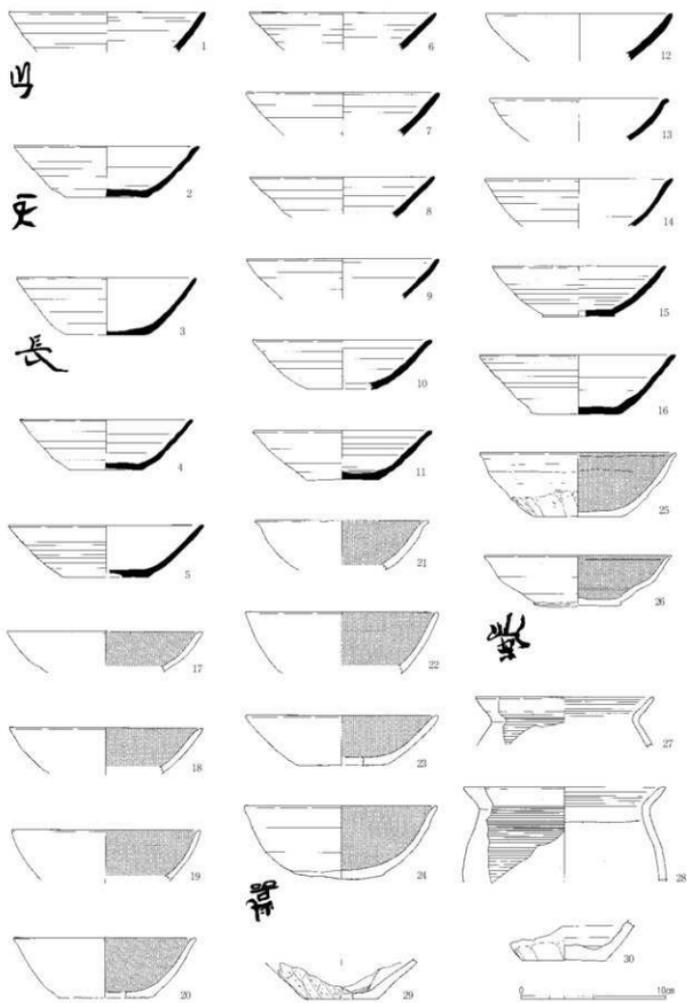
第54図17は鉄製の刀子である。刀身の一部が欠損している。

この住居址は6期と考えられる。

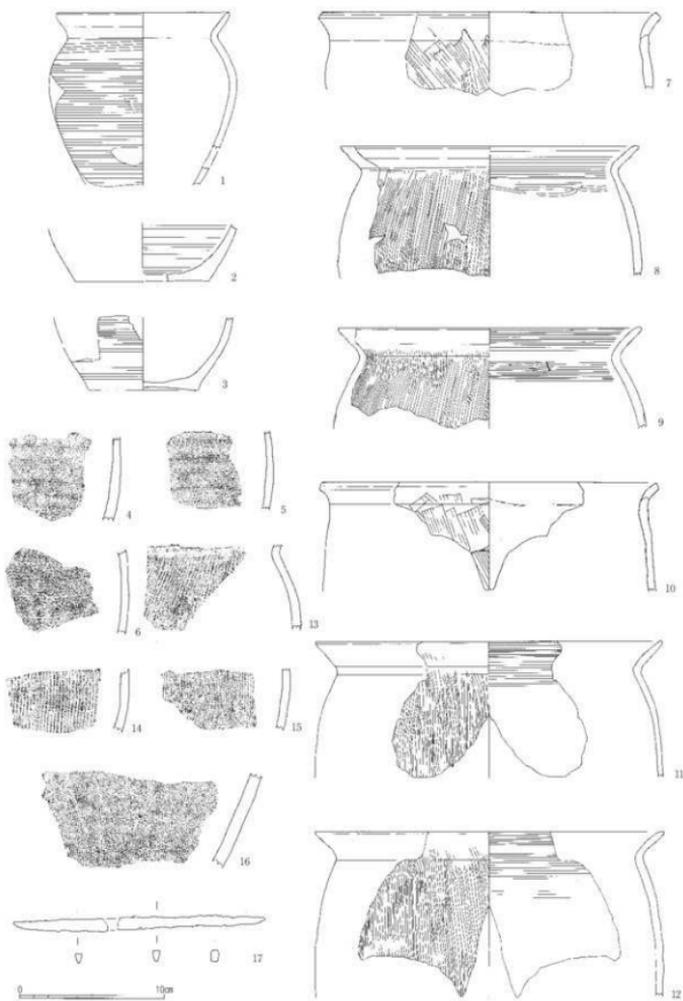
1. 住居址



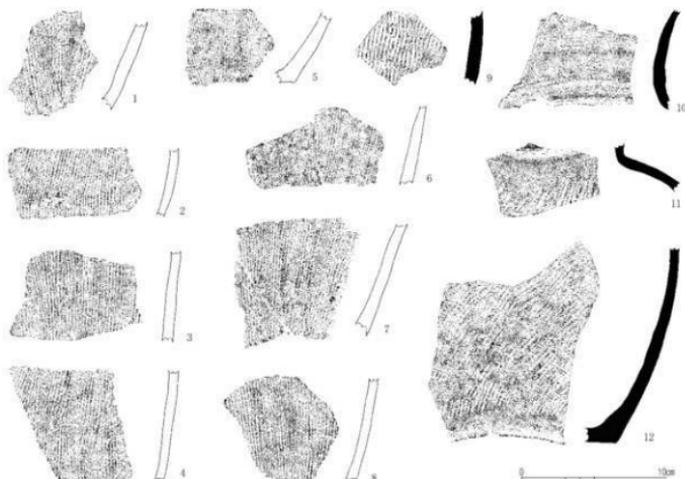
第52図 第5号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第53図 第5号住居址出土遺物(1)



第54图 第5号住居址出土遗物(2)



第55図 第5号住居址出土遺物(3)

第6号住居址(第56図)

この住居址はB X-89より出土している。この住居址は4.4m×3.5mの隅丸方形で、深さは約50cmを測る。カマドは西壁中央部より出土しており、カマド南部に偏平な石が置かれており、作業台の可能性が考えられる。また、住居址中央部に、礫の混入した土坑が検出されているが、この住居址に伴うものなのか明確にできなかった。さらに、柱穴についても検出することができなかった。カマドは左袖部に袖石が検出されたが、右袖石は出土していない。また、燃焼部には被熱により赤色化した底面が検出されている。

遺物(第57図)

1は須恵器坏である。小片からの復元である。

2～6は内黒土器で、破片からの復元である。2～5は内面のミガキ調整は密に施されているが、6はやや粗い。2・3は小片からの復元である。また、3と5は内面の黒色処理が抜けている。なお、5は床面付近からの出土である。2～4は推定口径14cm前後、5は1/2個体の残存率であり、口径13cm、器高3.6cmを測り、6は1/3個体残存で、口径15.2cm、器高4.5cmである。

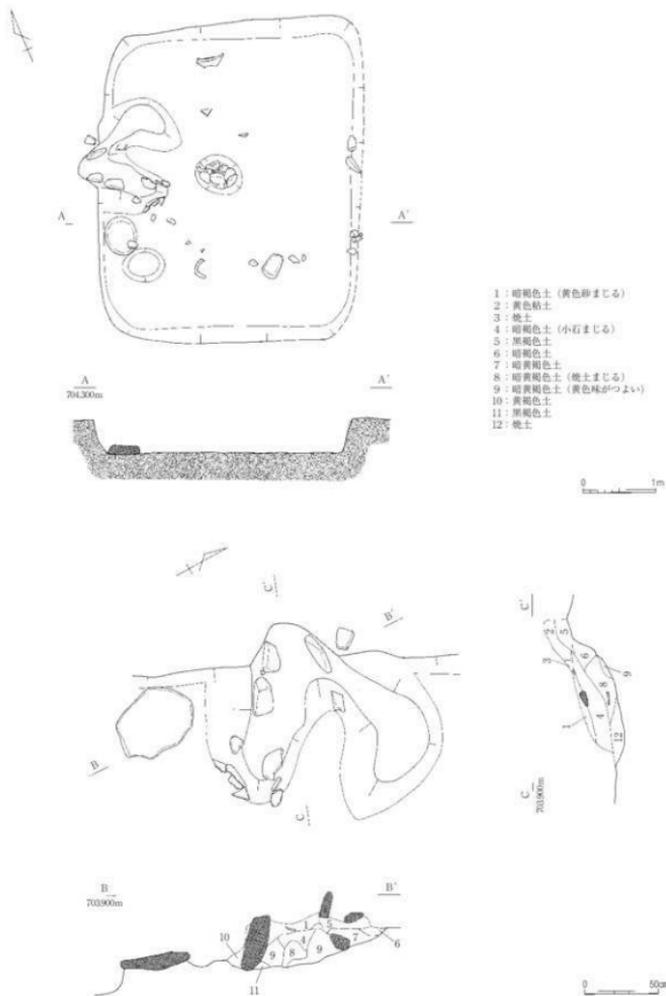
7は須恵器甕である。床面から出土した破片資料で、口縁部と体部下から底部が失われている。体部も全体的に大きくゆがんでいる。外面に平行タタキ目が見られる。

8は小型甕である。外面の体部と、内面の大部分がススに覆われている。

9は長胴甕である。口縁部はヨコナデ調整、体部は粗いハケ目調整の後、横位にユビナデ調整を行っている。内面の体部は斜位の粗いハケ目の後ナデ調整、口縁部は横位のハケ目を施している。

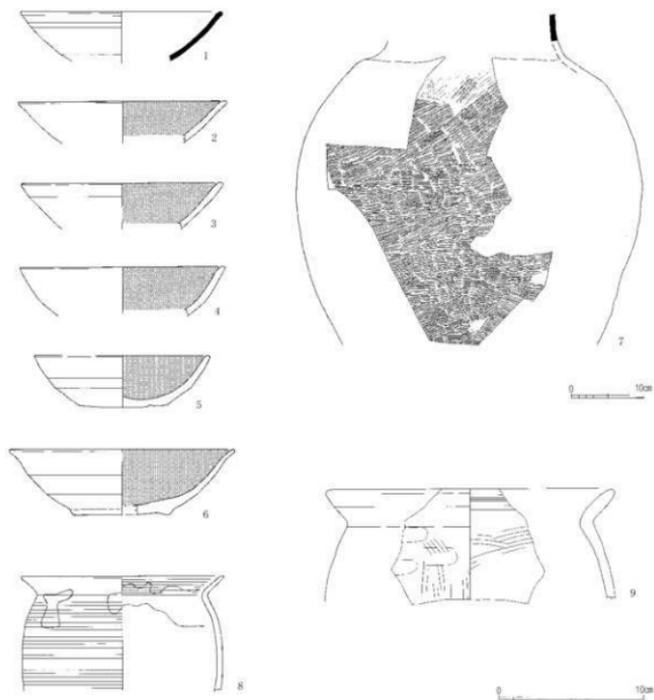
なお、覆土からは緑釉陶器の小片(9世紀代)も出土しており、時期としては7期頃と考えられる。

1. 住居址



第56図 第6号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

第五章 遺構と遺物



第57図 第6号住居址出土遺物 (7 : S-1/6)

第7号住居址 (第58図、第59図)

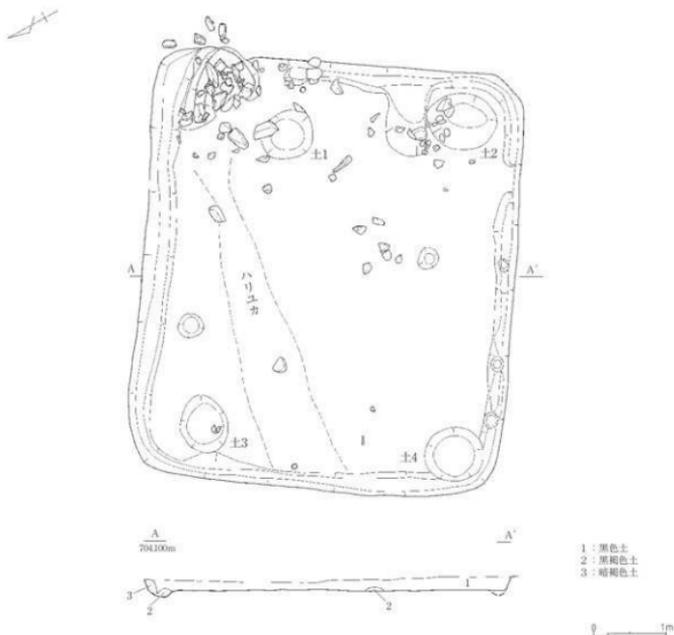
この住居址はCD-87より出土している。プランは6m×5.1mの方形で、深さ約15cmを測る。覆土は黒褐色系の土で覆われていた。また、四方の隅には直径約80cmほどの土坑1(深さ29cm)、土坑2(24.5cm)、土坑3(21.3cm)、土坑4(32.5cm)が検出されている。カマドは東隅に築かれていた。周辺の土は黒褐色系の土に焼土が混入しており、粘土状のものが検出されないことから、石組みカマドの可能性が高い。

遺物(第60図)

1・2は灰釉陶器の碗である。いずれも釉薬はほとんど施されていない。3は内黒土器(口径16cm、器高5cm)である。1/2個体残存した破片からの復原資料である。内面の黒色処理が若干抜けている。

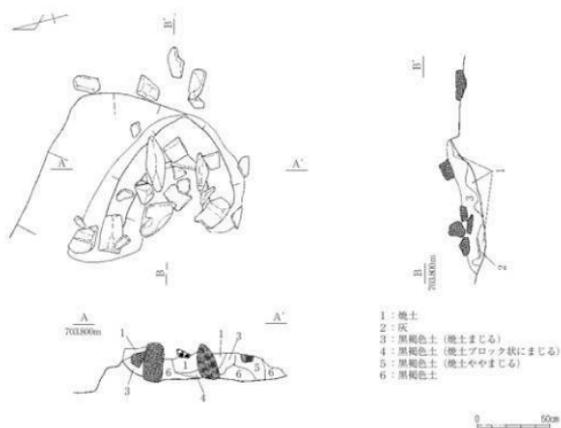
4は土師器の盤である。体部は一部残存していたにすぎない。やや白色味の強い色調で、高台は中実である。5・6は土師器の坏(口径10~11cm、器高2cm前後)である。退化が進み、皿との区別が困難である。7~10は土師器底部の破片である。なお、1~5・7・9・10は床面付近より出土している。

11~14は鉄製品である。11・12は鉄製の刃部の破片と考えられる。13・14は棒状の製品である。鉄製の基部の可能性もある。

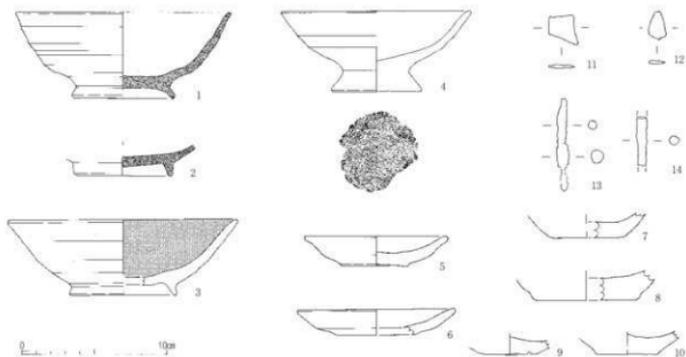


第58図 第7号住居址遺構平面図(1)

第五章 遺構と遺物



第59図 第7号住居址遺構平面図(2)



第60図 第7号住居址出土遺物

第8号住居址 (第61図)

この住居址はCF-83より出土している。プランは3.8m×3.2mを測り、深さは約20cmであった。この住居址は焼土の混入した暗褐色系の土が中心であり、床面にも被熱箇所が確認できることから、火災住居の可能性が高い。カマドは南東壁やや南寄りに築造されており、粘土は確認できないことから、石組カマドの可能性が高く、袖石が比較的遺存していた。なお、この住居址は調査中に第11号住居址としても取り扱われており、遺物も取り上げられていたことから、住居址番号の第11号は欠番としている。

遺物 (第63図)

第63図11~23が出土している。11は須恵器坏である。小片からの復原であるが、須恵器としては比較的器壁が厚く粗雑な印象を受ける。

12・13は内黒土器である。いずれも小片であり、12は黒色処理がやや抜けている。13の量は口径12.4cm、器高4.8cmである。この土器も黒色処理が抜け落ちている。これらの坏は内面のミガキ調整がやや粗い。

14・15は灰釉陶器である。14はハケ塗り施釉の可能性があり、15はハケ塗り施釉である。

16・23・26は土師器坏である。いずれも口径12cm前後、器高4cm前後である。17~20は比較的内湾しながら立ち上がっているのに対して20~23は16~23より直立気味に、しかもやや直線的に立ち上がっている。胎土も緻密な印象を受ける。なお、16・18・21~23は小片からの復原であり、17・21は内面にススが付着している。23はやや焼成がましい。また、19は内面にミガキ調整かとも考えられる痕跡があり、黒色処理の抜けた内黒土器の破片の可能性もある。

26は土師器坏の底部の破片である。

24・25は小型甕の上半部である。小片からの復原であり、24は外面に、25は内外面にススが付着している。両者とも外面にはナデ調整が施されている。

この住居址は、出土遺物から9期頃と考えられる。

第9号住居址 (第62図)

この住居址はBX-89より出土している。第6号住居址がこの住居址の中央部を掘り込んでいるため、詳細は明確にできなかった。覆土は黒褐色系の土が主体であり、プランは4.8m×4.5mの方形で、深さ約50cmを測る。カマドは東部壁中央部に築造されていたが、焚口付近は破壊されてしまっている。また、西部壁は第3号住居址が重複して出土したため、状況が把握できなかった。なお、南東壁と、北西壁には土坑が検出されている。

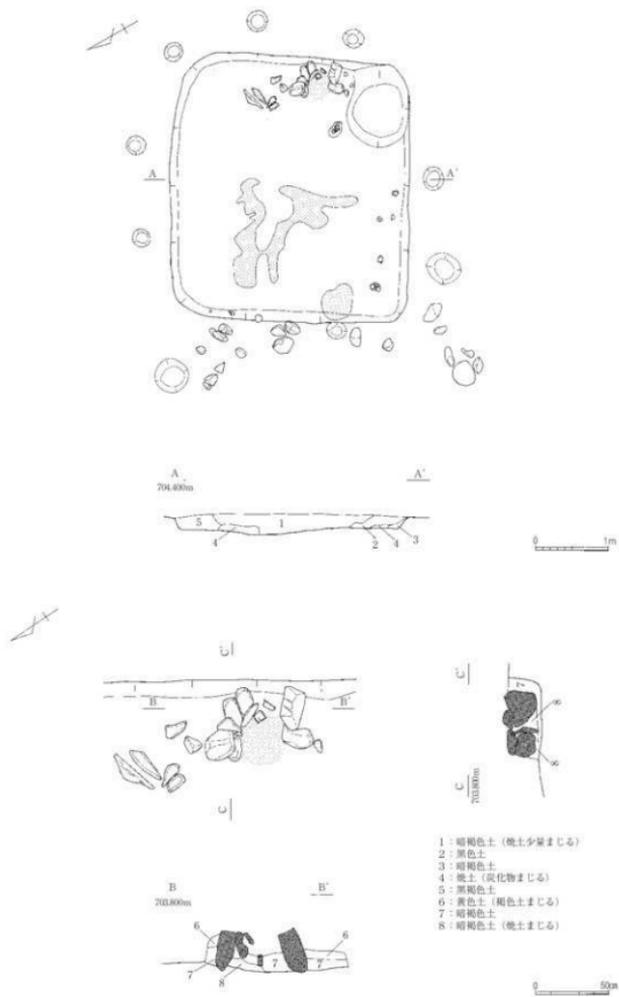
遺物 (第63図)

第63図1~10が出土した遺物である。1・2は須恵器坏である。1は軟質須恵器であり、小片からの復原である。2は床面付近より出土している小片で、上端部に重ね焼きの痕跡をとどめている。

3~5は内黒土器である。いずれも反転復原であり、3は1/4弱の残存率で、口径17.8cm、器高4.8cmを測る。ミガキ調整はやや粗い。また、内面の黒色処理も抜けている。4は小片資料である。内面のミガキ調整は密で、口縁部内外面にはタール状になった炭化物が付着しており、灯明具として使用していた可能性がある。5は底部の破片で、底部に糸切り痕を残すが、外周部にケズリ調整がみられる。内面のミガキ調整は密である。

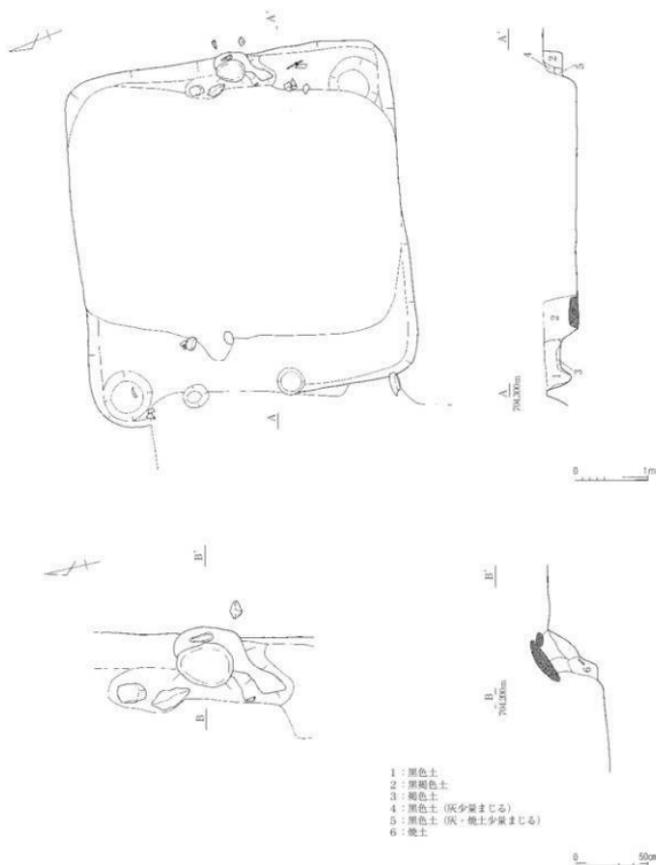
6・7は長胴甕の破片である。

8~10は鉄製品である。8は刀子状の形態をしている板状の製品である。刃は確認できない。9は紡錘車の紡茎である。先端部が折り曲げられている。10は紡錘車である。彈車は直径5.6cmを測り、紡茎は長さ24cmを測る。ほぼ完成品である。



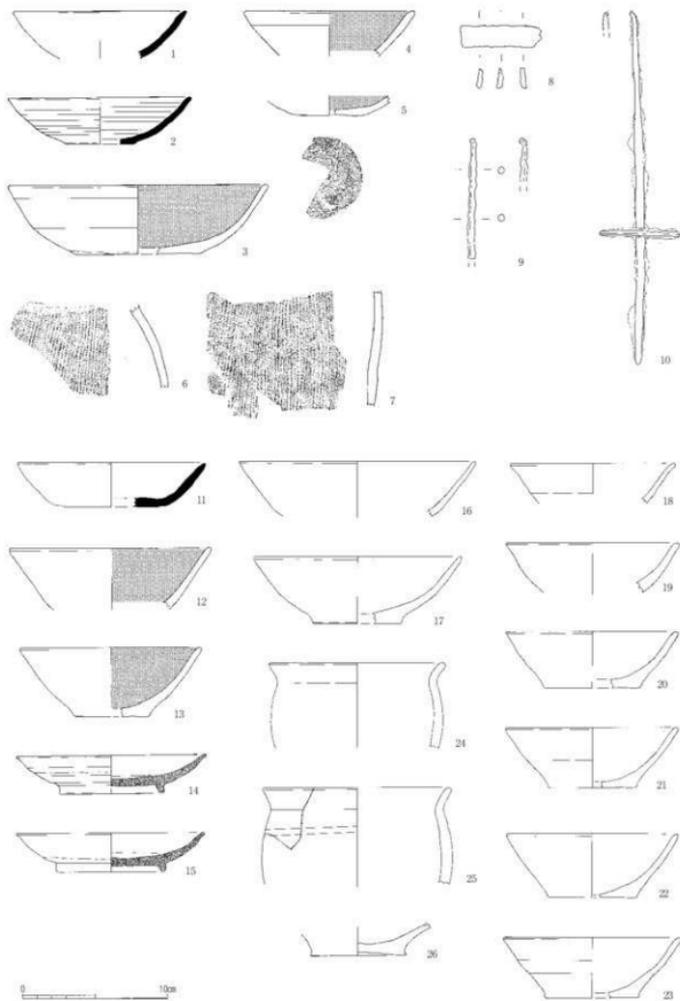
第61図 第8号住居址遺構平面図(カマド: S=1/30)

1. 住居址



第62図 第9号住居址遺構平面図(カマド: S=1/30)

第五章 遺構と遺物



第63図 第6・9号住居址出土遺物 (1-10: 6E、11-26: 9E)

第13号住居址 (第64図)

この住居址はCW-73より出土している。プランは3.6m×4mの方形で、深さは約20cmを測る。覆土は黒褐色系の土が中心である。周溝は東部壁下の一部以外に巡っている。カマドは東部壁中央部に築かれているが、袖石外側と奥壁部には暗灰褐色系の粘土が貼り付けられている。このことから、残存状況はよくないものの、石組み粘土カマドと考えられる。

遺物 (第65図)

1・2は須恵器蓋坏の坏身である。1は器壁がやや厚めの印象を受ける焼成不良の坏身である。高台が焼成前に剥離してしまったのか、接合痕をわずかに残している。1/3個体ほどの破片である。2は体部を1/2ほど欠損している。焼成は良好で、見込部の一部が磨ったように平滑になっていることから、転用観の可能性がある。

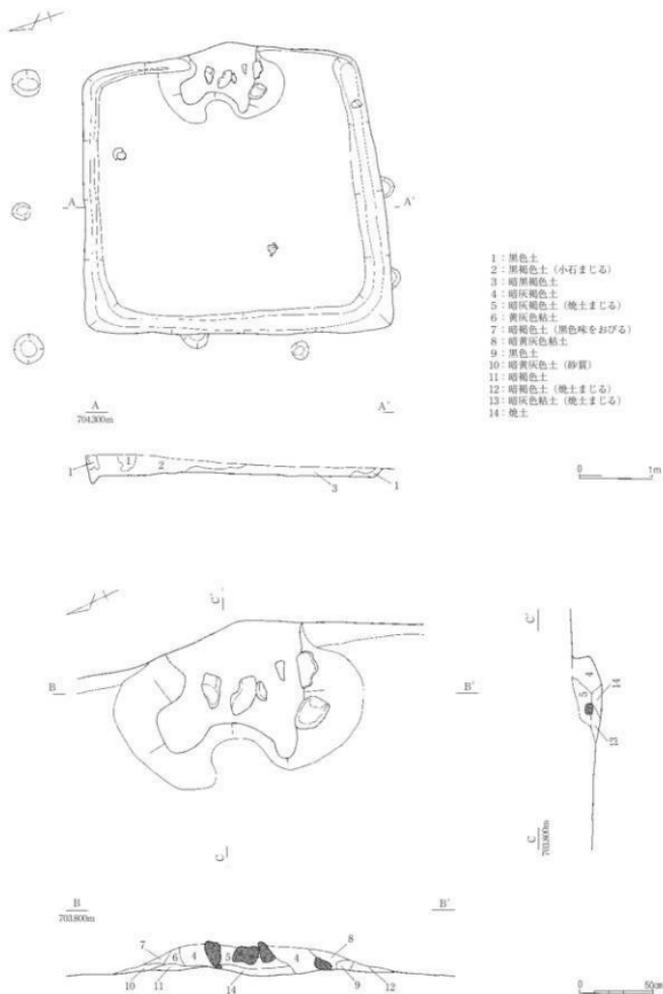
3・4はいわゆる甲斐型土器である。3は小片を復原したものである。やや丸みをおびた体部で、外面の下部にはケズリ調整が施されている。内面には粗雑な縦位のヘラミガキ調整が見られる。4はほぼ完形の坏で、外面口縁部は横位のヨコナデ調整、体部から底部にかけては斜位のケズリ調整がみられる。底部は外周部のみケズリ調整が施されている。内面の体部は上下に振幅させたヘラミガキ調整を行い、見込部と体部との境界部の周囲には円を描く様にミガキ調整を加えている。見込部には放射状暗文が施されている。なお、外面底部には「孝」が墨書されている。

5は小型甕である。ややずんぐりした器形である。外面の体部にはカキ目よりも弱い板状工具のヨコナデ痕がみられる。6はいわゆる武蔵甕の底部である。外面には縦位のヘラケズリ調整が施されている。

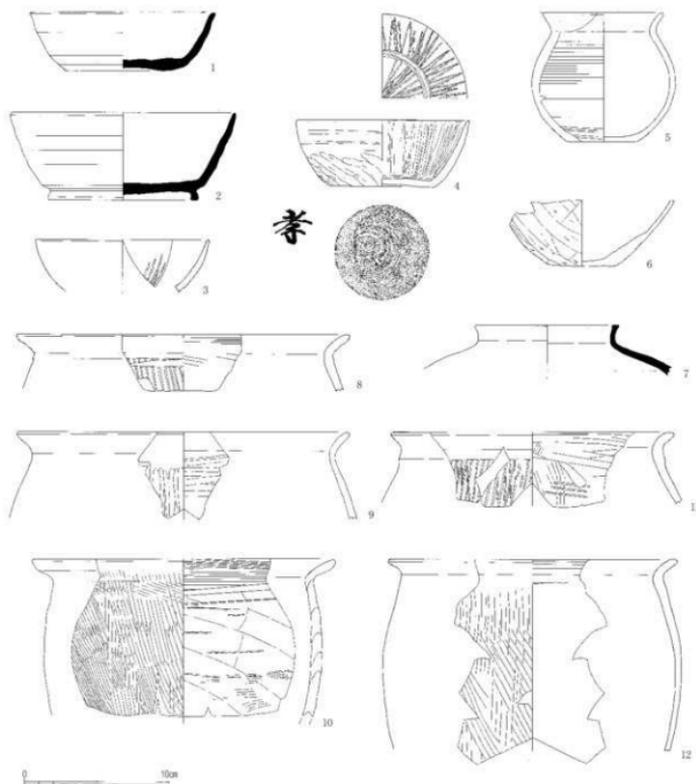
7は須恵器短頸甕で、小片からの復原である。肩の張った器形であるが、体部は欠損している。

8~12は長胴甕の破片である。8の外面には幅の広いハケ目を縦位に施文している。口縁部にはヨコナデ調整を行い、体部上部には指によるナデ調整の痕跡を残している。内面は口縁部に横位のハケ目調整がみられる。小片からの復原である。9は外面にごく浅いハケ目調整を縦位に施し、内面には横位のヘラナデ調整を施している。10は外面体部には斜位のごく浅いハケ目調整が密に施されている。口縁部は横位のヨコナデ調整を行い、ハケ目調整を一部ナデ消している。内面は口縁部にハケ目調整がみられる。また、体部は横位のハケ目調整を施した後に板状工具によってナデ調整を施している。内面の調整はやや粗雑で、接合痕を残している。なお、口縁部にはスガが付着している。11は小片からの復原で8と同様に幅の広いハケ目を縦位に施文している。内面は口縁部に横位のハケ目調整を施し、体部は縦位のハケ目調整と、横位の幅の広いハケ目を施している。12は体部上部に縦位の浅いハケ目調整と、体部下部に斜位のハケ目調整が施されている。内面には口縁部に横位のハケ目調整が施されている。この住居址は5期頃と考えられる。

第IV章 遺構と遺物



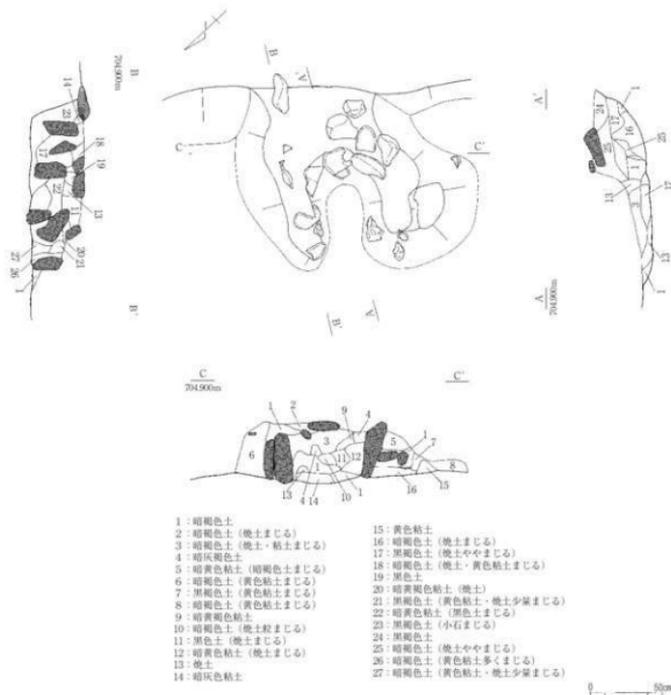
第64図 第13号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第65図 第13号住居址出土遺物

第14号住居址 (第66図、第67図)

CM-53から出土している。この住居址は第15号住居址と第16号住居址と重複して出土している。プランは5.4m×4.9mの方形で、深さは約40cmであった。覆土は焼土が混入した黒色土が中心であった。壁際には周溝が巡り、東部壁にはカマドがみられる。なおこの住居址にはカマドが2基存在するが、調査段階では同一住居址内に存在したのか、重複した住居址が存在したのかについては明確にすることができなかった。カマドは調査段階で暫定的に壁中央部のカマドを中央カマド、南東隅のカマドを脇カマドとして取り扱った。脇カマドは、袖石の外側に黄色粘土土、暗褐色系の土を使って版築状に重ねるように築造しており、燃焼部内には天井部か



第67図 第14号住居址遺構平面図(2)

ら崩落した構造物が扇状に堆積していた。また底部は使用に伴う被熱によって赤色化していた。中央カマドは、偏平な礎を袖石として設置した後に、その隙間に黄色粘土を使用して充填している。燃焼部内には焼土の混入した覆土が堆積しており、底部には灰が堆積していたが、カマドの使用に伴う被熱面を検出することはできなかった。

遺物(第68図、第69図)

第68図1～3は須恵器環である。1・2は蓋形の坏身である。1は1/4個体の残存であり、2は小片からの復原である。両者共に火罨がみられる。3は器壁が厚めの坏である。1/2個体の破片で、底部が大きく、直立気味に体部が立ち上がっている。焼成はややあまい。

4はいわゆる甲斐型環の小片である。外面の口縁部上端部に横位のミガキ調整を施し、体部下部にはケズリ調整が施されている。内面には上下に振幅させたミガキ調整が見られる。

5～8は小型壺である。5はやや褐色の、きめの細かい胎土を持ち、幅の広い、深いハケ目を持っている。

口縁部の内面も同一工具によるハケ目調整が施されている。なお、口縁部にはススが附着している。8は同様な工具による調整痕を持っているが、胎土は5より粗く、砂粒の混入がめだつ。6は外面の一部にハケ目調整の痕跡を残し、他の部分についてはヘラミガキ状の光沢のある調整を行っている。なお、内面にはススが附着している。7は体部上部に最大径を持つ器形で、体部に間隔の広い縦位の浅いハケ目調整、内面の体部下部には同一工具を使用した斜位の浅いハケ目調整がみられる。また、口縁部付近を中心に、内外面共にススが附着している。

9は灰釉陶器長頸壺の頸部破片である。上部に浅い沈線が1条施文されている。

10～15は長胴甕の破片である。10の外面はごく浅いハケ目調整を施し、内面の口縁部や体部に横位のハケ目調整痕が見られる破片である。11は小片からの復原で、外面の体部に縦位の浅いハケ目調整を施し、その後に口縁部にヨコナデ調整を施している。内面にはナデ調整がみられる。なお、口縁部にススが附着している。12も小片からの復原であるが、外面体部に縦位の浅いハケ目調整を行い、その後に口縁部のヨコナデ調整を施している。内面は口縁部と体部上部に横位のハケ目調整を施している。13は寸胴気味に立ち上がる器形で、外面体部には、縦位の板状工具によるナデ調整または、ごく浅いハケ目調整と考えられる調整が施される。内面体部には横位の板状工具によるナデ調整痕が確認でき、下部には接合痕もみられる。14は寸胴の体部から、大きく屈曲する口縁部を持つ器形である。外面は縦位及び斜位のナデ調整であり、内面は板状工具による横位のナデ調整痕が確認できる。この甕は内外面共にススが附着している。15は底部に向かって徐々に径を減じている器形で、外面の口縁部から体部は縦位のハケ調整を施し、その後体部では縦位のヘラミガキ調整が施されている。また口縁部はハケ目調整の後、ヨコナデ調整を施している。内面は斜位・横位のハケ目調整の後に横位のヘラミガキ調整を行っている。第69図1～3も長胴甕である。1は外面の口縁部はヨコナデ調整、体部は板状工具による縦位のナデ調整がみられる。内面は口縁部にはハケ目調整が施され、体部には外面同様に板状工具による横位のナデ調整が施されている。2は底部に向かって次第に径を減じていく器形である。外面は板状工具による縦位のナデ調整が施され、内面は口縁部にハケ目調整痕をとどめ、体部には斜位のハケ目調整の後に縦位のナデ調整がみられるが、粗雑で接合痕を残している。3は底部破片である。外面は縦位のナデ調整、内面は横位のナデ調整が施されている。

4は須恵器大甕の破片である。外面に並行タタキ目、内面に同心円文がみられる。

5は鉄鏝である。刃部が小形である。

この住居址は4期～5期頃と考えられる。

第15号住居址(第70図)

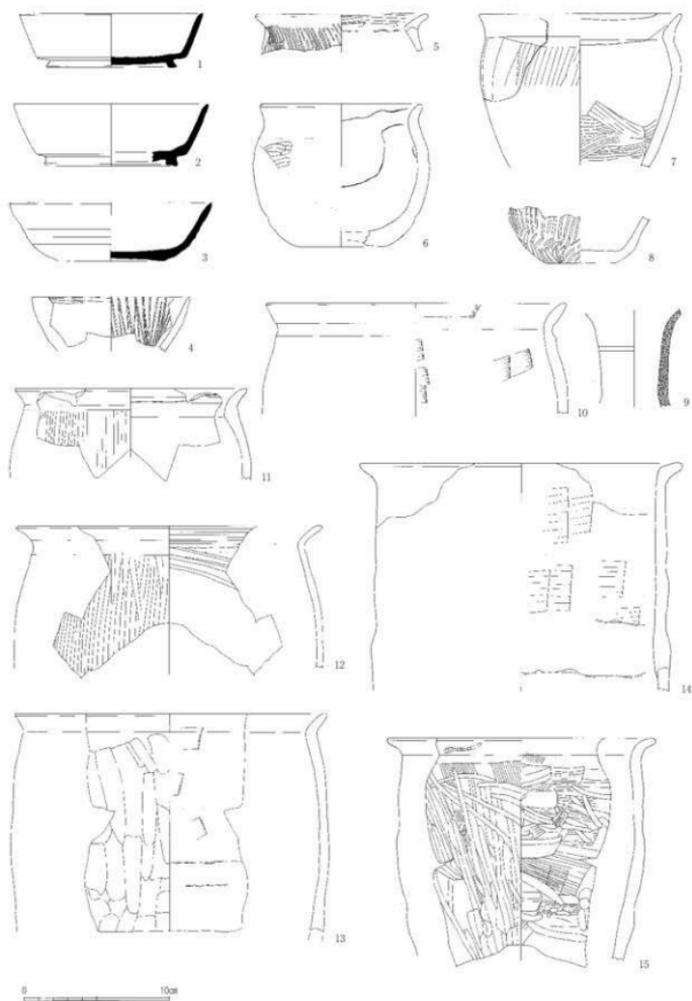
この住居址はC M-55から出土している。第14号住居址に掘り込まれているため、南部壁の状況は不明である。プランは3.6m×3.9mの方形で、深さ約30cmであった。覆土は黒色土系を中心に堆積している。床面からはピットが2ヶ所検出されているが、柱穴になるかは明確にできなかった。また、南東壁際の床面には被熱した部分が検出されている。

カマドは西隅に築かれ、左袖部は明確に検出できなかったものの、右袖部には袖石と、その周辺に灰色系の粘土が確認されており、石組み粘土カマドと考えられる。燃焼部の底部には焼土の混入した灰色粘土が出土したが、使用によって被熱し、赤色化した地点は確認できなかった。

遺物(第71図～第74図)

第71図1～9の土器が出土している。1～4は須恵器坏である。1・2は小片である。1の内面には摺とも

1. 住居址



第68图 第14号住居址出土遺物(1)

第V章 遺構と遺物

考えられる痕跡が見られる。また、両者とも口縁部上部部に重ね焼きの痕跡をとどめている。3・4は口径13cmほどで、ゆがみが多い。3は軟質須臾器である。

5・6は内黒土器である。口径13.5cm前後、器高3cmほどである。5は内面のミガキ調整が粗く、外面底部の糸切り痕はナデ消されている。1/3程度の残存率である。6は内面のミガキが密である。口縁部は一部残存しているにすぎない。

7は小形甕の上部小片である。胎土は緻密で、白色を帯びた色調である。外面の頸部から体部にかけて縦位の幅の広い浅いハケ目調整が施されている。なお、内外面にススが付着している。8・9は長胴甕である。8は口縁部付近の小片であり、外面の体部には縦位の細かいハケ目調整を行い、内面の口縁部は横位に、体部には斜位（左から右方向）にハケ目調整を施している。9は外面体部に縦位に細かいハケ目調整を行い、内面の口縁部から、体部上部部には横位のハケ目調整を施している。なお、体部の一部には指による斜位のナデ調整痕が確認できる。

10は鉄製の鎌である。切先が欠損している。

第72図～第74図1～3はいわゆる瓦手石である。第74図5は磨石である。

この住居址は7期頃と考えられる。

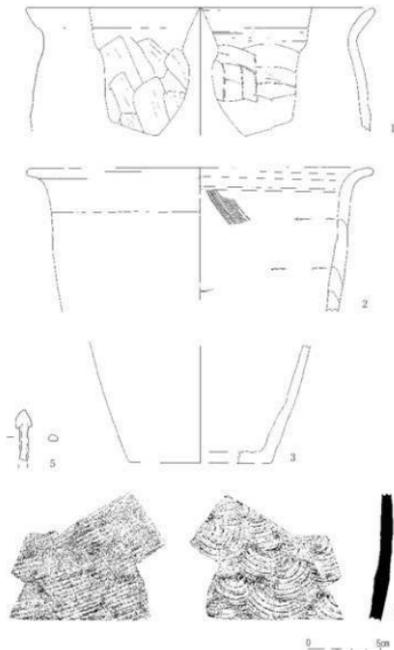
第16号住居址（第75図）

この住居址はCP-54から出土している。プランは5.5m×5.2mの方形で、深さは約20cmであった。また、北部と南部が、それぞれ第14号住居址と第17号住居址と重複しており、壁の確認ができなかった。なお、土層観察を行わなかったため、前後関係も明確にできない。覆土は全体に黒色土で、上層では石が混入し、下層では焼土が混入していた。なお、柱穴は検出することができなかった。

カマドは南部隅に築かれていたと考えられるが、周辺に構造物と考えられる礎が散乱しており、遺存状況が良くなかったために、規模等を把握する事はできなかったものの、礎下に黄色粘土が混入した土が出土していることから、礎を固定するために粘土が使用されていることが推定できた。また、燃焼部と考えられる付近から、焼土や炭が出土していることから、カマドとして機能していたことが判明した。

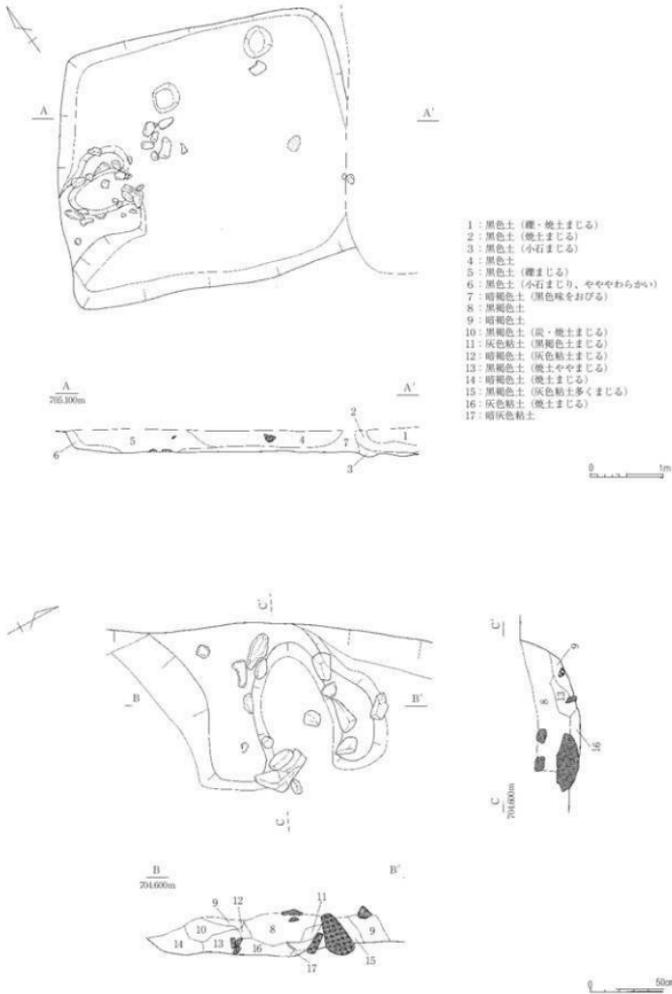
遺物（第71図）

第71図11～15が出土している。11・12は土器器である。11は坏の底部である。口縁部から体部が欠損している。胎土はやや白色系である。



第69図 第14号住居址出土遺物(2)

1. 住居址



第70図 第15号住居址遺構平面図 (カメラ: S=1/30)

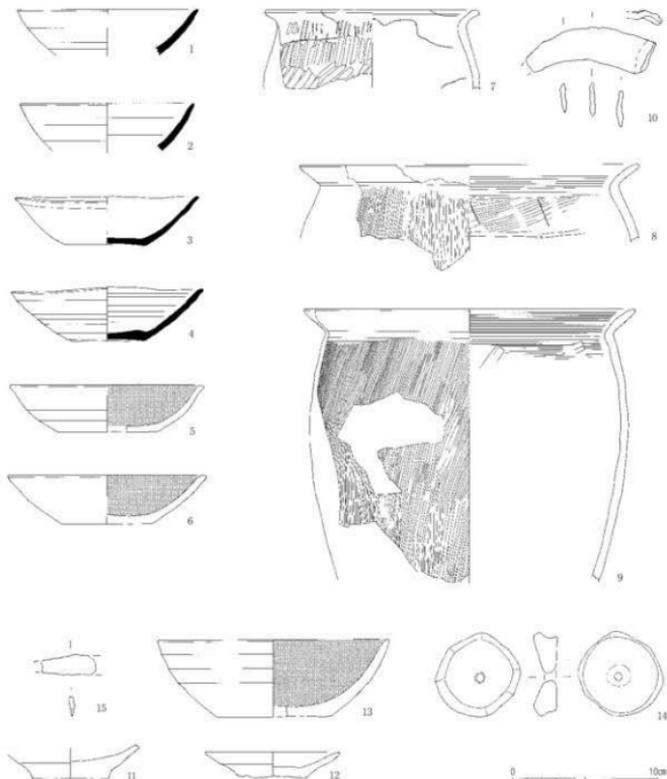
第IV章 遺構と遺物

12は皿と考えられる。外反気味に立ち上がり、口縁部に向かって若干内湾する器形である。底部の糸切りは粗雑で、凹凸がみられた。なお、外面の口縁部付近にはススが附着している。

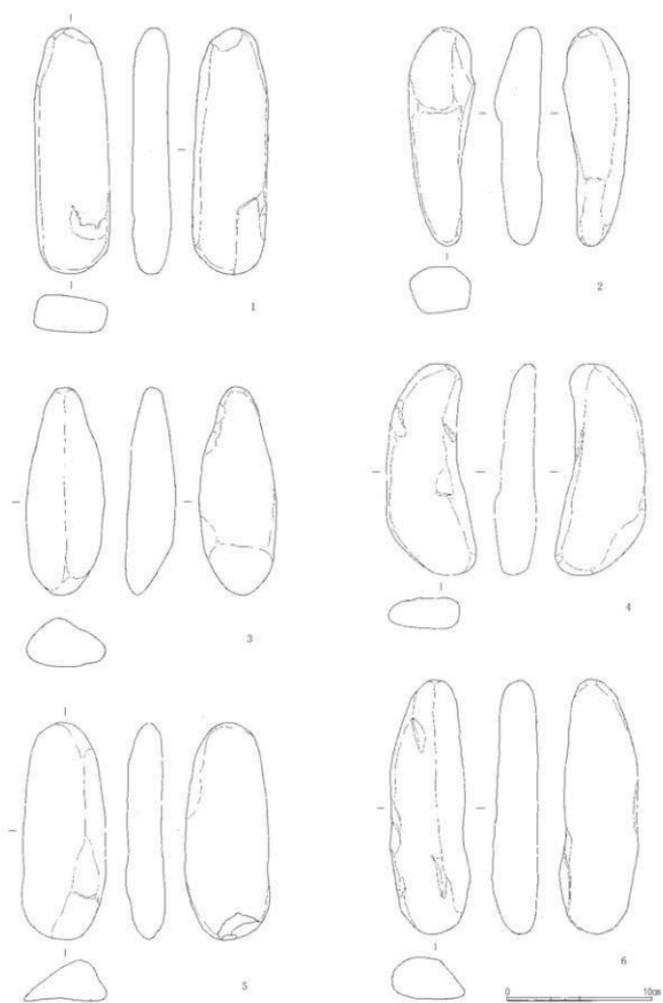
13は内黒土器である。1/2ほどの破片のため、反転復原している。内面の黒色処理が抜けているが、ミガキは緻密である。口径16cm、器高5.2cmである。

14は土師器の底部である。体部の立ち上がり付近から上部を打ち欠き、中心部付近に見込部から底部外面に向かって穿孔している。また、全面にタール状のススが附着している。紡錘車の弾車の可能性があるものの、用途は明確にできない。

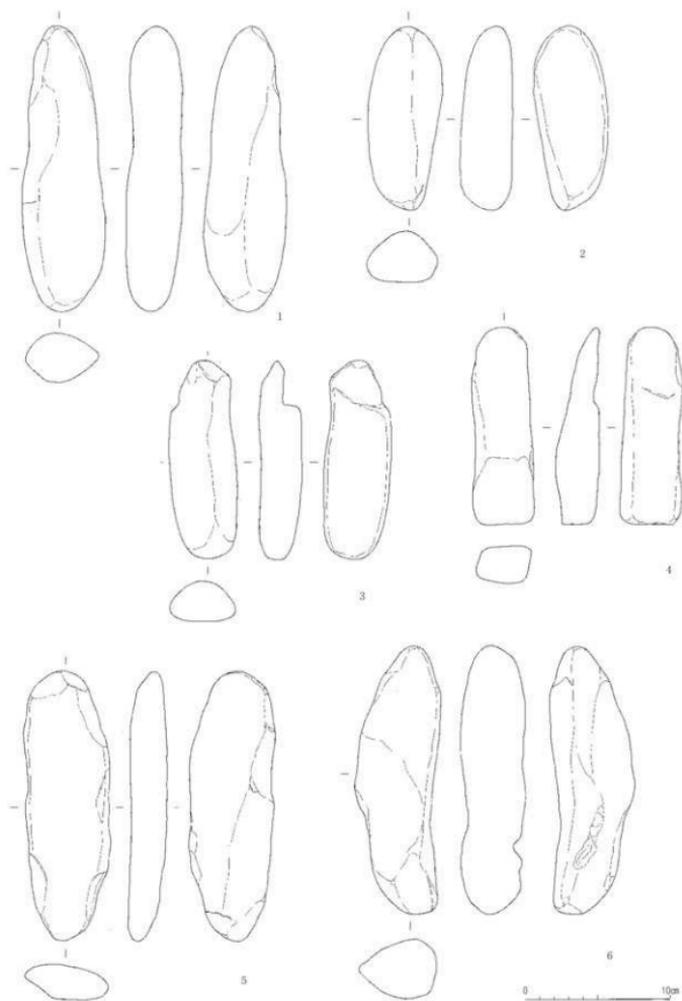
15は鉄製品である。刀子の刃部と推定される。



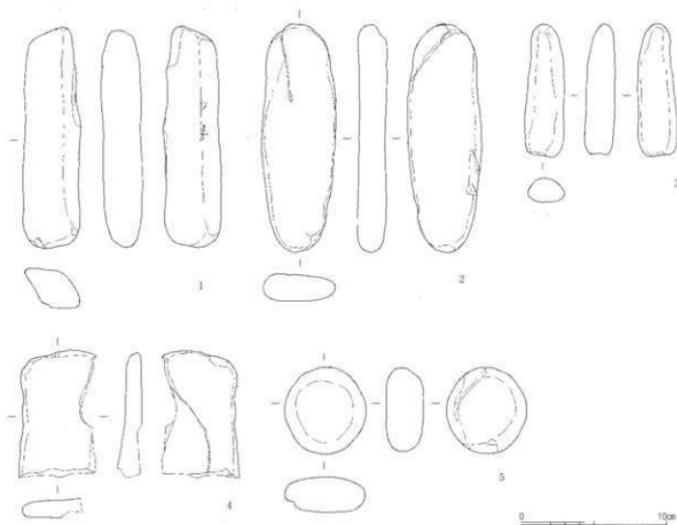
第71図 第15・16号住居址出土遺物(1) (1~10:15住、11~15:16住)



第72图 第15号住居址出土遗物(1)



第73図 第15号住居址出土遺物(2)



第74図 第15号住居址出土遺物(3)

第17号住居址(第76図)

この住居址はCQ-56より出土している。プランは4.3m×4.3mのややゆがんだ方形で、深さ約40cmを測る。覆土は暗褐色系の土が中心で、拳大かそれ以下の大きさの石を混入しながら堆積していた。床面からは、礫が散乱するように出土した。

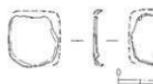
住居址の西壁中央部付近に焼土や炭が混入した土が検出されたことから、ここにカマドが築かれていたと考えられる。しかし、礫は出土せず、カマド内の一部に暗黄色系の粘土がみられたが、土層観察においてもカマドの規模を示す層位を把握することができなかったため、規模・構造等は明確にすることはできなかった。

なお、この住居址からは、錆化の進んだ銅製の帯金具が出土している。

遺物(第77図、第78図)

第77図と、第78図が出土している。第77図は銅製の帯金具(巡方)である。遺存状態が悪く、折り返し部はほとんど欠損している。また方形の穴はなく、帯に固定するための突起が痕跡程度に確認できるのみである。

第78図1は須恵器環である。小片からの復原資料である。

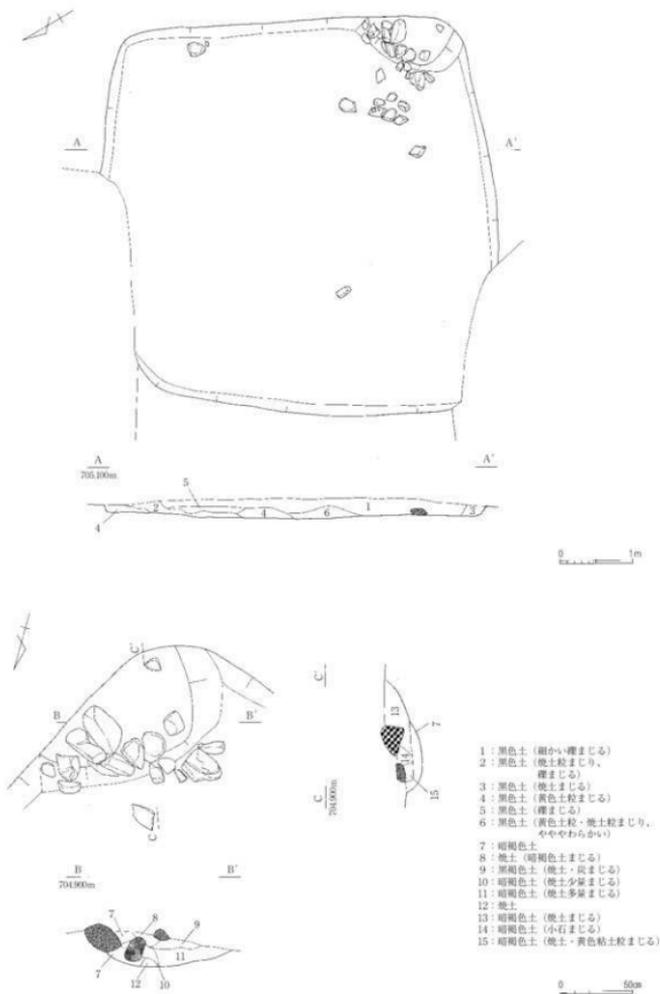


第77図 第17号住居址出土遺物(1)

2~4は内黒土器である。2・3は内面の黒色処理が抜けている。いずれも小片からの復原である。2の内面のミガキ調整はやや粗く、3の内面のミガキ調整は緻密である。4は碗である。1/4個体の残存率で、内面のミガキ調整は緻密である。いずれも口径は15cm前後である。

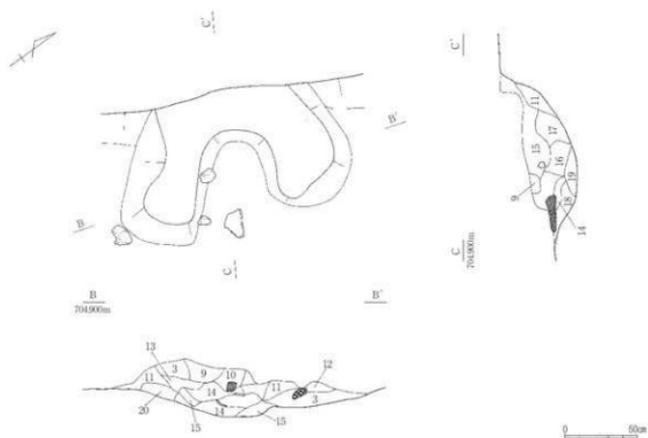
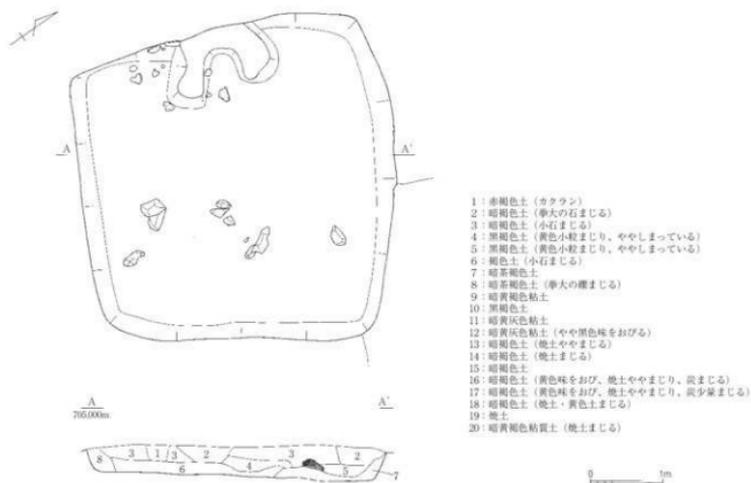
5~7は長胴甕である。5・6は口縁部の小片からの復原である。5

第五章 遺構と遺物



第75図 第16号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

1. 住居址



第76図 第17号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

第V章 遺構と遺物

は、外面の体部には幅の狭い縦位のハケ目調整を施し、その後口縁部のヨコナデ調整を行い、体部上部のハケ目調整がナデ消されている。内面は口縁部に横位のハケ目調整を施し、体部は丁寧なナデ調整を行っている。6は口縁部から体部にかけて縦位の深いハケ目調整を施し、口縁部にはヨコナデ調整を行っているが、ハケ目は消しきれていない。内面の口縁部には横位のハケ目調整が行われ、体部にはナデ調整が施されている。なお、これらの甕は丁寧な作りである。7は1/5個体の残存率で、体部下半部付近まで残存する破片である。5・6と異なり、口縁部に縦位のハケ目を残す手摺ね状の成形である。体部も外面はごく浅い縦位のハケ目調整の痕跡を残し、内面は横位のハケ目調整痕をとどめている。なお、破片下部付近からはヨコナデ調整が行われていると考えられる。全体に厚手で粗雑な印象を受ける土器である。

第18号住居址（第79図）

この住居址はC P-50から出土している。プランは36m×35mの方形で、深さは約25cmを測る。床面からは、柱穴を検出することはできなかった。覆土は黒色系の土を中心に堆積し、底部付近では焼土が混入していた。カマドは南東部壁中央部に築かれていたが、検出を的確にできず、プランを明確にすることができなかった。なお、カマドからは袖石が検出され、黄色粘土も見られることから石組み粘土カマドと考えられる。また、燃焼部の底部では、使用に伴う伴熱菌所が検出された。

遺物（第80図）

1・2は鉄製品である。1は鉄製紡錘車である。紡錘の下部が欠損しているが、ほぼ完形と考えられる。彈車は直径約5.6cmである。2は棒状の鉄製品である。3は板状を呈した鉄製品である。

4は灰釉陶器甕の底部と推定される。外面には厚く釉薬が掛けられている。

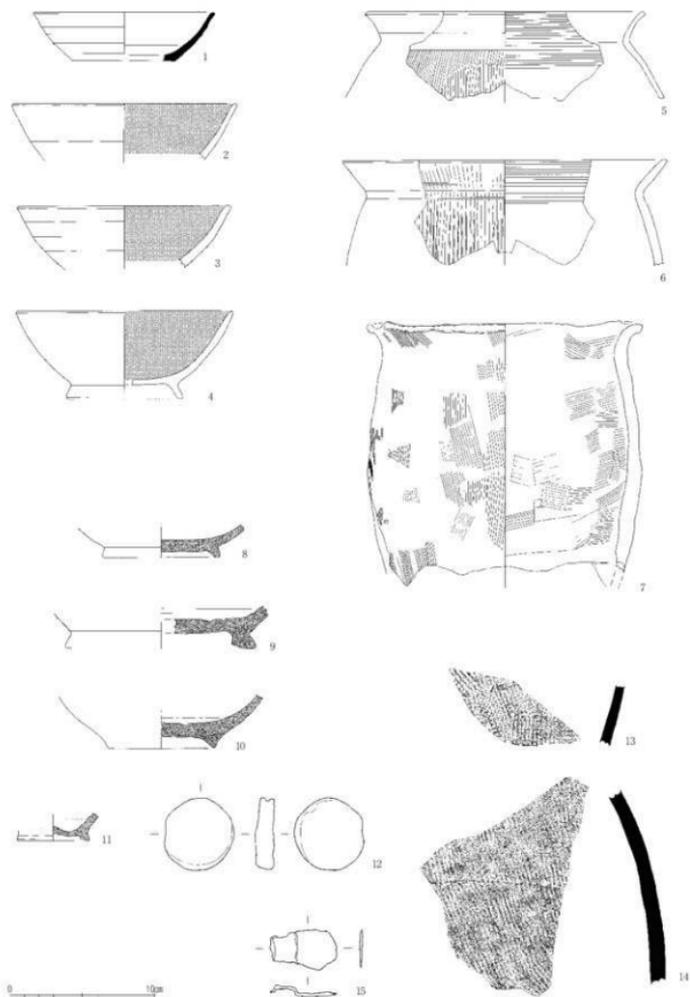
5は須恵器甕である。1/4程度の破片資料からの復原で、断面の中央部はやや焼成があまく、褐色を呈している。口径約13.5cm、器高約3.5cmである。

6・7は内黒土器の甕である。6は、口縁部の一部を残存するのみの個体で、口径12.5cm、器高4cmを測る。内面の黒色処理が抜け落ちているものの、ミガキ調整は緻密に行われていた。なお、外面体部にはスガが付着している。7は口縁部が一部欠損したのみの個体である。口径12.8cm、器高4.1cmである。内面のミガキ調整は、6と同様に緻密に行われている。

8・9は長胴甕の破片である。いずれも小片からの復原である。8は、外面の口縁部中部から体部にかけて縦位からやや斜位のハケ目調整を行い、その後口縁部にヨコナデ調整を施している。内面は口縁部から体部上部にかけて横位のハケ目調整がみられる。なお、内面の口縁部から体部にかけてタール状のスガが付着している。9も8と同様に口縁部下部から体部にかけて縦位のハケ目調整を行い、その後口縁部をヨコナデ調整している。内面は、体部上部にかけて横位にハケ目調整がみられる。なお、口縁部の内外面にはスガが付着している。これらの甕は深いハケ目を持ち、丁寧な作りの甕である。10はいわゆる武蔵型甕の小片である。体部上端部に段を有し、それより上部の口縁部にかけてはヨコナデ調整、下部は横位（右から左方向）のケズリ調整を行っている。内面はナデ調整が施されていると考えられる。

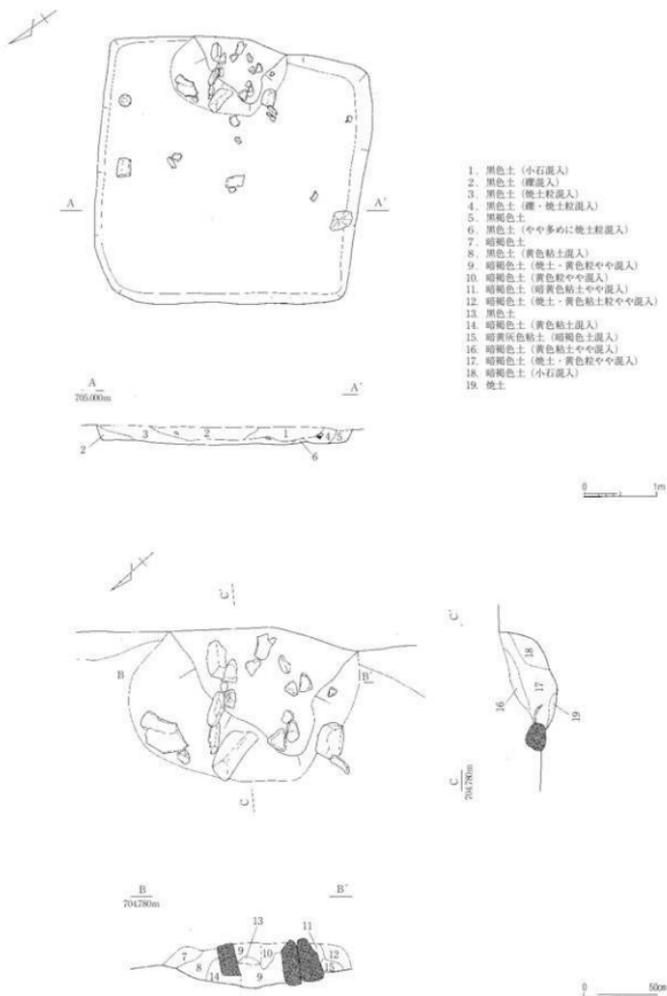
11は須恵器の短頸甕である。ほぼ完形で、色調は灰色である。口唇部はエビナデによって面取りされている。体部には平行タタキ目がみられるが、その後ナデ調整が施されているため、痕跡程度にとどめるだけである。なお、内面にはヨコナデ調整がみられる。

出土遺物から7期と考えられる。

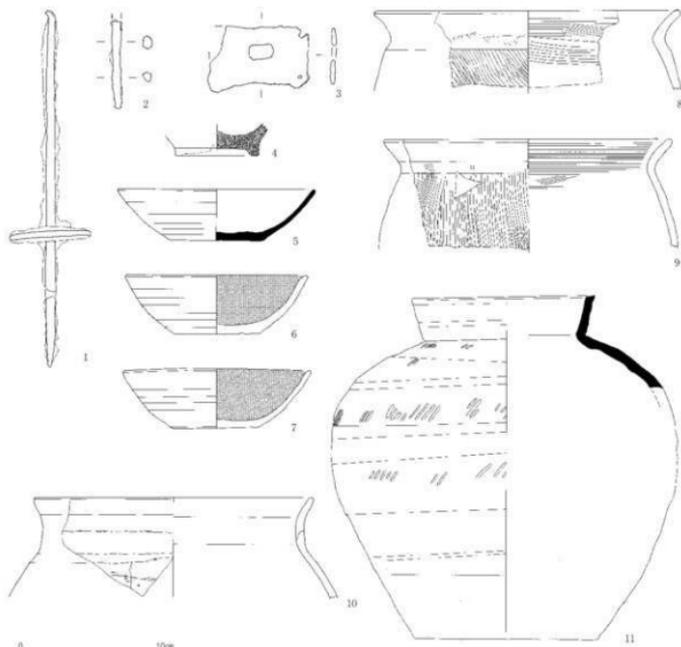


第78图 第17·19号住居址出土物(1~7:17住, 8~15:19住)

第五章 遺構と遺物



第79図 第18号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第80図 第18号住居址出土遺物

第19号住居址（第81図、第82図）

この住居址はCF-47より出土している。プランは6m×5.6mのややゆがんだ方形で、深さは約30cmである。覆土はやや粘質の黒褐色土を中心に堆積している。床面からは柱穴は検出できなかったが、土坑が1基南東部から出土した。カマドは東隅から検出されており、右袖石の周辺に暗灰色粘土がみられることから、石組み粘土カマドと考えられる。しかし、カマドとしての形態は、破壊が進んでおり明確にはできない。

遺物（第78図）

第78図8～11は灰釉陶器である。いずれも底部の破片で、8は袖葉がみられない。9は貯蔵具の底部と考えられ、外面には厚く袖葉が掛けられている。10は下端部が尖った高台をもち、袖葉は薄く掛けられている。器種は不明である。11は小型の底部で、見込部と、高台の一部に自然降灰による袖葉が付着しているほかは、袖葉は見られない。小型の壺の底部と考えられる。

12は土製の円盤である。明褐色を呈している。平坦部に糸切り痕が見られず、体部へと立ち上がる痕跡も見られないことから、土器（中実の盤）の底部の2次利用とは考えられず、当初から意図されてこの様な形態で

第V章 遺構と遺物

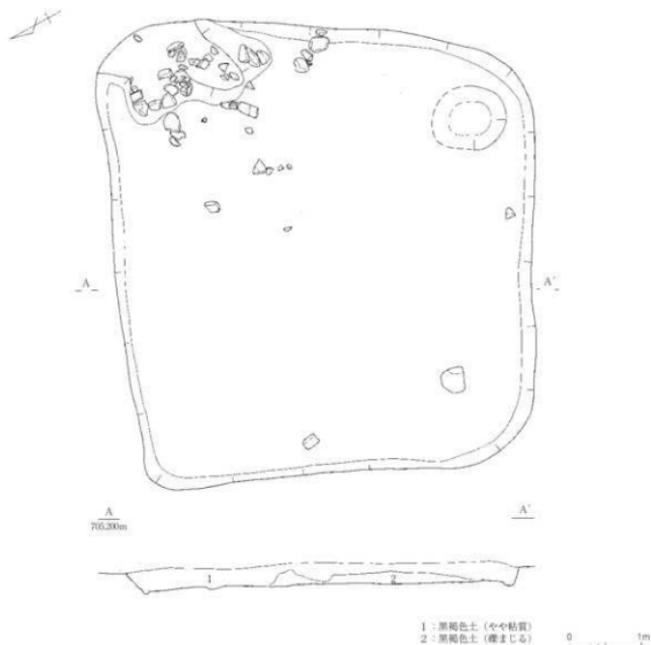
焼成されたと考えられる。

13・14は須恵器甕の破片である。13は外面に格子目叩き目が見られ、14には平行叩き目がみられる。

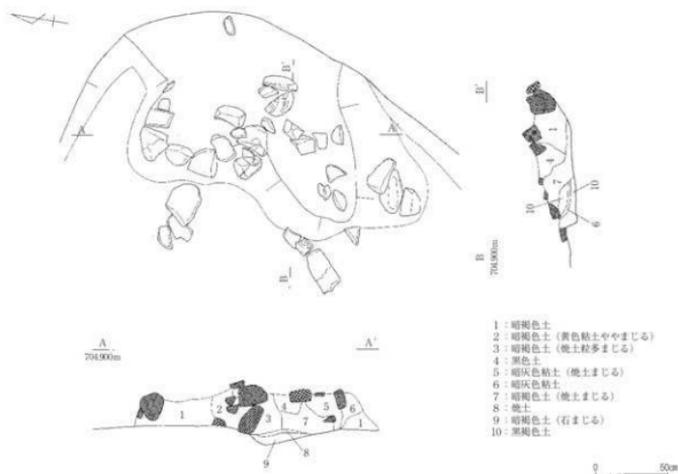
15は鉄製品である。断面でみるとクランク状に屈曲しているのが分かる。用途は不明であり、混入品の可能性もある。

第20号住居址 (第83図)

この住居址はCF-50より出土している。プランは5.2m×4.7mの方形であり、深さは約20cmを測る。ピットは3ヶ所、P1(深さ20.5cm)、P2(40.5cm)、P3(23.5cm)が検出され、これらが柱穴と考える事ができる。カマドは東部壁中央部に築造されている。袖には礫が確認され、礫外側には少量ではあるが、黄色粘土が検出されていることから、石組み粘土カマドと考えられる。また、燃焼部には焼土も検出された。



第81図 第19号住居址遺構平面図(1)



第82回 第19号住居址遺構平面図 (2)

遺物 (第84回)

第84図1～4は須恵器蓋である。1～3は坏蓋で、いずれも欠損品である。これらは天井部の上半部にヘラケズリ調整を行い、下半部にはヨコナデ調整を行っている。なお1の口縁部付近には、重ね焼きの痕跡をとどめている。いずれも小片からの復原である。4は坏身である。小片からの復原である。焼成はややあまい。

5は灰釉陶器の小片である。内外面に釉葉が掛けられている。

6は内黒土器で、小片からの復原である。内面は比較的緻密なヘラミガキ調整が行われている。口径11.8cm、器高3.7cmを測る。

7は土器器皿である。内面にタール状のスガが付着している。口径10.8cm、器高2.5cmである。

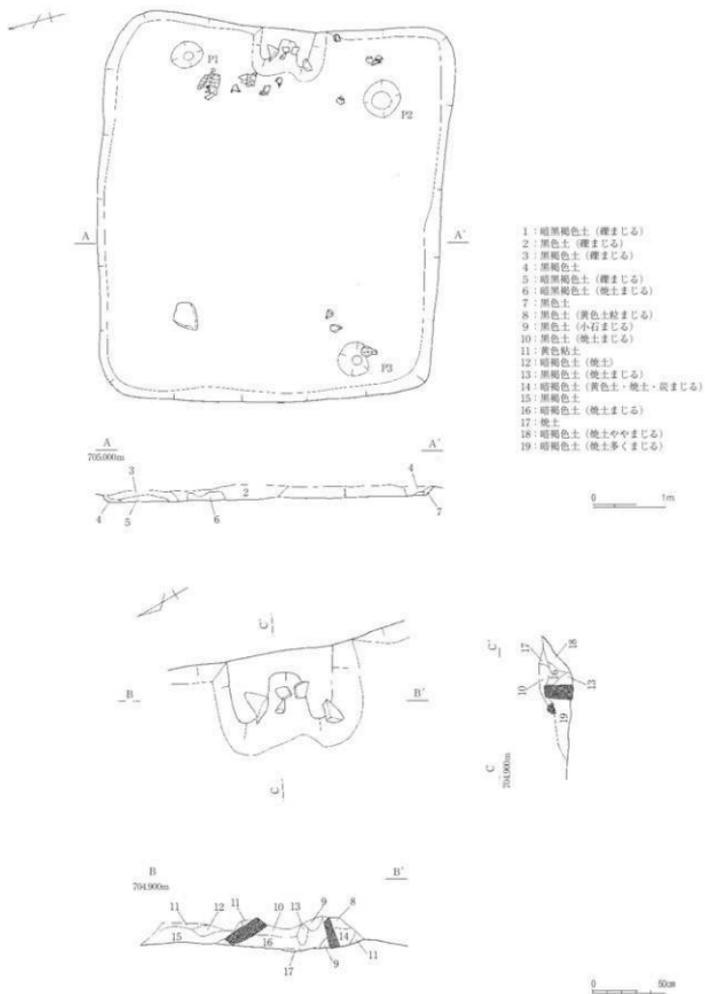
8・9は小形甕である。8の口縁部は1/5程度で、体部は1/2程度の破片からの復原である。外面の口縁部はヨコナデ調整を施し、体部には横位のカキ目が見られる。内面は口縁部に横位のハケ目調整がみられ、体部はナデ調整を行っている。9は体部である。体部中部までは横位のカキ目が施され、下部は斜位、底部付近では横位のカキ目となっている。

10・11は長胴甕である。10はやや白色味を帯びた色調を呈し、口縁部から体部に至るまで、内外面共に胎土の砂粒を引きずるケズリ状のナデ調整を、横位 (左から右方向) に行っている。焼成の良好な土器である。11は外面体部に縦位のハケ目調整を行い、その後口縁部から体部上部にかけてヨコナデ調整を施している。なお、体部上部付近にはユビによると考えられるヨコナデによってハケ目が磨り消されている部分がみられる。また、体部下部にはヨコナデ調整が行われている。

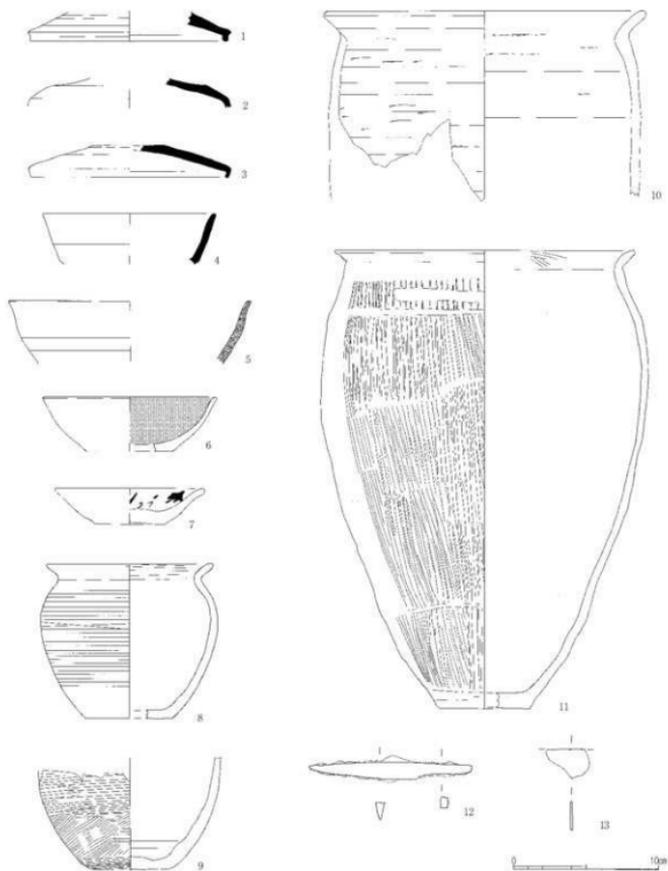
12は鉄製の刀子で、ほぼ完形品である。13は厚みの薄い鉄製品である。小片のため用途は不明である。

この住居址から須恵器が出土していることから5期頃と考えられる。

第五章 遺構と遺物



第83図 第20号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第84图 第20号住居址出土遺物

第21号住居址 (第85図)

C C-62から出土している。プランは4.2m×4.2mの隅丸方形で、深さは約15cmを測る。ピットはP 1 (深さ165cm)、P 2 (281cm)、P 3 (115cm) の3ヶ所が検出された。覆土は黒褐色系の土で占められ、中には小石が混入している。カマドは東壁中央部に築造され、軸石の外部に黄灰色粘土や、暗黄灰色粘土がみられることから、石組み粘土カマドと考えられる。なお燃焼部からは焼土が出土したが、底部からは検出されなかった。

遺物 (第86図)

1～5は須恵器である。1・2は須恵器の坏蓋である。1は蓋坏の坏蓋の破片資料であり、2はほぼ完形である。いずれも天井部上半部にヘラケズリ調整、下半部にはヨコナデ調整が施されている。3・4は坏身である。3は体部から底部は残存しているが、体部は1/4個体の残存である。高台部は、接合時の調整が粗雑で、接合痕を残している。4の体部はごく一部が残存しているのみである。外面底部の高台内部はナデ調整によって糸切り痕を消している。5は無蓋の坏である。1/4程度の残存率で、やや厚手の器壁である。口縁部上端部に重ね焼きの痕跡をとどめている。なお外面には火槽が確認できる。

6は小形甕である。器壁は比較的厚手で、外面体部にはヘラ状工具による縦位のナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施している。内面は体部上部から口縁部にはヨコナデ調整、体部にはナデ調整を施している。

7～9は長胴甕である。7は外面体部に板状工具による縦位(上から下方向)のナデ調整が確認でき、口縁部はヨコナデ調整を行っている。内面は口縁部にヨコナデ調整を施し、体部にもナデ調整を施しているが、調整が粗く、接合痕を明確にとどめている。8は直線的に立ち上がる器形で、外面の口縁部はヨコナデ調整、体部には浅いハケ目調整の後に、ユビによるナデ調整を行っている。内面の口縁部から体部上部には、横位の浅いハケ目調整を口縁部に施すが、体部に接合痕を残している。また、下部にはススが附着している。9は体部下半部の破片である。外面の体部は、板状の工具によって縦位にナデ調整を施し、底部付近ではユビによるナデ調整を施している。内面も上半部で板状工具によるナデ調整を施しており、下半部では指によるナデ調整を施しているが、この部分では接合痕も確認できる。この住居址も5期頃と考えられる。

第22号住居址 (第87図)

この住居址はC M-58より出土している。プランは4.2m×4.3mの方形で、深さは約30cmを測る。覆土は石の混入した暗褐色系の土で占められていた。床面にピットが2ヶ所出土したが、柱穴は特定できなかった。カマドは西壁中央部に築造され、軸石の外部には黄色系と灰色系の粘土が貼り付けられていた。なお、燃焼部の底部には焼土が出土していた。

遺物 (第88図)

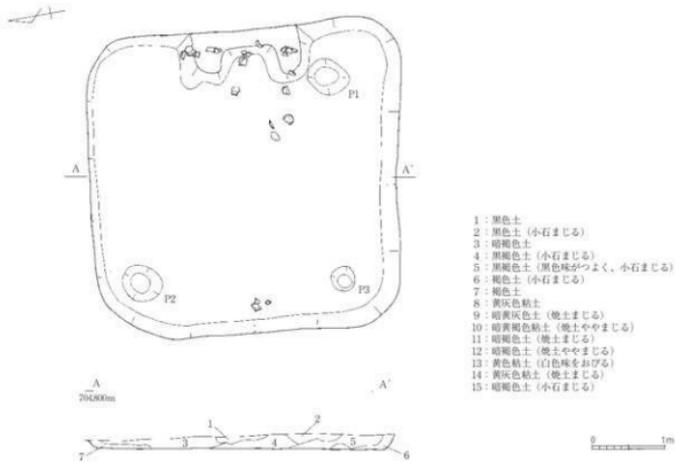
1～3は須恵器である。1は口縁部が1/3ほど欠損している。ややゆがみの激しい坏である。やや白色味を帯びた色調の坏で、見込部と、外面体部に墨書が確認できる。2は上半部が1/2個体残存している破片からの復原であり、淡灰色を呈する。3は体部から底部に至る屈曲部をヨコナデ調整している。体部にロクロ調整痕はみられない。1と同様に白色味を帯びた色調である。この坏のみが口径15cmとやや大振りである。

4は内黒土器である。内面のミガキ調整を緻密に施している。口径16cm、器高5cmを測る。

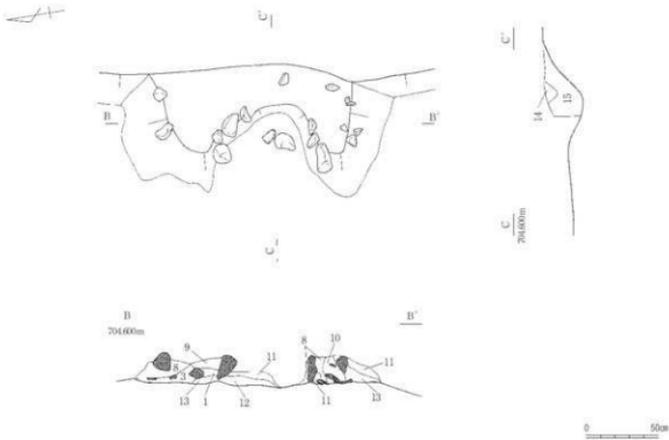
5は須恵器の甕である。褐色を呈し、内面に自然軸がかかっている。

6は灰釉陶器の長頸甕である。口縁部は欠損しており、形態は不明である。頸部と体部に接合関係はないが、色調・胎土から同一個体と考えられる。なお、頸部上部から体部上部にかけて薄い釉層がみられるが、薄いため、自然釉の可能性も考えられる。7は刀子の切先部である。

1. 住居址

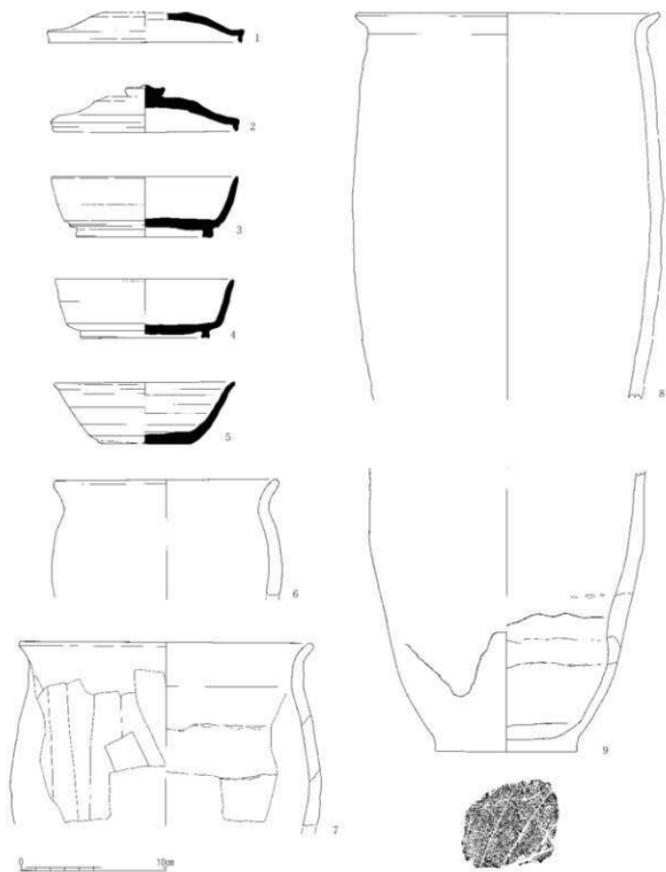


- 1: 黒色土
- 2: 黒色土 (小石まじる)
- 3: 暗褐色土
- 4: 暗褐色土 (小石まじる)
- 5: 暗褐色土 (黒色味がつよく、小石まじる)
- 6: 褐色土 (小石まじる)
- 7: 褐色土
- 8: 黄灰色粘土
- 9: 暗黄灰色土 (焼土まじる)
- 10: 暗黄褐色粘土 (焼土ややまじる)
- 11: 暗褐色土 (焼土まじる)
- 12: 暗褐色土 (焼土ややまじる)
- 13: 黄色粘土 (白色味をおげる)
- 14: 黄灰色粘土 (焼土まじる)
- 15: 暗褐色土 (小石まじる)



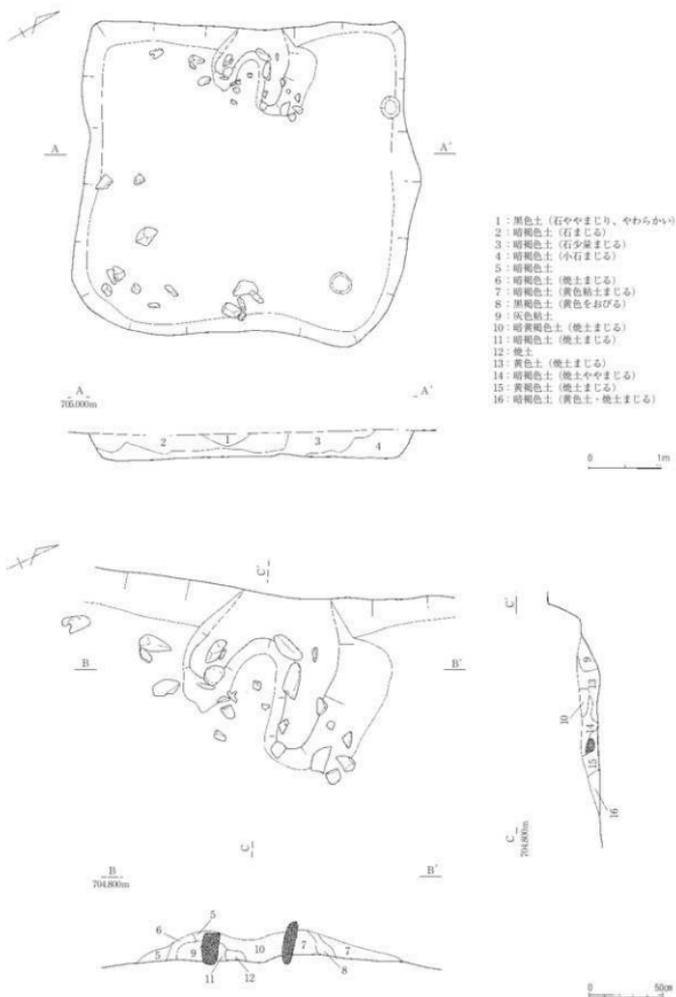
第85図 第21号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

第五章 遺構と遺物

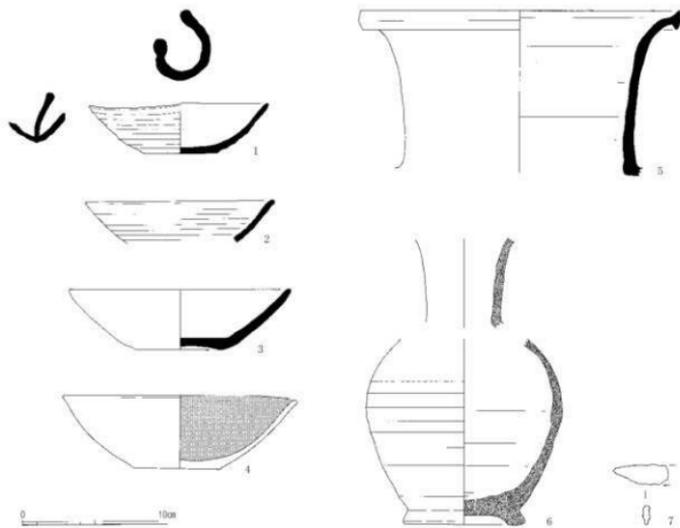


第86図 第21号住居址出土遺物

1. 住居址



第87図 第22号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第88図 第22号住居址出土遺物

第23号住居址 (第89図、第90図)

この住居址はC O-22より出土している。プランは6.8m×6 mの方形と考えられるが、北東壁と南西壁がそれぞれ第24号住居址と第34号住居址と切り合っているため推定にすぎない。深さは約40cmを測る。覆土は暗褐色系の土で占められ、一部には焼土が混入していた。ピットはP 1 (深さ57.5cm)、P 2 (126cm)、P 3 (51.7cm)等が検出されているが、柱穴と判断していいか疑問が残る。また、P 1は周溝の外側に位置しているため、この住居址に伴わない可能性が高い。なお、周溝はカマド部分を除いてほぼ全周している。カマドは北西壁の中央部より検出され、検出段階では明確に調査できなかったものの、断面観察によって両袖石と、その外面に貼り付けられた粘土が確認された事から、石組み粘土カマドと考えられる。また、燃焼部中央部には支柱石が立てられ、底部は使用に伴う被熱による赤色化部分が検出された。また、P 2の掘り方からは鉄製の鬚矢(第95図1)が出土している。

遺物 (第91図～第95図)

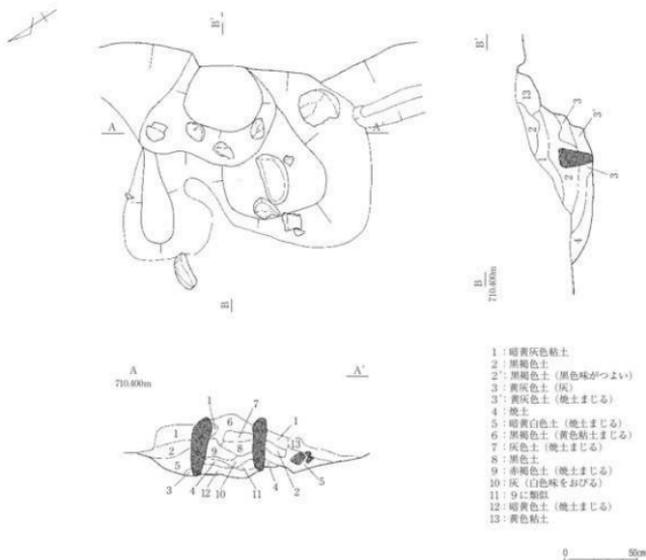
第91図1～12は須恵器片である。1～3・5・8・9は軟質須恵器である。1は底部が欠損しているもののほぼ完形で、外面体部には、胎土中の空気が焼成中にはじた痕跡を1ヶ所もつ。2は1/4程度の残存率である。3はカマド南部に存在した土坑内からの出土で、小片資料である。4は小片からの復原で、口縁部上部に重ね焼き痕をとどめる。5は1/4個体の破片資料であり、床面付近より出土している。また、6は1/4以下の破片からの復原で、口縁部上部に重ね焼きの痕跡が確認できる。色調はやや白味を帯び、外面には火押が確認できる。7・10は、断面の中心部の焼成がamai。7はカマド南部の土坑より出土している。両者とも残存率は1/4以

下である。8・9は残存率1/4以下の破片資料であるが、8の見込部分には、ススカ墨と考えられる薄い黒色部が確認でき、口縁部上端部に重ね焼きの痕跡がみられる。11は1/2の残存率であり、12は1/4以下の破片である。これらの坏は、口径13cm前後（1～4、10・11）のもの、14cm前後（5～8、12）のものの2種類に分類できる。

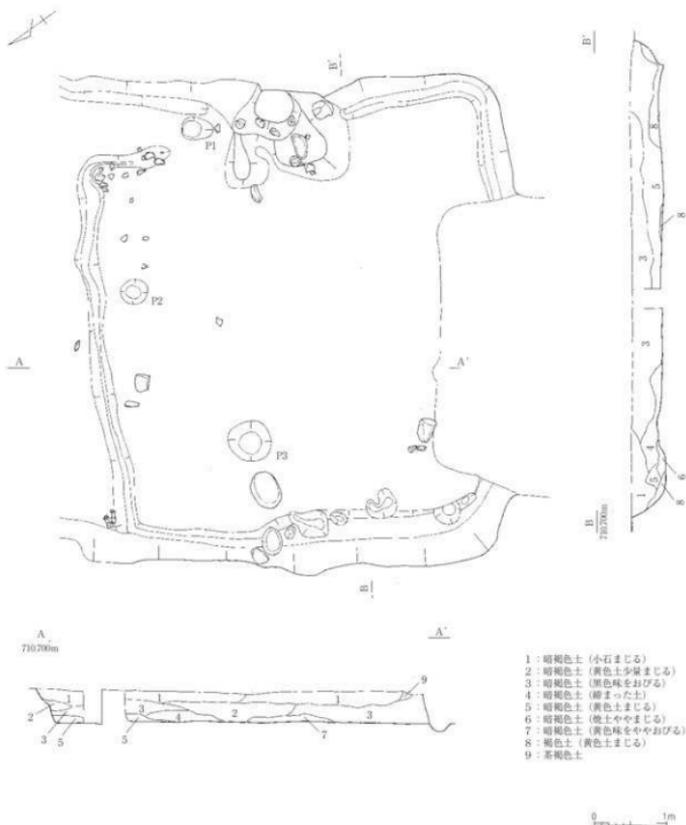
第91図13～31、第92図1～9は内黒土器坏であり、第91図20～24、第92図9の外面には墨書がみられる。第91図13～18、21～23・25は口径が13cm前後、器高は3.5～4cmであった。いずれも内面には緻密なミガキ調整が行なわれている。これらのうち、第91図18は完形であり、口縁部上部にはススが附着している。その他、22・24は残存率が1/2個体であり、内面のミガキ調整が若干粗い。13・15・16は1/3個体程度の残存率である。15の外面体部下部にはススの附着がみられる。第91図13は1/3程度の残存率である。外面の色調は黒色である。14・17・25は1/4個体の残存である。このうち、17の外面体部中部および内面体部中部にススの附着がみられる。

その他、第91図21・23は小片からの復原である。

第91図19・20・24、第92図1～3は口径14cm前後、器高4cm程度である。これらの内、第91図24、第92図3が1/2個体からの復原であり、第91図19・20、第92図1・2は小片からの復原である。第91図20の外面体部にはススの附着がみられる。なお、第91図24、第92図1の内面のミガキ調整はやや粗いが、それ以外は内面のミガキ調整も緻密で丁寧であった。



第89図 第23号住居址遺構平面図(1)



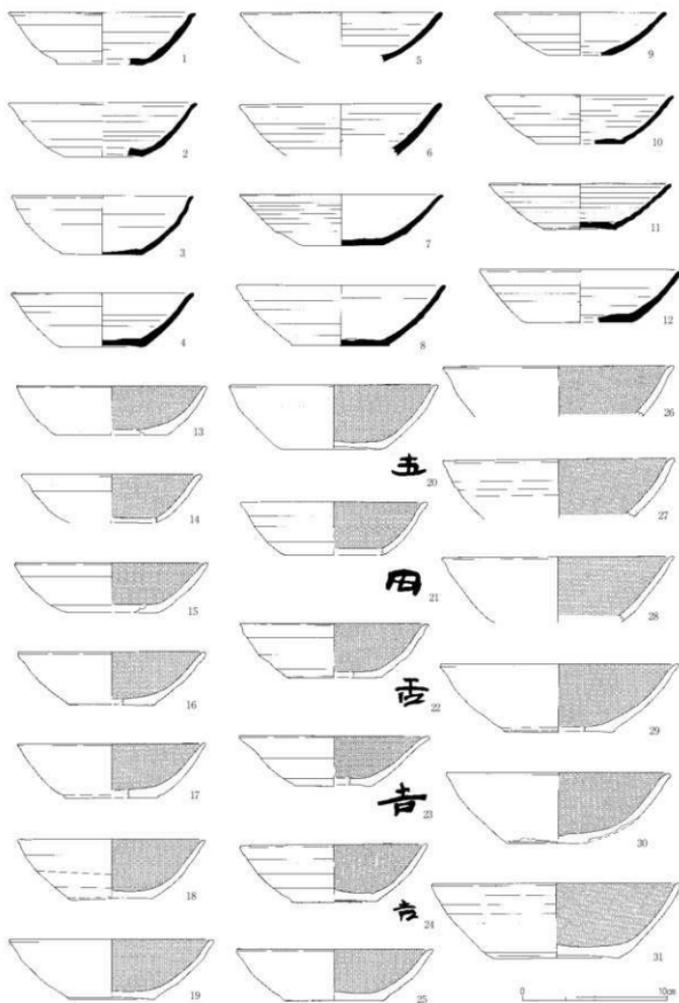
第90図 第23号住居址遺構平面図(2)

第91図26～31、第92図4・5は口径15cm以上、器高5cm前後である。多くの内面のミガキ調整が緻密であったが、第91図31はやや粗雑である。なおこれらの内、残存率1/3程度の破片は第92図4・5、1/4以下の破片は第91図29～31である。そのほか、第92図9の体部と10の椀の底部および体部に墨書が確認できる。

第92図12・13は灰釉陶器である。12は皿である。内面に薄く釉葉が掛けられている。13は壺の底部破片と考えられる。外面の一部に薄く釉葉が確認できる。

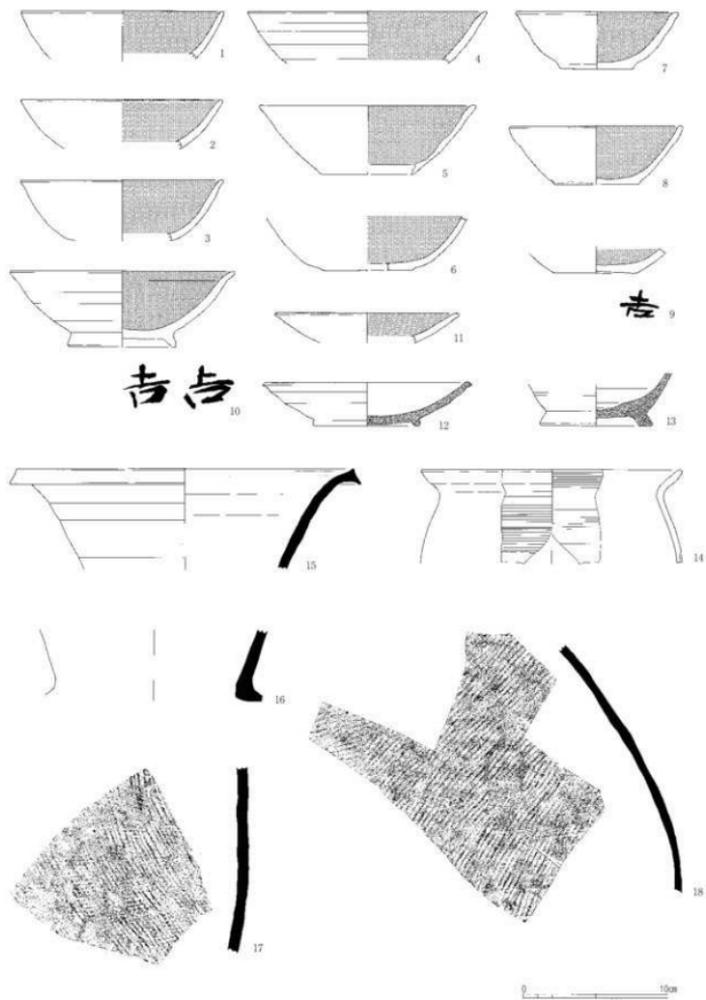
第92図14は小型甕の小片である。外面体部に横位のカキ目調整が行なわれ、口縁部にはコナデ調整が施され

1. 住居址

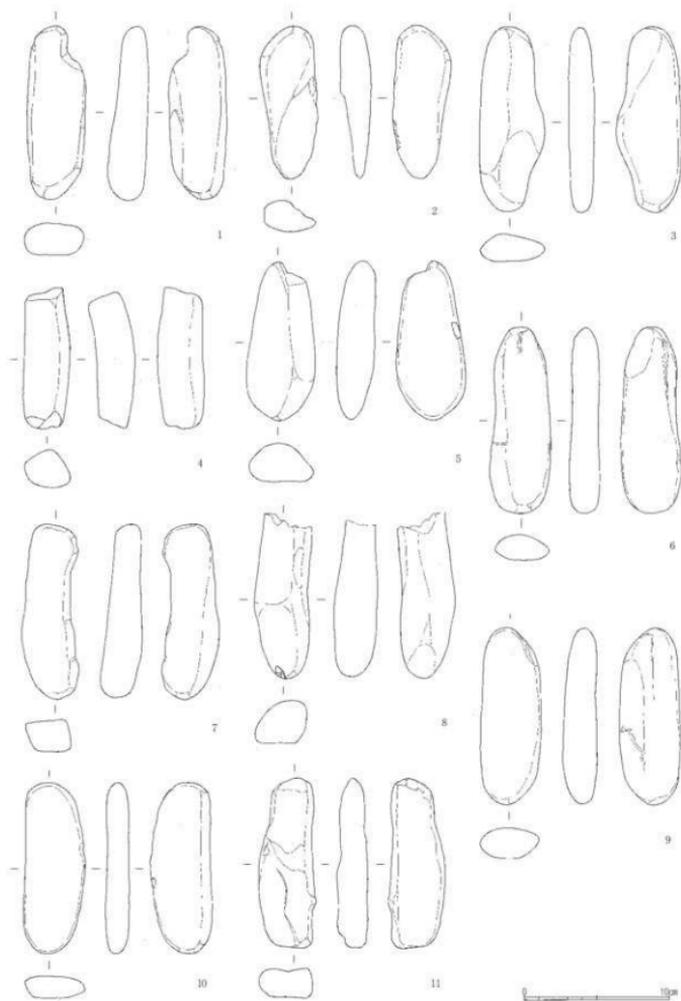


第91図 第23号住居址出土遺物(1)

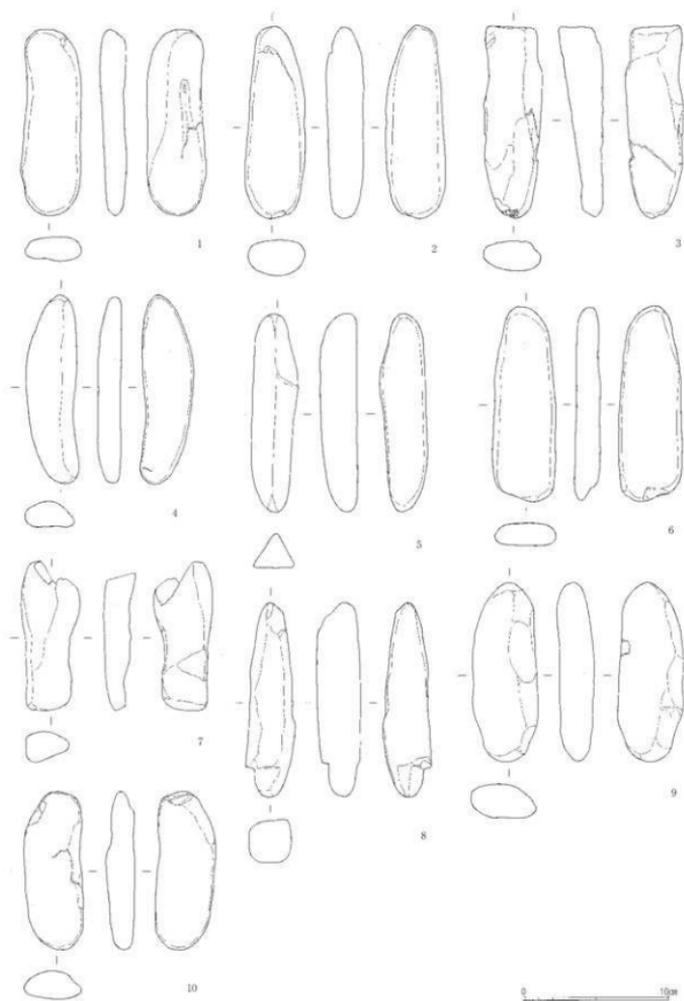
第五章 遺構と遺物



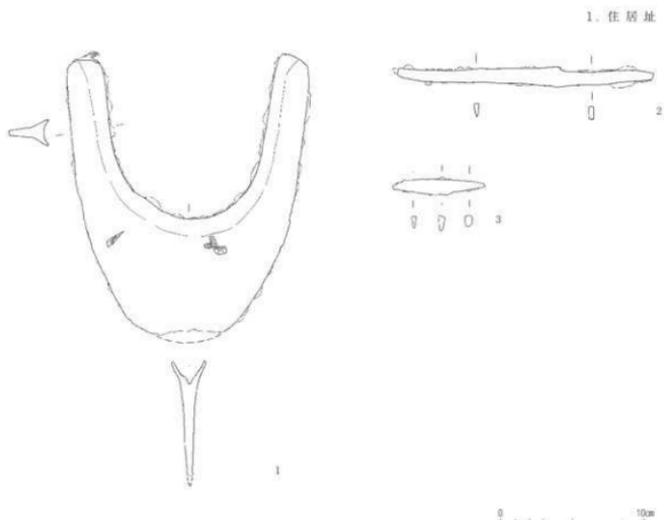
第92図 第23号住居址出土遺物(2)



第93图 第23号住居址出土遗物(3)



第94図 第23号住居址出土遺物(4)



第95図 第23号住居址出土遺物(5)

ている。内面の口縁部にも横位のカキ目が見られる。また体部にはヨコナデ調整が施されている。なお、外面の体部にはススの付着がみられる。

第92図15～18は須恵器である。このうち16は瓶の破片と考えられる。器壁中心部の焼成があまり。

第93図・第94図は隼手石と考えられる。これらの石の平均は164gであり、最も重い石（第94図2）で230g、軽い石（第94図7）では118gであった。

第95図は鉄製品である。1は鋤先である。床面から出土している。先端部が欠損しているが、使用時の欠損か、劣化による欠損かは明確にできない。なお、体部には木質も残されている。2・3は刀子である。茎部に木質が残されている。

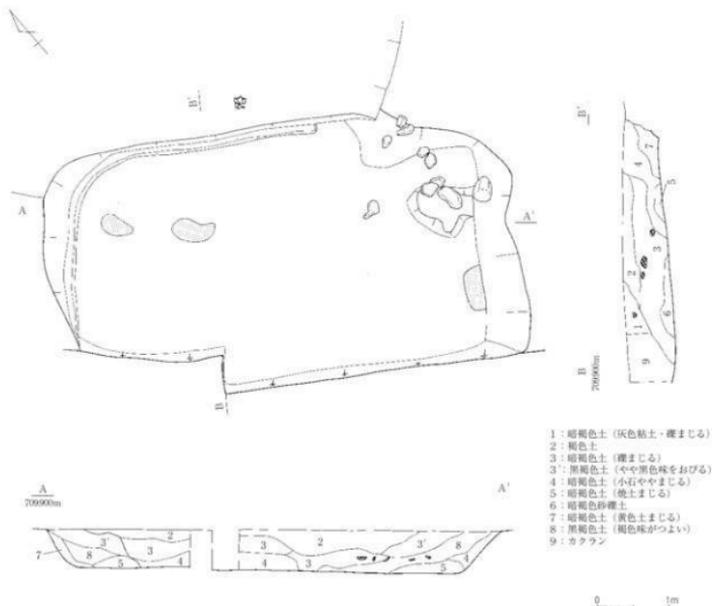
この住居址は出土遺物から7期頃と考えられる。

第32号住居址(第96図)

この住居址はCR-34から出土している。北部は第31号住居址(弥生時代)と重複し、南部は調査区域外となっている。覆土は底部に焼土が混入し、中層下部に礫の混入した黒褐色系の土が堆積していた。プランは1辺が6.5mを測り、調査区域外となる南西部には一部カクランが存在していた。

柱穴は検出することができなかったが、床面の3ヶ所に被熱地点が検出された。また、東隅の礫の集中している地点がカマドと考えられるが、遺存状況はよくなかった。

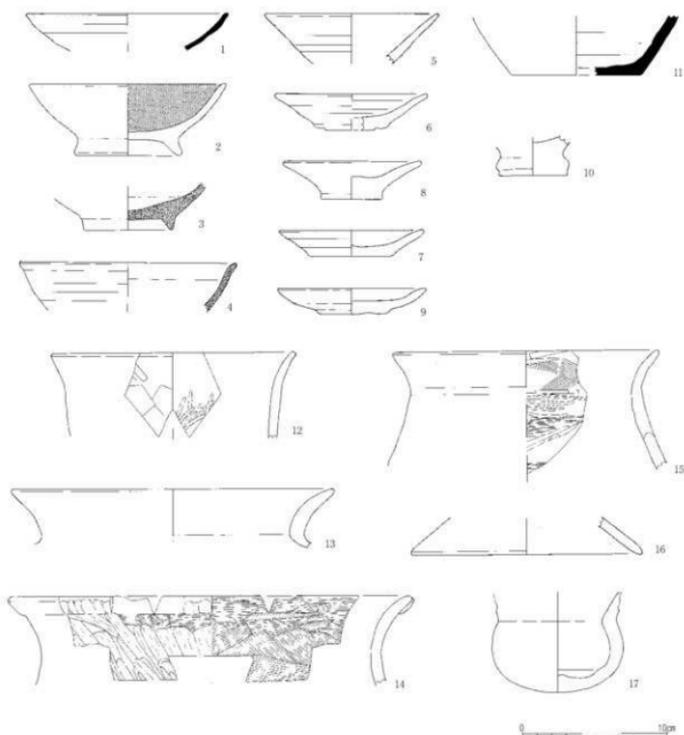
なお、遺物整理段階で、古墳時代の遺物が出土していたことが判明したが、調査時に遺構の存在を把握することができなかった。



第96図 第32号住居址遺構平面図

遺物 (第97図)

- 1は軟質須恵器杯の小片である。混入品の可能性が高い。
- 2は内黒土器椀である。内面の黒色処理が抜け、見込部のミガキ調整もやや雑に行っている。口径13.4cm、器高5cmを測る。
- 3・4は灰釉陶器である。3は底部の破片である。焼成はややあまく、外面は高台まで薄く釉葉が掛けられているが光沢がない。内面の釉葉は厚く掛けられ、十分溶融していないものの、光沢はある。なお、内面体部下部の器面が滑らかであり、見込部に墨の様な附着物が確認されることから、転用視の可能性が高い。4は碗の体部小片である。内・外の器面全面に施釉されている。
- 5～10は土器である。5～7は杯の破片資料である。5は小片からの復原で、内外面共に体部の一部にススが附着している。6は1/4個体ほどの残存率で、口径10.4cm、器高2.4cmを測る。底部の糸切りが雑なため、安定性に欠ける。7は小片からの復原である。やや赤味を帯びた色調で、口径9.8cm、器高1.9cmである。
- 8は赤褐色の色調を呈する。底部が厚く、高台状の形態であることから、中実の盤と考えられる。法量は口径9.6cm、器高2.6cmである。10は中実の盤の底部である。白色味を帯びた色調を呈している。そのほか図示していないが、赤褐色の色調で、大型の盤の脚部破片も出土している。



第97図 第32号住居址出土遺物

9は皿と考えられる。やはり破片資料である。白色味を帯びている。

11は須恵器の底部である。底部付近にススが附着している。

12～17が、古墳時代と考えられる遺物である。12は外面に板状工具によるナデ調整がみられ、内面には縦位のヘラミガキ調整が破片下部に施されている。14は、口唇部下部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、指頭により押圧文を施している。外面は口縁部をハケ調整の後、縦位のヘラケズリを行ない、体部には、頸部に向かう縦位のヘラミガキ調整が見られる。内面は一面ハケ調整が施されている。15は最大径が体部にある口縁部の小さな甕である。内面には斜位または横位のハケ調整を行った後、横位のヘラミガキ調整を施している。16は高杯の裾部、17は小型丸底甕である。小型丸底甕はこのほかにも破片が多数出土している。

この住居址は14期頃と考えられる。

第33号住居址 (第98図)

C N-36から出土している。遺存状況がきわめて悪く、プランも明確に把握できていない。検出段階での深さは、約20cmであるが、カマドの痕跡(被熱地点)も確認できなかったため、住居址と判断するべきか疑問は残る。遺物は南西限際集中して出土しており、遺物から平安時代の遺構と判断している。

遺物 (第99図)

1-7は土師器片である。3以外はすべて破片資料であり、残存率は4・5で1/2個体、1・6は1/3個体である。また、2・7は小片からの復原である。分量は口径9.5cm前後、器高3cm程度(1-3)、口径11cm前後、器高4cm前後(4・5)、口径12.5cm程度(6・7)の3種類に分けられる。これらの坏は口縁部が外反気味に立ち上がる器形(1・6・7)と内湾気味に立ち上がる器形(2-5)に分かれる。3・7は色調が白色味を帯びており、胎土の素地も近似している。なお、3は床面からの出土である。また、5の内面には輪積み痕かと思われるごく弱い屈曲を残したヨコナデ調整が行なわれ、外面は粗めのヨコナデ調整が施されている。また、底部の処理は雑で、糸切り痕はみられない。

8-13は土師器盤の破片である。8は床面からの出土で、口縁部は一部残存しているのみの破片である。内面の一部にススが付着している。9は下半部の破片で、内面にススの付着がみられる。なお、体部を打ち欠いて調整し、再利用している可能性がある。11も8と同様に床面からの出土で、外面底部の一部と、高台内部にススと思われる黒色味を帯びた部分がみられる。12・13は盤の体部と考えられる。比較的厚手の器盤である。両者共に小片で、12は外面にヨコナデ調整の痕跡を明瞭にとどめているが、内面はなめらかに仕上げられている。

14-16は灰釉陶器である。14・15は碗である。14はほぼ完形で、内外面共に不完全な溶融の釉薬が確認でき、特に外面では痕跡程度に残存しているのみである。また、見込部には重ね焼きの痕跡を残している。15は底部の破片である。緻密な胎土で、見込部には重ね焼き痕がみられる。16は貯蔵具の底部と考えられる。緻密な胎土で、内面底部には自然釉が付着し、小片が釉薬で付着している。

第34号住居址 (第100図)

C P-23より出土している。プランは4m×4mの方形で、深さは約60cmである。覆土は黄色土の混入した暗褐色系の土であった。周溝は、南西部の一部を除いてほぼ全周している。ピットはP1(深さ21.4cm)、P2(31.1cm)、P3(37.6cm)、P4(35.7cm)が検出され、これらが柱穴と考えられる。また住居址中央部に浅い窪みが検出されているが、焼土等は出土していない。この住居址からは遺物もほとんど出土しておらず、時代を特定するのは困難であるが、覆土中から出土した小片の遺物を根拠として平安時代の項目に入れている。なお、周辺からは内耳土器片が出土していることや、覆土に黄色土が混入している事を考えると、中世以降の可能性もある。

遺物 (第101図)

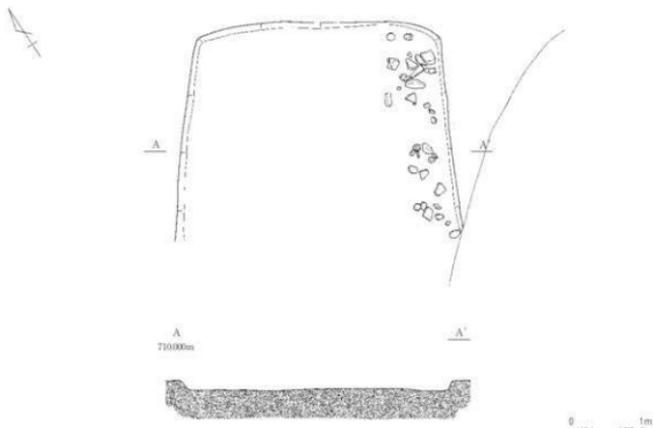
この住居址からの出土遺物は、いずれも小片である。

1・2は須恵器坏の破片である。いずれも焼成があまい。

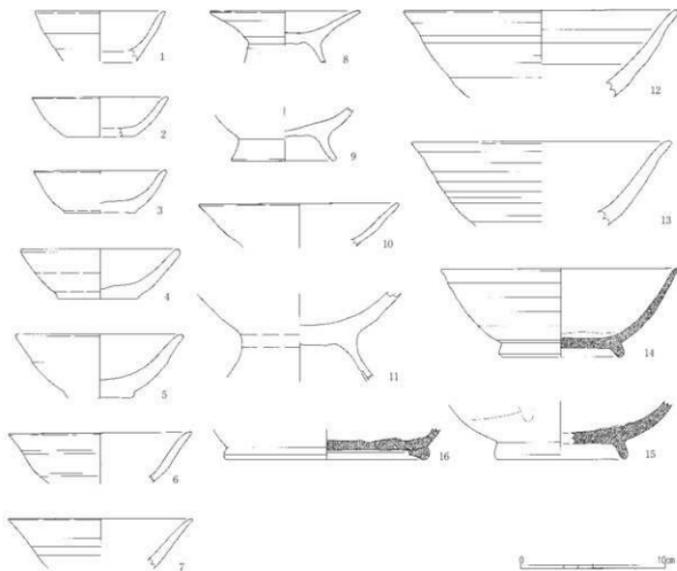
3は内黒土器である。小片からの復原で、内面の黒色処理が若干抜けている。4は壺の破片と考えられる。外面の底部にまで釉薬が施されている。

これらの遺物は混入品の可能性が高い。

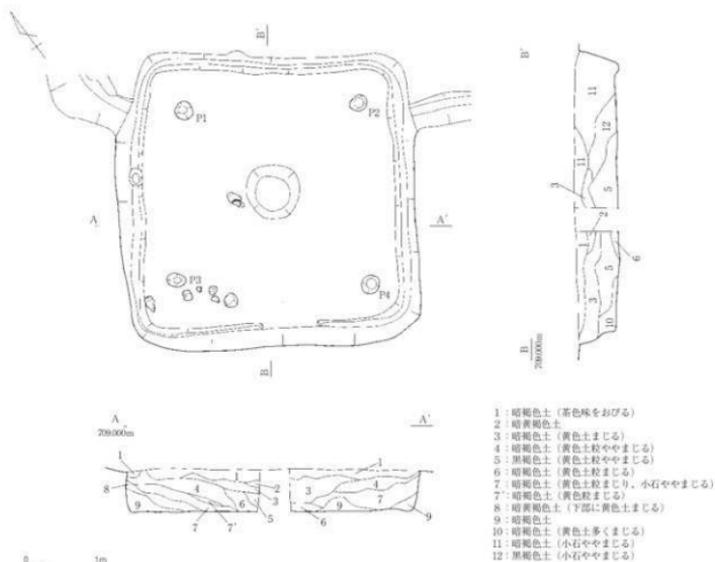
1. 住居址



第98图 第33号住居址遺構平面图



第99图 第33号住居址出土遺物



第100図 第34号住居址遺構平面図

第35号住居址 (第102図)

この住居址はCM-9より出土している。東部は調査区域外となっており、詳細は不明である。プランは1辺が38mで、ゆがんだ方形を呈すると考えられる。深さは約20cmを測り、覆土は黒色土で占められていた。カマドは東隅の調査区境界付近より検出されたが、遺存状況は悪かった。

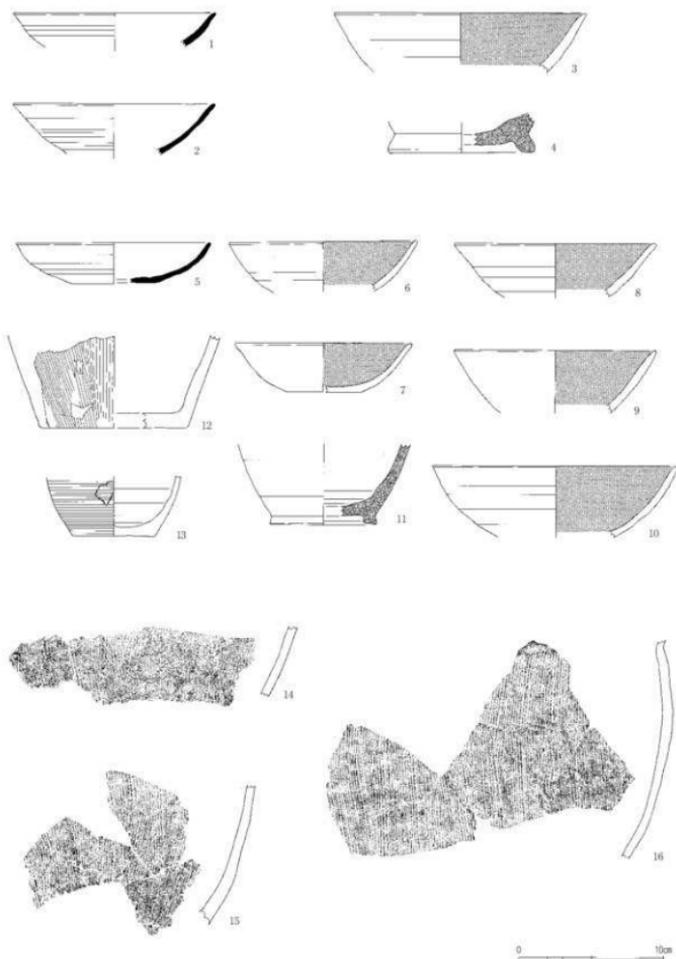
遺物 (第101図)

5は須恵器坏の小片である。床面からの出土で、ゆがみの大きい個体である。
 7～10は内黒土器の破片である。いずれも坏と考えられるが、8は碗の可能性もある。内面のミガキ調整は、6が若干粗雑であるが、他の資料は緻密に施されている。なお、7と8は黒色処理が施されている。法量は口径12cm前後と、14cm程度、17cm程度に3分類できそうであるが、10が1/3個体の残存率であるほかは、いずれも小片のため明確ではない。

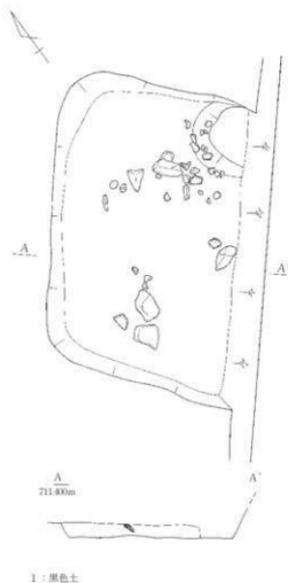
11は灰釉陶器壺の底部破片である。表面はやや黒色味を帯びている。

13は床面から出土している小形甕である。外面の体部に横位のカキ目が施され、一部にススが附着している。

14～16は長胴甕の破片である。



第101图 第34・35号住居址出土物 (1~4: 34住, 5~16: 35住)



第102図 第35号住居遺構平面図

遺物 (第106図)

- 1は須恵器杯の破片で、1/4ほどの残存率である。白味を帯びた色調で、内面にはススが附着している。
 2・3は長胴甕の小片である。口縁部が強く屈曲する器形で、2は内面の口縁部と体部に斜位のハケ目調整がみられる。3は内面にススの附着がみられる。

第39・40号住居址 (第107図、第110図)

この住居址はBF-43より出土している。この住居址は遺構の検出がうまくできず、プラン等の詳細を把握することができなかった。しかし、北部床に若干の高低差があることや、焼土が検出されていることから2基の住居址の重複として捉えている。カマドは第40号住居址とした住居址の北東中央より検出されており、両袖石の外面に粘土が一部みられることから、石組み粘土カマドの可能性が高い。また、燃焼部底部は使用に伴う被熱によって赤色化していた。

遺物 (第108図、第109図)

第108図 1・2は土器である。1は坏で、1/4程度の残存率である。底部の糸切り痕をナデ消している。口径10cm、器高3.8cmを測る。2は盤の破片で、1/2ほど残存している。高台部は一度欠損した際に再度加工して使用している様子がかがえる。口径13cm、器高5.2cmである。

第36号住居址 (第103図)

この住居址はC1-20から出土している。プランは3.6m×3.4mの方形で、深さは約20cmを測る。覆土は暗褐色から黒褐色系の土を中心に堆積している。床面の南半部には周溝が壁際に検出されているが、北半部についても調査の段階で検出していない可能性があり、周溝が存在した可能性は高い。カマドは検出することができなかった。

遺物 (第104図)

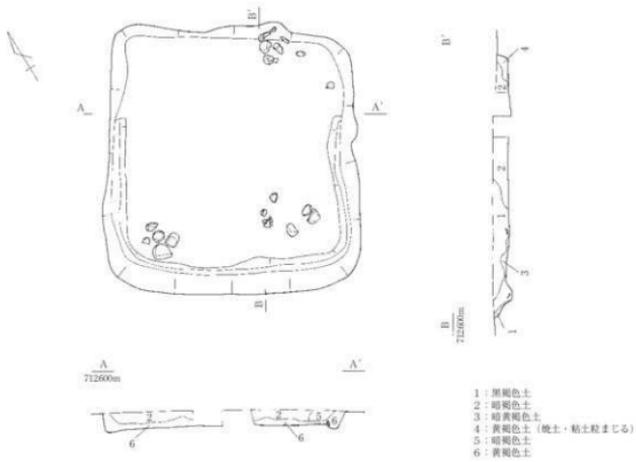
1～5は内黒土器である。1～3・5は坏である。1・2は小片からの復原であり、3は体部が1/3程度、口縁部はごく一部残存している。5は完形品であり、墨書がみられる。内面のミガキ調整も若干粗いもの(1・5)もあるが、全体的には緻密に仕上げられている。4は碗の小片と考えられる。断面にススが附着している。

6は須恵器で、いわゆる凸帯付四耳壺の破片である。外面体部には格子状の叩き目がみられる。7は須恵器の底部である。器種は明確にできない。

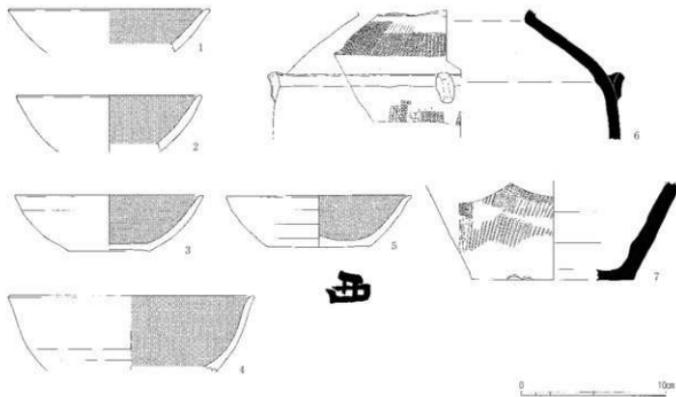
第38号住居址 (第105図)

この住居址はCL-15から出土している。残存状況が悪く、南西方向はプランを把握できなかった。規模は1辺が3.9mで、ややゆがんだ方形と考えられる。カマドは北東壁中央部に検出されているが形態が崩れ、構造は把握できなかった。

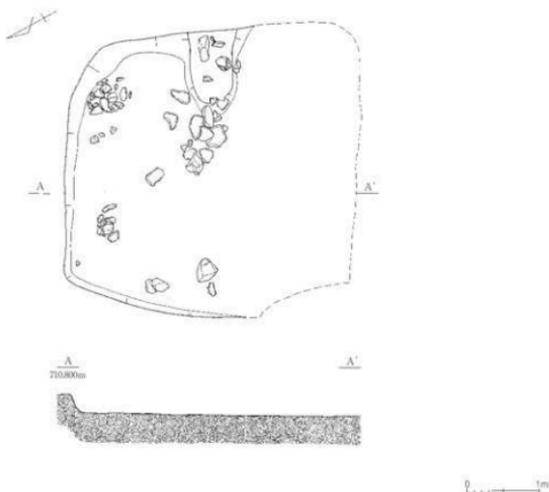
1. 住居址



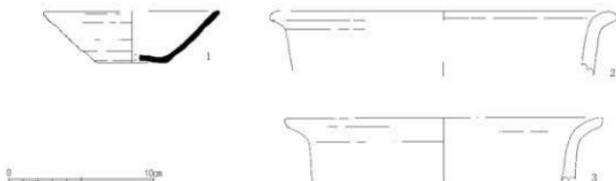
第103图 第36号住居址遺構平面图



第104图 第36号住居址出土遺物



第105図 第38号住居址遺構平面図



第106図 第38号住居址出土遺物

3は内黒土器の小片である。ミガキは比較的密に施されている。

4～14は灰釉陶器である。4～8は皿で、いずれも釉薬は薄い。5は接合によってほぼ完全な器形に復元できた皿である。外面にはごく薄い釉薬が施され、内面には自然降灰かと思わせるような、粗雑な施釉が行なわれている。6は口縁部が若干欠損しているのみの完形品である。内外面共に完全に溶融していない釉薬がみられる。また、4・7・8は小片である。9・10は段皿で9は1/2個体、10は小片からの復元である。釉薬は薄く、9は段部が不明瞭である。11～14は碗である。11は底部の破片で、胎土は緻密で、内面には釉薬が施されている。また重ね焼きの痕跡をとどめている。12は体部の小片である。内外面ともに光沢のある釉薬を漬け掛け施釉している。13は大振りな碗で、3/4個体残存している。住居址内から出土した破片を接合して器形を復元しており、高台の多くと、体部に欠損が見られる。体部の内外面に薄い釉薬が施されており、一部は溶融が不良

で痕跡程度となっている。14は焼成不良の碗の破片で1/4弱残存している。釉薬はみられない。

15は壺の破片である。弱いくびれが上部にみられ、若干外半する口縁部を持つ。外面は全面に板状工具による縦位のナデ調整が施され、内面は口縁部にヨコナデ調整、体部には斜位の板状工具によるナデ調整が施されている。なお、内面の口縁部付近にはススが付着している。

第108図16・17、第109図1～3は羽釜である。第108図16は外面に横方向を主体とするナデ調整を施し、内面には口縁部付近はヨコナデ調整、体部はナデ調整が施されている。なお、外面の下部は一部で器面に剥離がみられ、内外面の一部にススが付着している。17は罫が上部に付いている形態で、外面の体部には板状工具による縦位のナデ調整がみられる。また、内面には指によるナデ調整を行っている。ススは外面の体部下部和、内面の体部にみられる。第109図1は体部が1/2程度残存しているが、上部は一部残存しているにすぎない。外面にはナデ調整の後にミガキ調整を施し、内面の体部上部には板状工具による縦位のナデ調整の痕跡が認められる。下半部はナデ調整が施され、ススは内外面共に体部全面にわたって付着している。2は1/2個体の残存で全体に丸みを帯びた器形である。外面の口縁部はナデ調整のみであり、体部はナデ調整の後で施した粗いミガキ調整痕をとどめる。内面は板状工具によるナデ調整を施している。3は直線的に底部に向かう器形で、外面は口縁部にヨコナデ調整を行い、体部には板状工具による縦位のナデ調整を施している。内面はナデ調整を施している。なお、内外面共に体部下部にススが付着しており、内面は器壁に剥離もみられる。

第108図18は小形壺である。1/2程度の残存率である。口縁部から頸部にかけては指によるナデ調整を施し、体部には板状工具による縦位のナデ調整が施されている。内面は全体的にヨコナデ調整を行っている。なお、外面の体部にはススが付着している。第109図4は壺の下半部である。外面は板状工具によって縦位のナデ調整を行い、内面は指によるナデ調整を全体的には縦位に施し、下部では横位に施している。また外面下部にはススが付着している。

第109図5は鉄製品である。用途は不明である。

この住居址は11期頃と考えられる。

第41号住居址（第112図）

この住居址はB J = 42より出土している。第39・40号住居址と同様に遺構の検出がうまくできず、詳細は不明である。覆土は暗褐色系と黒色系の土で占められていた。また、カマドは北隅に築造されており、カマド内部の覆土からは焼土が出土し、燃焼部底部にも使用に伴う被熱部分が検出された。南部には直径約1mの浅い土坑が検出され、中から灰と考えられる覆土も出土した。

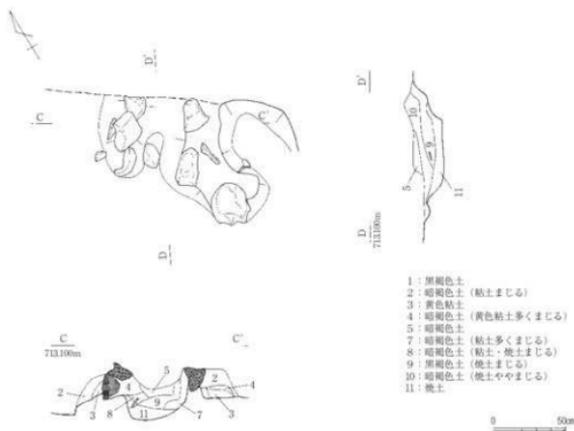
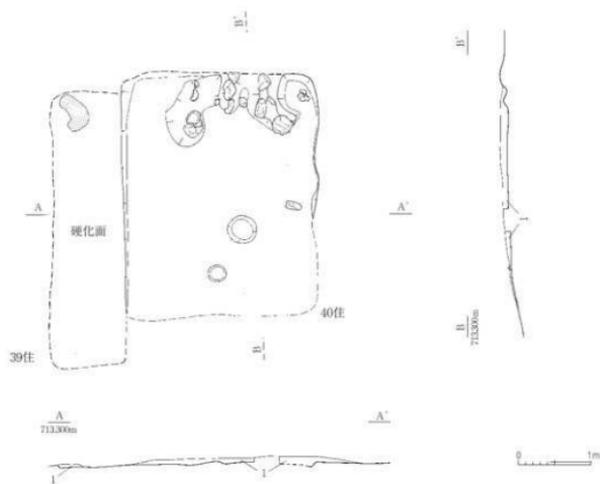
遺物（第111図、第113図）

第113図1・2は灰釉陶器である。1は皿の破片である。内外面にハケ塗りかと思われる施釉が行われている。2は碗の体部小片である。内外面共に施釉されている。1は1/3個体ほどの残存率であり、2は小片である。

3～16は内黒土器である。9・11は1/2個体、3・10・12は1/4個体の残存率であり、16は口縁部がほとんど欠損している。そのほかは小片からの復原である。4～6、8～10は内面のミガキ調整は緻密であるが、3・7・11・14・16はやや雑である。なお、9・16は黒色処理が一部抜けており、4・5・10・14は体部外面にススが付着（4は一部）している。また、3には墨書がみられるが、図化できた以上に墨痕がみられる。16の見込部にはへら状工具による沈線が「井」字状に刻まれている。12・13は、内面のミガキ調整も緻密で、外面の口縁部付近にススが付着している。また、12の外面は若干の剥離がみられる。なお、12・13は皿と考えられる。

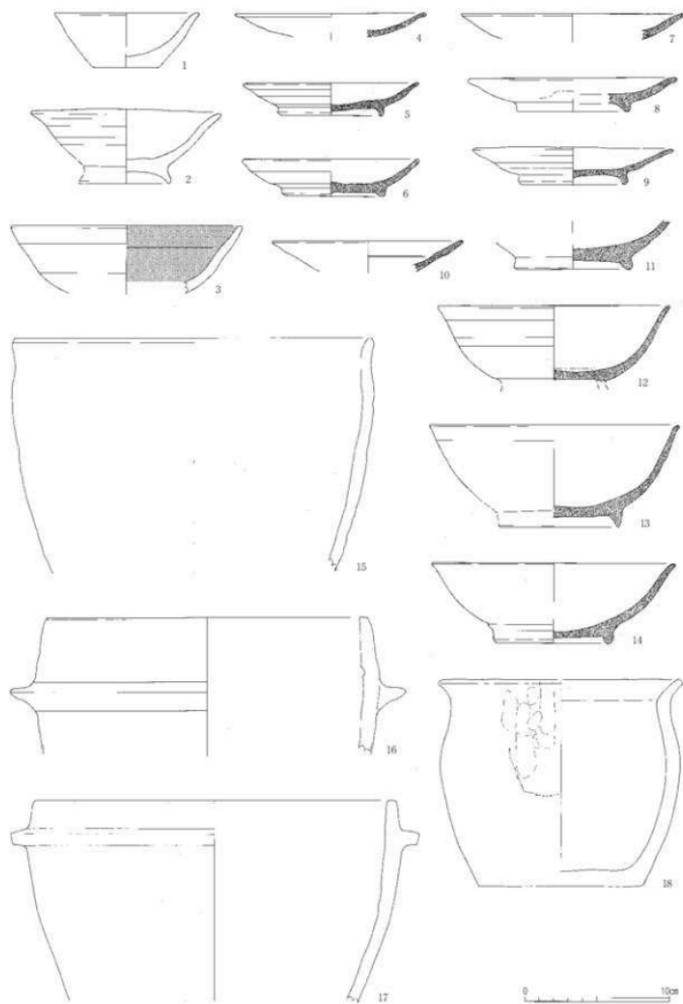
17・18は土器器環である。いずれも小片からの復原で、内面はヨコナデ調整を施している。なお、17の外面

第五章 遺構と遺物

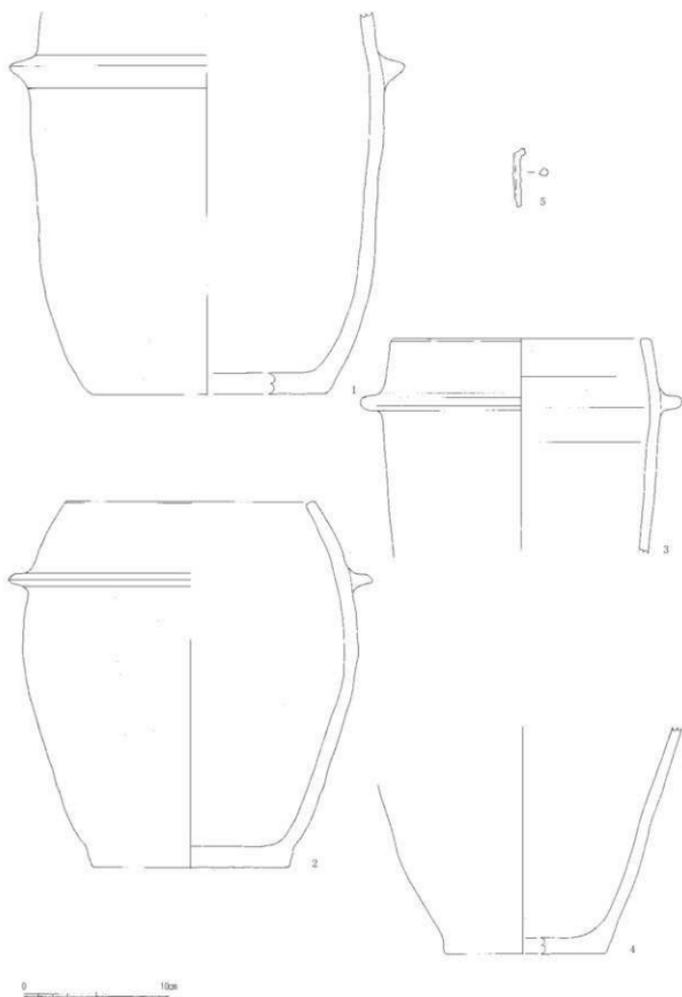


第107図 第39・40号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

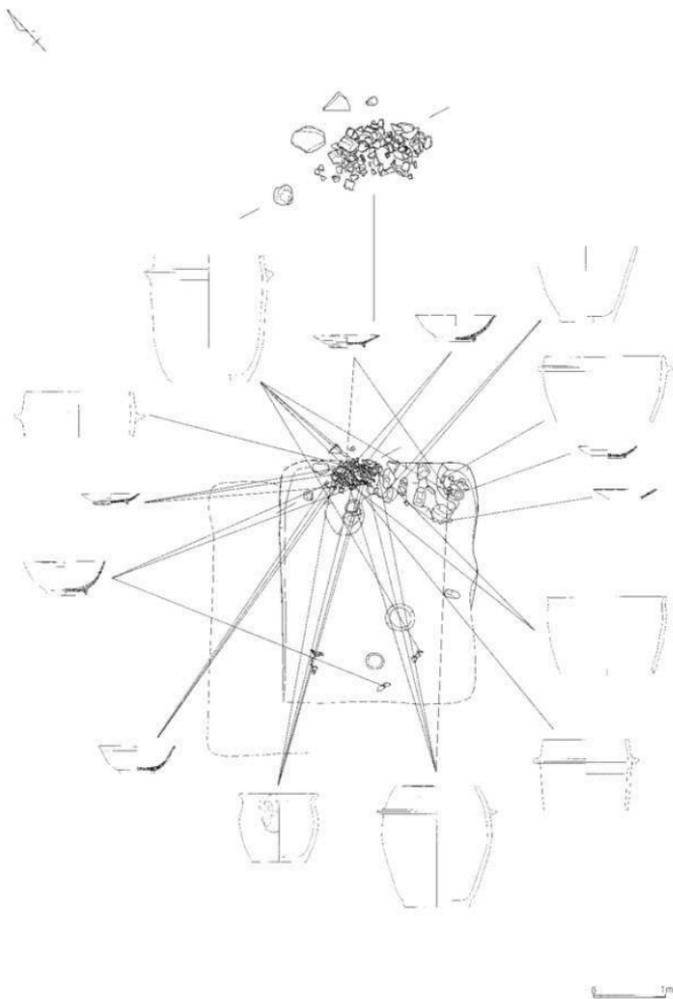
1. 住居址



第108图 第40号住居址出土遗物(1)



第109図 第40号住居址出土遺物(2)



第110图 第39·40号住居址遺物出土狀況图

口縁部にはススが付着しており、18は内外面の一部に縦位のススが付着している。

19～21は長胴甕である。いずれも小片で、19は板状工具による縦位のナデ調整痕をとどめ、内面は板状工具による横位のナデ調整によって器壁に溝状の段が発生している。20は外面にうすいハケ目調整がみられ、内面には口縁部にヨコナデ調整、体部にやや弱い横位から斜位のハケ目調整を施している。21は体部外面に縦位のハケ目調整を施した後、ヨコナデ調整を行っている。内面は口縁部に横位のハケ目調整を施し、体部にはヨコナデ調整を施している。

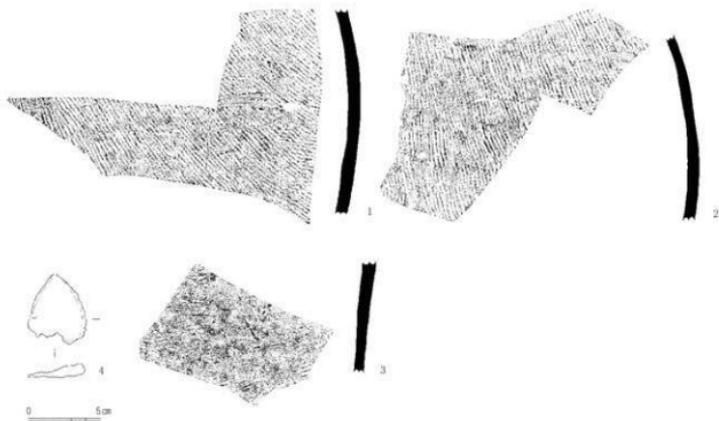
22・23は小型甕である。22は外面に板状工具による横位のヨコナデ調整がみられるが、これはごく薄いカキ目の可能性も考えられる。内面は口縁部にハケ目調整が行われ、内面にはヨコナデ調整を施している。23は口縁部が強く屈曲しラッパ状に広がる器形である。外面の口縁部から体部上部にかけてヨコナデ調整、体部は縦位のナデ調整がみられる。内面はヨコナデ調整を行っている。

24・25は須恵器の甕である。いずれも小片で、24については内外面に自然釉の付着がみられる。25は胎土中に砂粒が多く混入している。第111図1～3は須恵器甕の破片である。外面には並行叩き目がみられる。

4は鉄である。錳鉄の可能性がある。

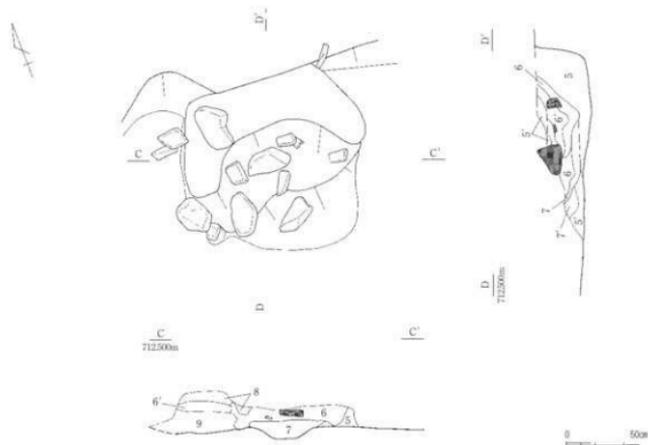
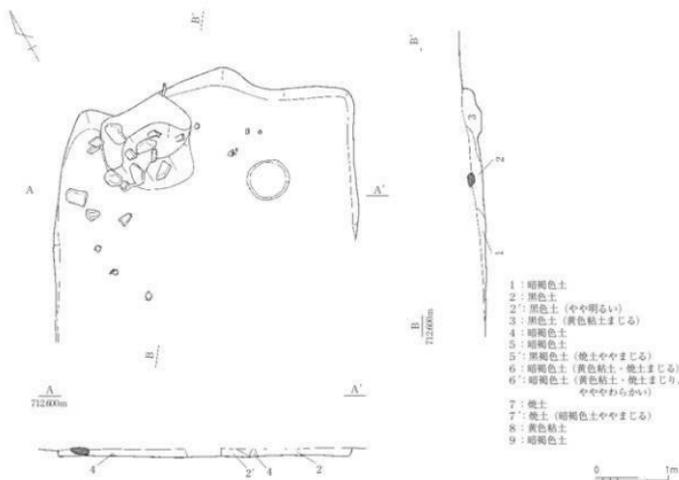
そのほか、破片ではあるが輪の羽口（図版100）が出土した。

この住居址は、8期の可能性がある。

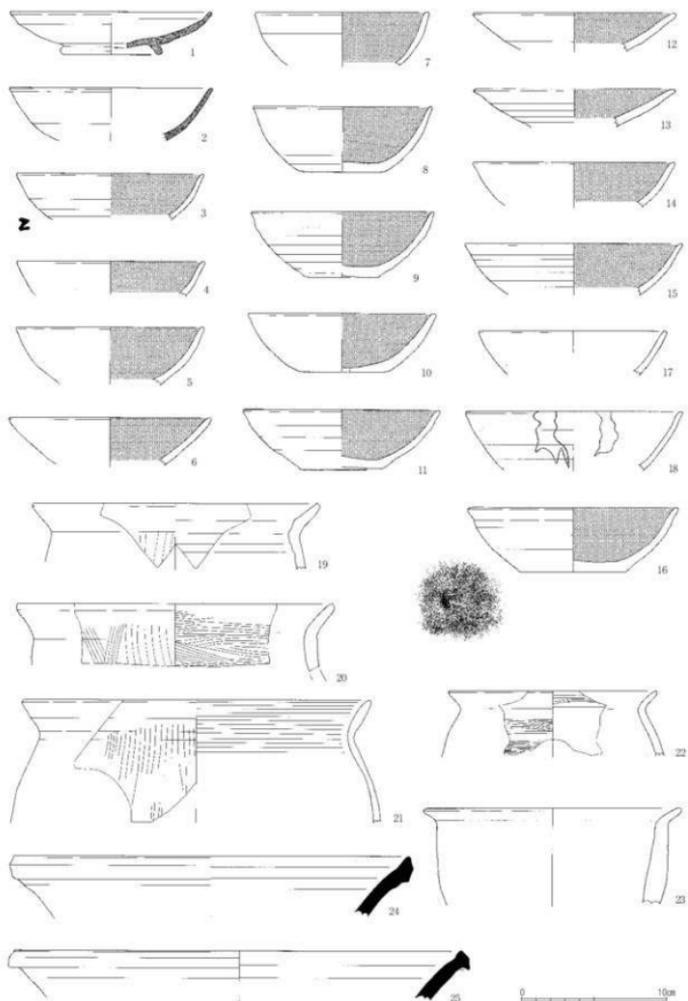


第111図 第41号住居址出土遺物(1)

1. 住居址



第112図 第41号住居址遺構平面図 (カマド: S-1/30)



第113図 第41号住居址出土遺物(2)

第51号住居址 (第114図、第121図)

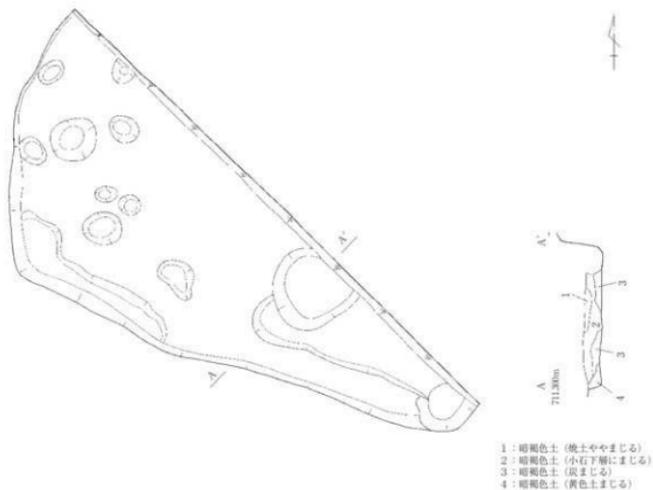
この住居址以降は第Ⅲ次調査によって検出された住居址である。この住居址はA V-6より出土している。北東部が調査区域外であったため、全体の約1/3程度を調査したにすぎない。プランは1辺7.6mの方形と考えられ、深さ約20cmを測る。床面には多数のピットと落ち込みが確認されたが、この住居址に伴うものなのかは明確にできなかった。覆土は暗褐色系の土で占められていた。

遺物 (第115図、第116図)

第115図1～3は灰釉陶器皿である。1は1/2個体程度の残存である。焼成は良好であるが、釉薬は薄い。2は口縁部の一部が残り、底部が約3/4程度残存している。釉薬が溶融しておらず、白色味を帯びている。3は小片である。比較的深い器形であり、釉薬は薄く、内面は斑点状にムラが見られる。いずれも漬け掛け施釉である。

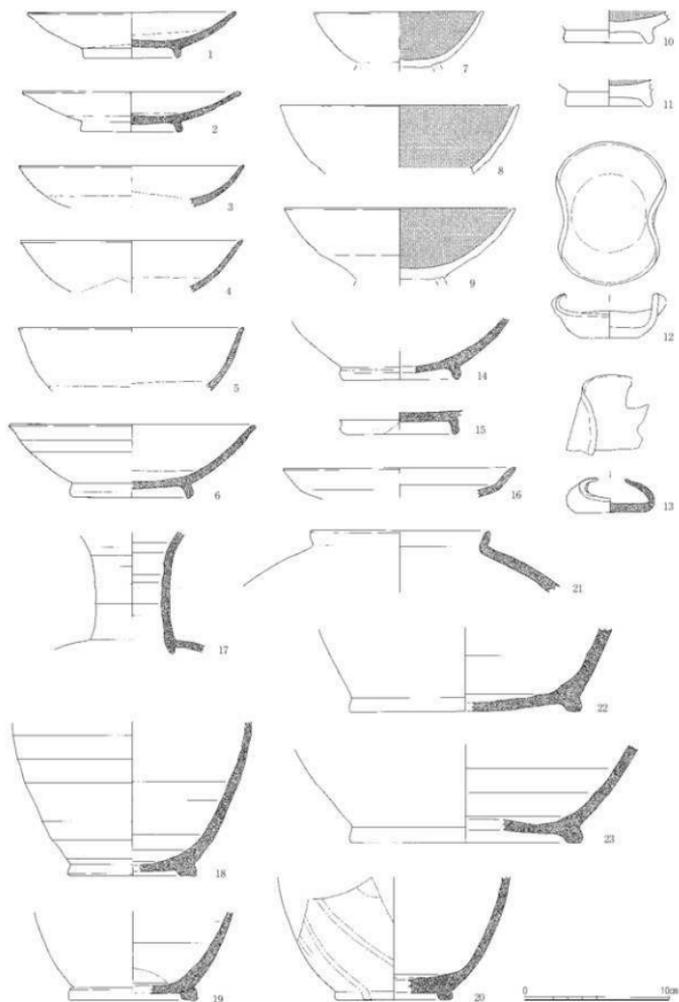
4～6は灰釉陶器碗である。4・5は小片からの復原である。いずれも釉薬は薄く、十分溶融していない。6は1/2個体ほどの残存率である。釉薬は厚く掛けられ、灰緑色を呈している。これらの碗は漬け掛け施釉である。

7～11は内黒土器である。いずれも碗と推定される。7は体部を1/4程度と、底部のほとんどが残存しているが、高台はすべて尖われている。また、見込部の黒色処理が抜け落ちている。8は体部上半部の小片である。9も口縁部の一部と底部が残存している。この個体も高台がすべて尖われており、磨滅していることから、高



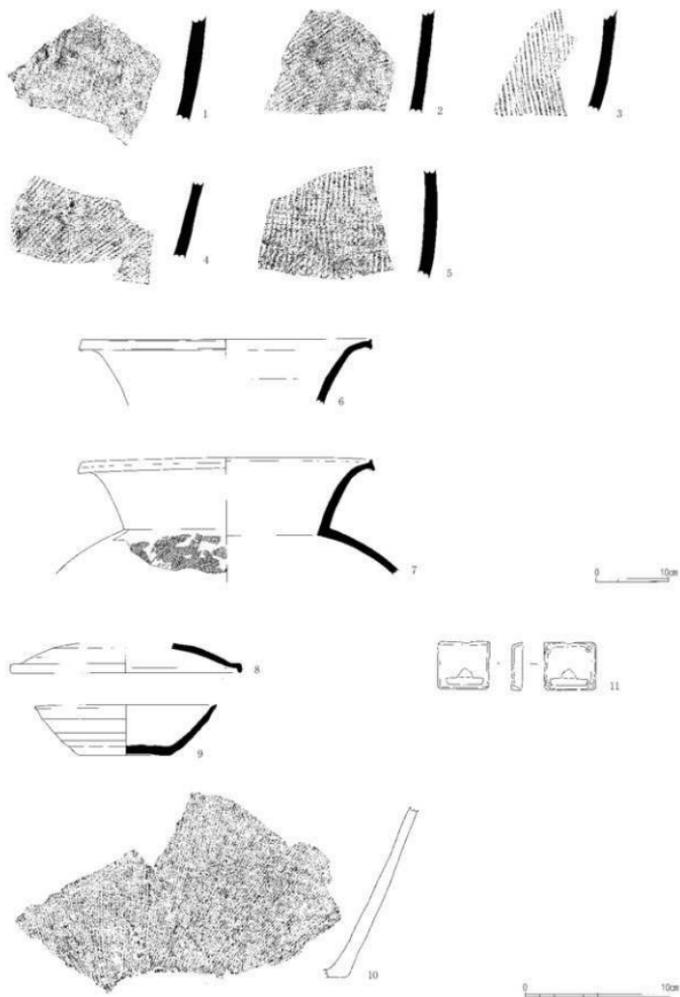
第114図 第51号住居址遺構平面図

第五章 遺構と遺物



第115図 第51号住居址出土遺物(1)

1. 住居址



第116图 第51・52号住居址出土遺物 (6・7:S-1/6) (1~7:51住, 8~11:52住)

第5章 遺構と遺物

台を欠いた後も使用されていたと考えられる。10・11は底部破片である。いずれの高台も厚く、粗雑な印象をうける。なお、11は黒色処理が抜け落ちている。

12は完形の土師器の耳皿である。見込部に亀裂が見られる。

13は灰軸陶器の耳皿である。1/2程度の残存率であった。釉薬は内面にごく薄く、痕跡程度に掛けられている。

14・15は灰軸陶器の底部破片である。14は深碗の底部と考えられ、1/2個体程度の残存である。15は底部の破片である。体部をきれいに打ち欠いており、外面底部を何らの用途のために再利用していたと考えられる。

16は緑軸陶器皿の口縁部である。薄緑色の釉薬が掛けられている。破片からの復原である。なお、他にも小片が出土している。

17～20は灰軸陶器の長頸壺である。17と18は同一個体である。17は1/2個体程度の破片である。外面に釉薬が厚く掛けられている。なお、体部内面と上部断面にススの付着がみられる。18は体部下下部である。やはり1/2個体程度の残存率で、外面には薄く釉薬が掛けられている。なお、外面にはススが付着し、破片上部には打ち欠いた様な剥離の痕跡が残されている。19は体部下下部である。3/4程度残存しているが、底部がほとんど失われている。20は体部下下部の破片で、1/3個体程度の破片である。釉薬は斜めに流れるように掛かっているにすぎない。

21～23は短頸壺である。22・23は体部下下部の小片であるが、器形から短頸壺と推定した。21は小片からの復原である。外面には厚く釉薬が掛けられているが、光沢はない。また、22の内面、23の内外面および高台の欠損部にススが付着している。

第116図1～7は須恵器である。1～3は並行吹き目、4・5には格子目の吹き目が見られる。6・7は口縁部の破片である。7の体部には並行タキ目が残されていた。

この住居址は10期頃の可能性がある。

第52号住居址 (第117図)

この住居址はA U-29より出土している。東半部は調査区域外となり調査を行っていない。プランは1辺約3.8mの方形と考えられ、深さは約60cmを測る。覆土は全体的に暗褐色系の土で覆われていた。なお、床面からは柱穴を検出することができなかった。

カマドは北西壁の中央部に架かっているが、住居址内の構造物が破壊されていたため詳細は不明である。壁外には偏平な石が並行して設置されており、煙道が作られていたと推測できた。なお、カマドの燃焼部底部には灰土および灰が検出された。

遺物 (第116図8～11)

8は須恵器の坏蓋である。小片からの復原である。9は須恵器坏である。口縁部の一部が欠損しているのみでは完形である。焼成はややあまく、色調も若干褐色を帯びている。

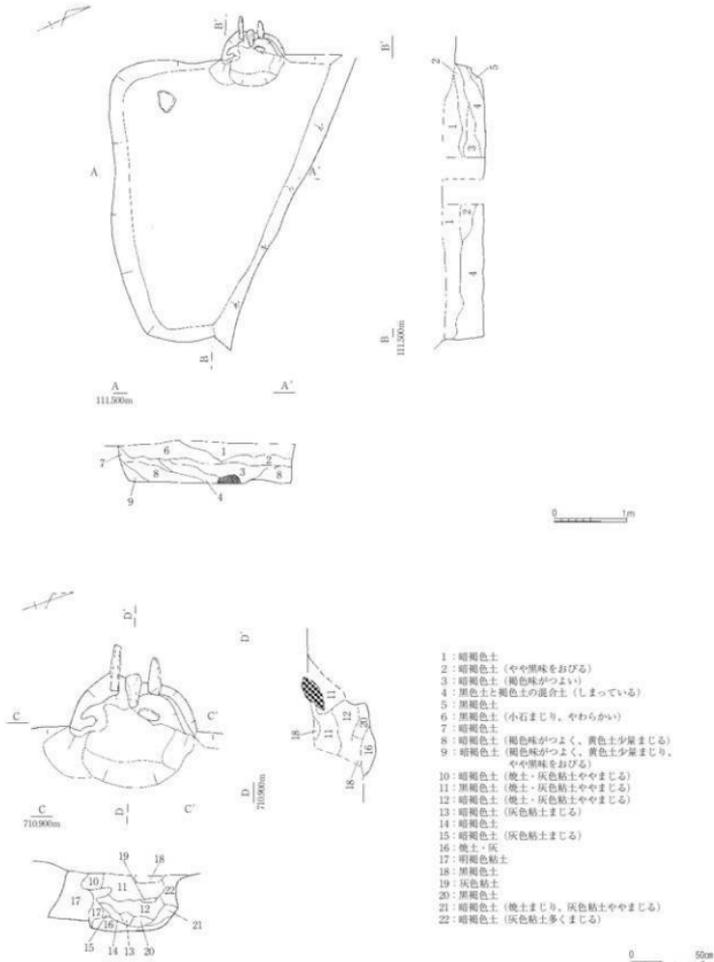
10は長頸壺の下半部破片である。外面に縦位のハケ目調整がみられる。

11は帯金具(盥方)である。銅製で、ほぼ完形である。

第53号住居址 (第118図、第121図)

Z P-40より出土している。この住居址のプランは1辺約4.6m、深さ約50cmを測るが、北西部は第60号住居址と第61号住居址と重複して出土しており、さらに南西部は調査区域外となっているため、規模等を明確にすることができない。カマドは南東壁の中央付近より出土しているが、破壊されているため、詳細は不明で

1. 住居址



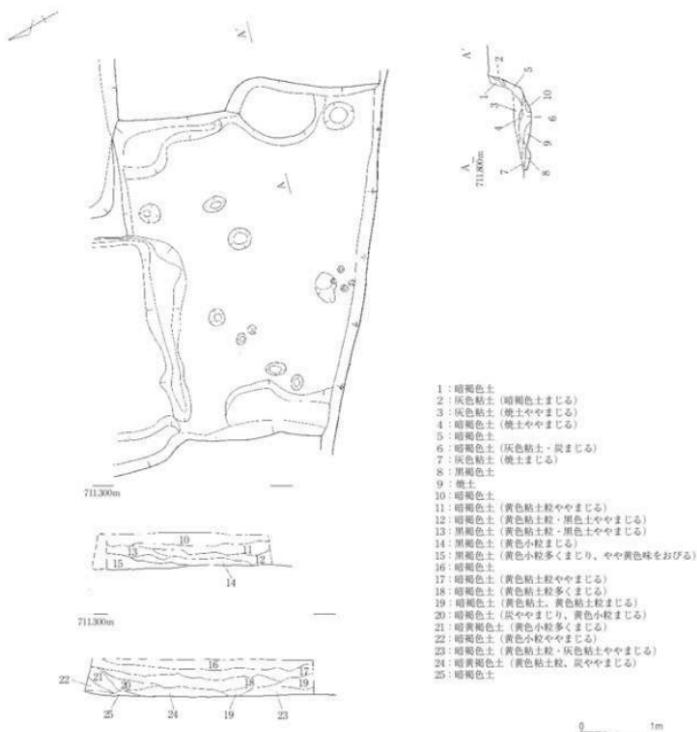
第117図 第52号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

ある。なお、燃焼部付近には被熱による赤色化した地点が検出されている。

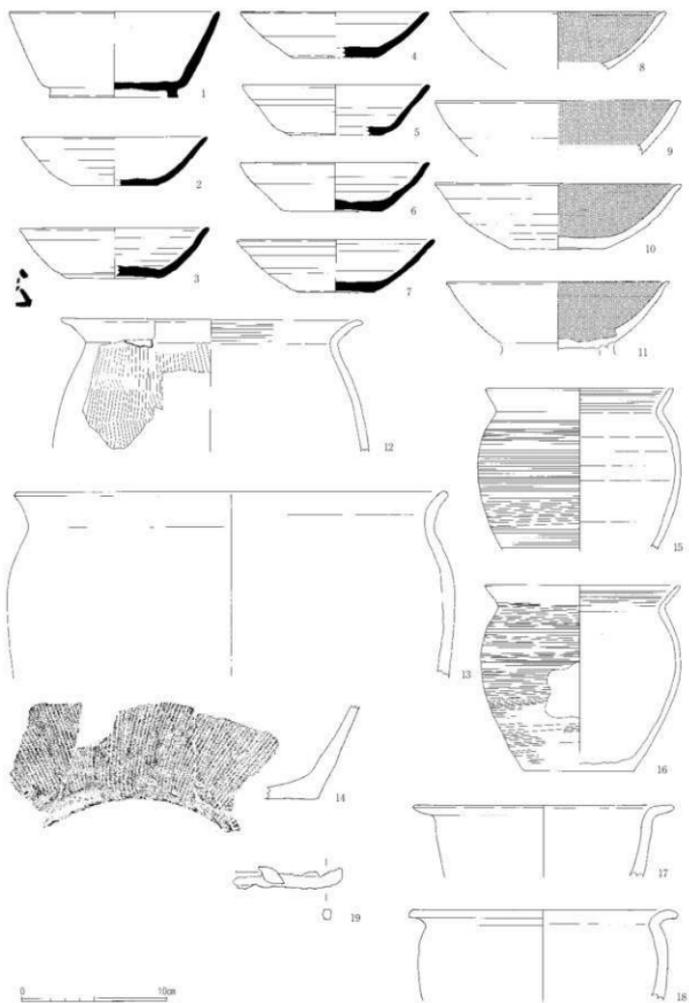
覆土は暗褐色系の土を中心として、黒褐色の土もみられる。なお、床面には多くのピットが出土しているが、この住居に伴うものかは明確にできなかった。

遺物(第119図、第120図1～5)

第119図1～7は須恵器坏である。1は蓋坏の坏身である。1/3个体程度の残存である。体部の外面には自然降灰による自然釉が付着している。2は1/3个体ほどの残存率である。焼成良好な个体である。3も1/3个体程度の残存率である。断面で観察すると中心部は褐色であり、焼成が不良である。なお、外面底部に墨書が確認できる。4は小片からの復原である。口縁部上部がやや焼成不良な破片である。5は底部を大きく欠損した、体部が1/3程度残存した破片である。他の个体よりやや直立気味に立ち上がる器形である。6は褐色を呈した



第118図 第53号住居址遺構平面図



第119图 第53号住居址出土遗物

第V章 遺構と遺物

土器で、火押がみられる。内外面にススが付着していることから、2次焼成を受けた可能性がある。7は口縁部の一部を欠損した個体で、灰白色の色調を呈する。なお、内面に若干ススが付着している。

8～10は内黒土器環である。8は体部が1/3程度残存しており、内面のミガキ調整は密に施している。また、外面にはススが一部付着している。9は1/6個体程度の体部からの復原である。内面のミガキ調整は比較的密である。

10は底部と、体部の一部が残存している。内面のミガキ調整は密に行われている。

11は内黒土器碗である。見込み部が剥離し、黒色処理も抜けている。また、体部も一部残存しているにすぎない。高台はすべて欠損しており、一部磨滅していることから、欠損後も使用されていた可能性が高い。なお、内面のミガキ調整は密に施され、外面にはススが薄く付着している。

12～18は土器器甕である。12～14は長胴甕の破片である。いずれも小片からの復原である。なお、12の頸部にはススが付着している。14は底部破片である。破片上部にススの付着がみられる。15・16は体部に横位のカキ目を施した小型甕である。15は小片からの復原であり、口縁部の内外面にススが付着している。16はほぼ完形の土器である。いずれも焼成の良好な個体である。17・18は無文の小型甕である。器壁が厚めの作りの、粗雑な印象の甕である。18の体部外面には、縦位のナデ成形痕をとどめ、内面には横位のハケ目が残されていた。なお、17の内面にはススの付着がみられる。

19は鉄器である。断面方形を呈し、端部が若干折りまげである。

第120図1～3は須恵器甕の破片である。いずれも小片である。1は体部上部で、平行タタキ目が残されている。また、2には格子目タタキ目痕がみられる。なお、3は外面の肩部に自然軸が付着し、横方向のナデ調整痕が確認できる。

第54号住居址（第122図、第127図）

この住居址はZL-38から出土している。プランは1辺が4m、深さ約28cmを測り、平面形態は方形と考えられる。カマドは調査区域外となっている北部に存在すると考えられ、柱穴はP1、P2が検出されている。

覆土は暗褐色系の土で占められている。なお、住居址東部に土坑が検出されているが、この住居址に伴うものかは明確にすることができなかった。

遺物（第120図）

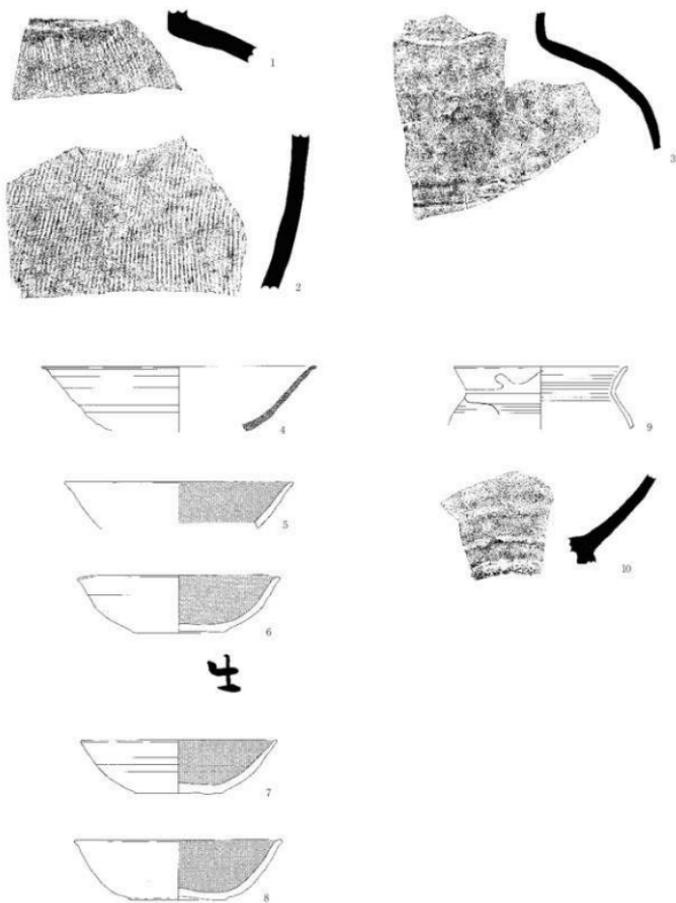
第120図4は灰釉陶器碗である。1/2個体程度の残存であるが、底部はすべて失われている。釉薬は内外面共に全面にわたって厚く施釉されている。

5～8は内黒土器である。5は小片からの復原である。内面のミガキ調整は密で丁寧であり、外面にススが付着している。6は1/3個体ほど残存している。内面のミガキ調整は密で、外面体部下部に墨書がみられる。7は口縁部が1/6程度の残存で、内面のミガキ調整は密であるが、剥離がみられる。また、外面にはススが付着している。8は1/3程度の残存率であり、内面のミガキ調整は密に施されている。

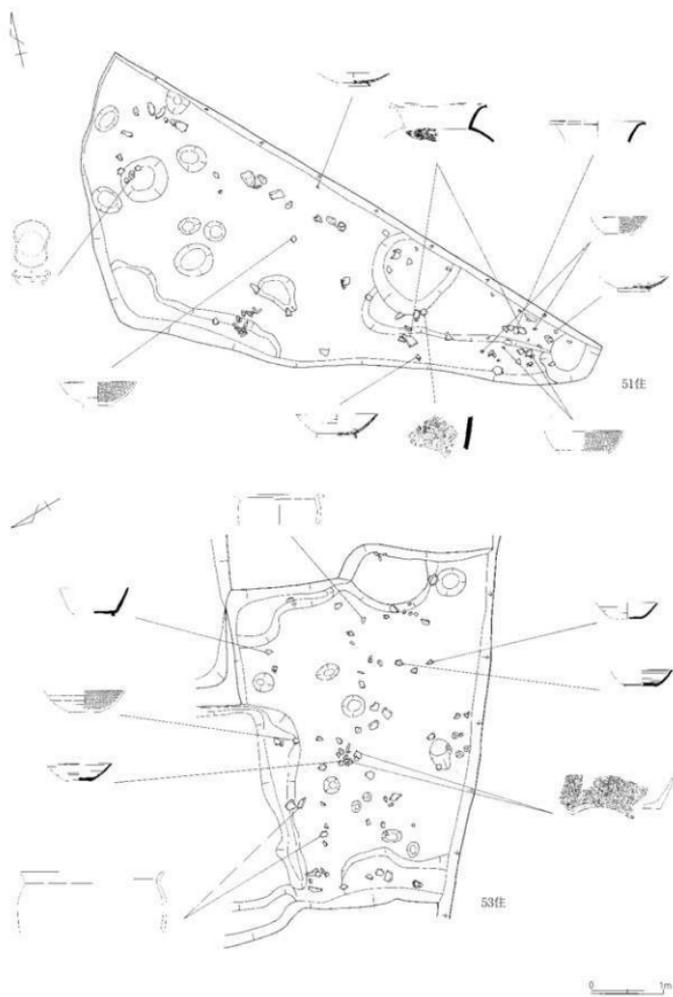
9は小型甕の破片である。内面上部と口縁部、および外面にはカキ目が施されている。また外面の口縁部にはススの付着もみられる。

10は須恵器甕の底部破片である。

1. 住居址

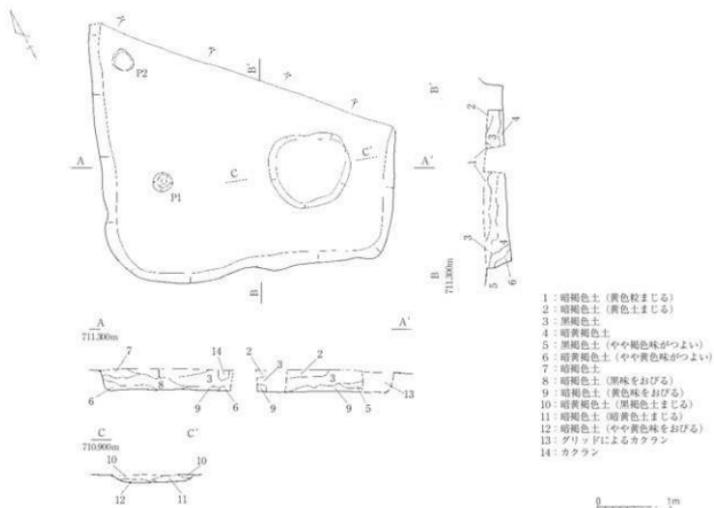


第120图 第53・54号住居址出土遺物 (1~3:53E, 4~10:54E)



第121図 第51・53号住居址遺物出土状況図

1. 住居址



第122図 第54号住居址遺構平面図

第55号住居址 (第123図)

ZR-33より出土している。この住居址の南西部は、第56号住居址を一部掘り込み、北東部は調査区域外となっている。このため詳細を明らかにできないが、住居址の規模は1辺約3mの平面方形のプランと考えることができる。なお、住居址床面に土坑が出土しているが、この住居址に伴うものかは明確にできなかった。

遺物 (第125図)

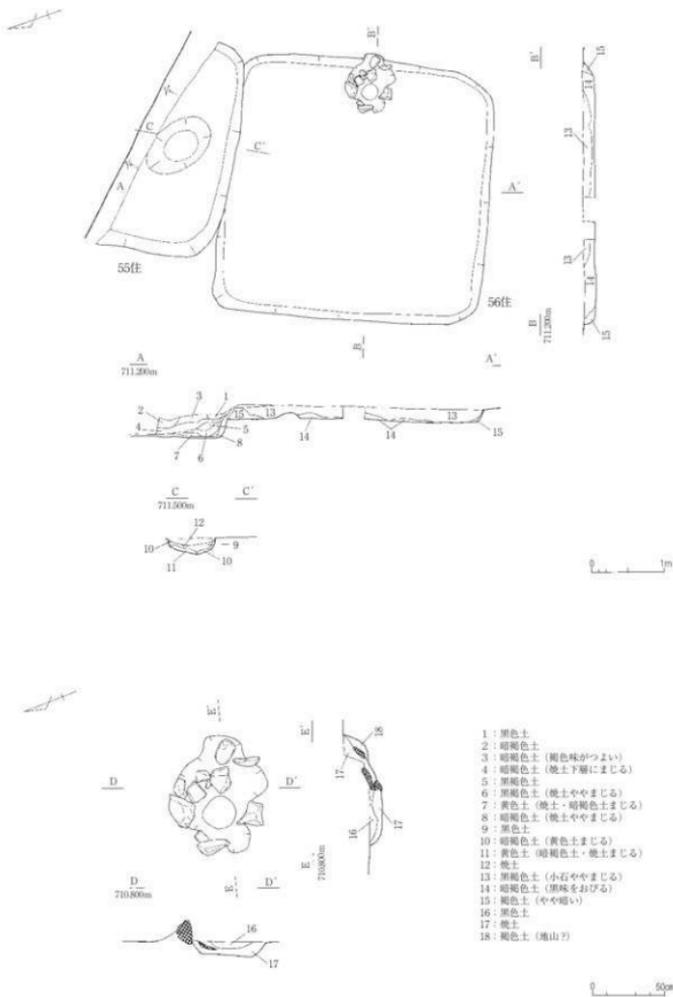
第125図1・2は灰軸陶器である。1は深碗の小片である。薄く軸葉をハケ塗りしているが、光沢はない。2は底部に高台の付けられた痕跡が確認できないことから、坏の小片と考えられる。外面に軸葉はみられず、内面の全面に施軸されている。

3は須恵器長頸壺の底部小片と考えられる。

4～8は内黒土器坏である。4は1/5個体程度の残存で、内面のミガキ調整は密である。5も小片からの復原である。内面のミガキ調整は密であるが、黒色処理が抜けている。また、外面の口縁部の一部にススが附着している。6は1/2個体の残存率である。やや小型の坏で、内面のミガキ調整は比較的密である。7は底部と、体部が一部残存している程度である。内面にはススが附着し、黒色処理が抜け落ちている。8は小片からの復原である。内面のミガキ調整は密に仕上げられている。

9は堯の小片である。口径に対して器高が低めの器形と考えられる。外面にはナデ調整痕をとどめ、内面にはハケ状工具による整形痕を残している。

第五章 遺構と遺物



第123図 第55・56住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

第56号住居址 (第123図)

この住居址は第55号住居址に北東壁を切られている。プランは1辺が約3.6m、深さ約20cmを測る平面方形で、覆土は黒褐色系の土で占められている。また東部壁にカマドが築かれているが、礫が散乱した状態で検出され、燃焼部と奥壁が被熱によって赤色化していた。なお、柱穴は検出できなかった。

遺物 (第125図)

第125図10は小型の甕である。体部を成形した後、粘土紐を屈曲させて貼り付け、口縁部を作り出している。成形後に、クシ状の工具を用いて整形作業を行っており、外面では頭部を整形後に、体部を整形していることがわかる。なお、この甕は第55号住居址出土遺物の可能性もある。

11は軟質須恵器と考えられる。器形は内湾が強く、土師器とも考えられるが、焼成が土師器より堅緻であることから須恵器と判断した。この個体は底部を欠き1/4個体程度の破片であった。

12は小型甕の小片である。頭部にヘラ状工具による縦位の調整痕が確認できる。

13は鉄鏝である。ほぼ完形と思われる。

第57号住居址 (第124図、第127図)

Y〇-39より検出されている。この住居址は第61号住居址を掘り込んで造られている。1辺が約3.2mの方形で、深さは約38cmを測る。

カマドは北東壁中央部に築かれ、壁の外側には煙道とみられる掘り込みが確認できる。また、この煙道の奥壁には内黒土器片が出土している。なお、この住居址のカマドについては断面観察を行う前に解体してしまったため、断面図を記録できなかった。

覆土は黒褐色系の土で占められ、床面には土坑も出土しているが、この住居址に伴うものが明確にできない。また、柱穴も検出することができなかった。

遺物 (第125図、第126図)

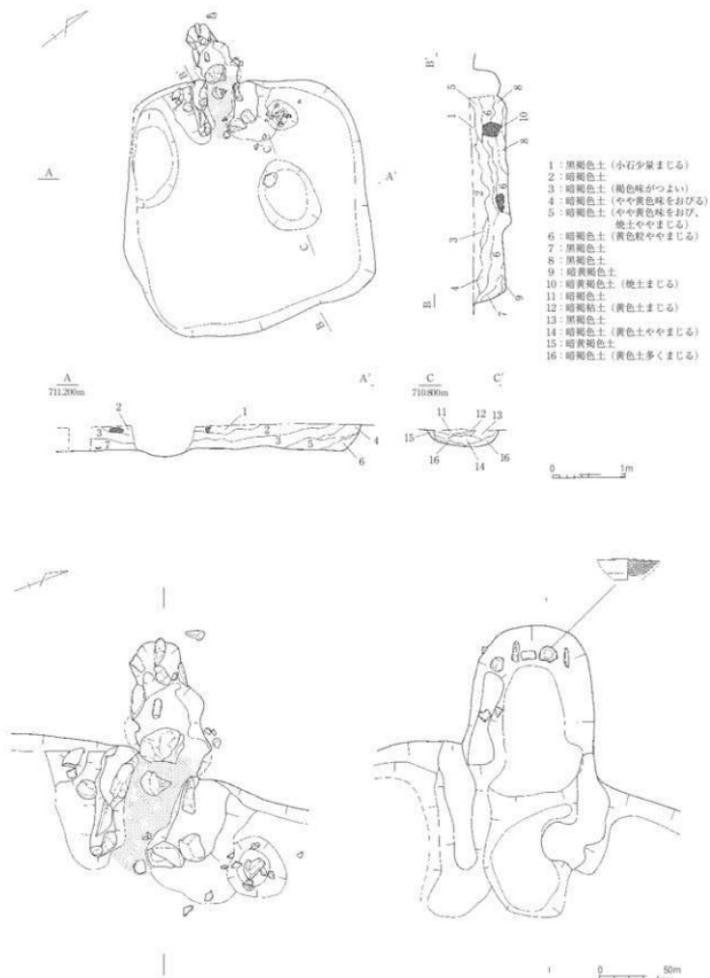
第125図14は灰釉陶器の皿である。体部が1/4程度欠損している。ハケ塗り施釉であるが、釉薬は薄く、光沢がない。なお、内外面ともに施釉方向は時計回りであった。

15は須恵器片である。小片からの復原である。若干焼成が甘いのか、灰白色を呈している。

16-23・25は内黒土器片である。16は小片からの復原である。内面のミガキ調整は密であるが、一部黒色処理がかけられている。17も小片からの復原である。若干焼成が甘い印象の土器で、内面のミガキ調整もやや粗い。18は1/2個体ほどの残存である。若干ゆがみのある土器で、内面のミガキ調整はやや粗い。なお、外面の体部中部に墨書の痕跡が確認できる。19は小片からの復原である。内面のミガキ調整は比較的密である。20は1/5程度の残存率である。内面の黒色処理は一部かけているが、ミガキ調整は密である。なお、外面にはススが付着している。21は大型の坏と考えられる。内面のミガキ調整は密であるが、黒色処理がかけられている。22は焼成のあまい土器で、1/5個体からの復原である。内面にミガキの痕跡をとどめているが、磨滅のため明瞭ではない。23は口縁部を1/5個体残す土器で、内面のミガキ調整は比較的密である。なお、外面に墨書が確認できる。25は1/4個体ほど残存している。体部下部に大きな屈曲部を持つ器形である。内面には不明瞭なミガキ調整がみられ、内外面の一部にススが付着している。24は内黒土器片である。底部と、体部の1/2個体程度が残存している。内面のミガキ調整は密であり、口唇部を外反するように面取りを行っている。高台は断面三角形である。

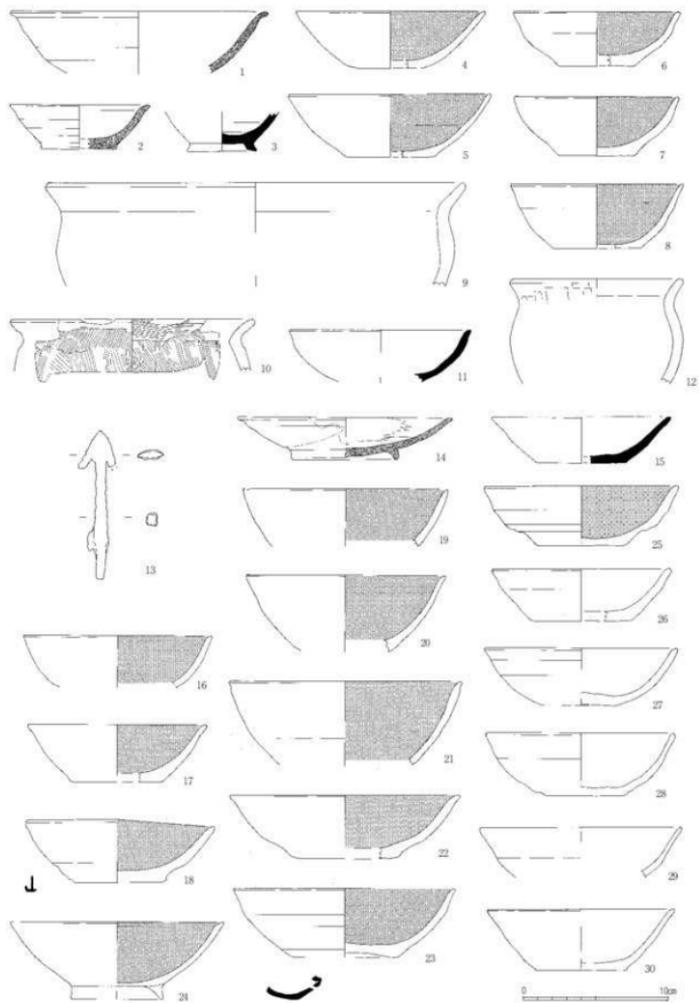
26-30は土師器である。26は1/2個体ほど残存している。内面の体部の一部と、外面上端部の一部にススがみられる。27は体部を1/3個体ほど欠損している。若干焼成のあまい土器で、見込部にロコ口整形痕をとどめ

第五章 遺構と遺物

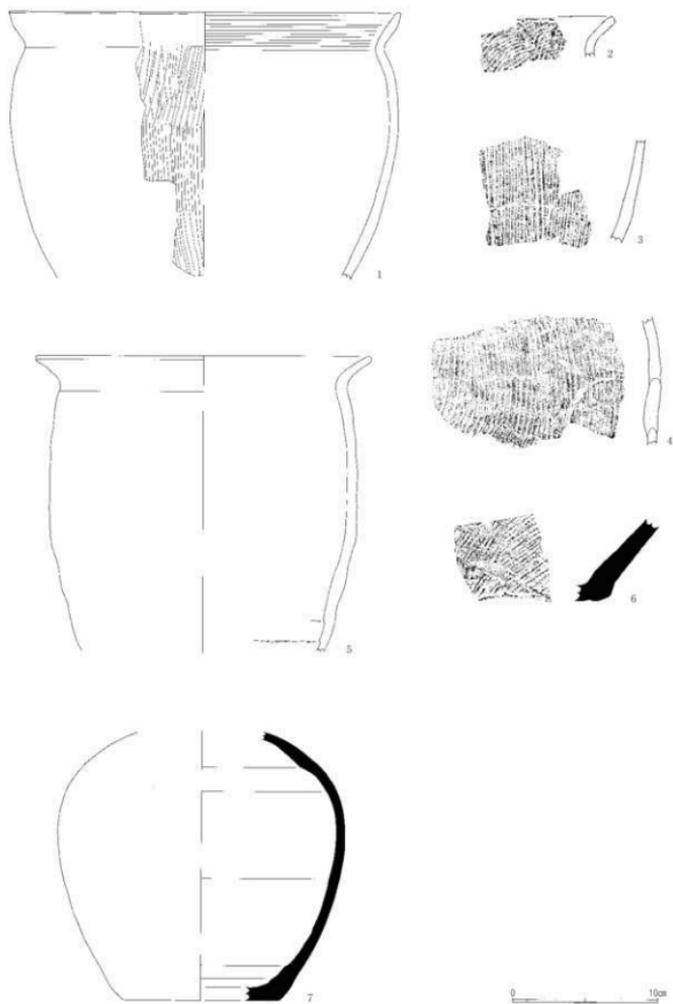


第124図 第57号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

1. 住居址

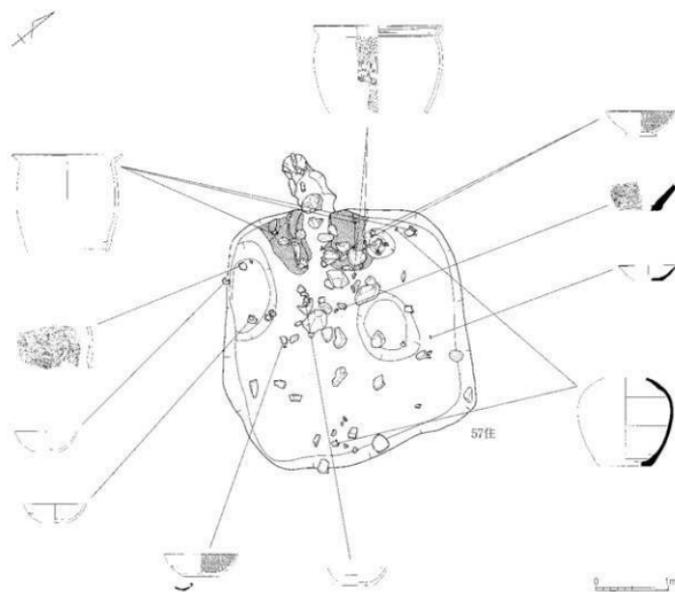
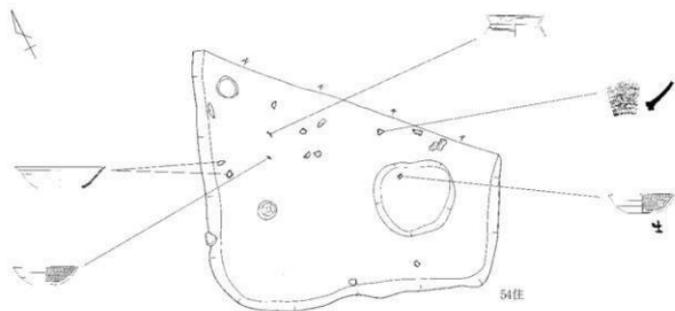


第125图 第55·56·57号住居址出土遗物 (1~9: 55住、10~55·56住、11~13: 56住、14~30: 57住)



第126図 第57号住居址出土遺物

1. 住居址



第127图 第54·57号住居址遺物出土狀況图

第V章 遺構と遺物

ている。28も体部を1/3程度欠損している。焼成のあまい土器である。29は1/5個体ほど体部が残存している。内面下部と外面の上部に一部ススが付着している。30は体部を一部残す破片である。内面にはロクロ整形痕を明瞭にとどめている。

第126図1～5は土師器甕である。1・3～5は長胴甕で、1・3・4の外面には縦位のハケ目調整が残されている。1は小片からの復原であり、4は比較的粗雑な作りである。なお、両者ともに、粗いハケ目である。5の外面にはナデ整形痕をとどめる。小片からの復原である。なお、1・3の外面にはススの付着がみられる。2は小型甕の小片で、口縁部から体部上部には斜位のハケ目調整が行なわれている。

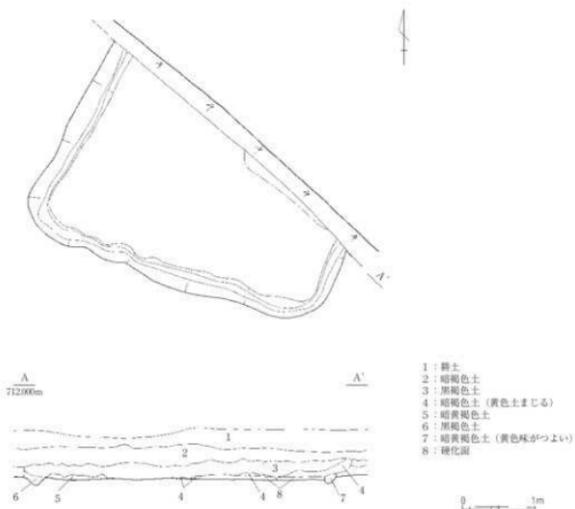
6・7は須恵器である。6は須恵器甕の底部小片である。外面に格子目叩き目がみられ、自然釉が付着している。7は短頸壺の体部破片である。体部上半部に自然釉が付着している。

この住居址は8期頃と考えられる。

第58号住居址 (第128図)

Y1-42で検出されている。北東部が調査区域外となり、全体を調査することができなかった。床面の一部に硬化面が確認されたが、柱穴等は確認できなかった。プランは1辺約4.4m、深さ約20cmを測る。覆土は暗褐色系の土が中心である。

この住居址からは土師器坏及び灰軸陶器の小片が出土したのみであった。



第128図 第58号住居址遺構平面図

第59号住居址 (第129図、第130図、第135図)

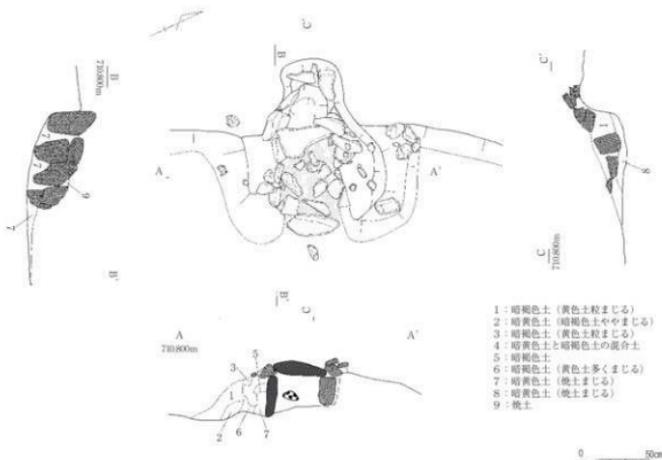
この住居址はAF-47より検出されている。1辺が約3.4mの平面方形プランで、深さ約40cmを測る。

カマドは北西部壁の中央部から出土している。この住居址のカマドは遺存状況がよく、軸は石を使用して組み、天井部に平石を乗せて火口を作っている。軸石の外面には暗褐色土や暗黄色褐色土を使用して石を固定している。内部には焼土が確認されており、焚口の手前には、炭・灰等が住居址床面に散乱しないようにするため、細長い石を設置している。また、壁の外側にまで掘り込みがおよんでおり、煙道と考えられる。

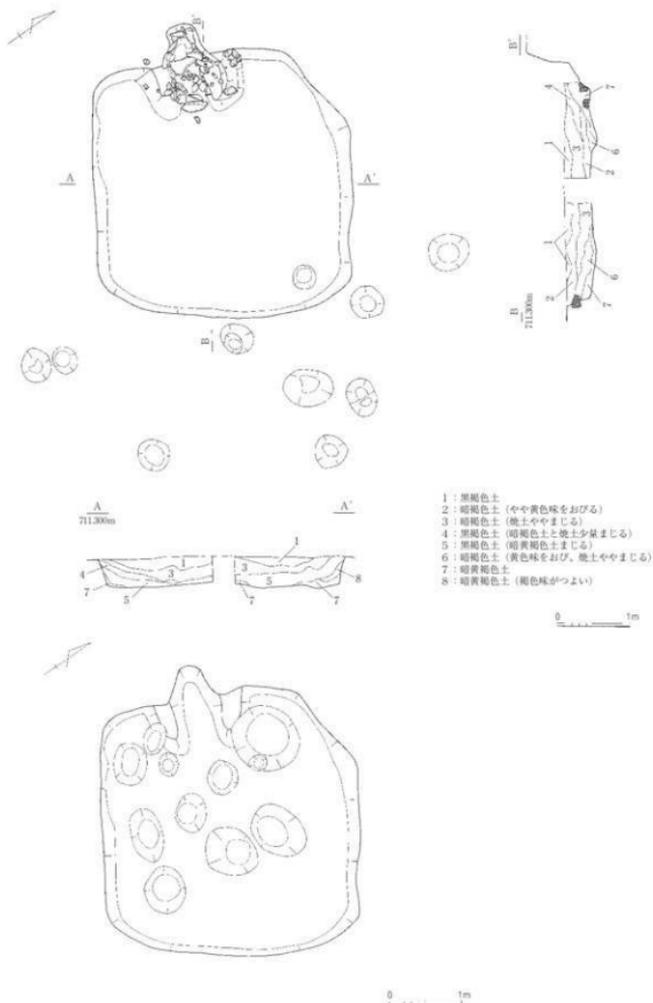
なお、床面から柱穴は検出されなかったが、床面の下層からは多数の土坑が検出されている。これらの土坑は、深さが7~21cmと浅く、平面楕円形のプランが多かった。住居址床面の直下からの検出であるが、いつの時点で掘られたものかは明確にできなかった。

遺物 (第131図、第132図)

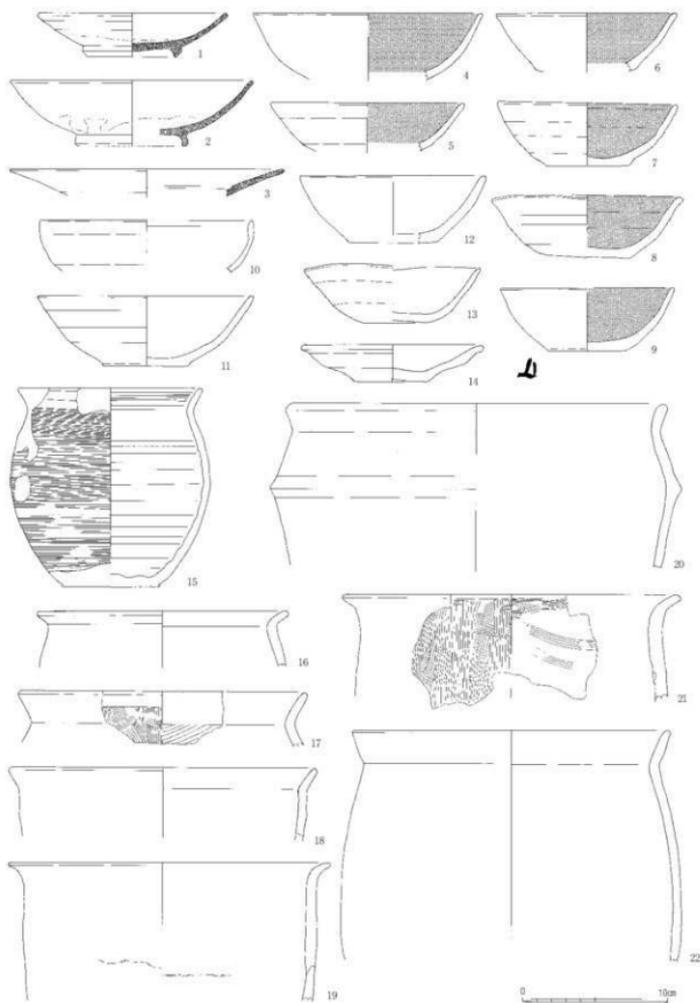
第131図1~3は灰釉陶器である。1は皿の破片で、底部は1/5個体程度の残存である。ハケ塗り施釉と考えられ、見込部には重ね焼の痕跡を明確にとどめている。2は碗である。釉薬の溶融が足りなかったのか、光沢がなく、外面では割離も見られる。施釉方法はハケ塗りである。また、見込部には重ね焼きの痕跡を残している。3は段皿の小片である。口縁部は若干外反気味で、釉薬は内外面共に厚く掛けられている。4~9は内黒土器である。このうち4~6は小片からの復原である。いずれの個体も内面のミガキ調整は粗く、5ではほとんど確認できない。7は口縁部を一部欠損している。内面のミガキ調整は比較的密であるが、黒色処理が抜け落ちている。また、欠損した口縁部付近を中心に、スガが内外面に付着している。なお、外面体部には墨書の痕跡が確認できる。8は体部を中心に1/3個体程度欠損している破片からの復原である。内面のミガキ調整は比較的密で、外面体部の一部にスガが付着している。9は体部が1/3程度欠損しているが、口縁部が残存して



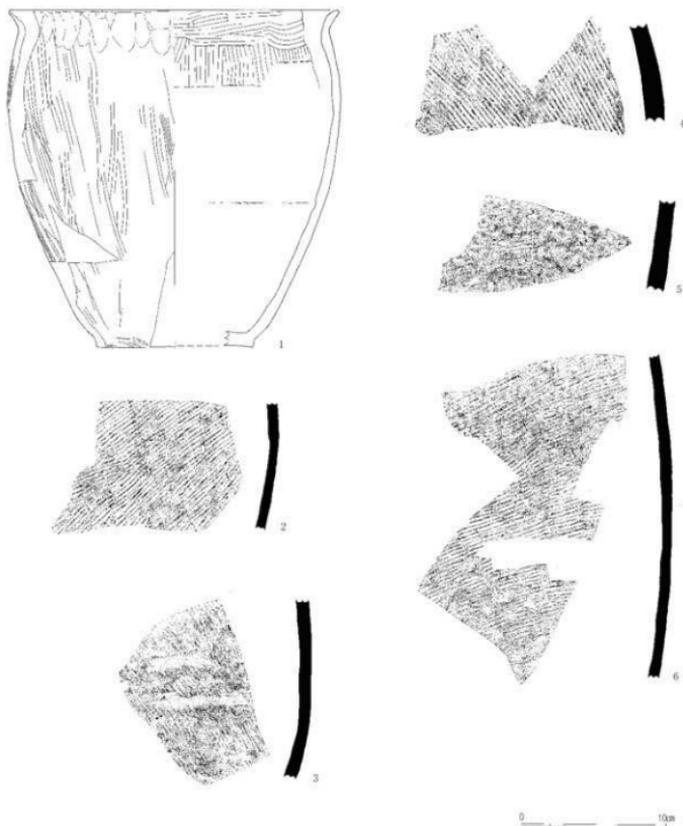
第129図 第59号住居址遺構平面図 (1)



第130図 第59号住居址遺構平面図(2)



第131图 第59号住居址出土遗物(1)



第132図 第59号住居址出土遺物(2)

いたため実測することができた。内面のミガキはやや粗く、外面に墨書の痕跡をとどめている。

10～14は土師器である。10～13は坏である。10は強く内湾しており、口唇部付近が肥厚している。小片からの復原であり、底部も失われているため正確な器形は復原できていない。11は1/4個体の破片である。12は1/5個体からの破片で、焼成があまり。13はゆがみの激しい個体である。内面上端部にススが付着しており、灯明具として使用していた可能性もある。14は皿で、ほぼ完形である。

第131図15～22、第132図1は土師器の甕である。第131図15は小型甕である。約1/2個体の残存で、淡褐色の

1. 住居址

色調を呈し、外面にはカキ目が施されている。16～19、21・22は長胴甕である。いずれも小片からの復原である。16は頸部から口縁部にかけてヨコナデ調整され、体部は縦位のハケ目調整痕が残されている。17は内外面共にハケ目調整が施されている。18は口縁部に整形時の指頭圧痕が残されている。19は内面にヘラ状工具による縦位の整形痕をとどめ、口縁部の内外面にはススが附着している。21は、外面に単位の短いハケ目が施され、内面は斜位の整形痕を残しており、17と同じタイプと思われる。22は砂粒の混入の少ない胎土で、内外面共にヨコナデ調整痕をとどめている。20は高さの低い鐙状の張出を断面三角形に貼り付け、内傾する頸部から口縁部上部を外側に折り曲げる器形である。このような器形はあまり見られないことから搬入品の可能性がある。第132図1は1/3程度残存する小型甕である。外面には口縁部成形時の指頭圧痕が残り、体部は縦位のハケ目の痕跡が確認できる。内面の口縁部には不規則な横位のハケ目調整がみられ、体部上部の縦位のハケ目調整を切っている。それ以下の体部には明瞭な調整痕は確認できず、接合痕が残されている。

2～6は須恵器甕の破片である。すべての破片の外面に平行叩き目がみられる。

この住居址は9期頃の可能性がある。

第60号住居址（第133図、第135図）

Y O-41に検出されている。この住居址は第53号住居址と第61号住居址の壁を、それぞれの北部と西部を掘り込んで造っている。プランは1辺が約3.4mの平面方形で、深さは約50cmを測る。覆土は褐色系の土が中心であり、西壁付近では焼土も若干混入して検出された。

カマドを北壁に設けており、粘土カマドと考えられるが、明確にできない。西部の床面は一部盛り上がっており、それに接して土境が検出されたが、住居址に伴うものかが明確にできなかった。

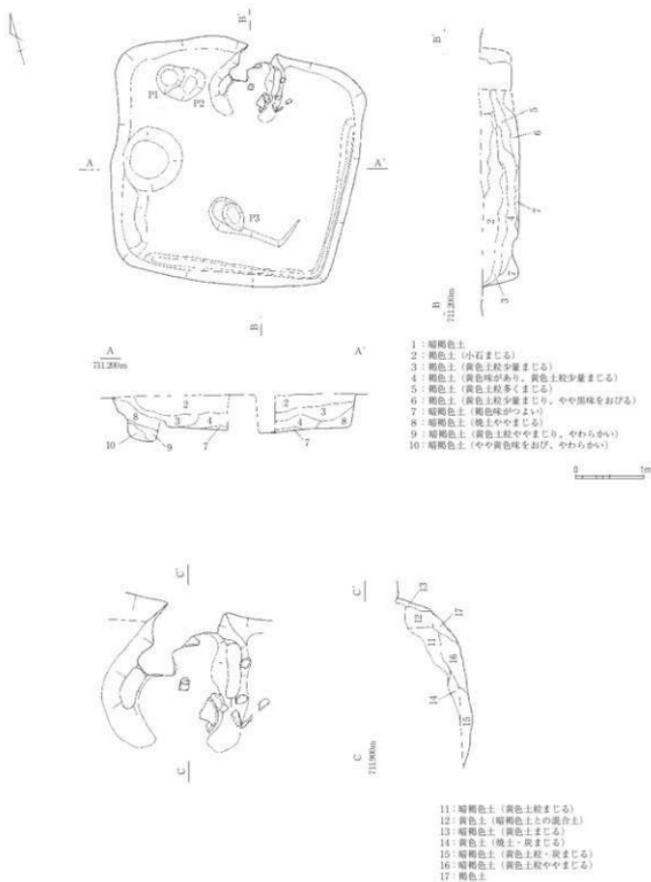
遺物（第134図）

1・2は灰軸陶器である。1の内面は破片全面、外面は上部に施軸されている。2は内外面共に全面施軸されているが、光沢はない。3・16は軟質須恵器である。3は底部の破片である。16は体部の破片で、1/5個体の残存で、土師器に近い焼成であったが、器形から須恵器と判断した。色調は黒色である。

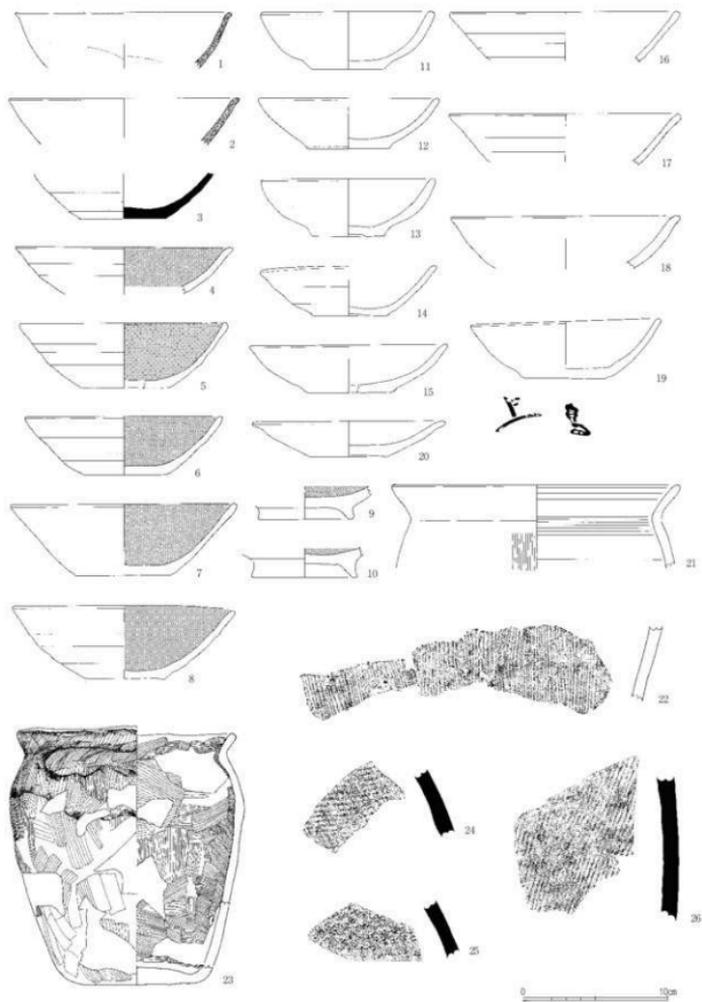
4～8・18は内黒土器である。4・5は小片からの復原である。4は内面のミガキが密である。5の底部はほぼ残存しているが、体部は小片である。口唇部は平坦に面取りされており、内面のミガキは行なっていない。6は1/3程度残存している。内面のミガキ調整は粗雑であり、体部にはタール上の炭化物が附着している。また外面の体部から底部にかけても、一部ススが附着している。7は底部と体部の一部が残存しているのみである。内面のミガキ調整は、ほとんど行なわれていない。8はほぼ完形である。内面のミガキ調整は粗く、黒色処理も抜け落ちている。また、外面体部及び内面の一部にはススの附着が見られる。18は体部の破片で、1/5個体ほどの残存である。内面のミガキ調整はほとんど見られず、黒色処理も抜けている。このため土師器の可能性もある。9・10は碗の底部である。いずれも体部を意図的に打ち欠いたかのように欠損している。

11～15、17は土師器である。このなかには体部の小片も含まれているが、口縁部の形態から環と判断した。11は1/6程度の残存からの復原である。内外面のみならず、断面にもススが附着している。12は体部を1/2程度欠損している。内外面の体部の一部にススの附着がみられる。13は体部が1/2ほどの残存個体からの復原である。この環も内外面の体部と見込部の一部にススが附着している。14は体部が1/3ほど欠損している。内面の体部の一部と、外面体部中部に、横長にススが附着している。15は底部の一部と、体部が1/4個体ほど残存している。外面体部の一部にススが附着している。19は体部が1/3個体ほど欠損している。外面に一部ススが附着し、墨書の痕跡をとどめている。20は器高の浅い土師器である。1/2個体からの復原である。

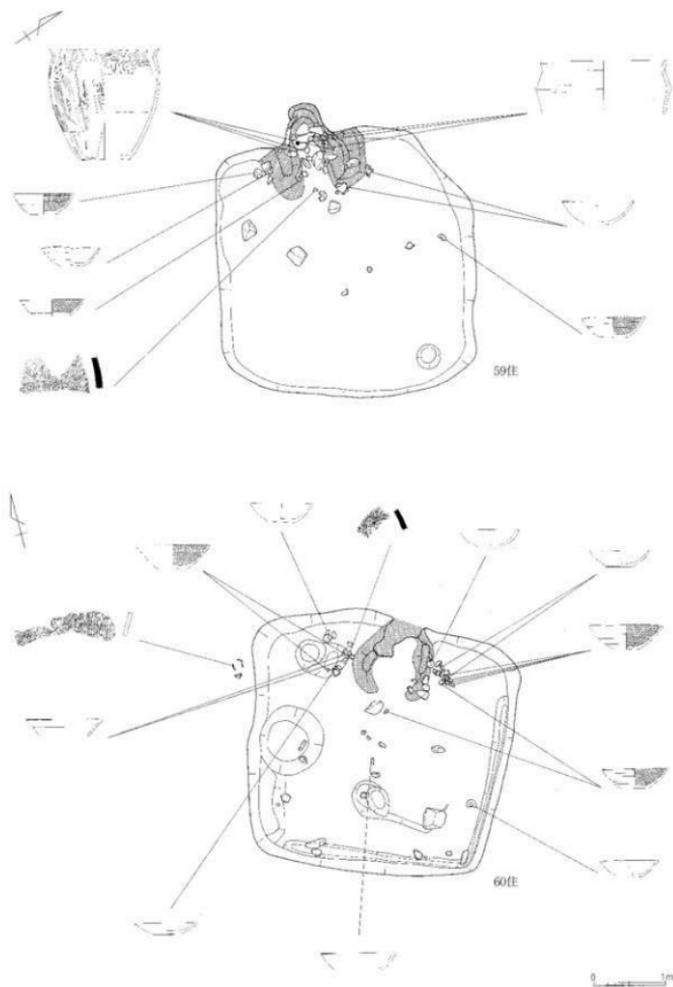
第五章 遺構と遺物



第133図 第60号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第134图 第60号住居址出土遗物



第135図 第59・60号住居址遺物出土状況図

21～23は土師器甕である。21の外面の一部に縦位の、内面には横位のハケ目がみられる。23は小型甕で、単位の短いハケ目調整が内外面にみられる。24～26は須恵器甕の破片である。

この住居址は9期頃と考えられるが、土師器内に混入品も見られ明確にできない。

第61号住居址 (第136図)

A0～39より出土している。この住居址は北部壁の一部を第60号住居址に切られ、中央部を第57号住居址によって破壊されている。プランは約4.6mの方形で、深さは約40cmを測る。

カマドは西部壁の中央部から出土し、青灰色粘土や黄色土を混入した暗褐色土を使用して袖部を築造している。袖の内面は被熱により赤化していた。

なお、床面からは柱穴等は検出されていない。

遺物 (第137図、第138図)

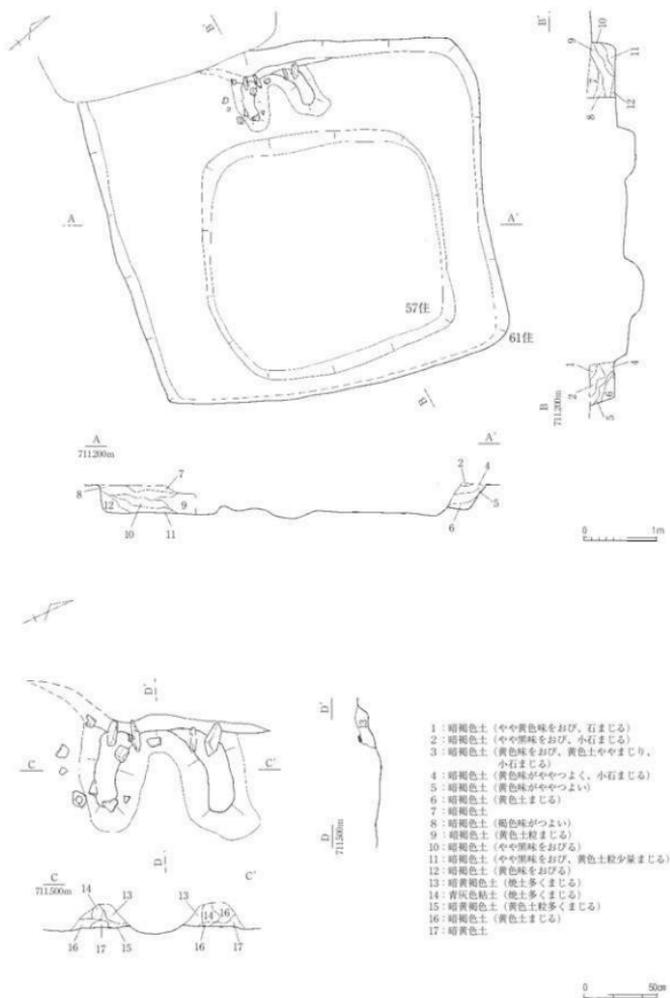
第137図1・2は灰釉陶器皿である。1は小片からの復原で、内外面共に施軸されているが、ガラス化しておらず、光沢がない。2は口縁部が一部欠損している。内面はハケ塗り施軸であり、厚く光沢がある。3～6は碗である。3は底部が欠損し、体部の1/3個体程度からの復原である。内外面の体部には光沢のある釉薬がハケ塗り施軸されている。なお、内面に重ね焼痕が確認できる。4は1/3個体程度の破片からの復原である。内外面ともに器面全面に施軸されているが、十分溶融しておらず、光沢がない。外面は、高台内部まで釉薬が掛けられている。また、見込部には重ね焼の痕跡を残している。5は口縁部のほとんどを欠損し、体部下半部と底部が1/2ほど残存した個体である。内面体部の一部には自然降灰かと思われるような釉薬が見られ、外面に施軸は見られなかった。6は小片からの復原である。焼成はあまく、釉薬も確認できない。

7は須恵器甕である。見込部に、一部磨かれたようになめらかな部分があることから、縦に転用されていた可能性がある。

8～24は内黒土器甕である。8～19は小片からの復原である。これらの破片内面のミガキ調整は、密に行なわれているもの(9・16・18・19)と、比較的密に行なわれているもの(8・10・11・13)、粗雑なもの(12・17)に分けられる。中でも12はほとんど行なわれておらず、一部黒色処理も抜けている。また、9・11・13の外面にはススの付着がみられる。なお、13は口縁部端部を外反するように整形しており、他の個体とは器形が異なっている。20・21は体部が1/4個体ほど欠損している。20は内面のミガキ調整は密に施され、黒色処理が抜け落ちている。21は見込部に粗雑なミガキ調整が行なわれているだけで、体部にミガキ調整はみられない。22～24は大型の甕である。22は底部と、体部が1/5ほど残存した個体からの復原である。23は体部の1/5程度の個体からの復原である。外面の一部にススの付着がある。24は体部が1/4程度欠損している。内面のミガキ調整はやや粗い。また、外面の一部にススの付着がみられる。なお、両者とも内面のミガキ調整は密である。24は皿である。1/2個体弱の残存率からの復原である。内面のミガキ調整は密に行なわれ、外面は底部までススが付着している。27は高台がないもの、皿と考えられる。内面のミガキ調整は密であるが、黒色処理が抜けている。なお、内面および破断面の一部にススが付着している。26は高台である。体部をすべて欠損しており、意図的に打ち欠いている可能性もある。なお、底部には墨書がみられる。28は内黒土器の耳皿である。内面と、外面の一部にミガキ調整が行なわれている。29は、内面のミガキ調整があまりみられないが、内黒土器の可能性が高い。なお、底部が8割程度と、口縁部が一部残存している。

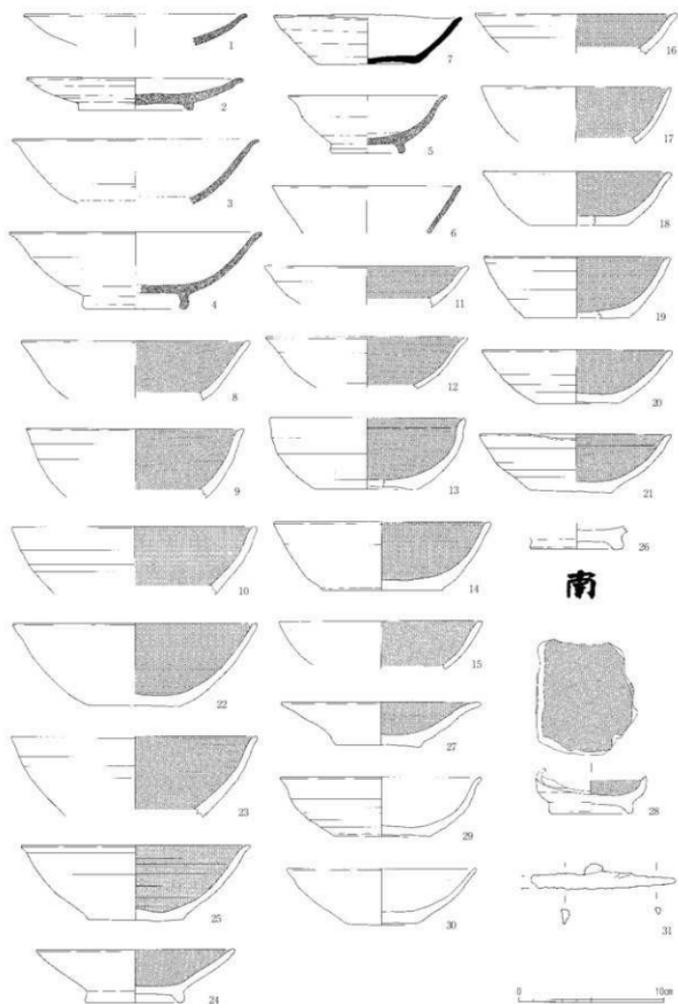
30は土師器甕である。口縁部の一部と、体部が1/3程度残存している。31は刀子で、切先部が欠損している。

第138図は土師器甕である。1、3～6は小片からの復原である。1は斜位の粗いハケ目調整がみられ、内

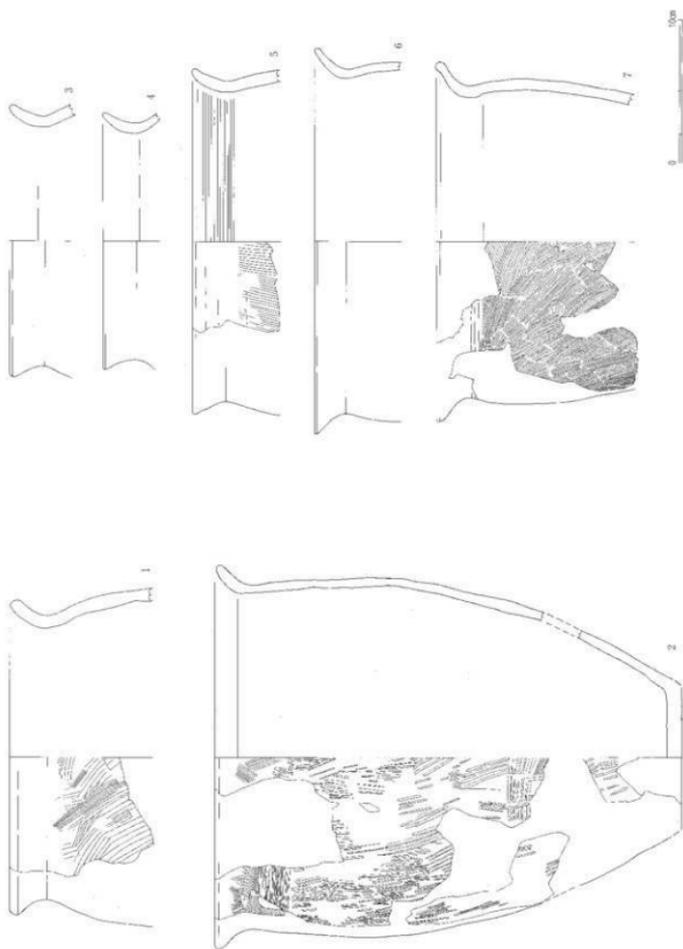


第136図 第61号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)

1. 住居址



第137图 第61号住居址出土遗物(1)



第138図 第61号住居址出土遺物(2)

1. 住居址

外面の一部と破断面にススが附着している。5の外面体部は縦位の、内面口縁部には横位のハケ目調整がみられる。6は口縁部の作りだしの際の指頭圧痕が残されている。2は1/3程度の残存率であるが、器形を復原することができた。体部に幅の広いハケ目調整を浅く行い、頸部から体部上部にかけて幅の細かい工具を使用したハケ目調整を行なっている。なお、口縁部の内面にはススが確認できる。7は上部の1/3程度が残存しており、幅の細かい工具によって斜位に調整を行なっている。なお、口縁部端部は若干受け口状に内湾している。

この住居址は、8期頃と考えられる。

第62号住居址（第140図、第145図）

YV-4から出土している。1辺約4.5mの方形プランを有し、深さは約20cmを測る。覆土は暗褐色系の土で占められる。カマドは北東壁の中央やや東寄りに検出されたが、左の輪部は破壊されて、燃焼部内にも積み上げられた様な状況で曜が出土した。断面観察によると石組み粘土カマドの可能性が高く、カマド周囲に散乱するように検出された曜は、カマドの構成材と考えることができる。ピットは5ヶ所から検出され、このうちP1～P4が柱穴と考えられる。

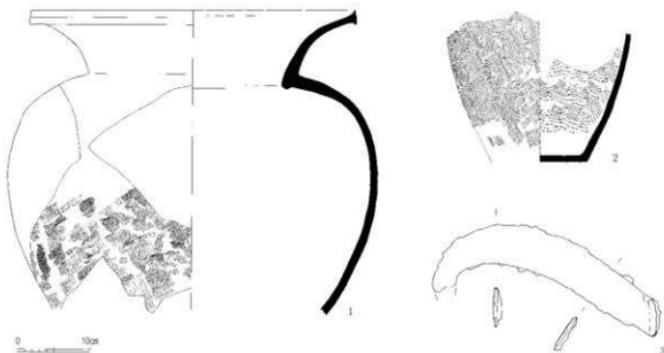
また、カマド右脇の床からは、須恵器広口甕が上半部を失った状態で出土したのを始め、須恵器の大甕の上半部が破片となって散乱した状態で見つかっている。

遺物（第139図、第141図）

第139図1は須恵器甕である。小片からの復原であるが、均整のとれた器形で、上部には自然釉が附着し、下部には格子目叩き目が残されている。2は広口甕の体部である。外面には平行叩き目が残され、内面には青海波文がみられる。

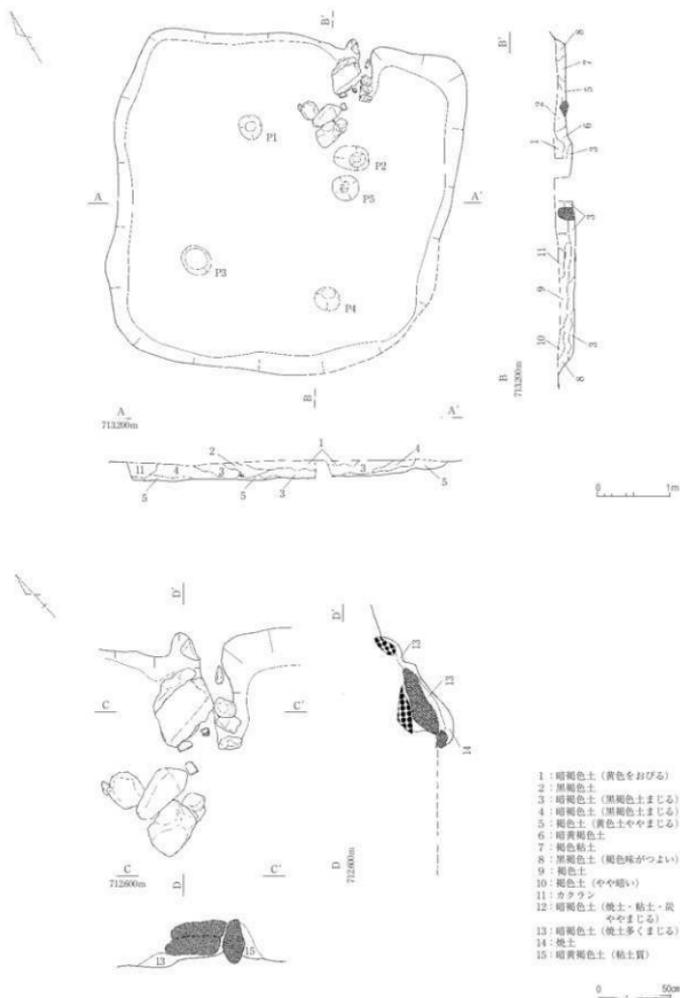
3は鎌である。刃部が大きく屈曲しており、切先部が欠損している。

第141図1～4は内黒土器環である。1・3は小片からの復原であり、4は1/5個体程度の破片からの復原である。1は内面のミガキ調整が比較密であるが、3・4はほとんどみられず、黒色処理も抜けている。また、4の内面は剥離がめだち、内外面の同じ部分にススが附着している。2は完形の土器である。焼成がややあま

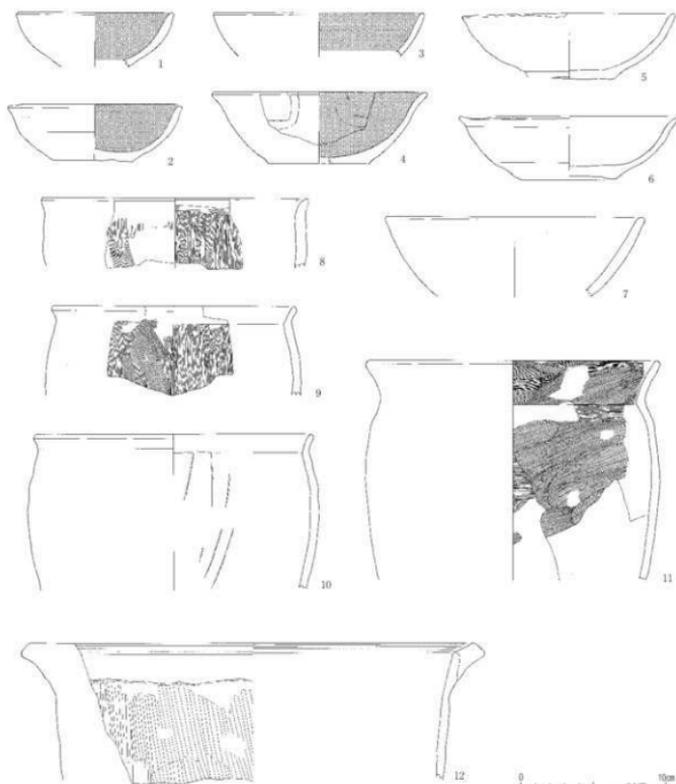


第139図 第62号住居址出土遺物 (1・2・3=1/6)

第五章 遺構と遺物



第140図 第62号住居址遺構平面図 (カマフ: S=1/30)



第141図 第62号住居址出土遺物

く、内面のミガキ調整は粗く、剥離がめだつ。

5～7は土師器環である。7は小片からの復原である。5・6はゆがみのある個体で、体部が一部欠損している。どちらも焼成はあまい。

8～12は長胴甕である。いずれも小片からの復原である。8・9は内外面に目が細かく、単位の短いハケ目調整が行なわれている。10の外面には縦位のユビによるナデ調整が行なわれ、内面には板状の工具を使用した縦位のナデ調整痕が確認できる。11の外面は縦位のユビによるナデ調整、内面は目の細かい斜位のハケ目調整が見られる。12は赤褐色の色調で、口縁部は厚く作られ、外面は屈曲部から下部に縦位のハケ目調整が行なわれており、口唇部にハケ目調整を行なっている。内面はナデ調整が行なわれている。なお、内面の口縁部には

第V章 遺構と遺物

ハケ目調整が行なわれている。

この住居址は8期頃の可能性がある。

第63号住居址（第143図、第145図）

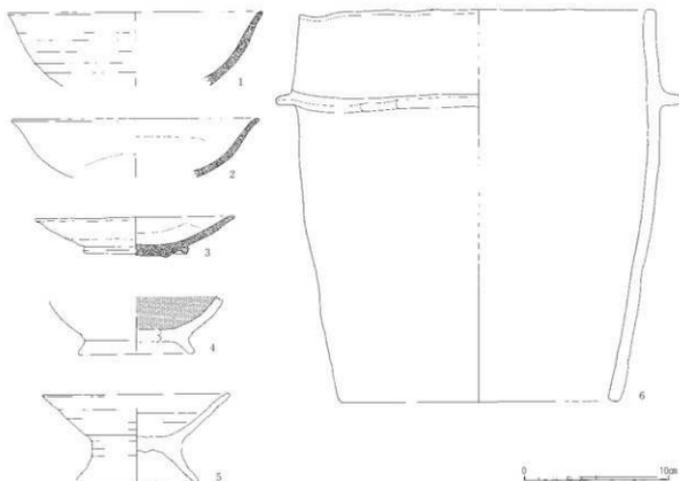
Y P-9から出土している。1辺約3.8mの方形プランで、深さは約40cmを測る。覆土は黄色土の混入した暗褐色系の土で占められている。カマドは北東隅に検出され、住居址壁より外にまで掘り込まれ、煙道が造られていた。袖部には石が組まれ、外側に暗褐色系の粘土が貼られていた。また、床面とカマドを仕切る様に石が置かれ、灰や炭等の散乱を防ごうとする意図がうかがえる。床面には土坑が3ヶ所検出された。このうち第1号土坑に関しては壁面を掘り込んでおり、この住居址に伴うのか疑問が残る。また、壁や内側寄りに周溝状の溝と、中央付近に土坑が検出されているが、この部分に貼床が確認されていることを考えると、住居址を埋立てている可能性があり、調査段階で把握できなかったものの、住居址が拡張されたことが推察される。

遺物（第142図）

第142図1～3は灰釉陶器である。3は皿で、完形である。漬け掛け施軸で、光沢のある厚い釉薬である。見込部には重ね焼きの痕跡を残している。なお、高台は底部より高い位置に付けられ、その機能を十分果たしておらず、全体的には粗雑な整形である。1・2は碗である。2は体部の1/2個体程度から復原した深碗である。釉薬は確認できない。2は小片からの復原で、光沢のない釉薬である。

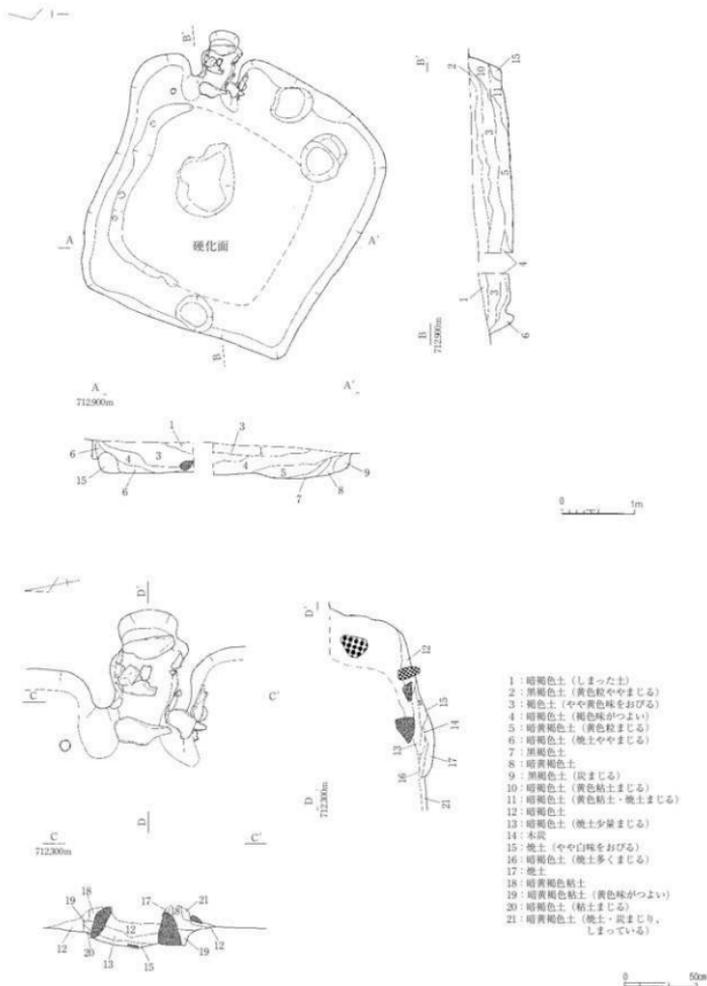
5は高台がよく発達している盤で、1/2個体程度からの復原である。

4は内黒土器の小片である。内面に明瞭なミガキ調整は確認できず、見込部は剥離している。また黒色処理

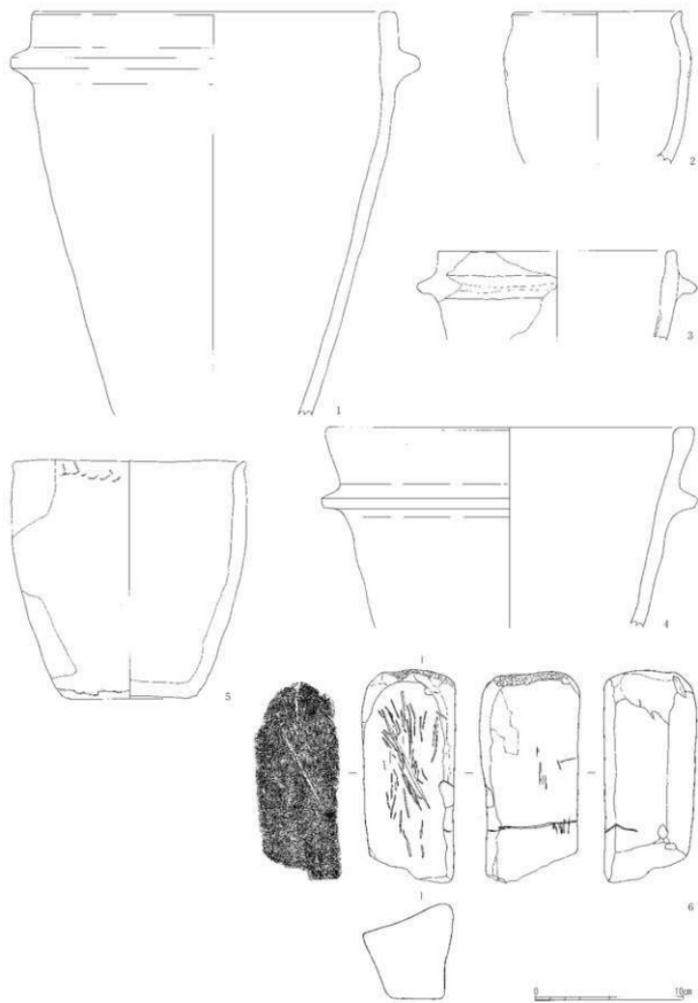


第142図 第63号住居址出土遺物

1. 住居址

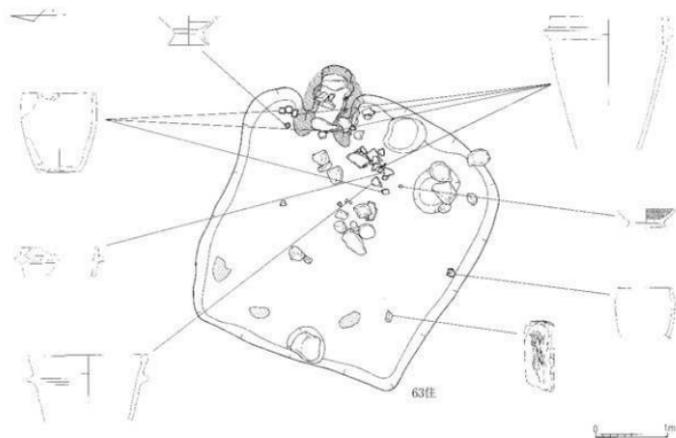
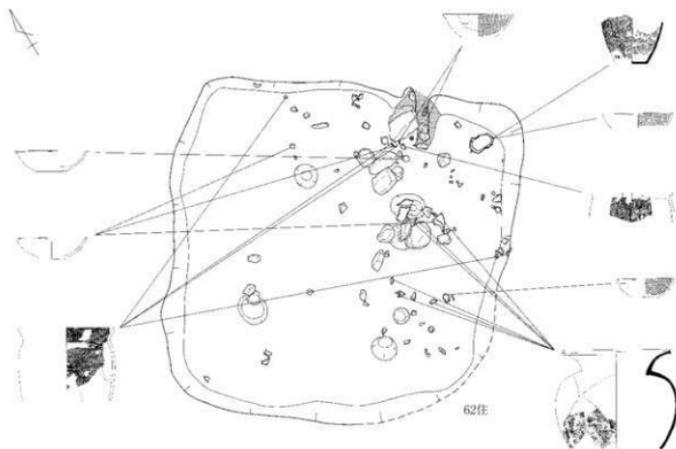


第143図 第63号住居址遺構平面図 (カマド: S=1/30)



第144図 第63号住居址出土遺物

1. 住居址



第145图 第62·63号住居址遺物出土狀況图

第V章 遺構と遺物

は抜けている。

第144図1～5は甕で、2・5は小型甕である。5の口縁部には整形時についたと思われる爪跡が残されている。2も5と同様の器形であり、小片からの復原である。口縁部が短く折り曲げられる器形で、体部外面には棒状工具による履位のナデ整形痕がみられ、ススの付着も確認できる。1・3・4は羽釜である。3は小片からの復原である。

6は砥石である。

第64号住居址（第146図、第147図、第150図）

YN-13より検出されている。住居址の規模は、一辺約5mの方形プランで、深さは約35cmであった。覆土は暗褐色系の土が中心であり、上層で若干焼土と炭が混入し始め、中層で黄色粘土状の土が混入し、下層では多量の焼土と、炭化物が混入していた。このため、慎重に検出作業を行った結果、床面からやや浮いた位置で、礫を伴って焼土が検出された。焼土は住居址の中央部では検出されず、その周辺から出土し、カマド周辺から最も広範囲に検出された。焼土を取り除くと、床面から炭化材が出土した。この炭化材は直径約10cm、長さは最長で約25mを測り、住居址中心部から放射状に広がっていることから垂木材の可能性が高い。炭化材は、上面の焼土の検出されなかった地点で多く出土する傾向があった。なお、今回の調査ではこのような棒状の炭化材が出土しているだけで、他の構造材は出土しなかった。

また、これらの炭化材を除去したところ、浅い土坑が検出され、中から碗皿類が多数出土した。これらの遺物は、カマド付近に灰釉陶器の碗や皿が多く、カマドの反対側の壁付近の土坑からは、土師器の壺が出土している傾向がうかがえた。さらに、陶器類は床面から出土し、土師器は土坑内から出土する傾向がみられた。

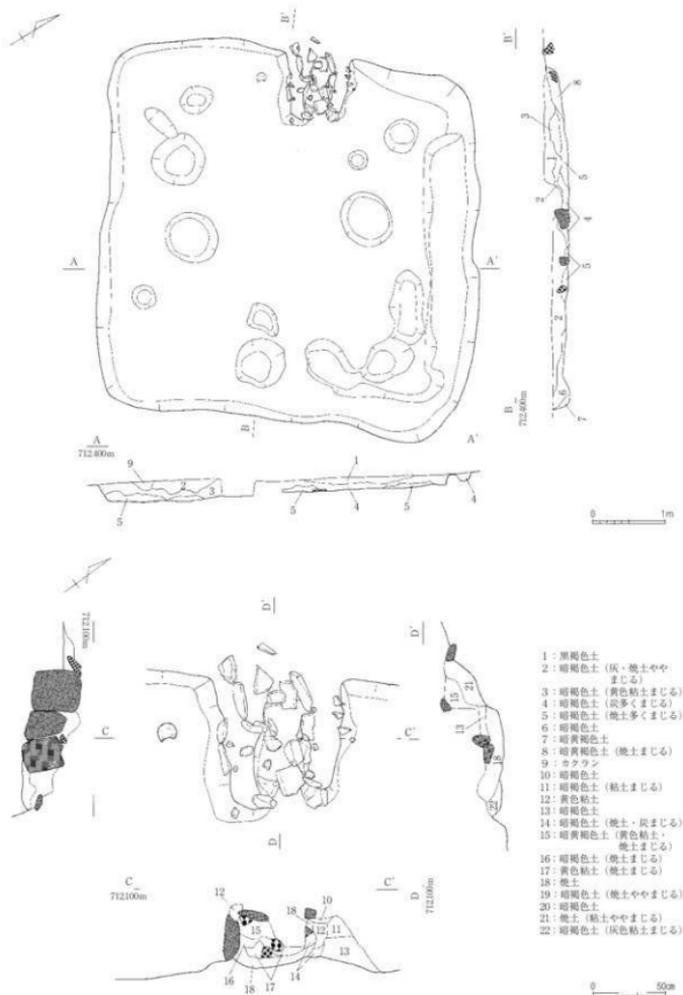
また、カマドからは固化のできる遺物の出土はなかった。

遺物（第148図、第149図）

第148図1～30は灰釉陶器である。1～10は皿である。いずれも釉薬は薄く、ほとんど掛けられていない個体もある。1は口縁部が1/2個体残存するのみの小片で、外面にはごく薄い釉薬が掛けられ、内面もやはり薄い釉薬ではあるが、やや光沢がある。2・6・7・10は1/2個体程度の残存率である。2の外面下部にはススの付着がみられる。釉薬は外面の上半部では光沢がある。また、見込部には重ね焼の痕跡が薄く残されている。なお、高台が低く作り付けられている。6は内外面ともに薄い痕跡程度の釉薬が掛けられている。また、見込部には重ね焼の痕跡が一部に残されているほか、焼成後の磨滅により、若干なめらかになっている。7は1/2より残存率は若干低く、釉薬は内外面共に痕跡程度掛けられている。10は高台が低く、底部中心部が高台と同じ高さとなっている。釉薬は外面には見られず、内面はムラがあるが、全体的には薄く痕跡程度に掛けられている。3は唯一ほぼ完形の皿である。断面丸みを帯びた、低い高台を持ち、外面の釉薬は口縁部上部に薄く施釉され、内面は全面に掛けられている。また見込部にトチンの痕跡が残されている。4は口縁部が1/5程度残存しているのみである。外面には薄くススが付着し、内面にもススの付着がある。釉薬は、内外面共に光沢がなく、十分溶融していない。5は1/4個体の残存率であり、内面の一部にススの付着が見られる。8・9は小片からの復原である。8は、外面に施釉がほとんどみられず、内面には薄く施されていた。9は見込部分をすべて欠損している小片である。内外面の釉薬は薄く、光沢もなかった。

11～15は段皿である。11・12は体部が一部残存するのみの小片である。釉薬は、11の外面には確認されず、内面では薄く痕跡程度に施釉されている。12は光沢のある釉薬である。なお、11の段部は、1段ではなく、二段であり、粗雑な印象である。13は1/2個体弱の残存率である。焼成がうまく、粘土が淡褐色を呈している。

1. 住居址



第146図 第64号住居址遺構平面図(1) (カマフ: S=1/30)



第147図 第64号住居址遺構平面図(2)

釉葉は、外面は光沢がないものの、内面は光沢がみられる程度に溶融していた。15は3/4ほどの残存率であった。釉葉は薄いものの、光沢がみられた。

16～30は灰陶器碗である。これらのうち、19・23がほぼ完形での出土であった。19は内外面に釉葉が薄く施されており、一部に光沢があるのみである。また、内面の一部と、外面の中央部に1筋、線状にススの付着がみられる。23は高台を一部欠損している。釉葉は薄く、光沢がない。また、破片となって散乱した後に、焼熱によるものか、表面がはじけて割れたような剥離が多く見られた。20・21は1/4個体程度の残存である。20は焼成があまく、胎土は淡褐色を呈している。釉葉も溶融が十分でないためか、光沢がない。21は、体部から高台までの一部を欠損しており、釉葉の光沢もない。16～18、22、24～28は小片からの復原である。いずれの破片も釉葉は薄く、光沢のないものがほとんどであった。中でも、17と18の外面についてはほとんど釉施されていなかった。また、22の内外面、27の内面にススの付着がみられた。30も破片資料である。推定される口径から、深碗の可能性が高い。また、26も口径が大きくなる可能性があり、深碗かもしれない。

31は長頸壺と考えられる。小片のため断定できない部分もあるが、灰陶器の可能性が高い。

32・33は須臾器である。32は杯の底部である。体部を打ち欠いたかのように、きれいに欠損している。33は壺の破片である。外面に格子目タタキがみられる。

第149図は土師器である。1～7は口径10cm前後で、器高さ3cmほどの杯である。これらのうち、2・5・6はほぼ完形である。2の内面にススが付着し、5は口縁部が一部欠損し、若干色調が明る。6は外面の一部と内面の体部下部に、環状にススが付着している。3・7は3/4個体程度の残存で、3は底部がゆがんでいるほか、体部内面上部から外面にかけてススの付着がみられる。7は内面の見込部を中心に薄くススが付着しており、剥離もみられる。なお、外面下部は、板状工具を使用しての成形をおこなったのか、鋭い段差を伴って厚みが変化している。

1・4は小片からの復原である。両者ともに内面にはススが付着している。また、4は外面にもススが付着し、内面の見込部には一部剥離も見られた。

12は口径11cm、器高さ4cm程度の杯である。若干器高が高く、小片でもあったことから、混入の可能性もある。

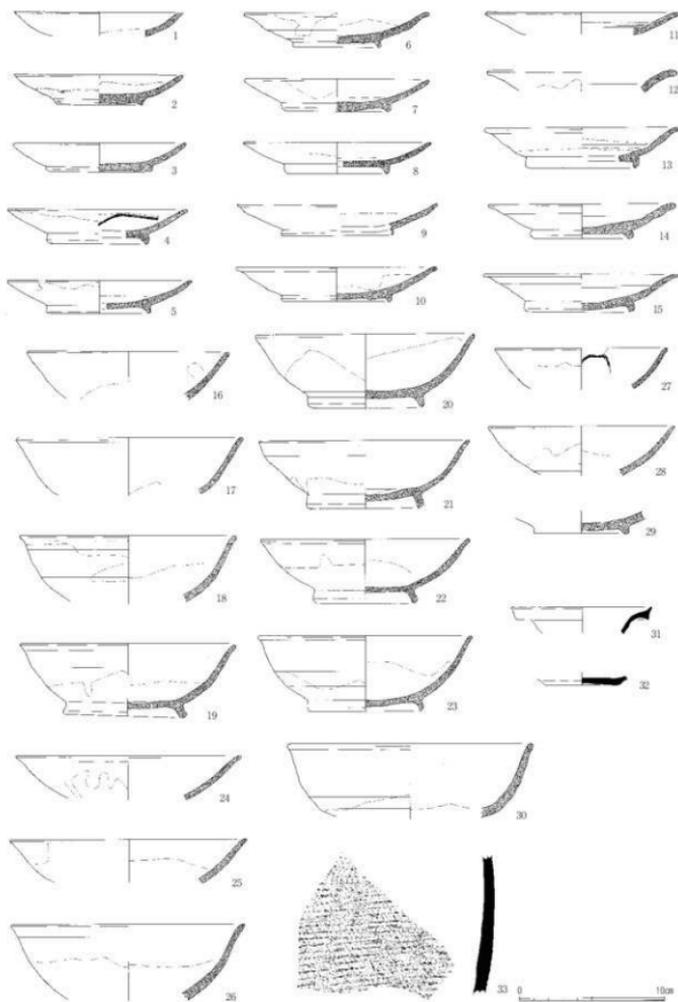
8～11は、口径12cm、器高4cm程度の杯である。このうち、9は完形、10・11はほぼ完形の土器である。10は内面に「×」状の沈線が焼成前に引かれている。また、見込部付近にススが薄く付着している。11の見込部は若干なめらかで、ごく薄くススが付着している。

13～16は、口径15cm、器高5cm前後の杯である。これらのうち、16のみが、ほぼ完形であった。13は体部上部から、口縁部にかけて一部欠損している。なお、外面には薄くススが付着している。14は口縁部から体部にかけて約1/4程度欠損している。内面に剥離がみられる。15は、口縁部から底部まで残存した小片である。内外面にごく薄いススが付着し、同時に剥離もみられる。16は外面のほぼ全面と、内面の見込部付近を中心にごく薄いススが付着している。なお、内面の見込部には、ヘラ状工具による沈線が、焼成前に1本引かれていた。12、17～19は、8～16までのようなヨコナデ調整をとどめず、口縁部が内湾する器形である。12は口縁部が一部残存した、底部付近をほぼ完全に残す個体である。見込部に剥離がみられる。17・19は小片からの復原である。17は内面にごく薄くススの付着がみられ、19は内外面に剥離があり、ススの付着もみられる。18の口縁部は一部を残して欠損している。なお、見込部は一部剥離している。

20・21は内黒土器である。20は内面の口縁部上端部のみを黒色部をとどめている。内面全体には粗雑ではあるが、ミガキ調整が行なわれている。21は小片であり、内面の黒色処理は抜け落ちている。

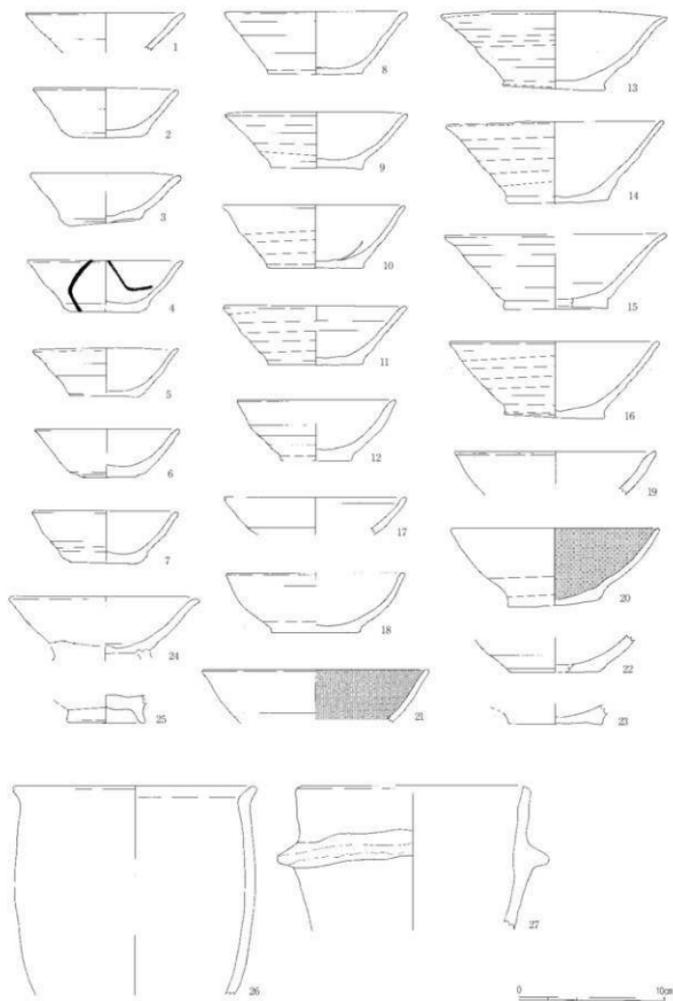
22・23は杯の底部である。共に1/4個体程度の破片である。22は内面の黒色処理が若干抜け落ちているもの

第五章 遺構と遺物

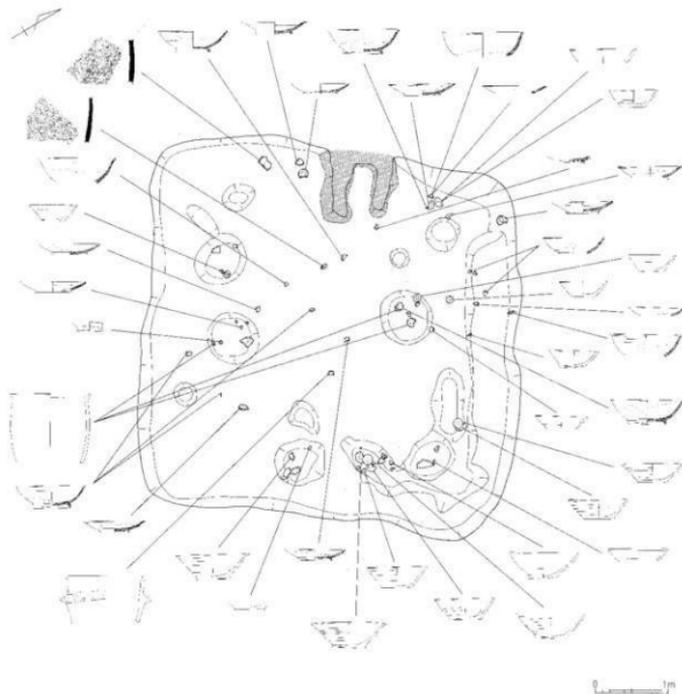


第148図 第64号住居址出土遺物(1)

1. 住居址



第149图 第64号住居址出土遗物(2)



第150図 第64号住居址遺物出土状況図

の、ミガキ調整が確認できることから、内黒土器の破片と考えられる。23は土器の破片であり、内外面に剥離が見られる。

24・25は土器器輪である。24は高台が1/2ほど剥離したため、残存部を打ち欠いて使用していたと考えられる。口縁部を一部欠損しているが、ほとんど残存している。全体に焼成が悪く、内面の剥離が著しい。

26は小型甕である。小片からの復原である。外面の体部は縦位のナデ調整痕が確認でき、上半部にはススが付着している。

27は羽釜である。小片からの復原である。内面には薄くススの付着がみられる。

この住居址は12期頃と考えられる。

第65号住居址 (第151図、第156図)

YU-33から出土した。4.3m×4.8mの平面方形のプランで、深さは約50cmであった。この住居址からはカマドが出土せず、被熱地点も検出できなかった。覆土は上層に黒褐色土が堆積し、下層には暗褐色系の土が堆積していた。床面からはピットが7ヶ所検出されたが、支柱穴を明確にすることはできなかった。また、北側壁にはテラス状の1段高い平坦部が検出されている。

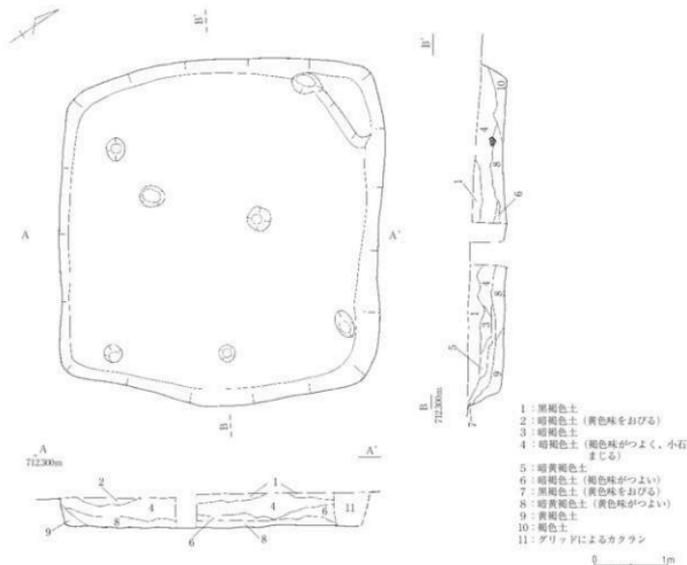
遺物 (第152図)

1は須恵器の坏蓋である。小片であるが、内面に墨とも考えられる黒色部があることから、転用祝の可能性もある。

2は灰釉陶器皿である。小片からの復元である。

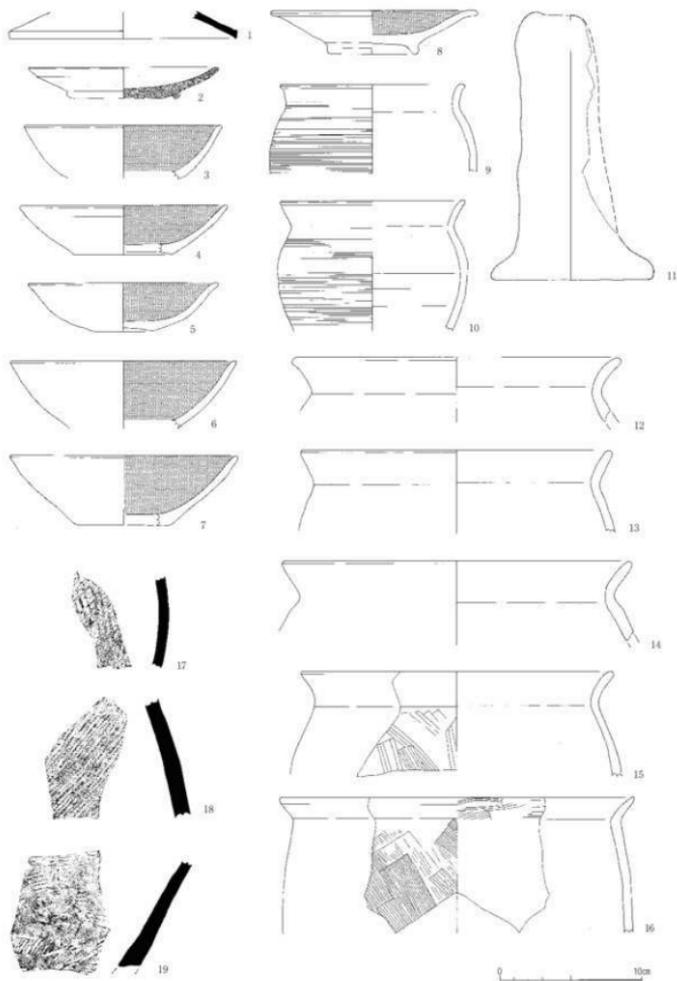
3～8は内黒土器である。5が1/2個体強残存している以外はすべて小片からの復元である。3は内面のミガキ調整は丁寧であるが、黒色処理が抜け落ちている。4は内面のミガキ調整は密であるが、外面に小さな剥離が多数見られる。5は内面のミガキ調整がやや粗い。6・7はなめらかな胎土である。ともに内面のミガキ調整は丁寧である。8は皿である。口縁部が外反する器形であり、内面のミガキ調整は比較的密であるが、黒色処理は抜けている。

9・10は小型甕で、いずれも小片で出土した。両者とも体部のカキ目が薄く、一部消失している。口唇部は玉縁状に整形されており、近似した個体であるが、口縁部の傾きが若干異なるため、別個体とした。また、9



第151図 第65号住居址遺構平面図

第五章 遺構と遺物



第152図 第65号住居址出土遺物

の外面体部には、ややスの付着が見られる。

11は床面に散乱して出土した。カマド内部の支柱として使用されていた土製品と推定される。

12～16は長胴甕である。いずれも小片からの復原である。12～14の外面は、ヨコナデ調整を行なっているのみである。15は体部の外面に浅い斜位のハケ目調整痕をとどめ、内面には板状工具による横位のナデ整形痕がみられる。16は、15より若干明瞭なハケ目調整痕が体部の外面に残され、口縁部の内面に横位のハケ目がみられる。

この住居址は、出土遺物から7期頃と考えられる。

第66・67号住居址 (第153図、第154図、第156図)

YR-36から検出された。断面観察によると、第67号住居址が、第66号住居址を掘り込んで造られている。

第66号住居址の規模は、一辺4.2mの方形プランで、深さは約50cmを測る。覆土は上層に黒褐色系の土が堆積し、下層には褐色系の土が堆積していた。なお、覆土中から床にかけて、カマド付近から住居址中央部を中心に礫が散乱していた。

カマドは東壁の中央部付近に築かれていた。偏平な石を立てて粘土まじりの暗褐色土で固定し、その上部に石を載せていた。柱穴は検出することができなかった。

第67号住居址は3m×3.5mの平面方形と推定される。第67号住居址は、カマドは西壁に築かれていた。カマドは偏平な石を芯に使って周囲を暗褐色系の土で築き、支柱石は土器を被せて設置していた。また、住居址の床には焼土が検出され、ピットも1ヶ所出土した。

なお、いずれの住居址も、カマド付近を中心に遺物が出土していた。

遺物 (第155図)

第155図16～19が第66号住居址から出土した。16・17は須恵器坏である。16は1/4個体の残存で、焼成があまりない。17は完形で、内外面の口縁部の一部にタール状のススが付着しており、灯明具として使用されていた可能性がある。

18・19は内黒土器である。どちらも完形であり、内面のミガキ調整は密である。また18の底部には墨書も見られるが、内容は不明である。19はゆがみの大きい土器である。また、外面底部にはヘラ削りも行われている。

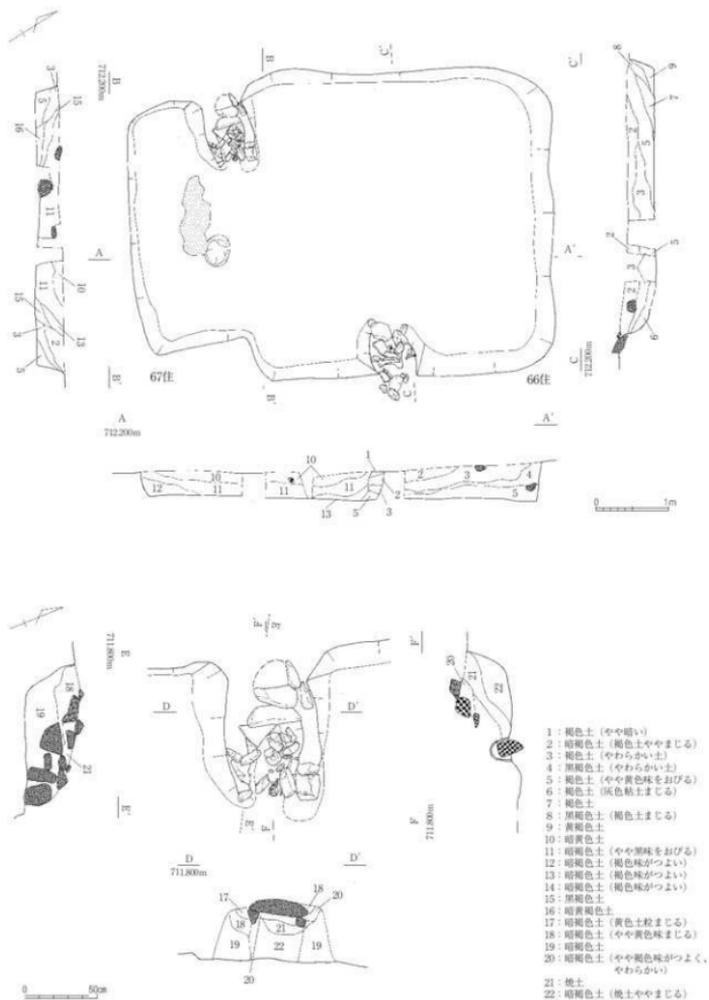
1～15、20は第67号住居址から出土した遺物である。1・2は須恵器である。1は軟質須恵器の坏の小片である。2は底部である。

3～5は灰軸陶器である。3・4は小片からの復原である。3の内面には全面に施軸がみられ、4は軸葉に光沢がない。5は口縁部がごく一部のみの残存であった。内面は全面に厚く施軸されており、外面は薄く施軸されている。

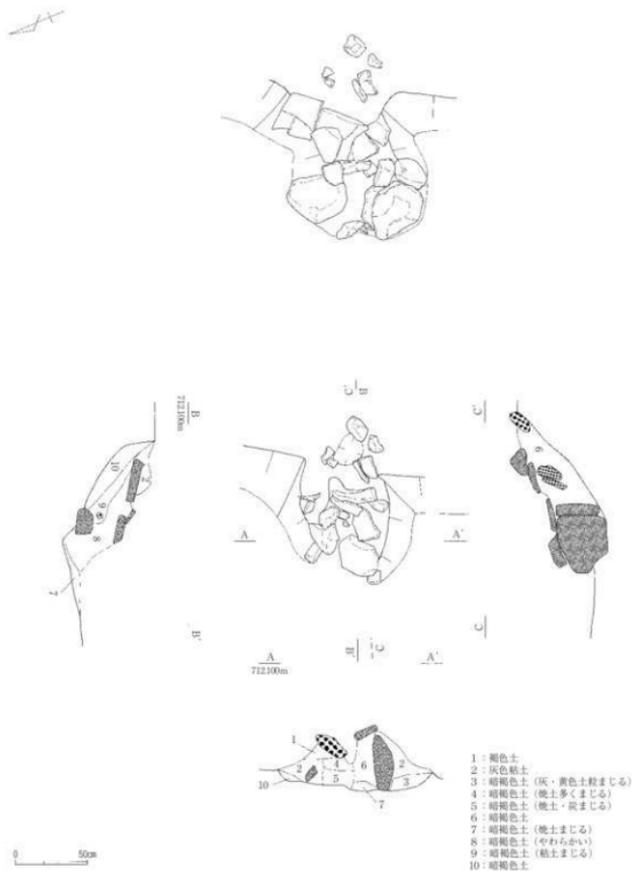
6～10は内黒土器である。11は完形であり、8は1/3個体残存している。6・7・9・10は小片からの復原である。6は内面のミガキ調整がやや粗く、黒色処理が抜けている。7は内面のミガキ調整が確認できず、黒色処理も抜けている。なお、内面にはタール状のススの付着がみられる。8の内面のミガキ調整は密である。9・10は内面のミガキ調整がやや粗く、10の黒色処理は抜け落ちている。

11・20はカマドの支柱として使用されていた土器である。11は内黒土器と考えられるが、被熱のため黒色処理は抜け落ち、剥離が激しく、見込部にミガキ調整の痕跡をとどめるのみである。20は甕の胴部である。内外面共にハケ目が残されている。

12～14は長胴甕である。いずれも破片からの復原である。12の外面の一部にススが付着している。13は外面



第153図 第66・67号住居址遺構平面図(1) (カマF: S=1/30)

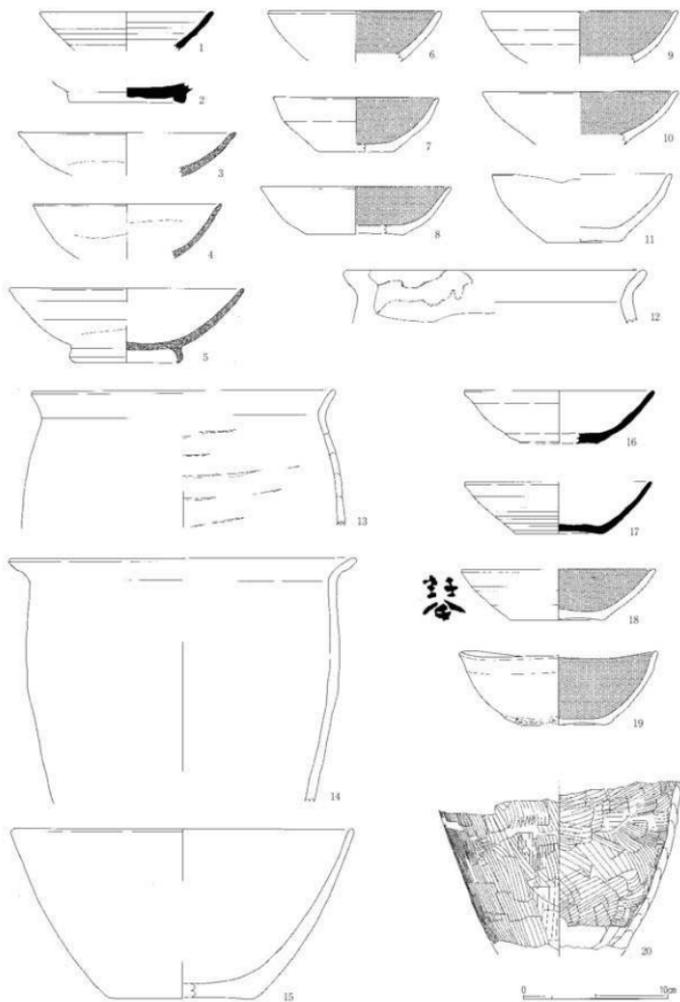


第154図 第66号住居址遺構平面図

体部の一部にススの付着がみられる。内面は整形が粗雑で、内面には接合痕が残されている。

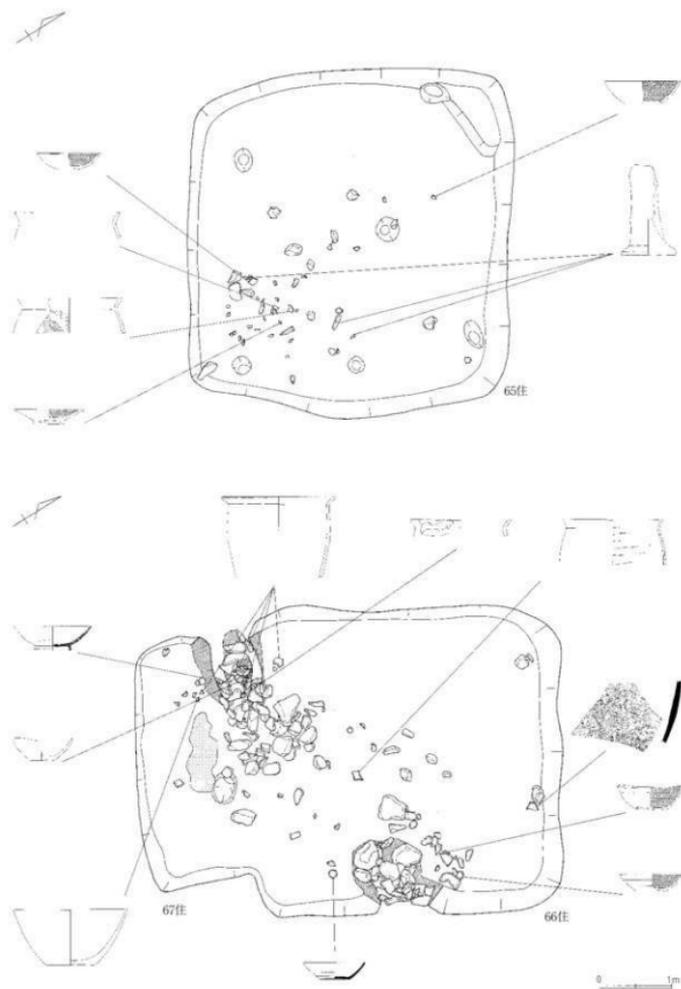
15は鉢の破片である。内面には丁寧なミガキ調整が行なわれている。

第66号住居址は8期、第67号住居址は6期頃と考えられそうである。



第155図 第66・67号住居址出土遺物 (1~15、20:66住、16~19:67住)

1. 住居址



第156图 第65·66·67号住居址遗物出土状况图

第68号住居址 (第159図)

YT-38から出土した。調査区の境界付近からの出土であったため、約1/2程度調査できたのみである。住居址の規模は1辺約3.7mの方形と考えられる。残存する壁高は約50cmであった。覆土は黒色系の土で覆われており、下層では焼土が混入していた。

なお、床面からは何も検出することができなかった。

遺物

第157図1～6がこの住居址から出土した。1は灰軸陶器碗の破片で、内外面に薄い光沢のある釉薬がかけられている。

2～4は内黒土器である。いずれも小片からの復元である。いずれの破片も内面のミガキ調整は粗雑な印象である。なお、3の内部には縦位にタール状のススが4ヶ所付着し、その周囲にも薄いススの付着が見られ、さらに外面の口縁部にもススの付着があることから、灯明具として使用されていたと推定される。4は内面の薄い剥離が目立つため、ミガキ調整は痕跡をとどめる程度であった。なお、黒色処理が一部抜け落ちていた。

5は刀子である。柄部に木質が残されている。

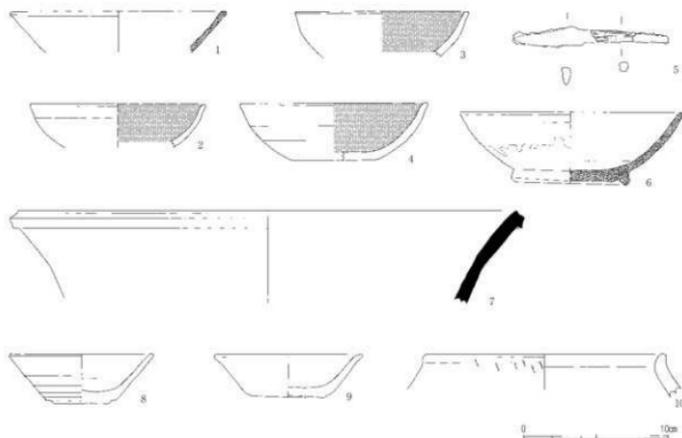
第69号住居址 (第158号図、第159図)

YX-13から出土した。調査区境界での出土のため、住居址すべての調査を行うことができなかった。

この住居址は火災住居と考えられ、床直上から礫とともに焼土が検出され、その下層には炭化材が出土した。

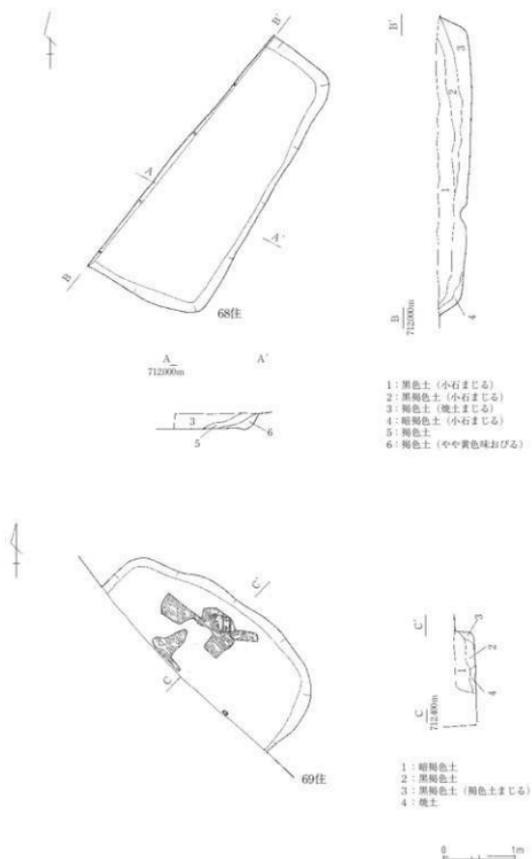
遺物 (第157図)

第157図6～9が出土した。6は灰軸陶器碗である。1/2強の残存率である。見込部がなめらかで、墨かと思われる薄い黒色部分があることから転用碗の可能性もある。また、外面にはススの付着がみられる。



第157図 第68・69・70号住居址出土遺物 (1～5: 68住、6: 69・70住、7～9: 69住、10: 70住)

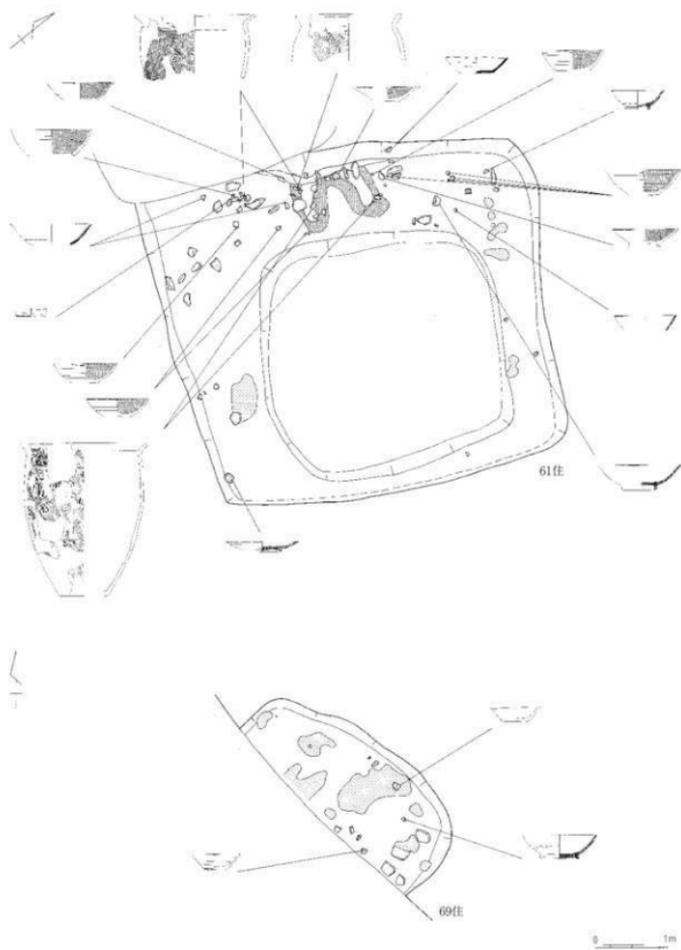
1. 住居址



第158図 第68・69号住居址遺構平面図

8・9は土師器坏である。8は、口縁部が3/4個体ほど欠損している。外面の口縁部にはススの付着がみられる。9はほぼ完形である。内面にススが付着し、外面には縦位に黒い筋状の部分がみられるが、墨書かススの付着かは不明である。なお、外面の口縁部付近を中心にやはりススの付着があり、打明具の可能性が高い。

7は須恵器甕の口縁部である。小片から復原している。外面の破片中部には、タタキを行った後にヨコナデ整形をした痕跡が残されている。



第159図 第61・09号住居址遺物出土状況図

2. 周溝墓

第1号周溝墓 (第161図)

C H-90から出土している。南西隅が調査区域外のため、一部未調査部分を残すこととなってしまった。この周溝墓の北側には第3号周溝墓が重複して出土している。十分な断面観察ができていないが、傾向として捉えたと、第3号周溝墓が第1号周溝墓を掘り込んでいると考えられそうである。

プランは9m×9.8mの方形と考えられ、西部に土橋がみられる。周溝は2m幅で、深さは約30cmを測る。なお、南西部には若干深い部分の確認できる。主体部は2.7m×1.8mの長方形を呈し、深さは約30cmを測る。断面は皿状を呈するが、東部の隅に向かって若干深さを増している。主体部については断面で重複しているように観察されているが、重複関係については記録に残っておらず、明確にできない。

第2号周溝墓 (第162図)

C I-86付近より出土している。西部は第1号周溝墓と重複している。プランは10.6m×9.2mの長方形を呈し、南西隅に土橋を持つ。周溝は1.6m前後の幅をもち、深さは約50cmを測る断面碗形の形態である。主体部は周溝内に2基出土し、第1主体部は1.6m×1.1mを測り、深さ約40cmを測る。この主体部の短辺付近にはそれぞれピットが検出されたことから、木棺墓の痕跡の可能性も考えられる。第2主体部は2.9m×2.5mの方形で、深さ約50cmを測る。

遺物 (第160図)

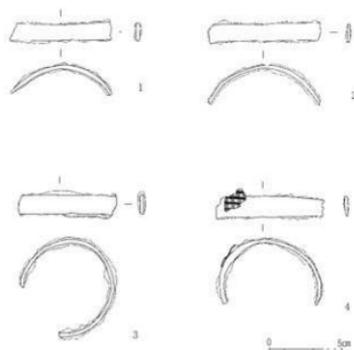
第2主体部から鉄鋼が出土している。主体部調査のためのサブトレンチを開坑中に出土し、取り上げてしまったことから出土状況を詳細に観察することができなかった。なお、出土位置は、覆土上層付近である。幅約1.5cm厚さ約0.2cmの細長い板を、直径6cm程度のらせん状に巻き上げたタイプである。残念ながらすべてを接合することはできなかった。なお、4の表面には織物の付着が確認できる。

第3号周溝墓 (第163図)

C E-88付近より出土している。この周溝墓内には3基の主体部が確認できるが、第3号周溝墓に伴うものかは明確にできない。プランは8.9m×8.1mの長方形で、溝の幅は約1.4m、深さが約50cmの断面碗状を呈している。土橋は北部隅に出土している。第1主体部は2.1m×1.3mの不整楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。第2主体部は2.4m×1.4mの細長い楕円形を呈し、深さは約20cmを測っている。第3主体部は1.7m×0.8mの楕円形で、深さは約22cmを測る。

第4号周溝墓 (第164図)

C K-79付近より出土している。5.8m×8mの方形で、溝は幅約1.1m、深さ約40cmの断面碗



第160図 第2号周溝墓出土遺物

第5章 遺構と遺物

形を呈している。周溝墓内中央部に1.9m×1.2m、深さ約20cmの楕円形を呈する主体部が出土している。この主体部の南東側の短辺にはピットが検出され、北西側についても落ち込みが確認されていることから、木棺墓の小口の可能性がある。

第5号周溝墓（第165図）

C N-84より出土している。この周溝墓の南西は調査区域外であり、北東部には第10号周溝墓と重複して出土している。土層の観察では第5号周溝墓が第10号周溝墓を切っていると考えられる。プランは1辺が7.2mを測る方形と推定される。溝の幅は約0.9m、深さは約24cmを測り、断面は椀形を呈している。主体部は2基検出され、第1主体部は2.3m×1.6m、深さ約16cmの不整楕円形を呈し、第2主体部は2.1m×0.7cm、深さ約6cmの不整楕円形を呈している。第2主体部については掘り込みが浅いため、主体部かどうかは疑問も残る。なお、西部の周溝には時代の不詳な集石炉が重複して出土している。

第6号周溝墓（第166図）

C P-72から出土している。プランは7.6m×7.6mの方形で、溝は幅約1.2m、深さは約25cmの断面椀形である。南部に土橋を持ち、主体部は周溝内中央部に2m×1.2m、深さ約24cmの不整楕円形で検出されている。

第7号周溝墓（第167図）

この周溝墓はC T-79から出土している。南西部は調査区域外となっており、規模等詳細に把握することができなかった。主体部は1.4m×1.1mの長方形を呈し、深さは約20cmを測る。

第8号周溝墓（第167図）

C Y-74より出土している。調査区の南角に検出されたため、詳細を明らかにできなかった。溝の幅は約1mで、深さは約20cmであった。

第9号周溝墓（第168図）

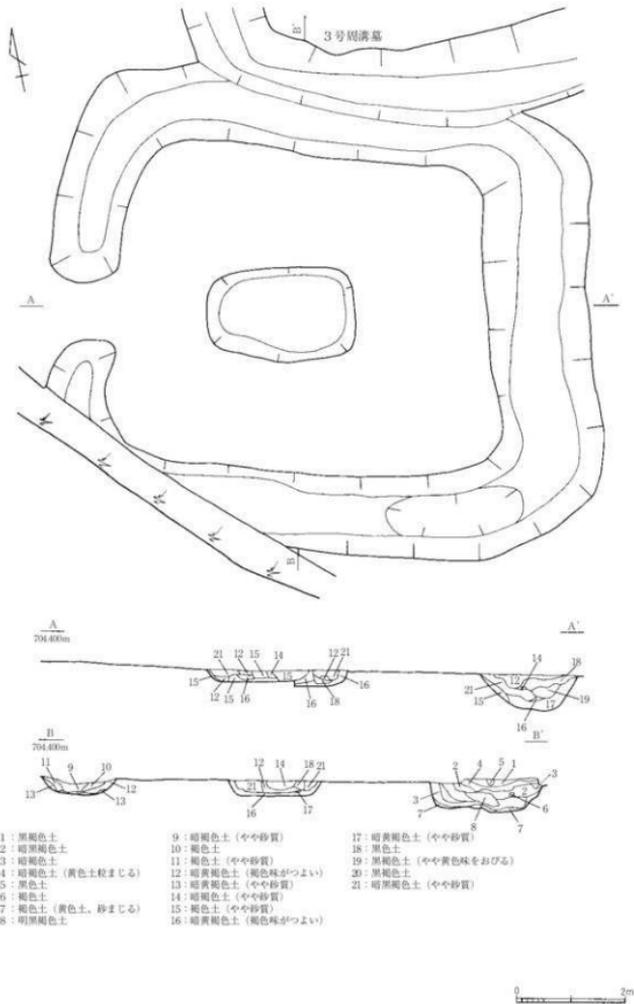
C W-74より出土している。やはり南西部のほとんどが調査区域外となってしまったため、詳細は不明である。溝の幅は約0.8m、深さは約20cmである。

第10号周溝墓（第169図）

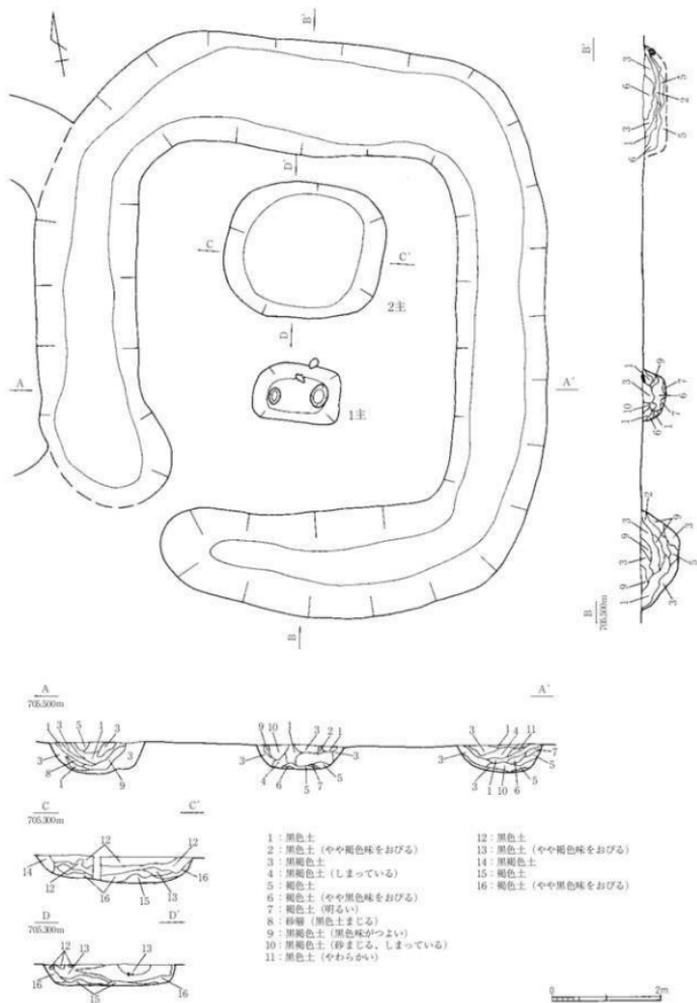
C L-81より出土している。この周溝墓は第4号周溝墓と重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。プランは8.2m×9.6mの方形と考えられ、溝の幅は約1m、深さは約20cmを測る。主体部は明確ではないが、中央部付近に1.2m×0.5mで深さ約20cmの方形のプランを持つ土坑が出土しており、この土坑を主体部と推定した。

第15号周溝墓（第170図）

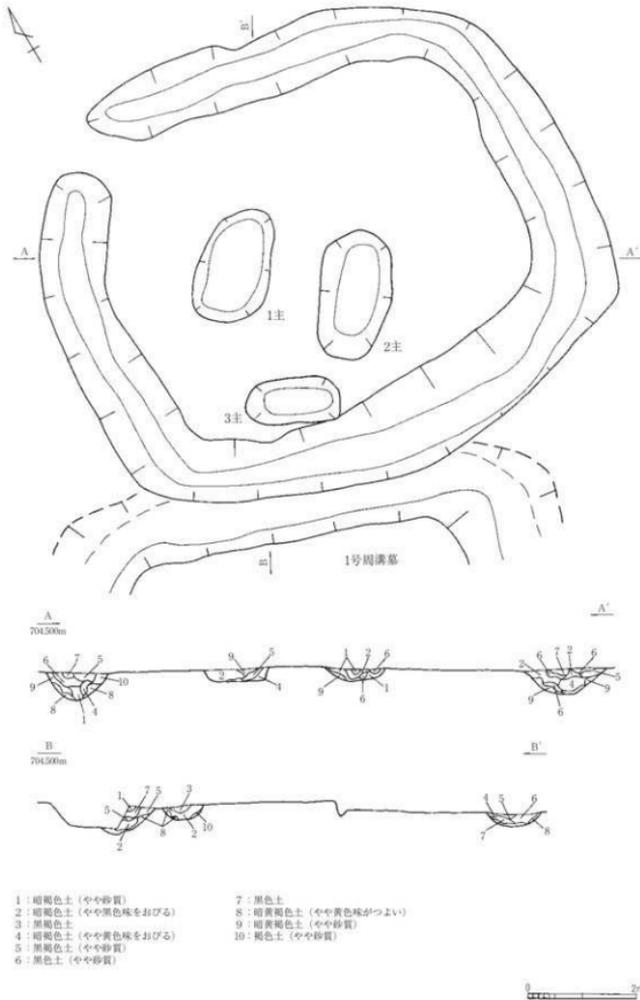
B G-43より出土している。この周溝墓は第39・40号住居址と重複しており、主体部付近は大きく削平されている。プランは9.6m×8.2mの方形で、北部隅に土橋が出土している。溝の幅は約1m、深さ約50cmを測る。周溝は数ヶ所に掘り込み部分が確認されている。主体部は1.6m×1.1mの楕円形で、深さは22cmを測る。



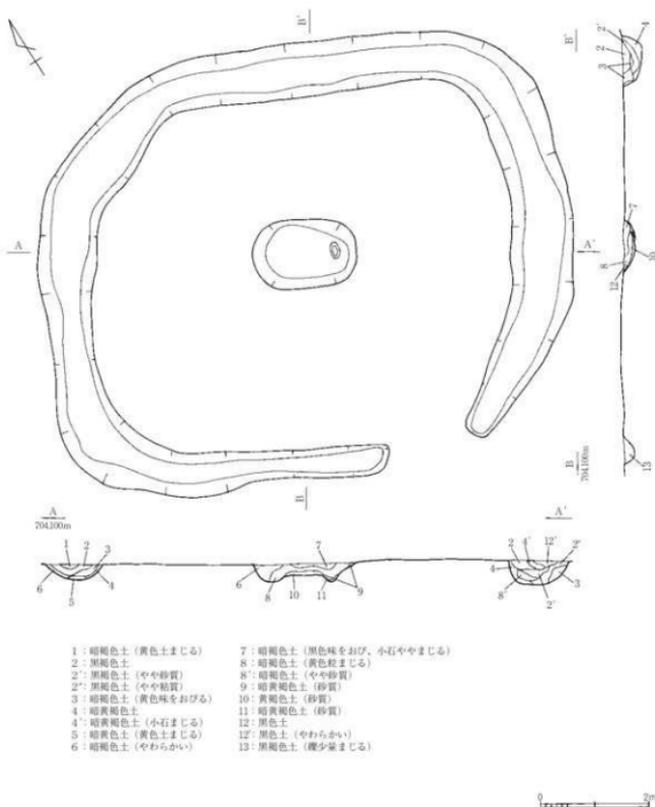
第161図 第1号周溝墓遺構平面図



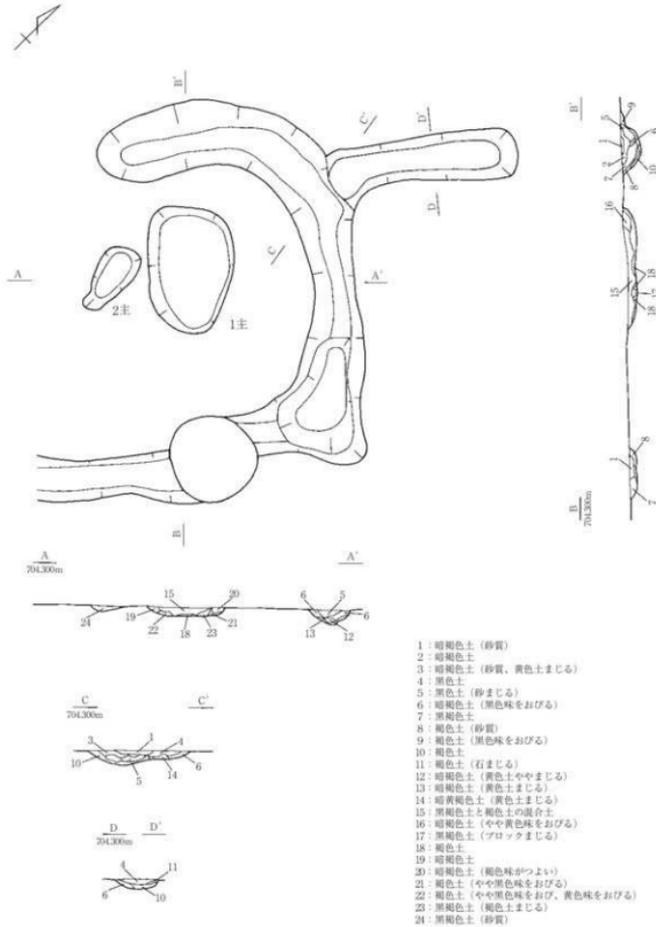
第162図 第2号周溝墓遺構平面図



第163図 第3号周溝墓遺構平面図

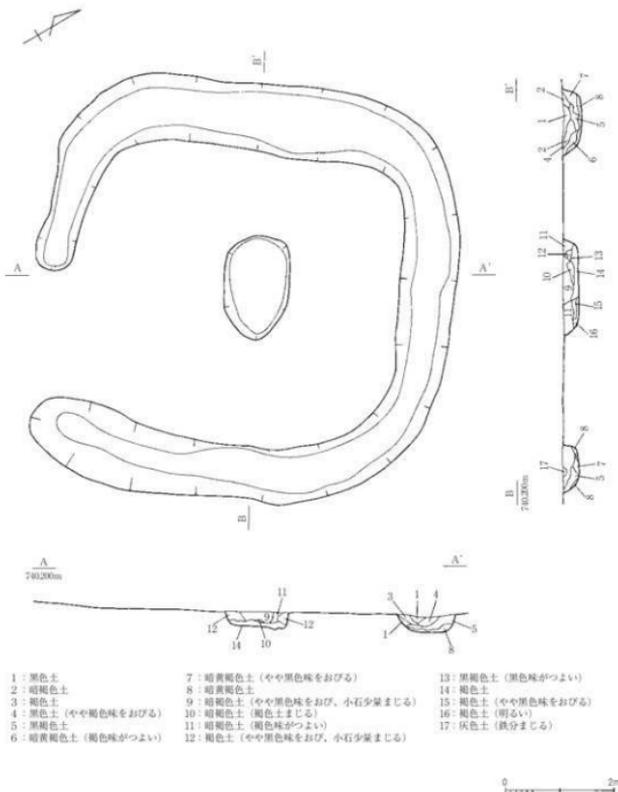


第164図 第4号周溝墓遺構平面図



第165図 第5号周溝墓遺構平面図

第IV章 遺構と遺物

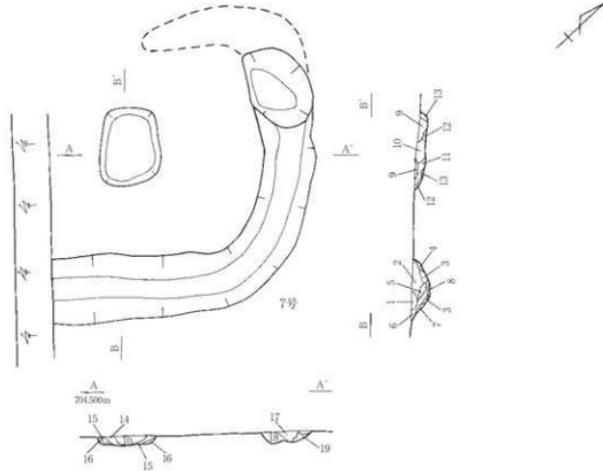


第166図 第6号周溝墓遺構平面図

なお、主体部内にピットが確認できるが、この遺構に伴うものかは明確にできなかった。

第16号周溝墓 (第168図)

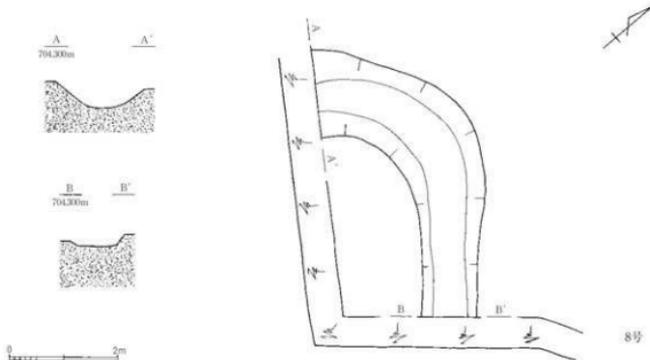
C A-63より出土している。一部のみ出土であり、主体部は検出できなかった。



- 1: 黒色土
- 2: 暗褐色土 (黒褐色土・黄色土まじる)
- 3: 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 4: 黄色土 (褐色味をおびる)
- 5: 暗褐色土
- 6: 暗黄褐色土
- 7: 黄色土

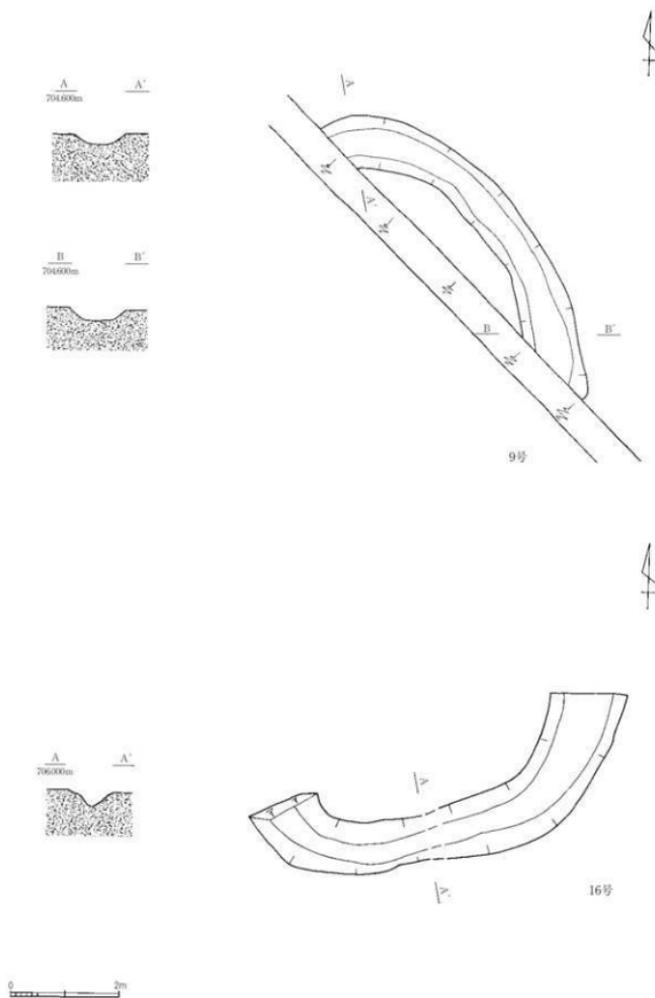
- 8: 褐色土と黄色土の混合土
- 9: 褐色土
- 10: 暗褐色土 (黒色土・黄色土まじる)
- 11: 暗褐色土
- 12: 褐色土
- 13: 暗黄褐色土
- 14: 暗褐色土

- 15: 暗褐色土
- 16: 褐色土
- 17: 暗褐色土 (覆まじる)
- 18: 黄色土 (覆まじる)
- 19: 黄色土

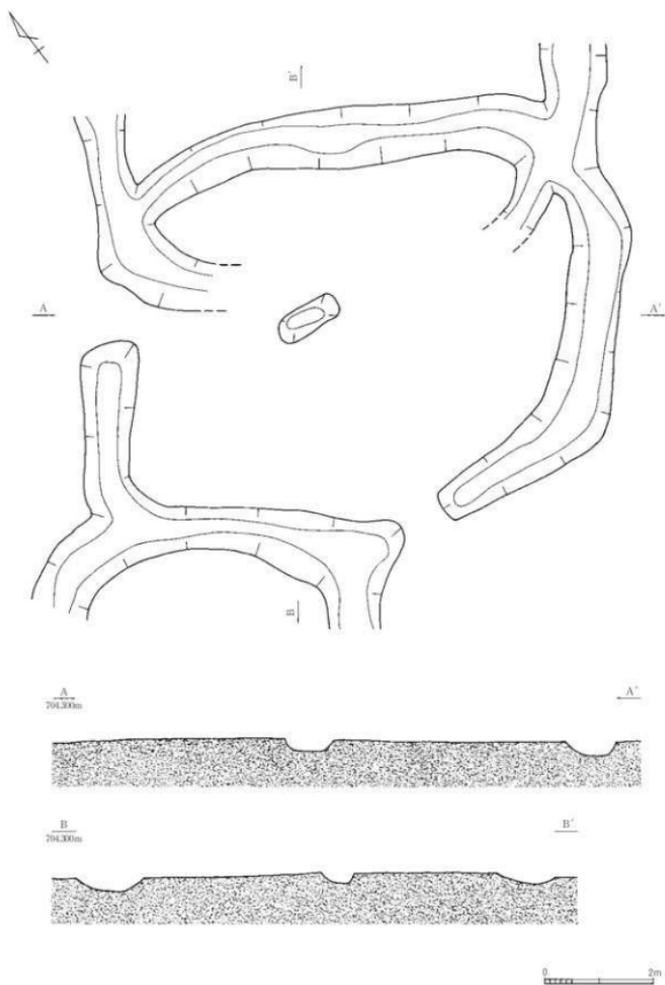


第167図 第7・8号周溝墓遺構平面図

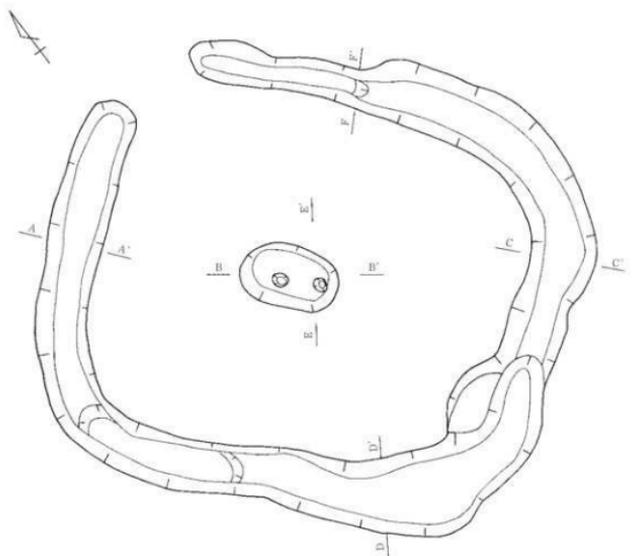
第IV章 遺構と遺物



第168图 第9・16号周濬墓遺構平面図



第169图 第10号周溝墓遺構平面图



A A'

713.400m



B B'

713.400m



C C'

713.400m



D D'

713.400m



E E'

713.400m



F F'

713.400m



- 1 : 黒色土
- 2 : 黒色土 (やや褐色味をおびる)
- 3 : 黒褐色土
- 4 : 暗褐色土
- 4' : 暗褐色土 (4よりやや暗い)
- 5 : 暗褐色土 (黄色土や含まれる)
- 6 : 暗褐色土 (黄色土がまじる)
- 7 : 暗褐色土 (ややわかい)

- 8 : 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 9 : 暗褐色土と黒色土の混合土
- 10 : 暗褐色土 (黒色味をおびる)
- 11 : 暗褐色土
- 12 : 暗褐色土 (やや褐色味をおびる)
- 13 : 黄褐色土
- 14 : 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)

主体部



第170図 第15号周溝墓遺構平面図

3. 土 坑

第1号土坑 (第171図)

A Y-52から出土した。プランは直径約1m、深さ約0.35mの平面円形であり、覆土は暗褐色系の土が主体であった。

なお、底部にビットが検出されている。遺物は出土していない。

第2号土坑 (第171図)

A X-52から出土した。直径約0.9m、深さ約0.4mの平面円形のプランで、覆土は黄色系の土が中心であった。遺物は出土しなかった。

第3号土坑 (第171図)

A X-51から出土した。直径約1m、深さ約1.1mの平面円形のプランで、覆土は黄色土の混入する暗褐色系の土が中心であった。また、土坑上部には黄色土が皿状に堆積しているのが観察されているが、カクランの可能性が高い。遺物は出土しなかった。

第4号土坑 (第171図)

A X-51から出土した。直径約0.6m、深さ約0.1mの平面円形のプランで、覆土は黄色土の混入する暗褐色系の土が中心であった。遺物は出土しなかった。

第5号土坑 (第171図)

B E-40から出土した。直径約0.8m、深さ約0.5mの平面不整形のプランで、覆土は黄色土の混入する暗褐色系の土が中心であった。また、北東部は調査区域外となっていたため、正確なプランは把握できなかったが、形態から推定すると、ロームマウンドの可能性もある。遺物は出土しなかった。

第6号土坑 (第171図)

B H-38から出土した。直径約0.9m、深さ約0.4mの平面円形のプランで、覆土は黄色土の混入する暗褐色系の土が中心であった。遺物は出土しなかった。

第7号土坑 (第171図)

B H-38から出土した。直径約0.7m、深さ約1.1mの平面楕円形のプランであった。断面形態はフラスコ状を呈しており、覆土には炭や黄色土の混入が見られ、堆積した土も比較的柔らかいことなどから、いわゆる地下式坑と呼ばれる、中近世の墓坑と推定される。遺物は出土しなかった。

第8号土坑 (第172図)

B H-20から出土した。直径約1.1m、深さ約0.5mの平面不整形のプランで、覆土は黒味の強い暗褐色系の土が中心であった。なお、遺構検出面付近で、ほぼ完形の土器が壊になった状態で1点出土している。

第V章 遺構と遺物

遺物

1 個体が出土した。器形を成形後に器面全面に縄文を施し、続いて半載竹管状工具による平行沈線文で文様を描いている。内面は横位のナデ調整が行われている。焼成も良好な土器である。

第9号土坑（第174図）

B G-39、第42号住居址内から検出された。直径約0.7m、深さ約0.7mの平面円形のプランで、覆土は黄色土の混入する暗褐色系の土が中心であった。遺物は出土しなかった。

第10号土坑（第174図）

A Y-49から出土した。平面プランは約1.9m×1.6mの不整形な長方形で、検出時の深さは約20cmを測る。底部は平坦でなく、南部になだらかな高まりが検出された。暗褐色系の覆土で、中層には炭・焼土が混入している。

第11号土坑（第174図）

B I-41より出土した。約80cm×60cmの長方形のプランで、深さは約15cmであった。暗褐色系の覆土中には炭が混入していた。

第12号土坑（第174図）

B I-39から出土した。約80cm×60cmの長方形で、深さ約10cmであった。覆土中には炭が混入し、底部には炭化物も検出された。

遺物（第177図1～3）

この土坑からは銭貨が3枚出土した。1～3であり、1は熙寧元寶（北宋、初鑄年1068年）である。2は至道元寶（北宋、初鑄年995年）、3は判読不明である。2・3は文字が崩壊しており、模鑄銭の可能性が高い。

第13号土坑（第174図）

B A-49から出土した。約1.7×1.1mの不整形長方形と推定され、深さは約20cm程度であった。

第14号土坑（第174図）

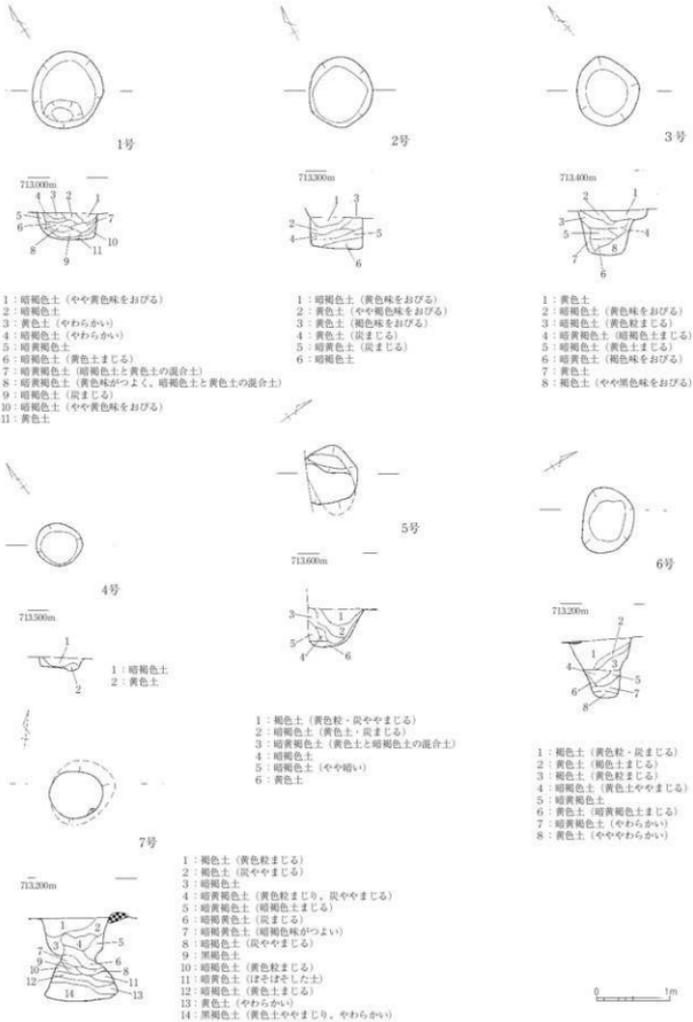
B A-50から出土した。直径1.4mの平面円形で、深さは約80cmを測る。

4. 堅穴

(1) 遺溝

第1号堅穴（第175図）

C T-73から出土した。約1.8m×1.3mの平面不整形長方形のプランで、深さ約10cmを測る。覆土は暗褐色の粘質土や、粘土が不規則に堆積していた。また、覆土中に直径20cm程度の石が多数出土しており、意図的な混入の可能性が高い。



第171図 土坑遺構平面図 (1)

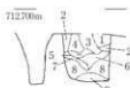
第IV章 遺構と遺物



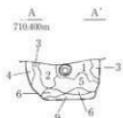
9号



8号



- 1: 暗黄褐色土
- 2: 黄色土
- 3: 暗黄褐色土
- 4: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 5: 暗黄色土 (褐色土まじる)
- 6: 暗褐色土 (黄色土まじり、炭まじる)
- 7: 黄色土 (やや暗い)
- 8: 黄色土 (炭まじる)
- 9: 暗黄褐色土 (炭まじる)



- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土 (黒色土まじる)
- 3: 暗黄褐色土
- 4: 黄色土
- 5: 褐色土 (粘土まじる)
- 6: 暗褐色土 (黒味をおびる)
- 7: 暗褐色土 (黒味をおび、炭まじる)



0 10m

第172図 土坑遺構平面図 (2)

0 1m

第173図 第8号土坑出土遺物



10号

71350mm



- 1: 暗黄褐色土 (黄色土粒・褐色土まじる)
- 2: 黄褐色土
- 3: 黄褐色土 (炭まじる)
- 4: 暗黄褐色土 (粘土まじる)
- 5: 黄色土



11号

71270mm



- 1: 暗褐色土 (炭・粘土まじる)
- 2: 暗褐色土 (炭ややまじる)



12号

71320mm

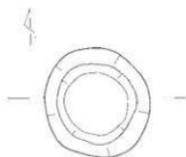


- 1: 黒色土 (炭まじる)
- 2: 褐色土 (炭ややまじる)



13号

71320mm



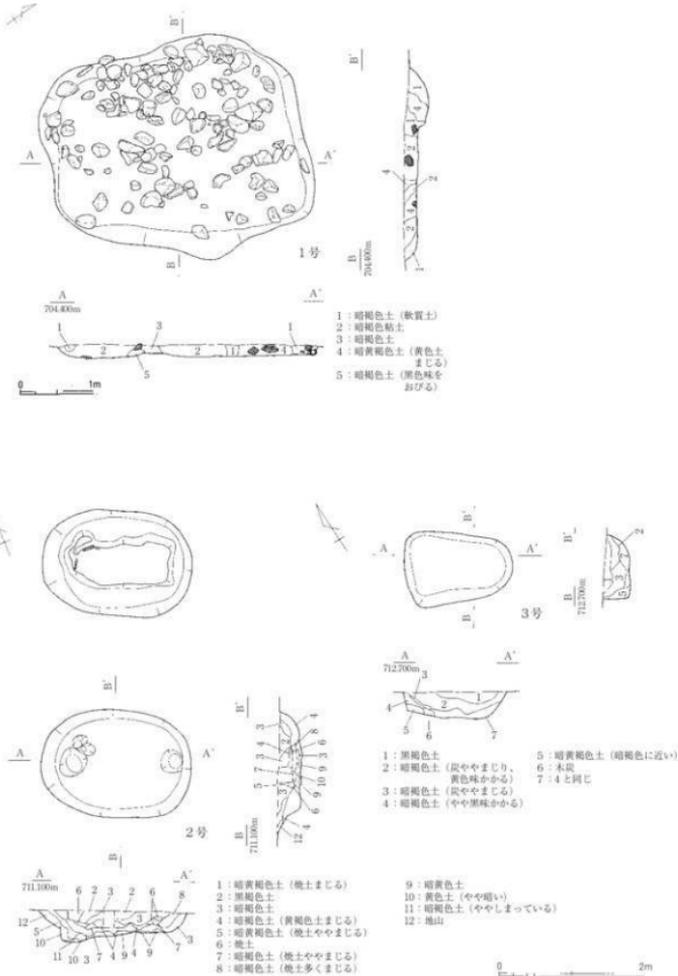
14号

71300mm



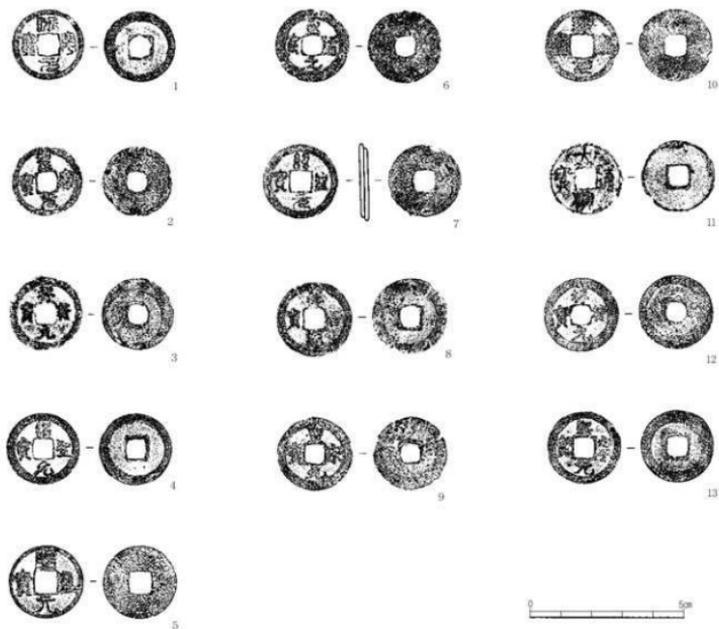
0 5m

第174図 土坑遺構平面図 (3)



第175図 堅穴遺構平面図

第五章 遺構と遺物



第176図 調査区内出土銭貨

第2号壁穴 (第175図)

ZK-41から出土した。長径2m、短径1.5mの楕円形プランで、深さ約50cmを測る。底部には約1.4×0.7m、高さ15cm程の高まりが検出され、その上部からは焼土が出土した。覆土からも焼土が混入した層位が確認されている。焼土の堆積層を掘り下げると、東西の壁際に浅いビットが検出された。

第3号壁穴 (第175図)

ZP-5から出土した。約1.5m×1m、深さ約35cmの不整長方形のプランであった。中層に黒褐色系の土が見られ、その上下で焼土の混入した層位が確認されている。

5. 出土銭貨

調査段階で遺構を把握できずに掘り下げましたが、遺構の覆土と考えられる土から銭貨が出土している。これらはB I-39グリッド周辺の2ヶ所から一括して出土した。

第176図4～8は第43号住居址南壁から出土した。4は熙寧元寶と思われる。5は2枚が錆着しているが、そのうちの1枚は紹聖元寶（北宋、初鑄年1094年）である。6は大観通寶（北宋、初鑄年1107年）である。外縁が欠損している。7・8は判読不明である。これらの内、3・4・7・8は文字が錆漬れており、判読できないのに加え、質も悪い事から模鑄銭の可能性が高い。

9～13は第12号土坑南西部付近からの出土である。9は祥符元寶（北宋、初鑄年1009年）、10は紹聖元寶、11は聖宋元寶（北宋、初鑄年1101年）、12は熙寧元寶である。13は開元通寶（南唐、初鑄年960年）である。9・11・12は文字が錆漬れており、判読できないのに加え、質も悪い事から模鑄銭の可能性が高い。また、13も模鑄銭の可能性を捨てきれない。

これらは、それぞれ6枚と5枚が一括で出土していることから、いわゆる六道銭と推定され、遺構を検出できなかったものの、第12号土坑の他にもこの付近に墓坑が集中していたことをうかがわせた。

6. 集石

第1号集石（第177図）

CO-83から出土した。直径約1mの平面円形に礫が集中して検出された。断面はすり鉢状を呈し、深さは約50cmを測る。覆土内にも礫が多数入れ込まれており、底部の直径40cm程の範囲には扁平な石が敷かれていた。

第2号集石（第177図）

CT-71から出土した。約1m×0.8mの平面楕円形の範囲に礫が集中し、掘り込みの断面はすり鉢状を呈していた。また、覆土中にも礫が混入していた。

第3号集石（第177図）

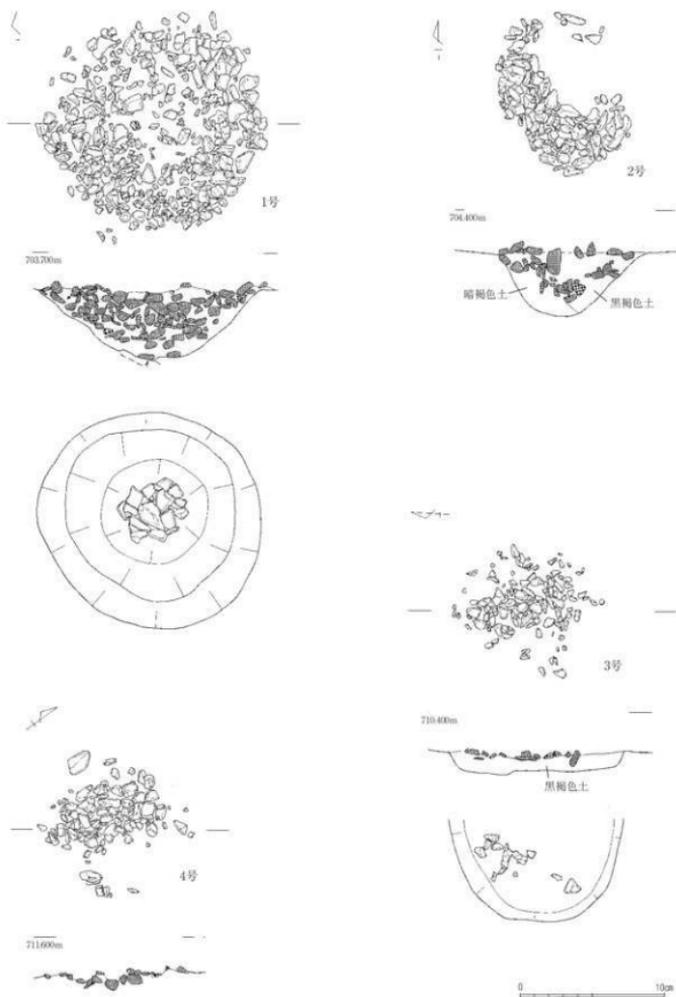
CR-15から出土した。約1m×0.8mの平面楕円形の範囲に比較的小さな礫が集中していた。掘り込みは浅く、約10cmであったが、底部付近から押型文が敷かれたような状態で集中して出土した。

遺物（第209図）

一括して出土した。同一個体と考えられる楕円文の破片である。1～4は同一個体である。口唇部にキザミを施し、口縁部から体部上部には横位の大粒の楕円文、体部下部には縦位の楕円文が施文されている。そのほか5・6も横位の楕円文である。7～9は縦位施文を行っている。また、10は山型文である。口縁部は無文帯を残しながら横位に2段施文の後、その下部を重複させて縦位に施文している。

第4号集石（第177図）

CL-15から出土した。この遺構は第37号住居址と重複して出土したが、住居址床面で検出できたことから、住居址の掘り込まれる以前に存在していたと考えられる。直径約70cmの平面円形の範囲に平面的に礫が集中して出土した。



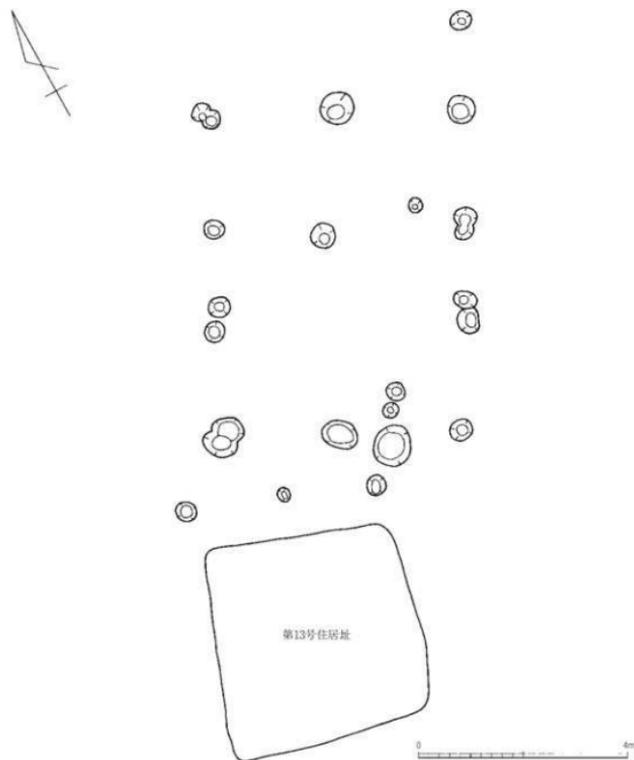
第177図 集石遺構平面図

7. 柱 穴

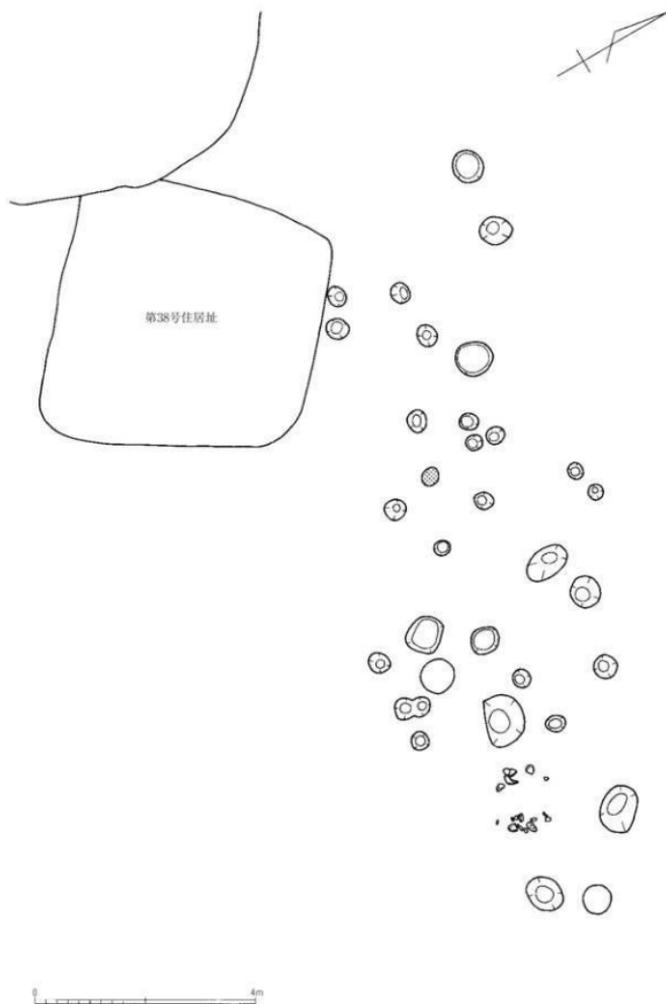
今回の調査では、掘立柱建物址と考えられる柱穴が多数出土した。しかし、調査時に規模を明確に把握することができなかった遺構が多く、平面図を掲載するのみにとどめる。

第1次調査区では、C S-70付近、第13号住居址の北部に、2間×3間の建物址の存在を1棟確認できる。柱穴が重複して検出されていることから、建て替えが行われている可能性がある。また、C O-76では、南北の軸に合わせよう柱穴が並んでいる傾向は把握できるが、規模を明確にできない。

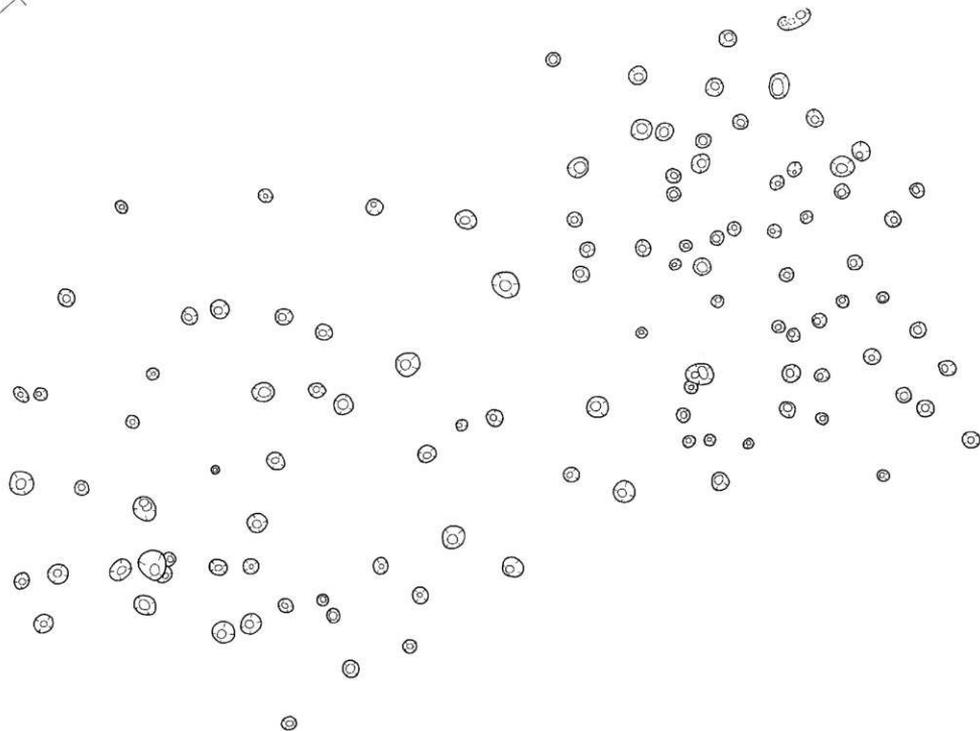
第3次調査区は調査範囲が狭く、全体像を把握することが困難であった。



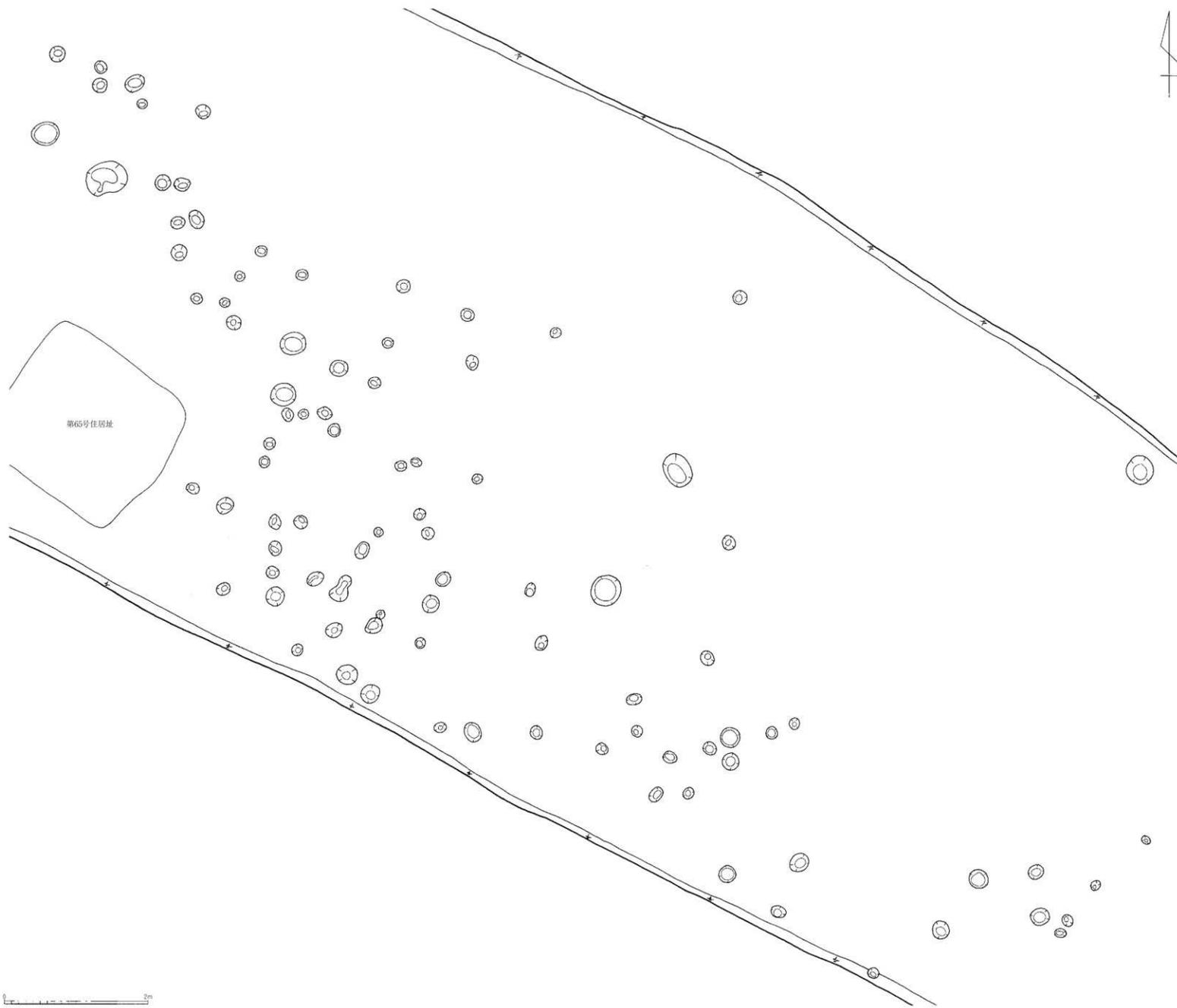
第178図 柱穴遺構平面図(1)(第1次調査区CT-70付近)



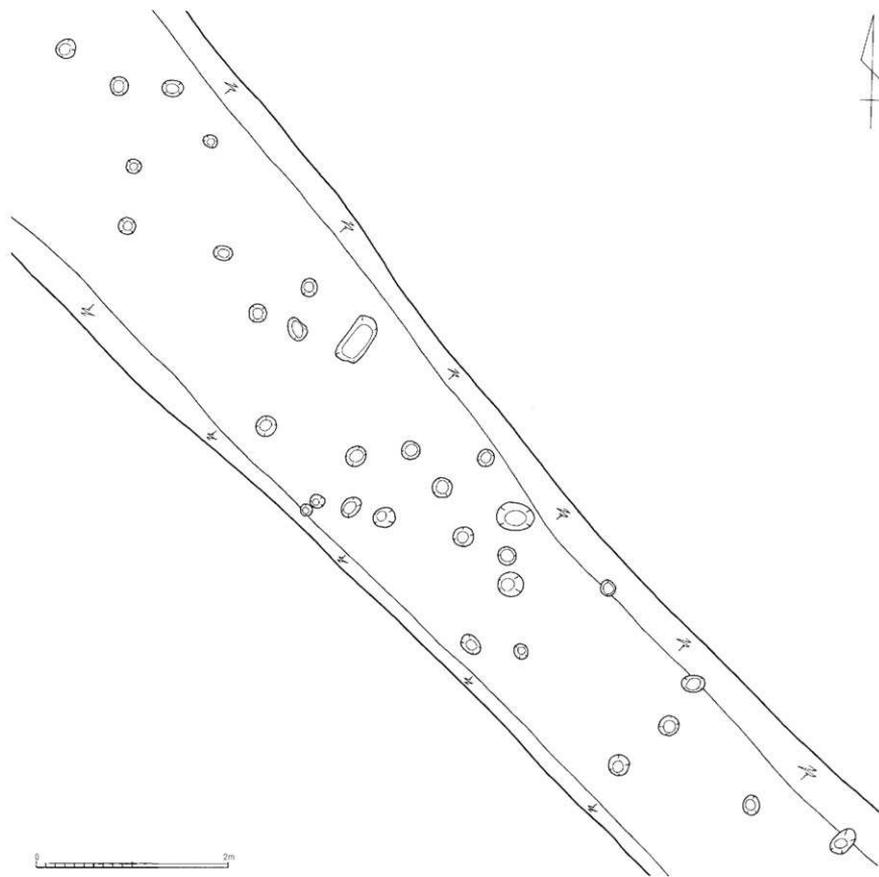
第179図 柱穴遺構平面図(2)(第I次調査区CL-14付近)



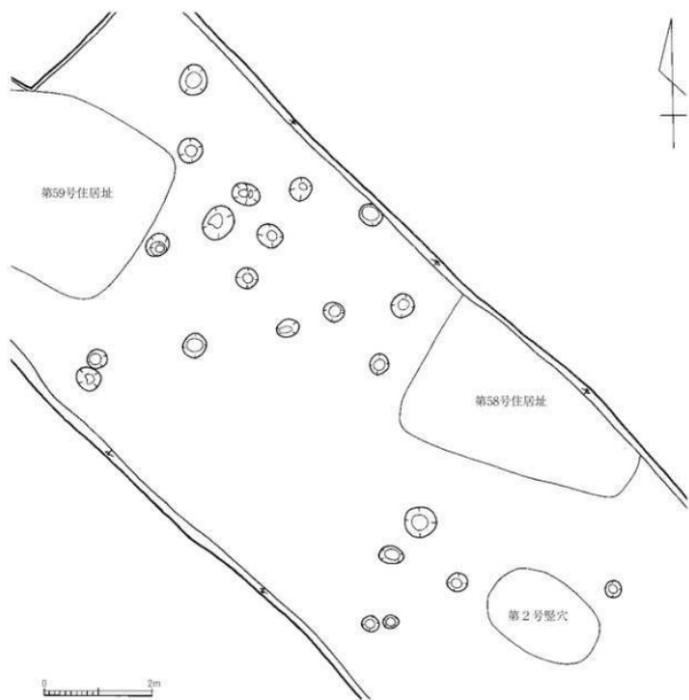
第180図 柱穴遺構平面図(3)(第1次調査区CQ-78付近)



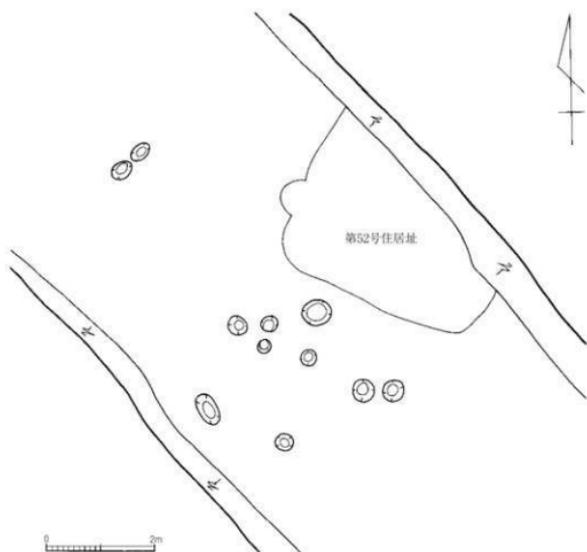
第181图 柱穴遺構平面图(4)(第Ⅲ調査区YT-29付近)



第182图 柱穴遺構平面図(5)(第Ⅲ次調査区A1-20付近)



第183图 柱穴遺構平面图(6)(第Ⅲ次調査区ZG-44付近)



第184図 柱穴遺構平面図(7)(第三次調査区ZB-30付近)

8. 礫 群

第1号礫群 (第185図)

第1次調査南区の東部から出土した。遺構検出時に、石が帯状にひろがって検出されており、その測量図からはいくつかのブロックに別れていたことが読み取れるが、調査者に十分な知識がなく、調査時に判断ができなかったため、断面をはじめ、レベルすら記録せずに調査を終了してしまい、貴重な遺構を破壊してしまった可能性が高いことは大変遺憾である。礫が楕円状にめぐる地点も実測図上に読み取れることから、配石墓群を含む、縄文時代後期の配石遺構の可能性が高い。

第2号礫群 (第186図、第188図～第191図)

第1次調査北区の北端部から検出された。水田直下から押型文が出土したことから、慎重に掘り下げると礫が集中して出土したため、礫群と判断した。

礫群内には、10cm～30cm程度の礫が散在し、荒神山の傾斜が変化する地点に、黒曜石が集中したブロックが2ヶ所含まれており、CK-7付近には、ある程度復原できる土器片がまとまって出土した。

礫は環状を呈し、いくつかのまとまりがみられ、何らかの単位を示していることが考えられる。

遺 物 (第192図～第211図、第225図～第230図)

ここからは早期の土器が多数出土した。そのほとんどは破片資料であり、しかも小片が多い。期的には、押型文 (第192図～第209図) から条痕文 (第210図～第211図) までみられる。なお、押型文土器は礫群周辺で検出された他の時代の住居址等からも出土したため、一括して掲載している。当該遺構から出土した遺物は、図に丸付番号で示し、出土地点についても第188図～第191図に図示している。

また、礫群付近では黒曜石も多数出土した。多くは剥片を利用した石器 (第226図14・15、第227図) や板型石器 (第225図10～12・16、第226図1～9) および石核 (第227図～第230図) であるが、石鏃 (第225図1～6) やその未製品 (第225図9、第228図9)、石錐 (第225図7・8)、石匙 (第225図13) 等も若干出土した。

第1号ブロック (第187図)

C1-10から出土した。この地点からは小型の黒曜石が集中して出土した。

遺 物 (第218図～第222図)

第218図1・2は石鏃である。1は先端部、2は基部が欠損していた。6は剥片を利用した刃器と考えられる。3・4～17、第219図1～4は剥片である。第219図5～10、第220図～第222図は石核である。

薄片のほとんどには自然面が見られる。また、石核も小型であった。

第2号ブロック (第187図)

第1号ブロックの東部から出土した。第1号ブロックとは異なり、大型の黒曜石と石材から構成されていた。

遺 物 (第223図～第224図)

立方体の黒曜石が出土している。原石を打ち割っただけの母岩と考えられる。なお、第223図、第224図1～4は接合する。

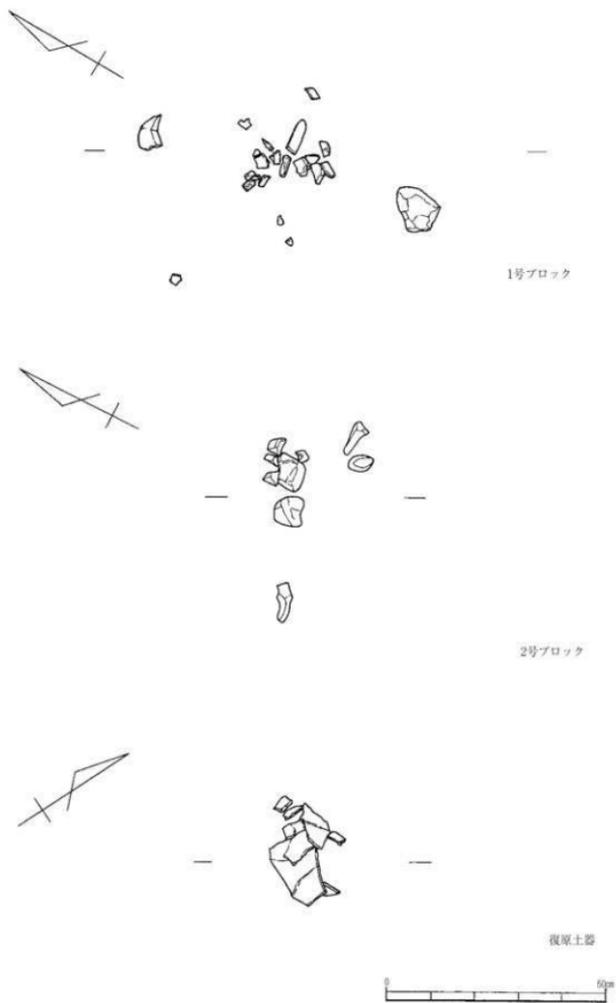


8. 禮 群

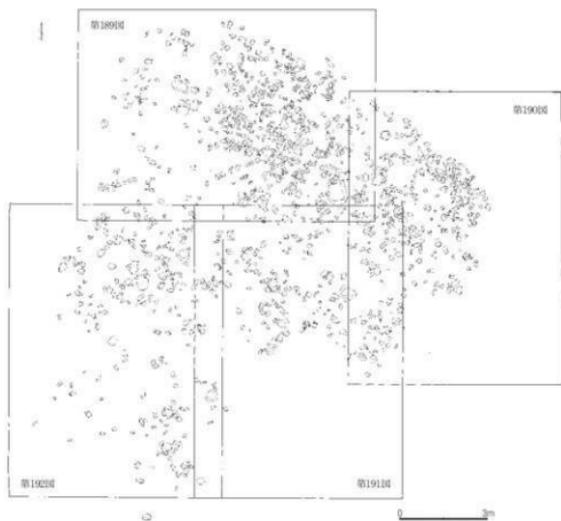
第185图 第1号遗址遺構平面图



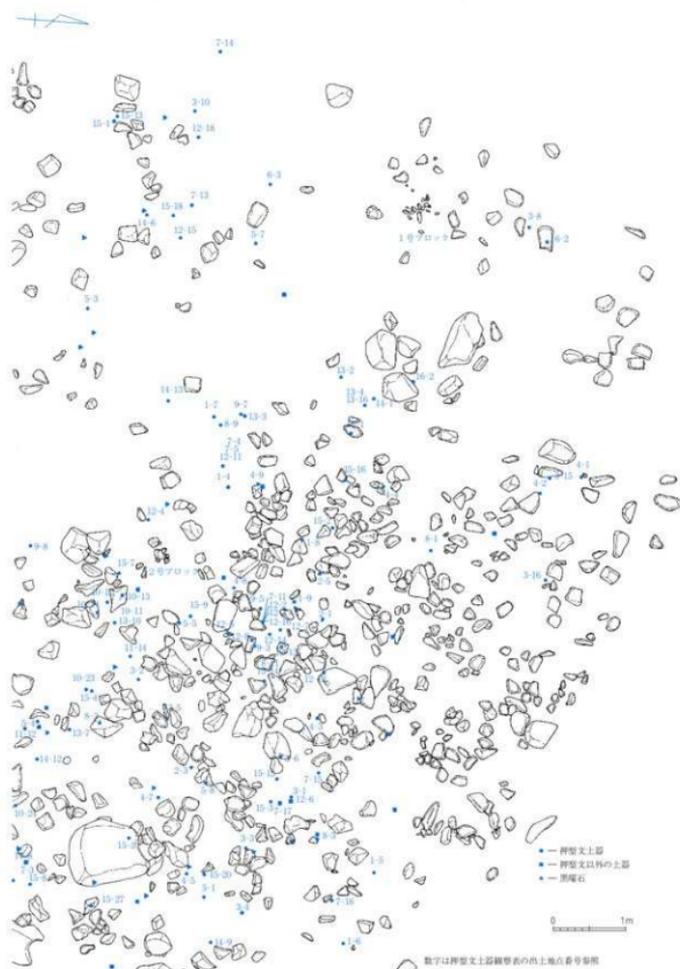
第186図 第2号雑群遺構平面図



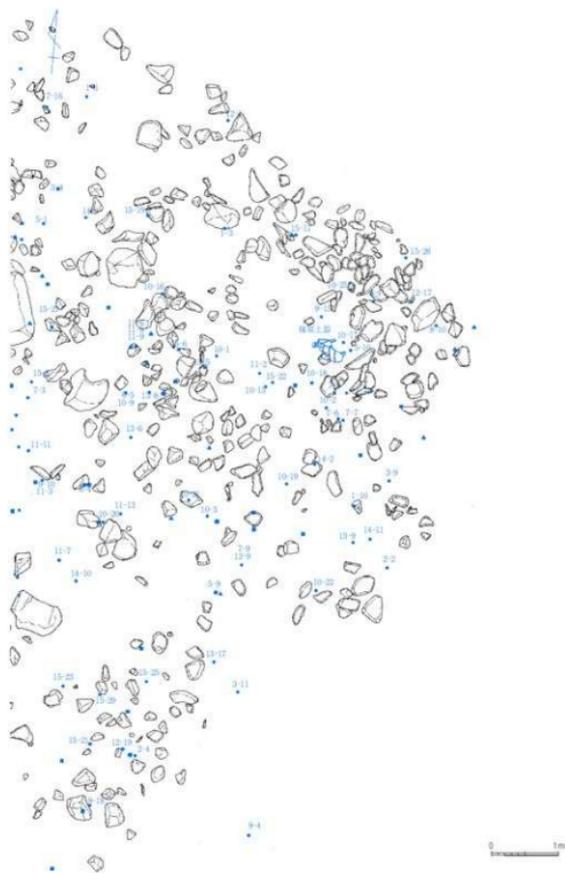
第187図 第2号礫群内遺物出土状況図



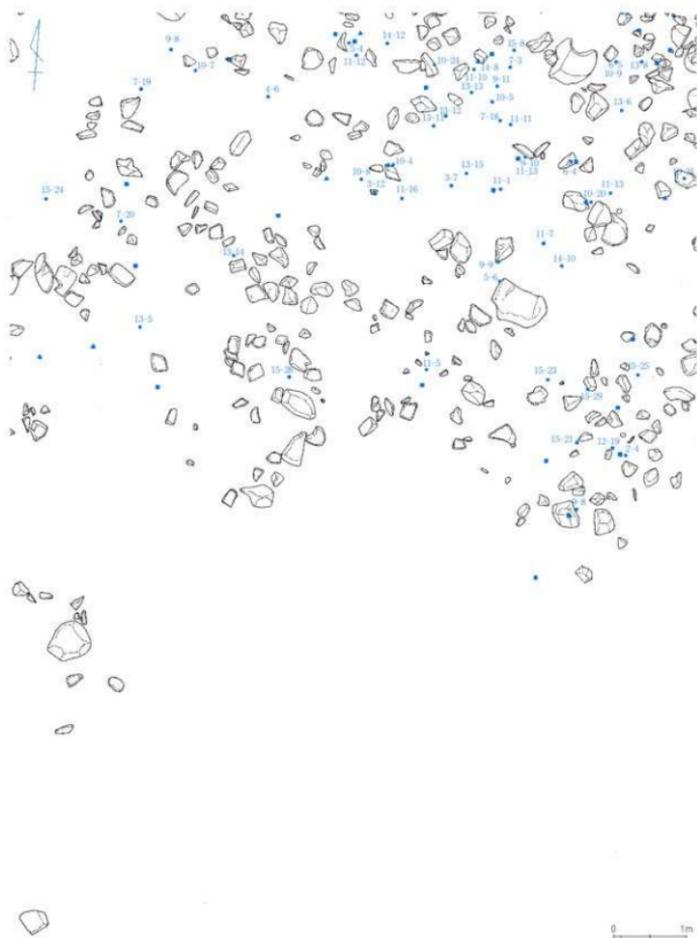
第188図 第2号群出土遺物分布図(区別)



第189図 第2号雑群出土遺物分布図(1)



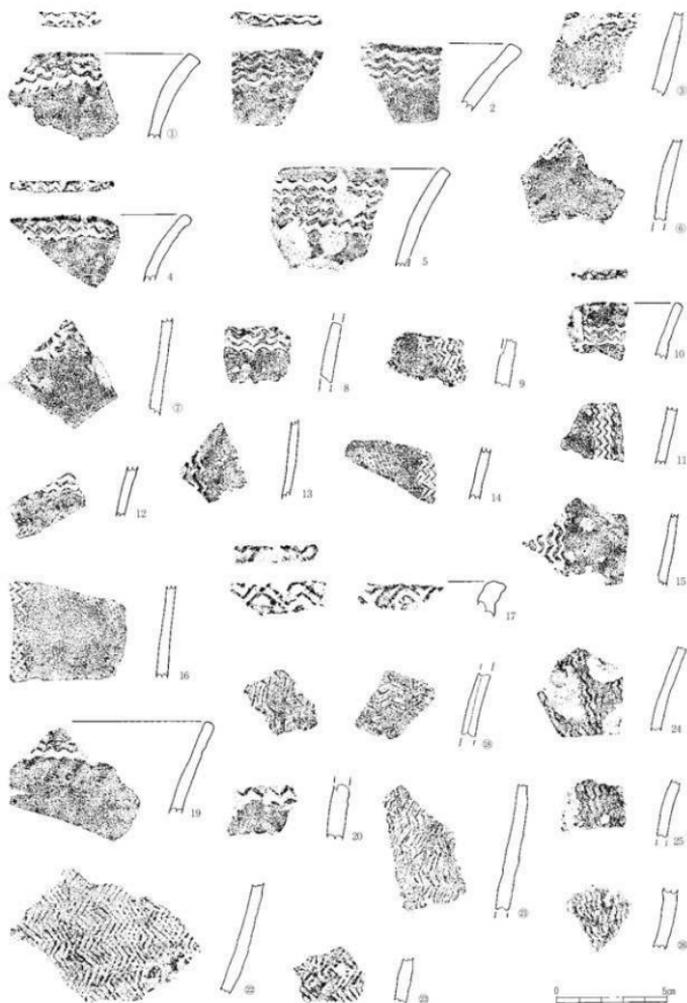
第190図 第2号礫群出土遺物分布図(2)



第191图 第2号覆群出土遗物分布图(3)

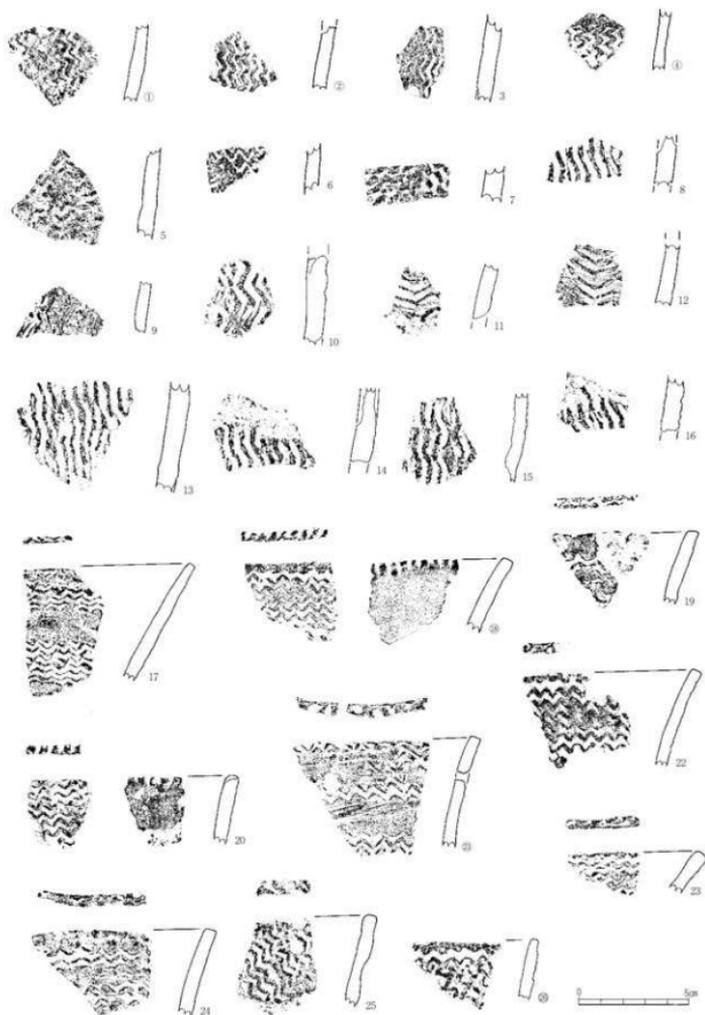


第192図 第2号群出土遺物分布図(4)

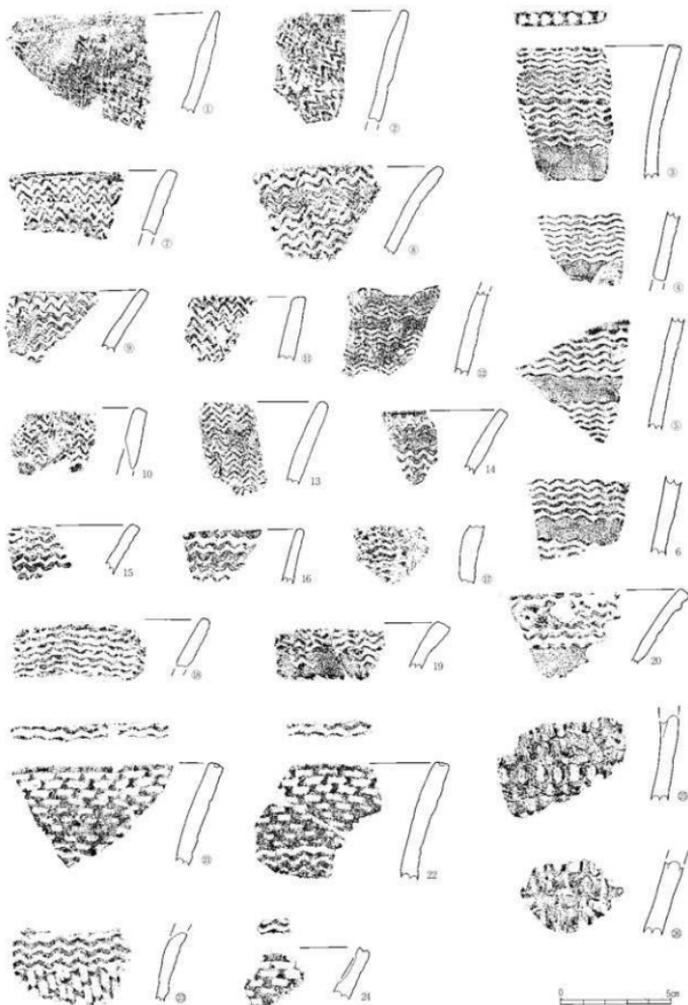


第193图 第1次調査北部調査区出土押型文(1)

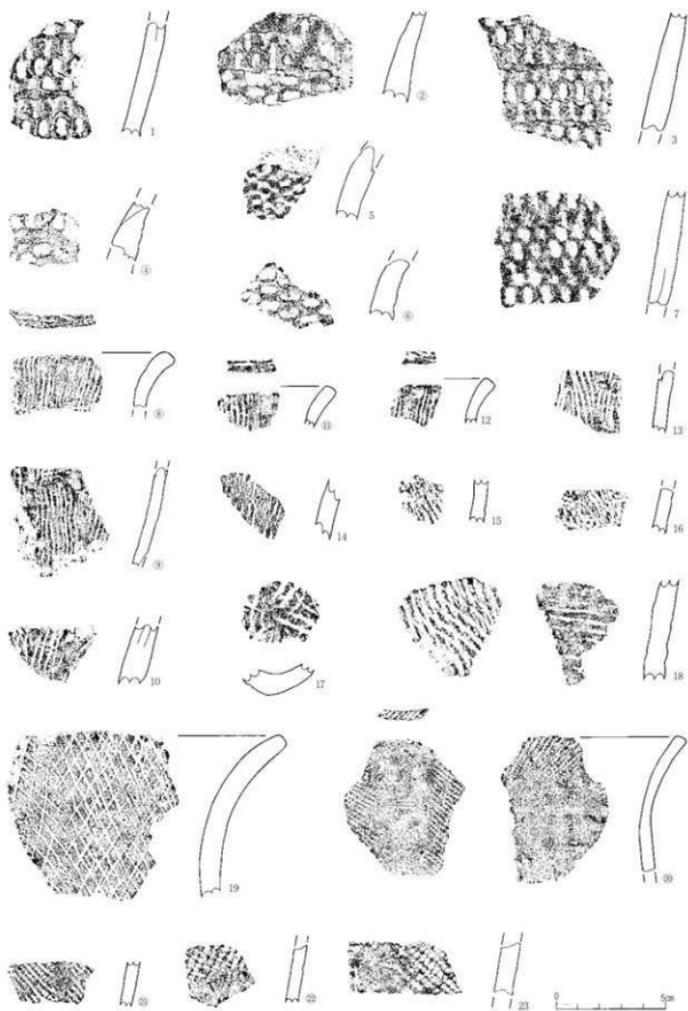
第五章 遺構と遺物



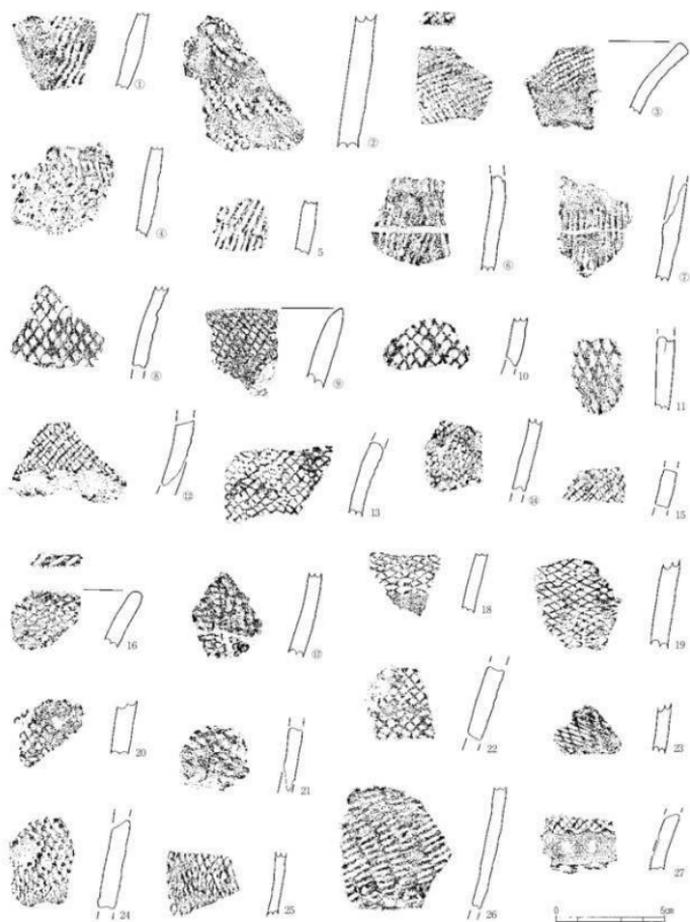
第194图 第1次調査北部調査区出土押型文(2)



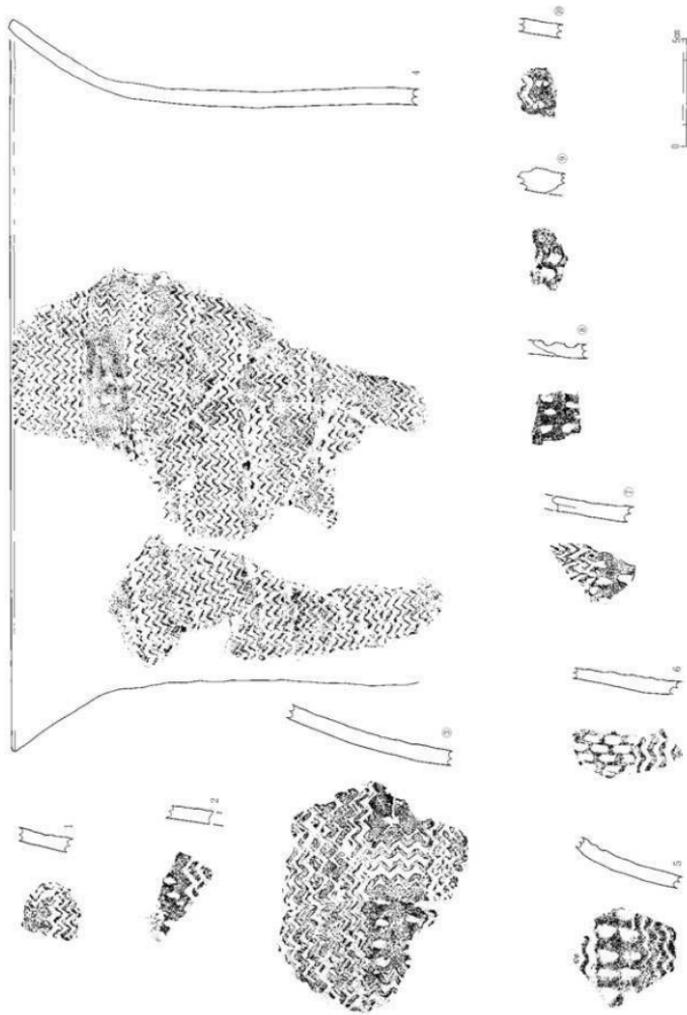
第195图 第1次調査北部調査区出土押型文(3)



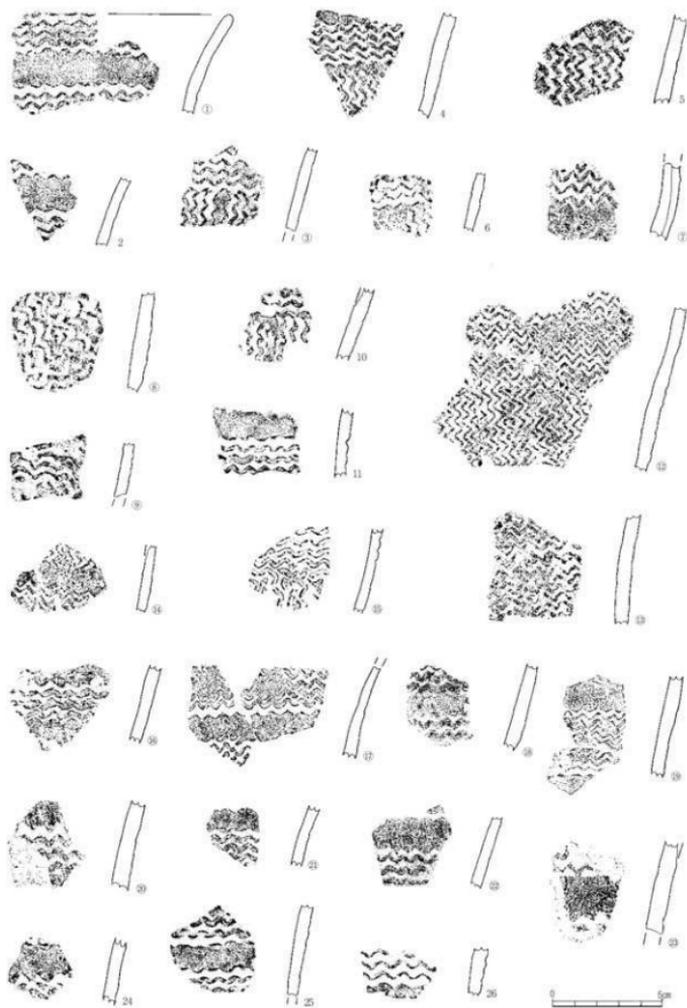
第196图 第1次調査北部調査区出土押型文(4)



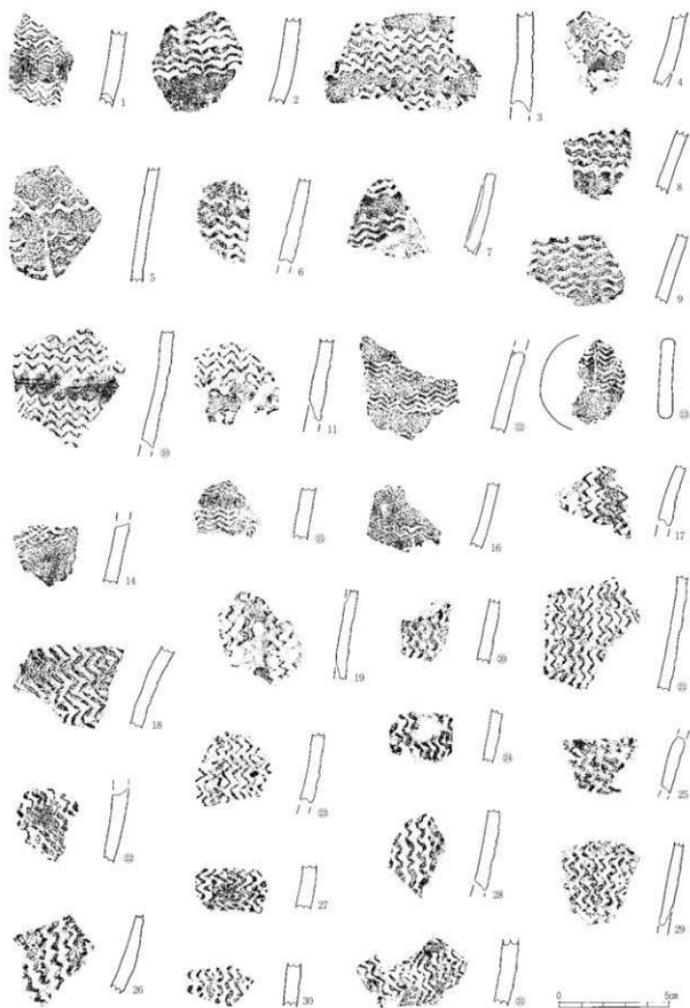
第197图 第1次调查北部调查区出土押型文(5)



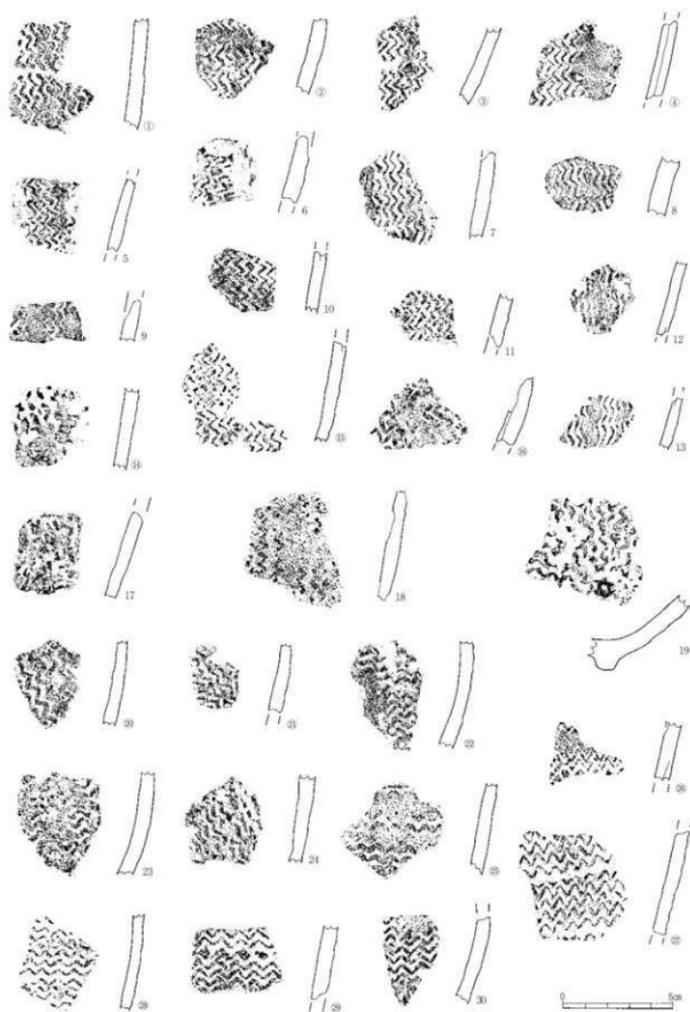
第1984図 第1次調査北部調査区出土押型文(6)



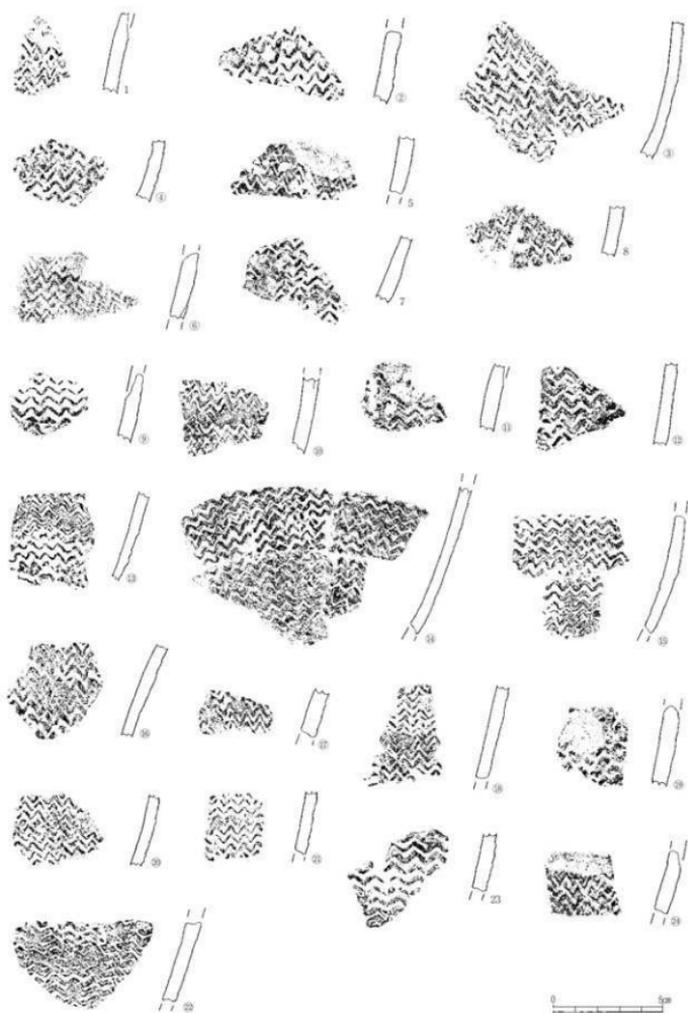
第199图 第1次调查北部调查区出土押型文(7)



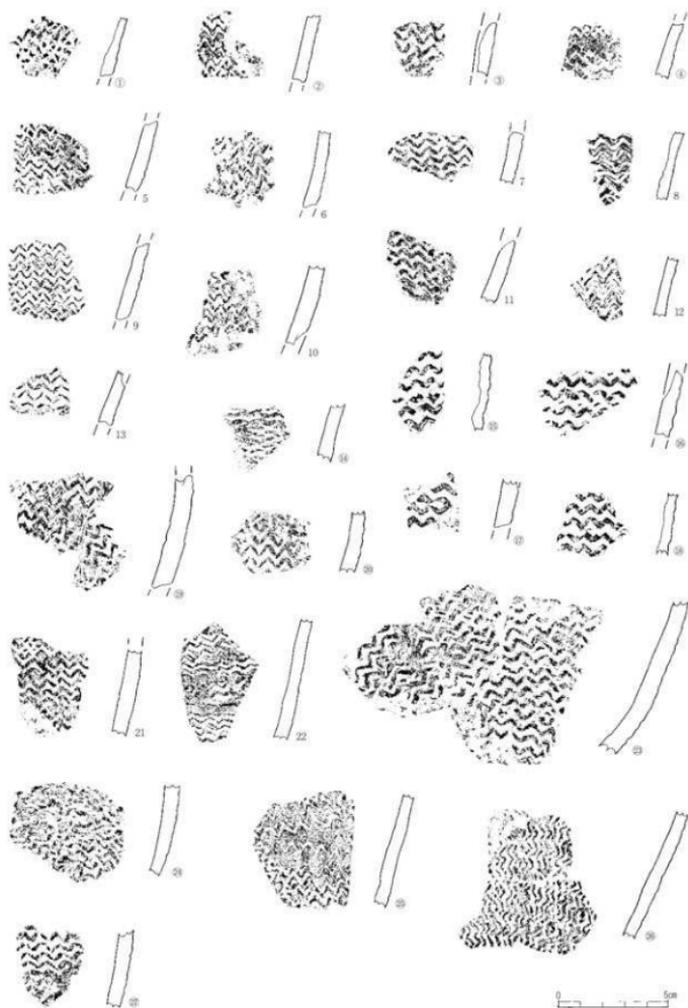
第200图 第1次調査北部調査区出土押型文(8)



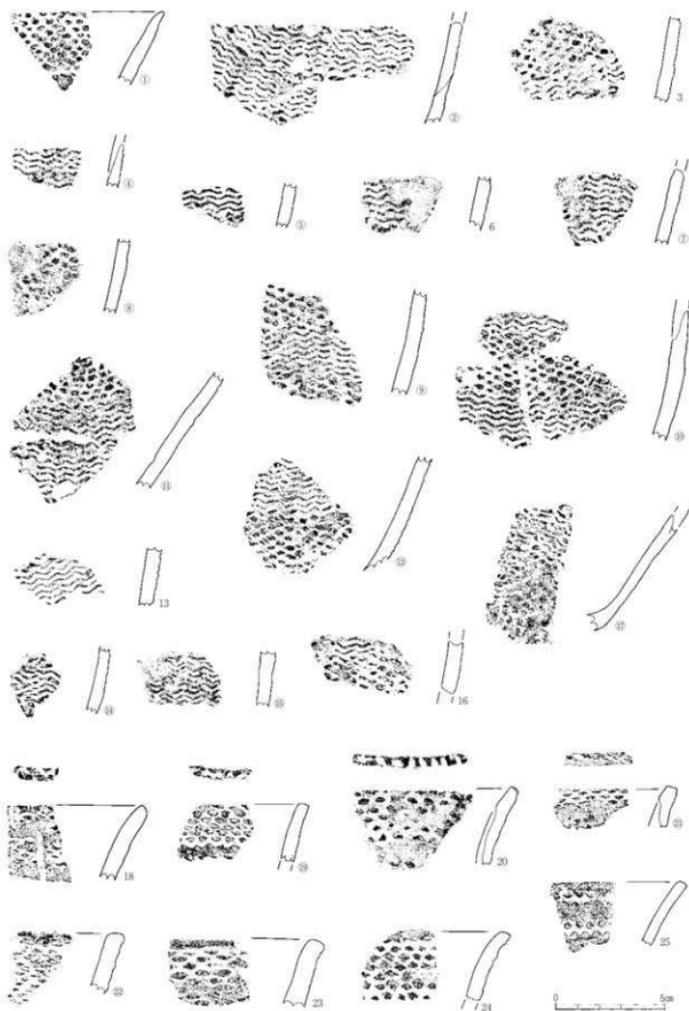
第201图 第1次調査北部調査区出土押型文(9)



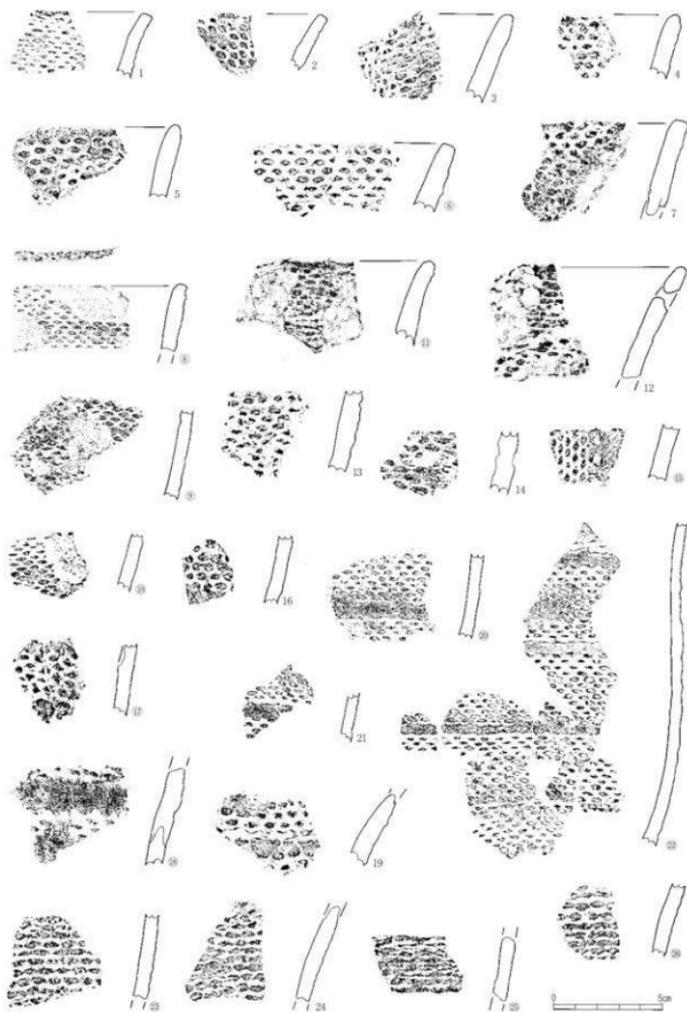
第202図 第1次調査北部調査区出土押型文(10)



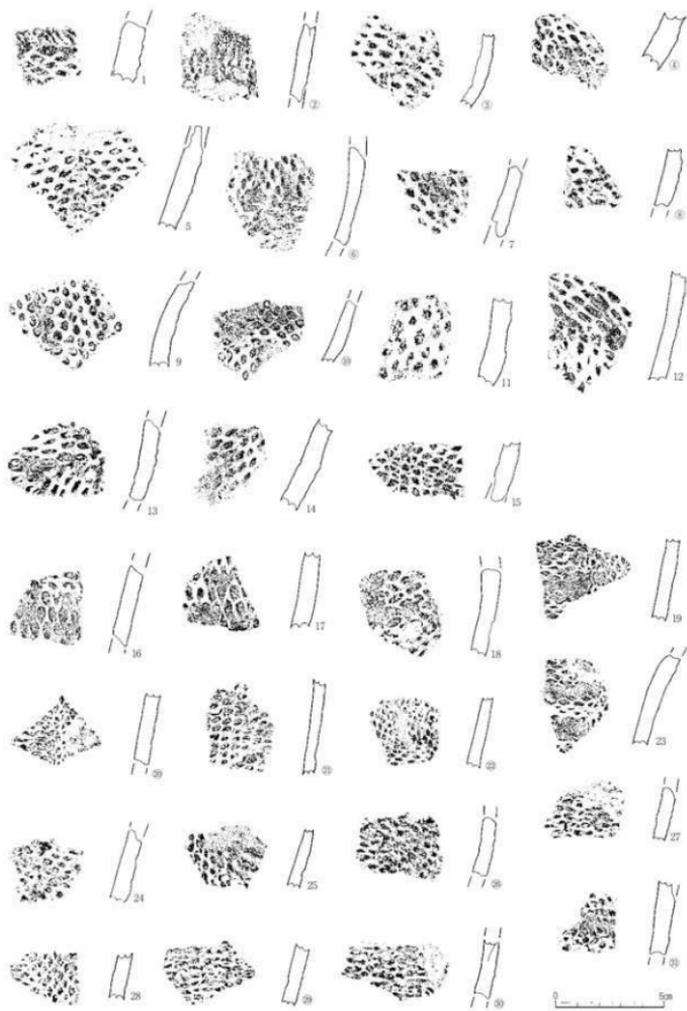
第203图 第1次调查北部调查区出土押型文(11)



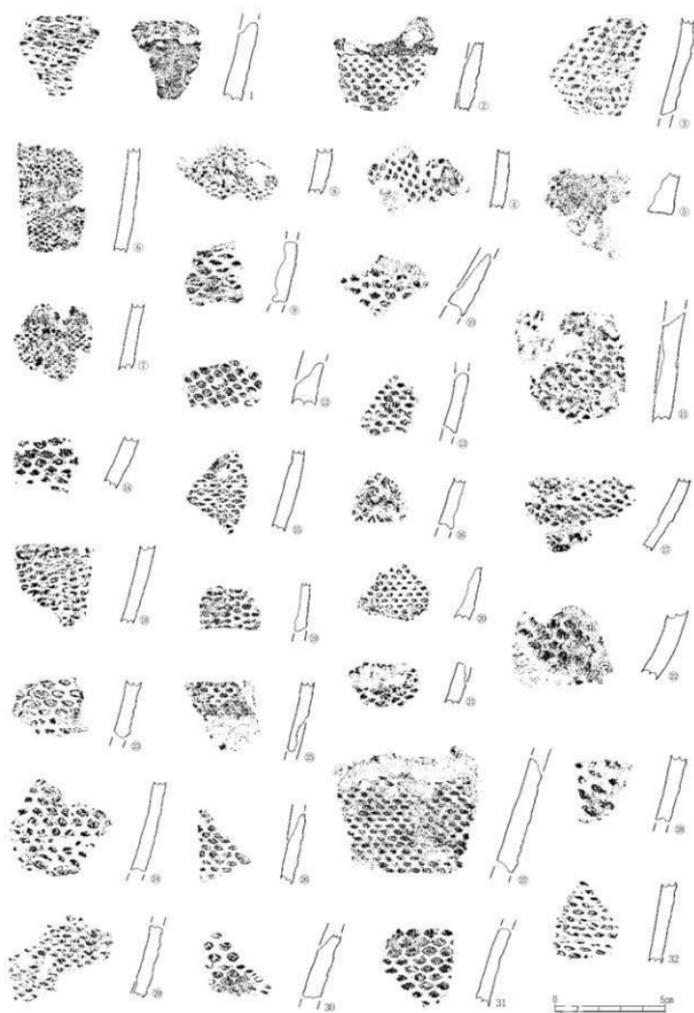
第204図 第1次調査北部調査区出土押型文(12)



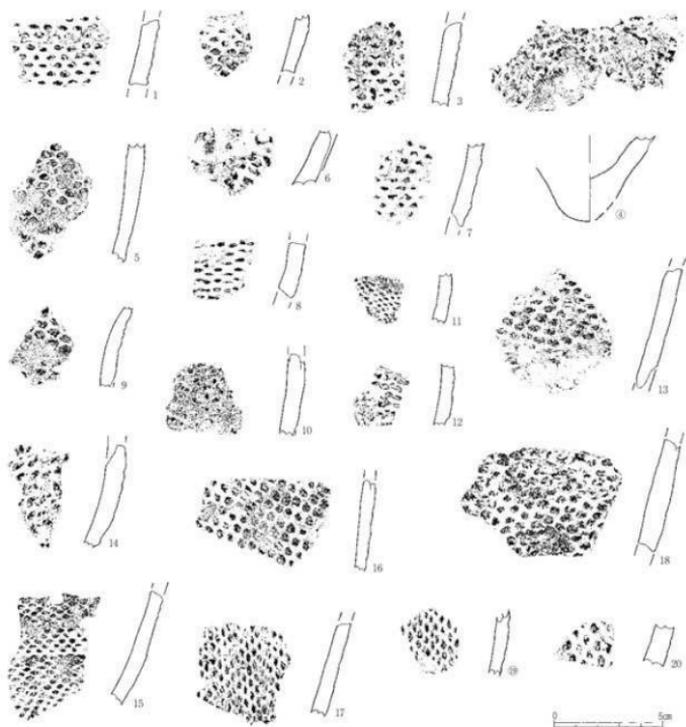
第205图 第1次調査北部調査区出土押型文(13)



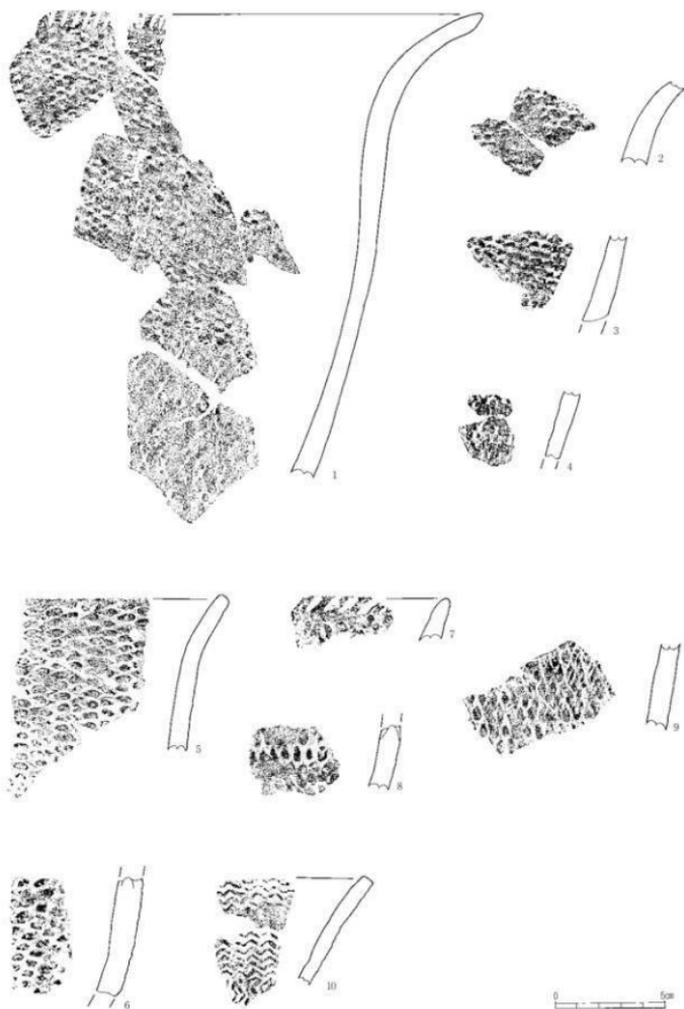
第206図 第1次調査北部調査区出土押型文(14)



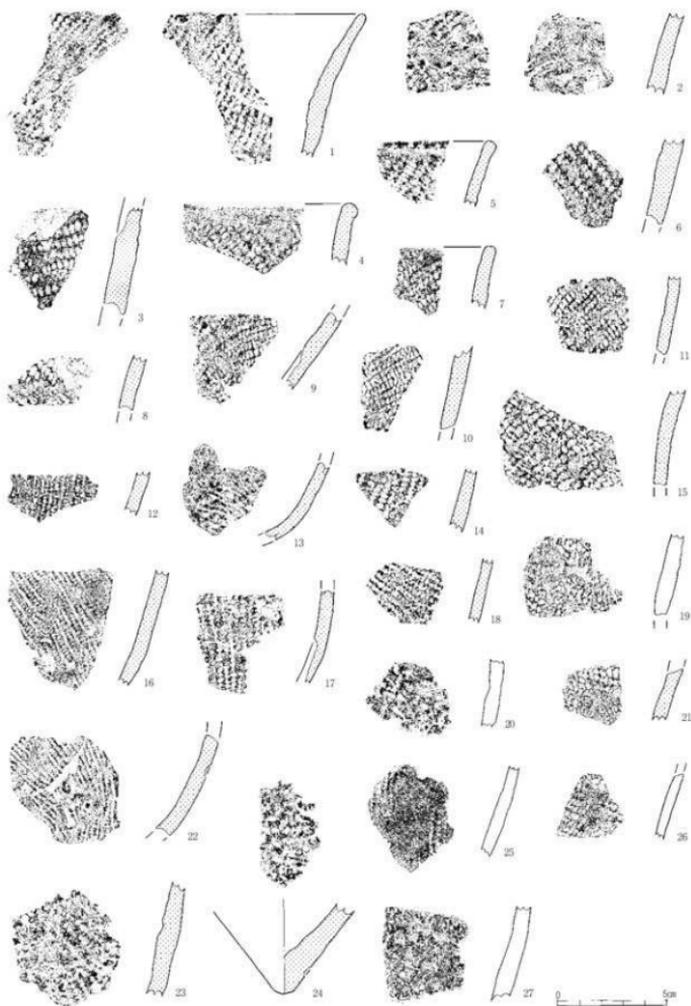
第207图 第1次调查北部调查区出土押型文(15)



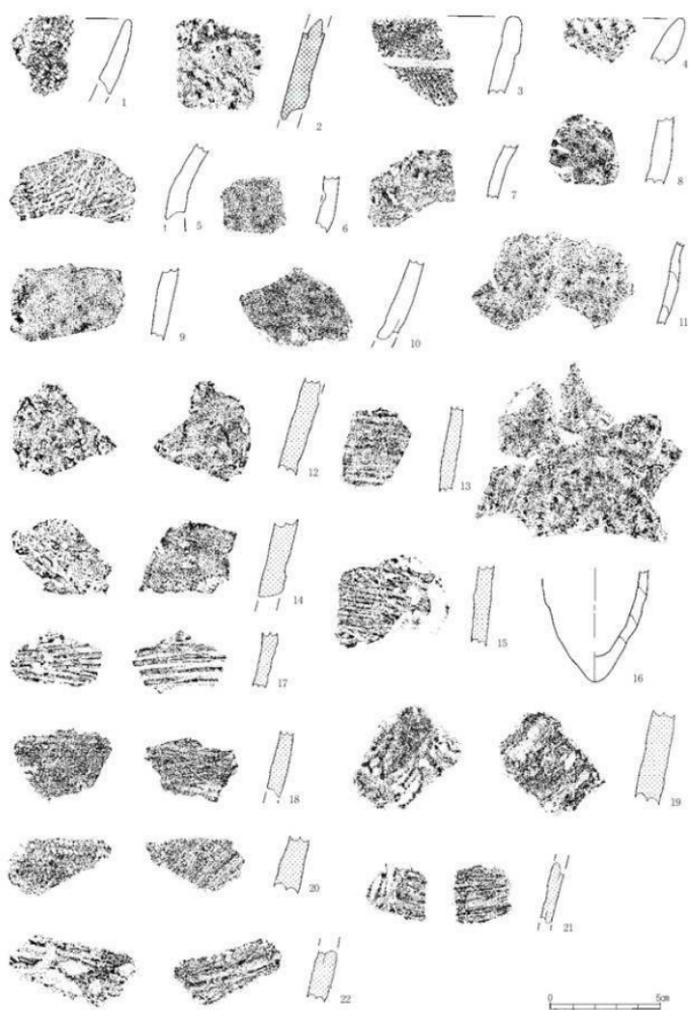
第208図 第1次調査北部調査区出土押型文(16)



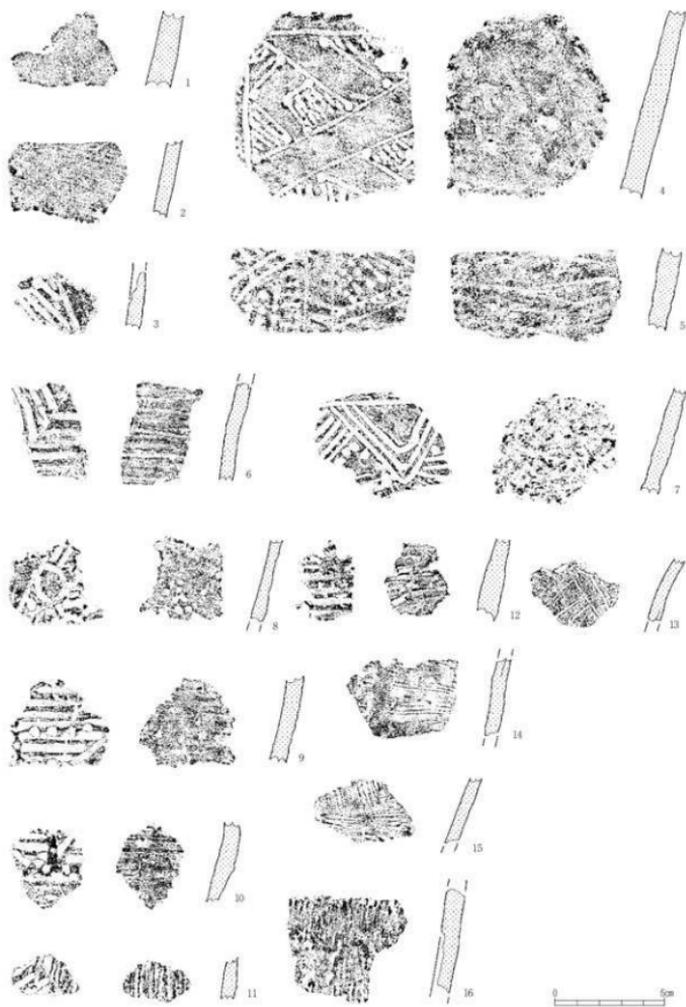
第209图 第3号集石直下出土押型文



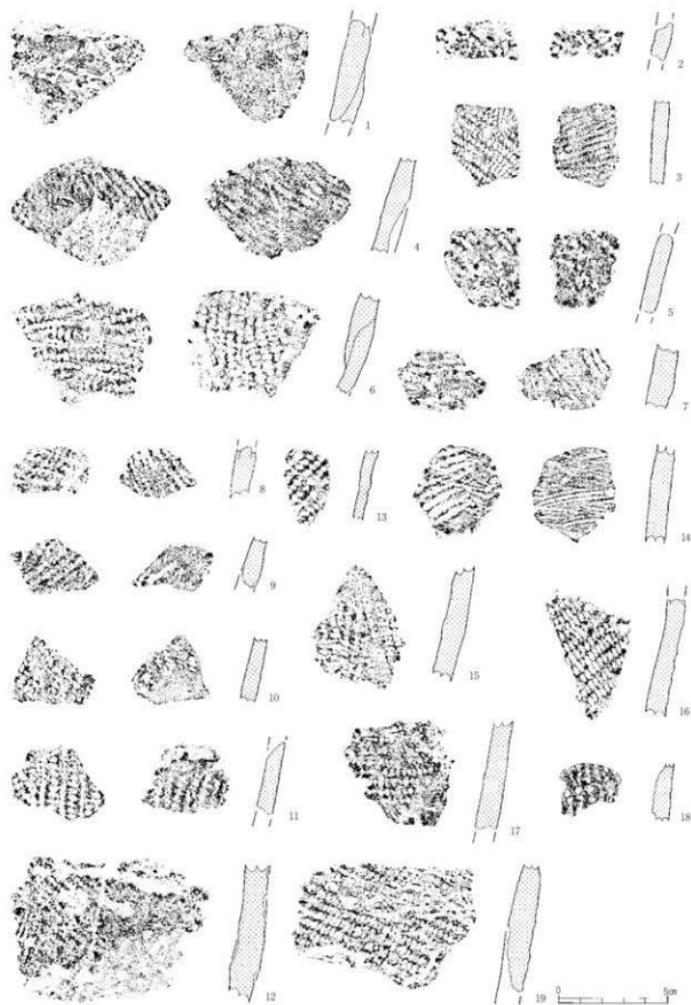
第210図 第2号塚群出土土器(1)



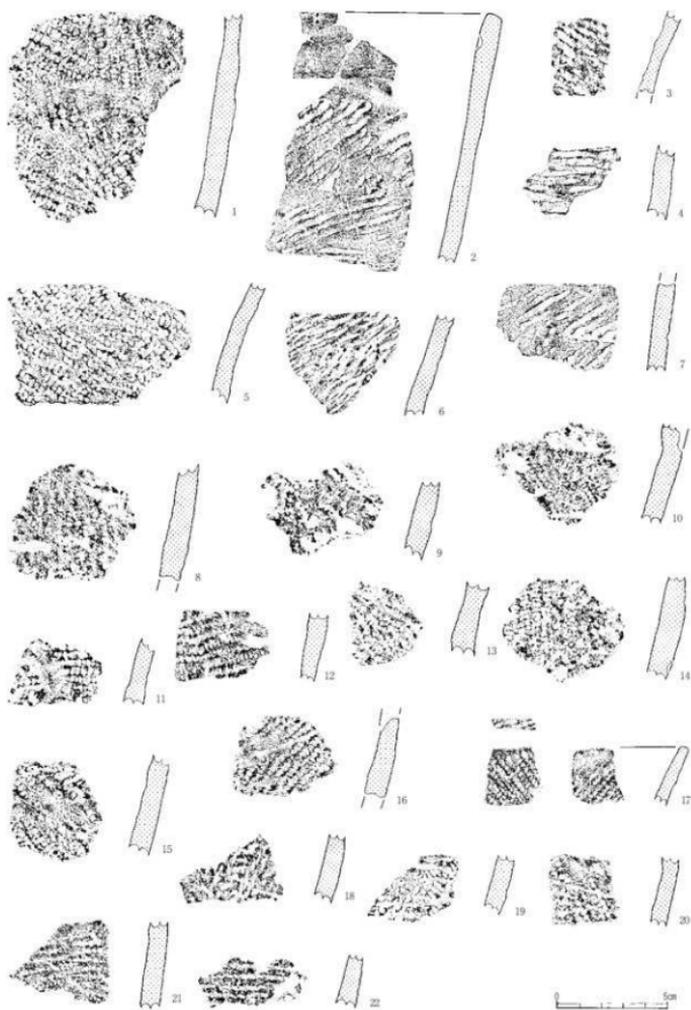
第211图 第2号群出土土器(2)



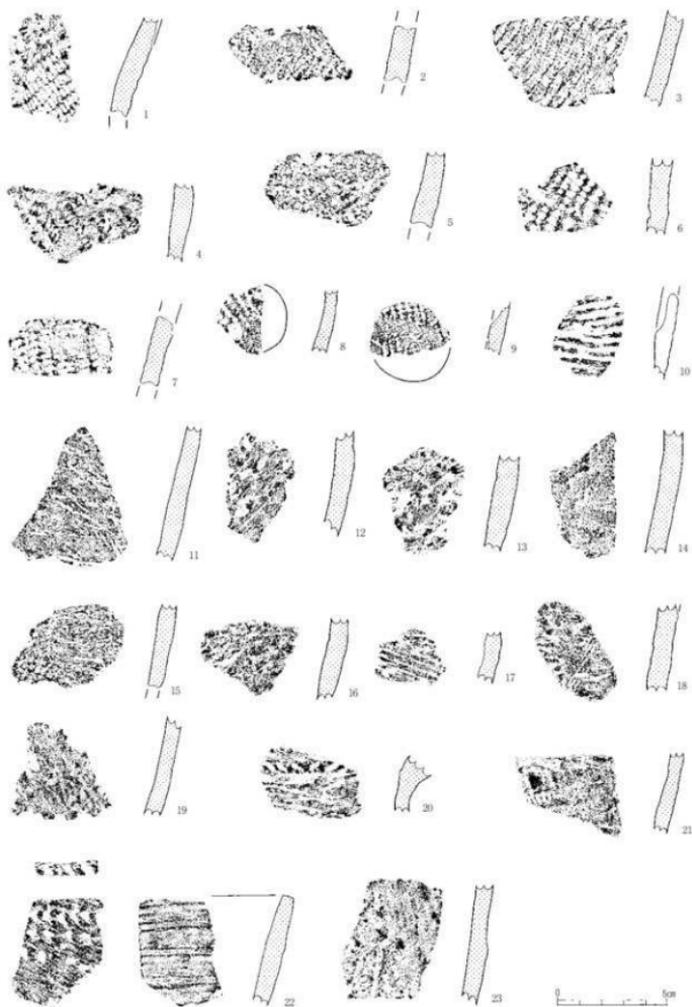
第212図 第2号塚群出土土器(3)



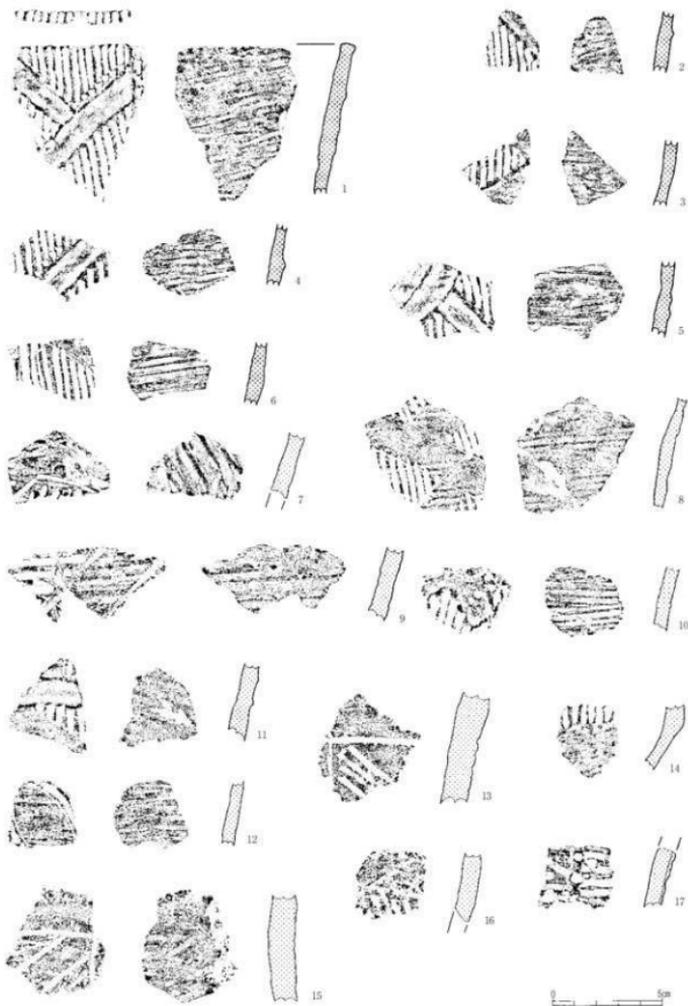
第213图 遺構外出土土器(1)



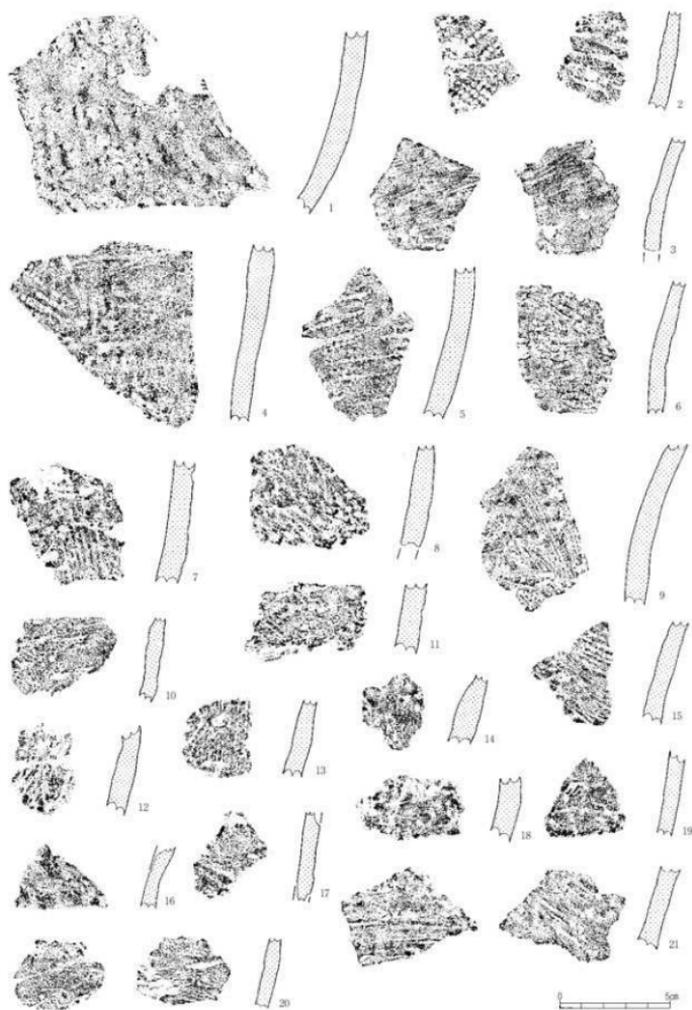
第214図 遺構外出土土器(2)



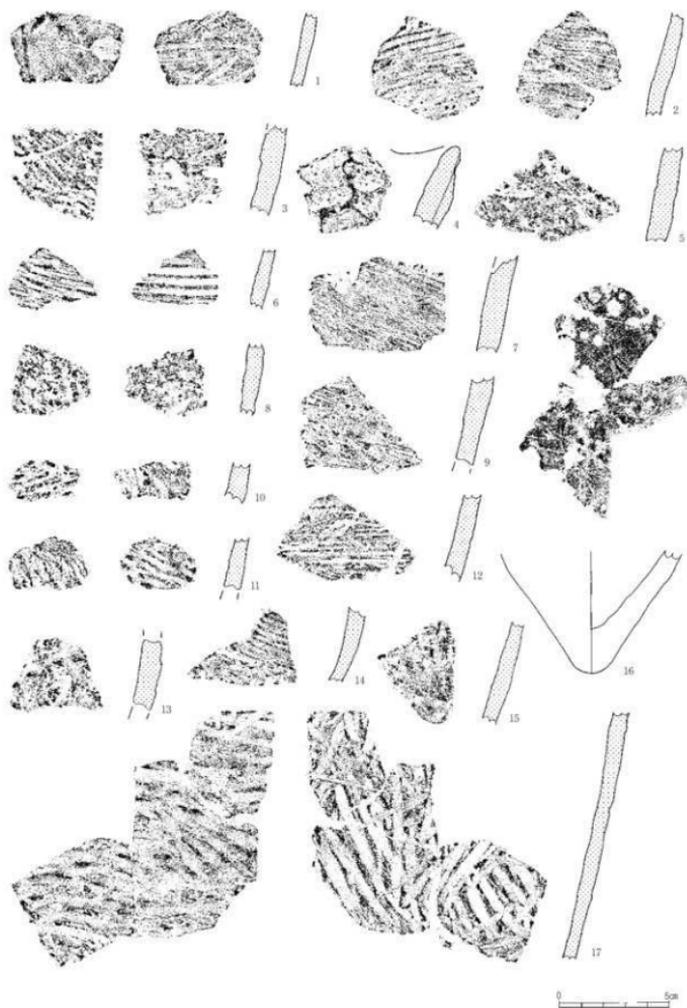
第215图 遺構外出土器(3)



第216図 遺構外出土土器(4)



第217图 遺構外出土土器(5)



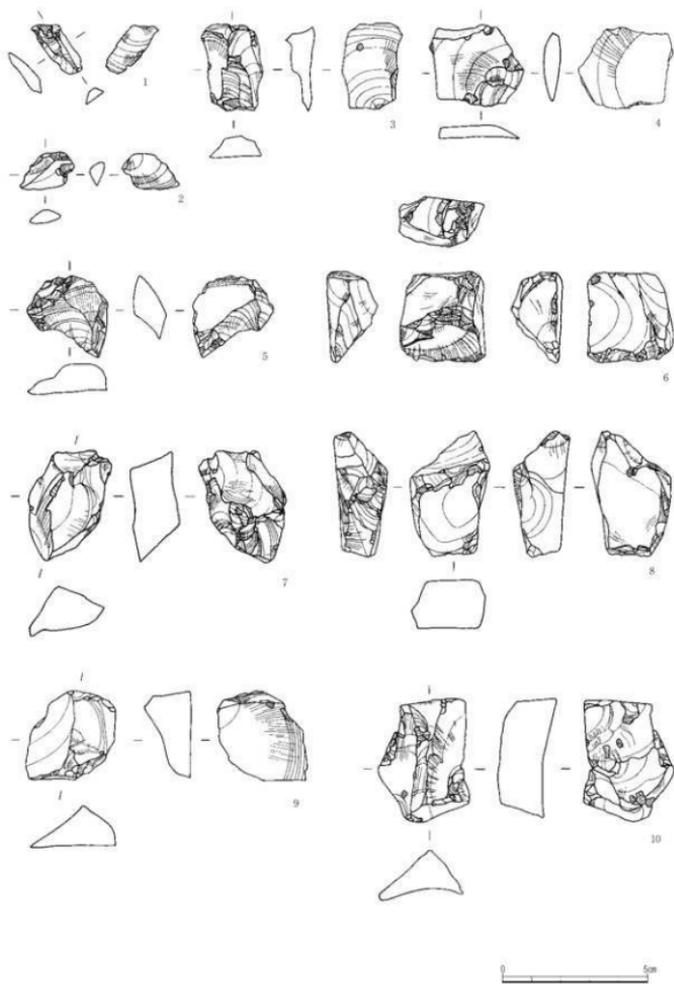
第218図 遺構外出土器(6)

第五章 遺構と遺物

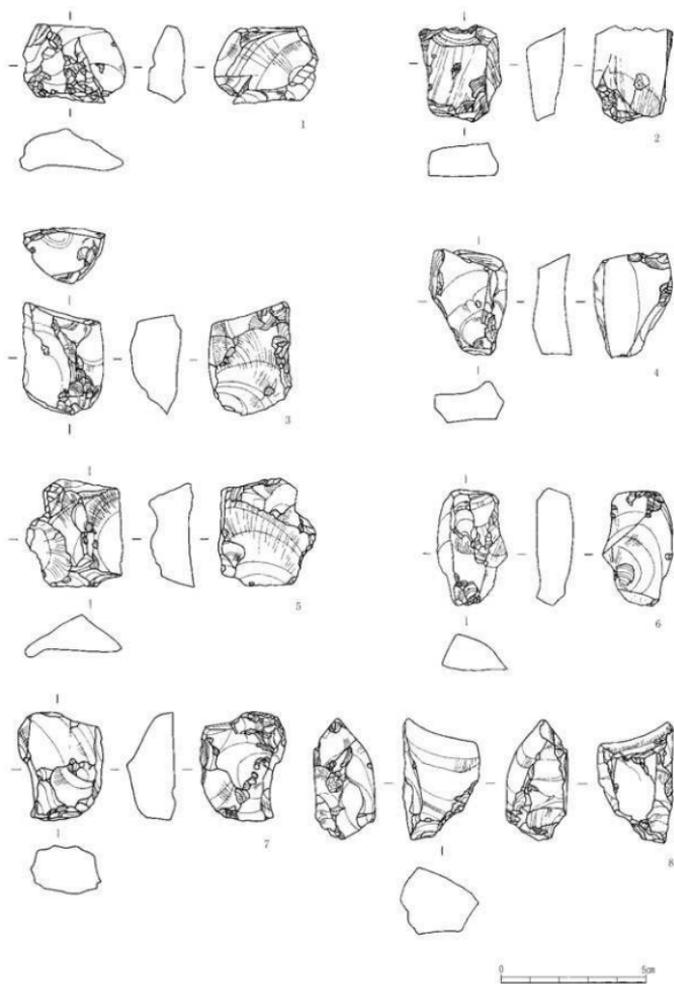
調査番号	遺構番号	調査年度	調査内容	高さ	幅	延長	構造	基	用途	遺物	備考
196	06		210				礎石				
196	07		210				礎石				
196	08		210				礎石				
196	09	4	7	207			礎石				
196	10	4	8	207	70		礎石				
196	11	4	8	207	76	6	礎石		2	内宮御行徳太刀遺文	
196	12	4	9	207	76	17	礎石				
196	13	1	5	1	207	76	礎石				
197	1	5	2	1	207	76	礎石				
197	2	5	3	207			礎石				
197	3	5	3	207			礎石				
197	4	5	3	207	76	7	礎石				
197	5						礎石				
197	6	3	4	207	76	48	礎石				
197	7	3	5	207	76	7	礎石		11		
197	8	3	6	207	76	7	礎石		21		
197	9	3	7	207	76	85	礎石		31	361	
197	10	3	8	207	76	85	礎石			352	
197	11			207			礎石				
197	12	5	8	207	76	84	礎石			331	
197	13			207			礎石				
197	14	5	9	207	76	163	礎石				
197	15			207			礎石				
197	16			207			礎石		22	361	
197	17	5	10	207	76	117	礎石				
197	18			207			礎石				
197	19			207			礎石				
197	20			207			礎石				
197	21			207			礎石				
197	22			207			礎石				
197	23			207			礎石				
197	24			207			礎石				
197	25			207			礎石				
197	26			207			礎石		17	361	
197	27			207			礎石				
198	1			207			礎石				
198	2			207			礎石				
198	3			207			礎石				
198	4			207			礎石				
198	5			207			礎石				
198	6			207			礎石				
198	7			207			礎石				
198	8			207			礎石				
198	9			207			礎石				
198	10			207			礎石				
199	1	7	1	203	76	104	礎石		33		
199	2			203			礎石				
199	3			203			礎石				
199	4			203			礎石		21	368	
199	5			203			礎石			368	
199	6			203			礎石			368	
199	7	7	3	203	76	87	礎石				
199	8	5	4	203	76	113	礎石				
199	9	7	5	203	76	13	礎石		5	361	
199	10	7	6	203	76	13	礎石				
199	11			203			礎石				
199	12	1	7	6	203	76	128	礎石	4	361	
199	13	7	8	203	76	169	礎石				
199	14	7	9	203	76	182	礎石		4	361	
199	15	7	10	203	76	202	礎石				
199	16	7	11	203	76	215	礎石		21	351	
199	17	1	13	203	76	4	礎石		1	376	
199	18	2	14	203	76	31	礎石		1	376	
199	19	2	15	203	76	46	礎石		1	365	
199	20	1	16	203	76	55	礎石		1	367	
199	21	1	17	203	76	66	礎石		1	367	
199	22	1	18	203	76	85	礎石		3	354	
199	23	1	19	203	76	100	礎石		3	354	
199	24	1	20	203	76	115	礎石		3	354	
199	25	1	21	203	76	137	礎石		3	354	
199	26	1	22	203	76	160	礎石		3	354	
199	27	1	23	203	76	182	礎石		3	354	
199	28	1	24	203	76	205	礎石		3	354	
199	29	1	25	203	76	228	礎石		3	354	
199	30	1	26	203	76	251	礎石		3	354	
199	31	1	27	203	76	274	礎石		3	354	
199	32	1	28	203	76	297	礎石		3	354	
199	33	1	29	203	76	320	礎石		3	354	
199	34	1	30	203	76	343	礎石		3	354	
199	35	1	31	203	76	366	礎石		3	354	
199	36	1	32	203	76	389	礎石		3	354	
199	37	1	33	203	76	412	礎石		3	354	
199	38	1	34	203	76	435	礎石		3	354	
199	39	1	35	203	76	458	礎石		3	354	
199	40	1	36	203	76	481	礎石		3	354	
199	41	1	37	203	76	504	礎石		3	354	
199	42	1	38	203	76	527	礎石		3	354	
199	43	1	39	203	76	550	礎石		3	354	
199	44	1	40	203	76	573	礎石		3	354	
199	45	1	41	203	76	596	礎石		3	354	
199	46	1	42	203	76	619	礎石		3	354	
199	47	1	43	203	76	642	礎石		3	354	
199	48	1	44	203	76	665	礎石		3	354	
199	49	1	45	203	76	688	礎石		3	354	
199	50	1	46	203	76	711	礎石		3	354	
199	51	1	47	203	76	734	礎石		3	354	
199	52	1	48	203	76	757	礎石		3	354	
199	53	1	49	203	76	780	礎石		3	354	
199	54	1	50	203	76	803	礎石		3	354	
199	55	1	51	203	76	826	礎石		3	354	
199	56	1	52	203	76	849	礎石		3	354	
199	57	1	53	203	76	872	礎石		3	354	
199	58	1	54	203	76	895	礎石		3	354	
199	59	1	55	203	76	918	礎石		3	354	
199	60	1	56	203	76	941	礎石		3	354	
199	61	1	57	203	76	964	礎石		3	354	
199	62	1	58	203	76	987	礎石		3	354	
199	63	1	59	203	76	1010	礎石		3	354	
199	64	1	60	203	76	1033	礎石		3	354	
199	65	1	61	203	76	1056	礎石		3	354	
199	66	1	62	203	76	1079	礎石		3	354	
199	67	1	63	203	76	1102	礎石		3	354	
199	68	1	64	203	76	1125	礎石		3	354	
199	69	1	65	203	76	1148	礎石		3	354	
199	70	1	66	203	76	1171	礎石		3	354	
199	71	1	67	203	76	1194	礎石		3	354	
199	72	1	68	203	76	1217	礎石		3	354	
199	73	1	69	203	76	1240	礎石		3	354	
199	74	1	70	203	76	1263	礎石		3	354	
199	75	1	71	203	76	1286	礎石		3	354	
199	76	1	72	203	76	1309	礎石		3	354	
199	77	1	73	203	76	1332	礎石		3	354	
199	78	1	74	203	76	1355	礎石		3	354	
199	79	1	75	203	76	1378	礎石		3	354	
199	80	1	76	203	76	1401	礎石		3	354	
199	81	1	77	203	76	1424	礎石		3	354	
199	82	1	78	203	76	1447	礎石		3	354	
199	83	1	79	203	76	1470	礎石		3	354	
199	84	1	80	203	76	1493	礎石		3	354	
199	85	1	81	203	76	1516	礎石		3	354	
199	86	1	82	203	76	1539	礎石		3	354	
199	87	1	83	203	76	1562	礎石		3	354	
199	88	1	84	203	76	1585	礎石		3	354	
199	89	1	85	203	76	1608	礎石		3	354	
199	90	1	86	203	76	1631	礎石		3	354	
199	91	1	87	203	76	1654	礎石		3	354	
199	92	1	88	203	76	1677	礎石		3	354	
199	93	1	89	203	76	1700	礎石		3	354	
199	94	1	90	203	76	1723	礎石		3	354	
199	95	1	91	203	76	1746	礎石		3	354	
199	96	1	92	203	76	1769	礎石		3	354	
199	97	1	93	203	76	1792	礎石		3	354	
199	98	1	94	203	76	1815	礎石		3	354	
199	99	1	95	203	76	1838	礎石		3	354	
199	100	1	96	203	76	1861	礎石		3	354	
199	101	1	97	203	76	1884	礎石		3	354	
199	102	1	98	203	76	1907	礎石		3	354	
199	103	1	99	203	76	1930	礎石		3	354	
199	104	1	100	203	76	1953	礎石		3	354	
199	105	1	101	203	76	1976	礎石		3	354	
199	106	1	102	203	76	1999	礎石		3	354	
199	107	1	103	203	76	2022	礎石		3	354	
19											



第219図 第1号ブロック出土石器(1)



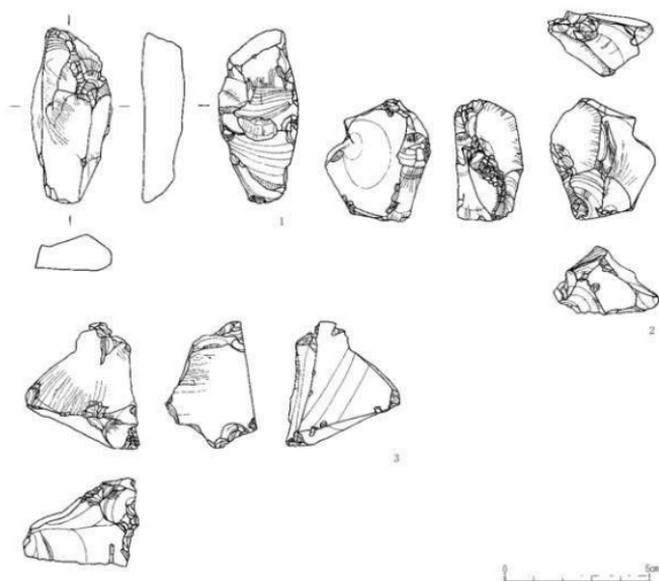
第220図 第1号ブロック出土石器(2)



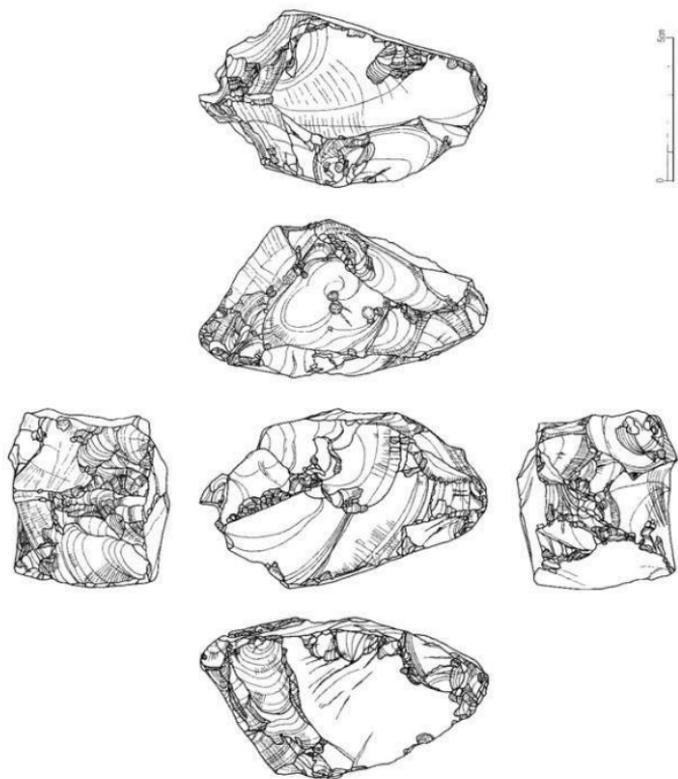
第221図 第1号ブロック出土石器(3)



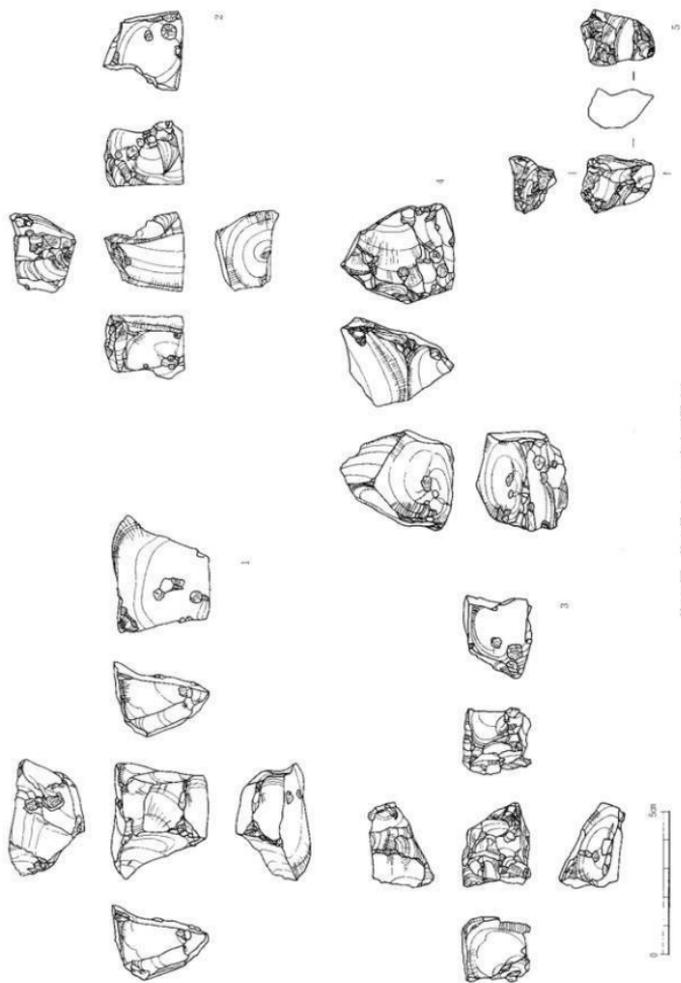
第222図 第1号ブロック出土石器(4)



第223図 第1号ブロック出土石器(5)



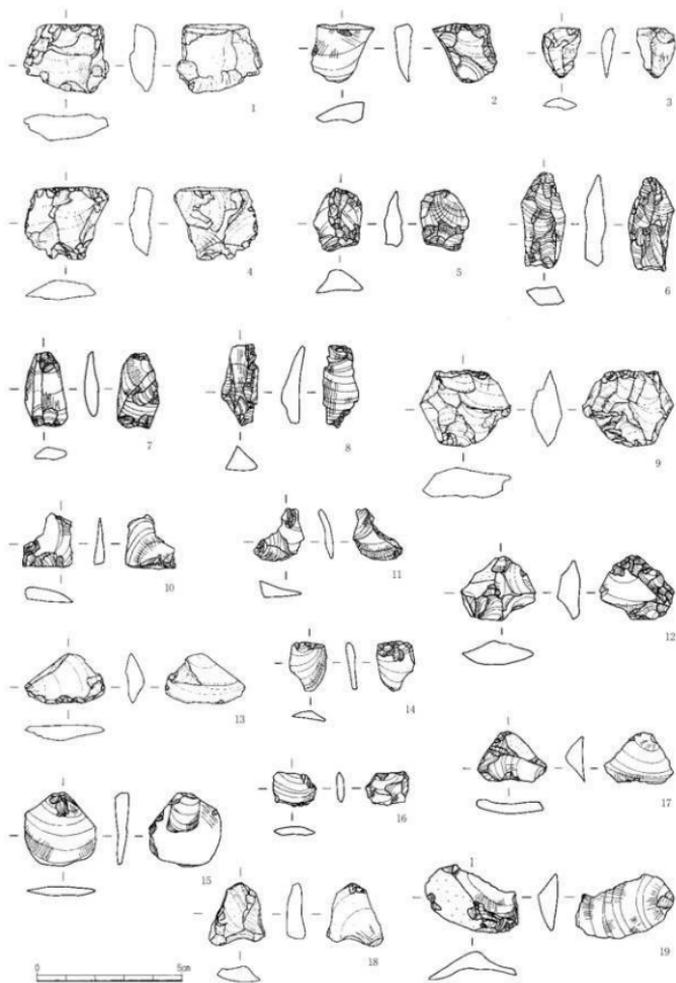
第224図 第2号プロット出土石器(1)



第225図 第2号プロット出土石器(2)



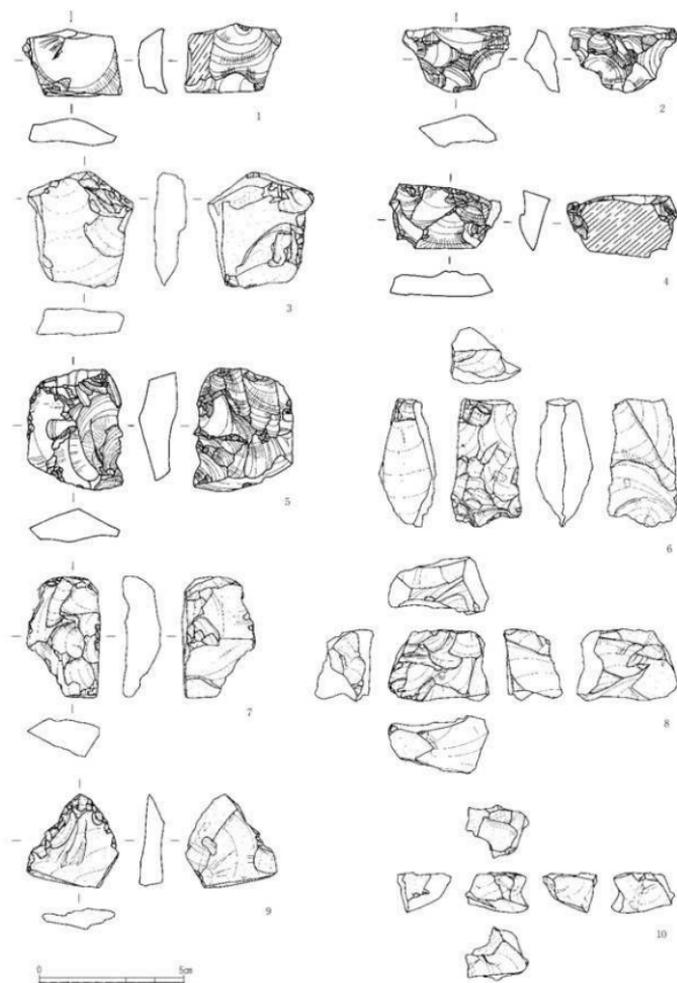
第226图 第2号裸群出土石器(1)



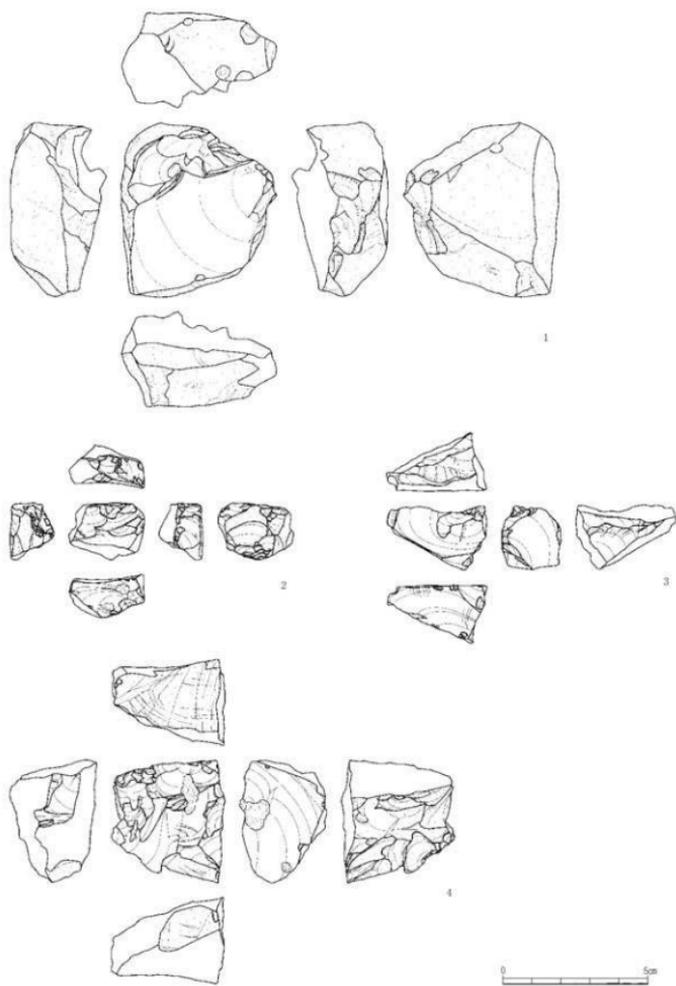
第227図 第2号裸群出土石器(2)



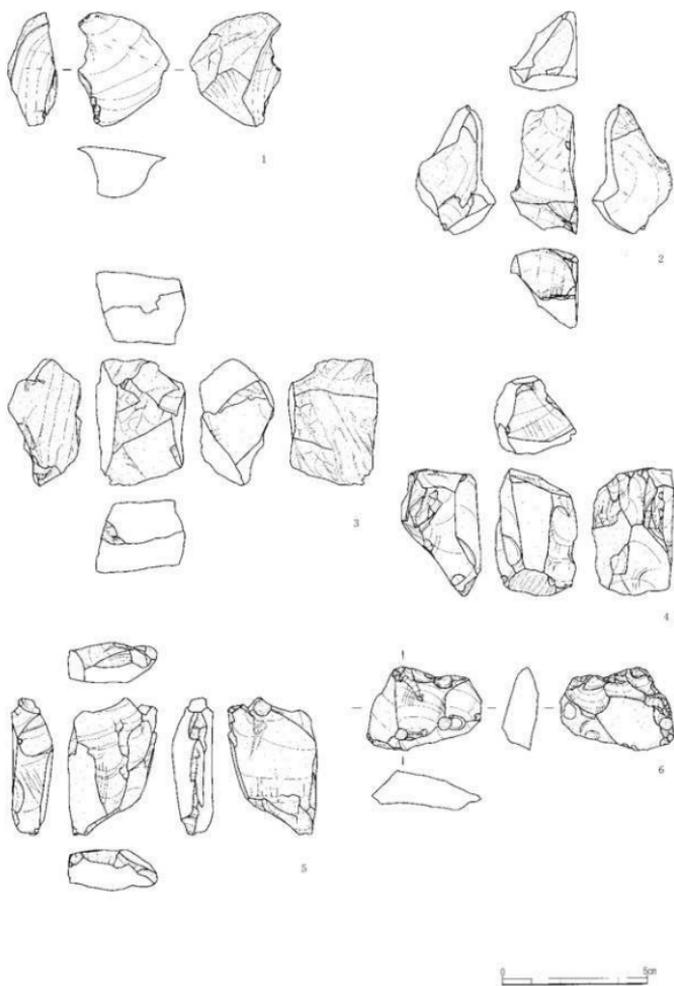
第228图 第2号群出土石器(3)



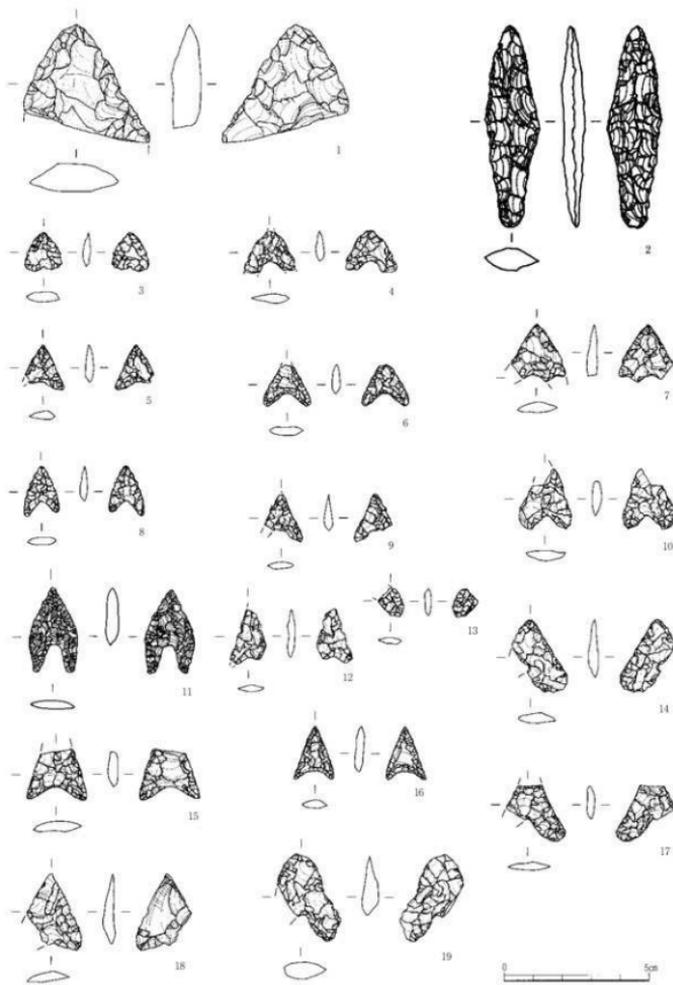
第229図 第2号裸群出土石器(4)



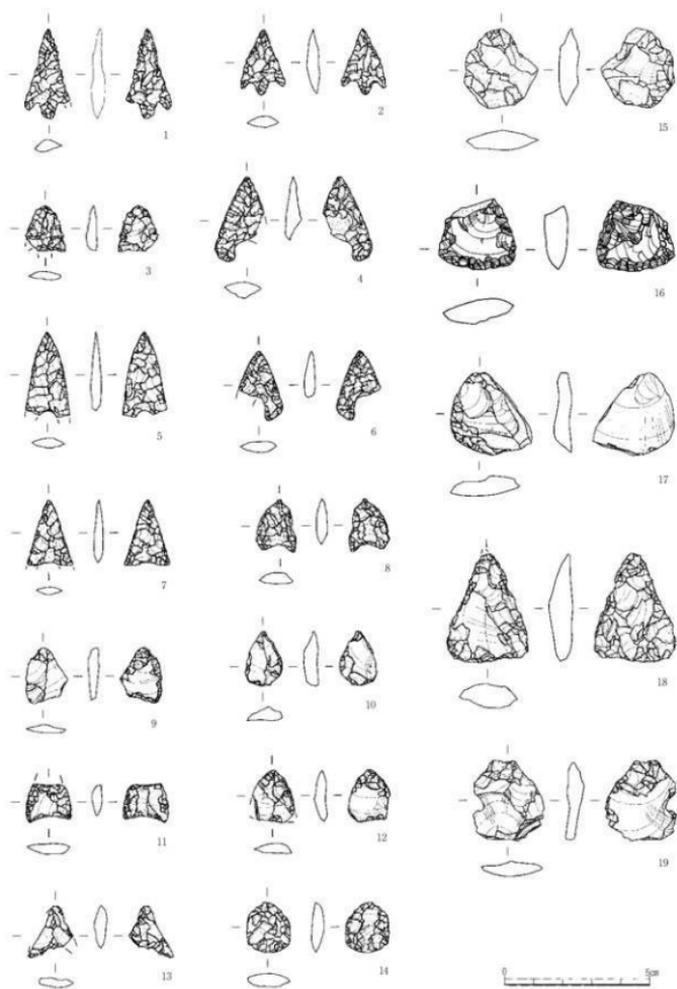
第230图 第2号群出土石器(5)



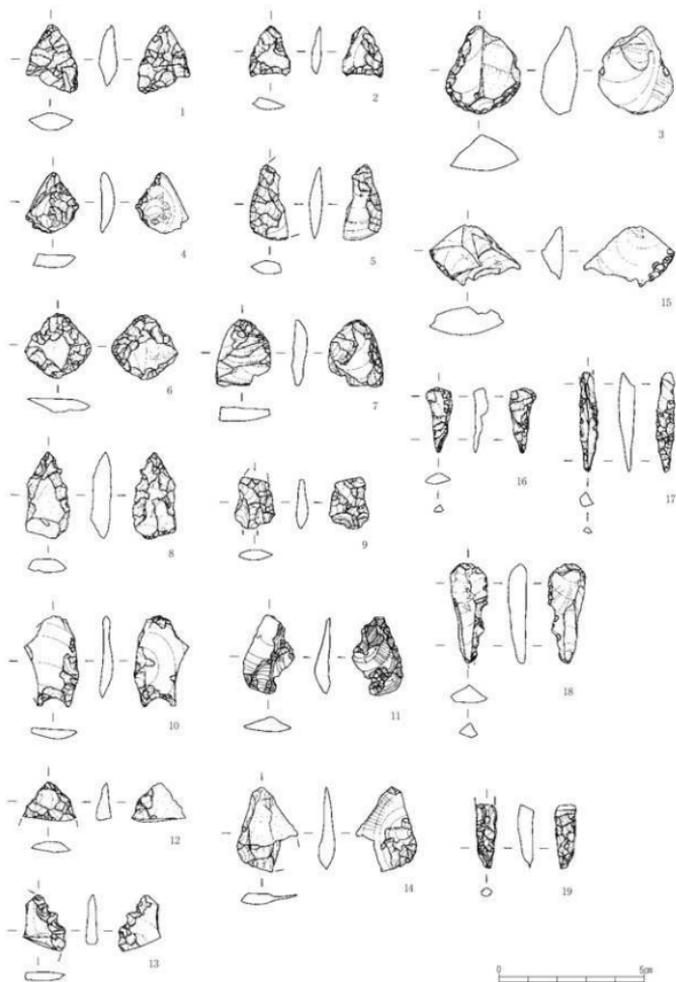
第231図 第2号塚群出土石器(6)



第232図 遺構外出土石器(1)



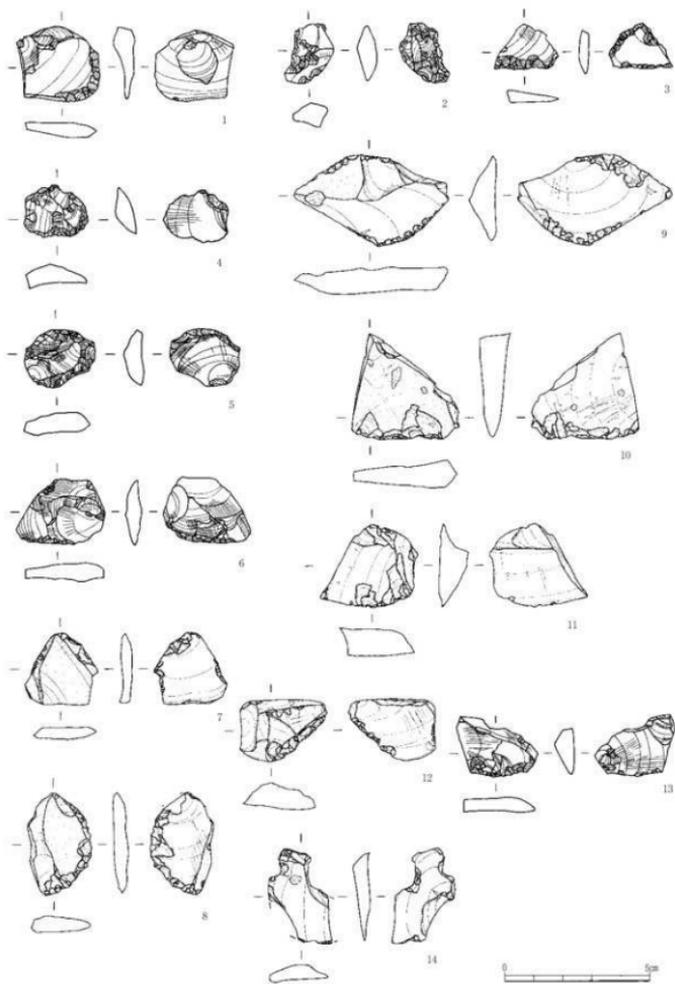
第233図 遺構外出土石器(2)



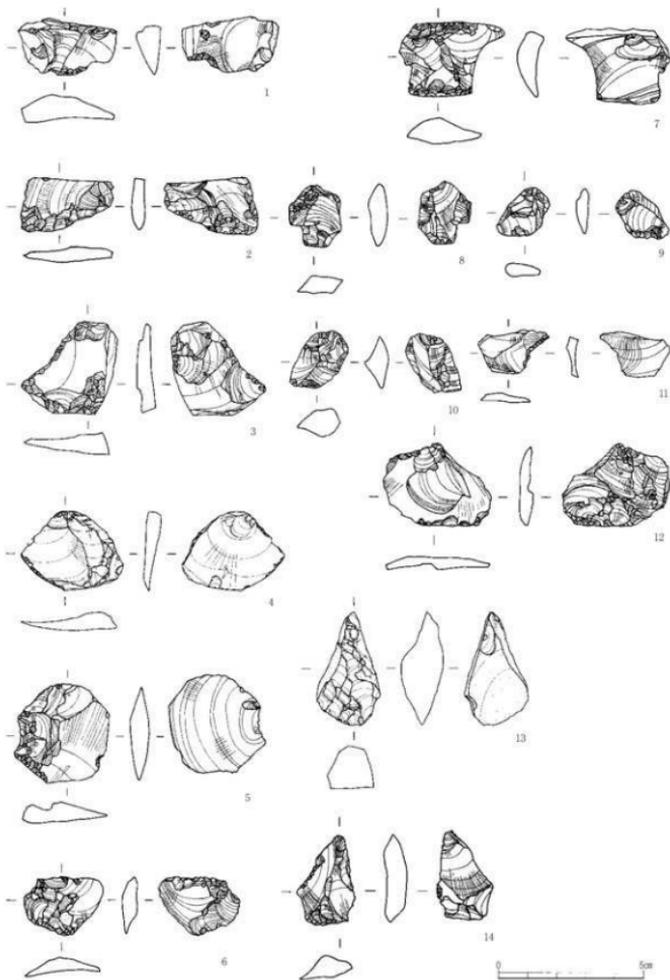
第234图 遺構外出土石器(3)



第235図 遺構外出土石器(4)



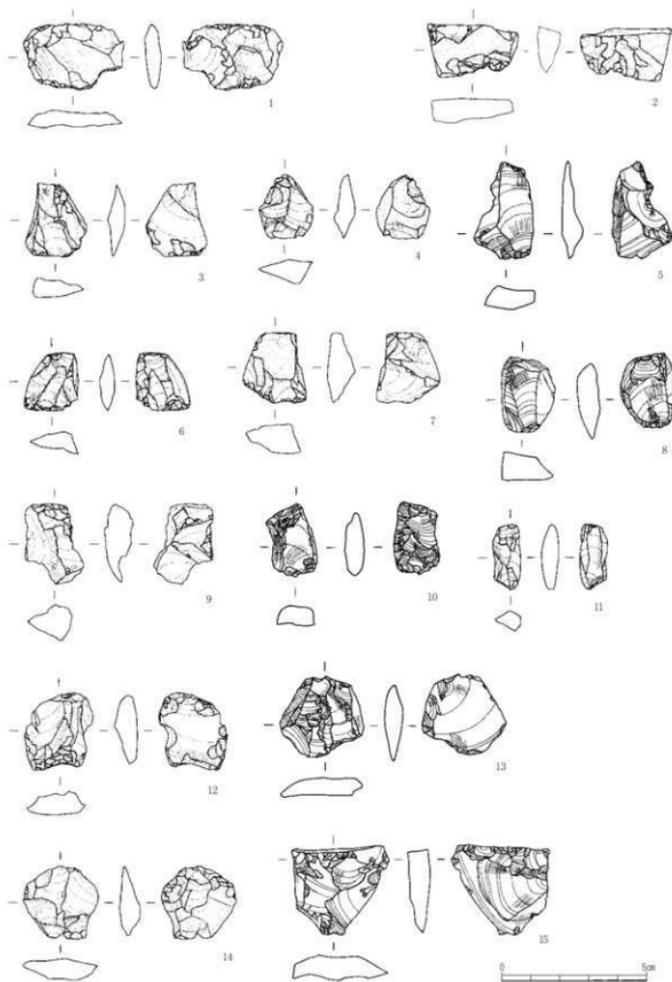
第236图 遺構外出土石器(5)



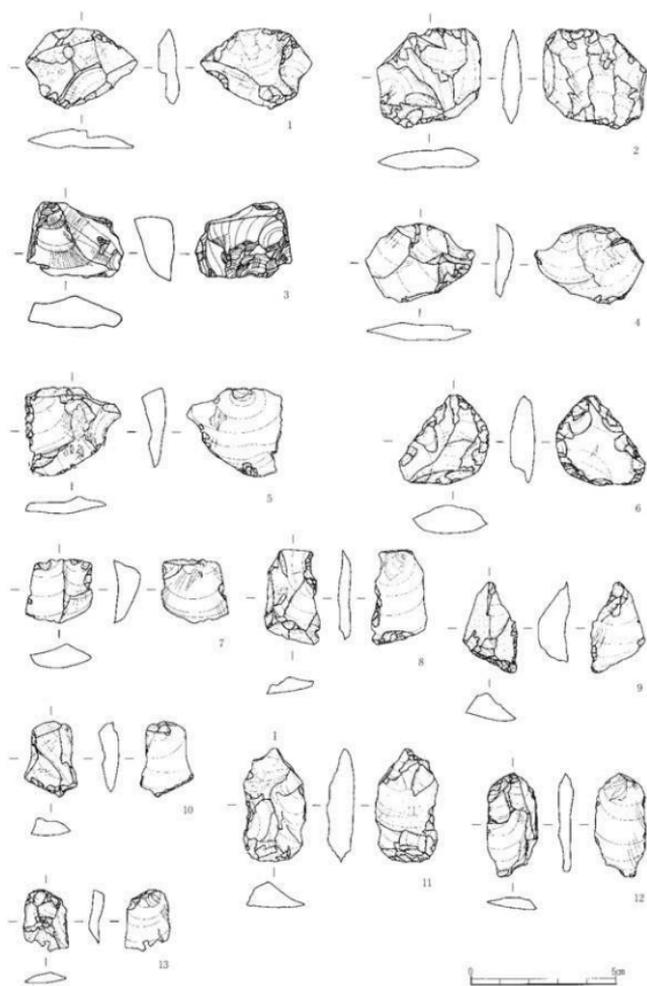
第237図 遺構外出土石器(6)



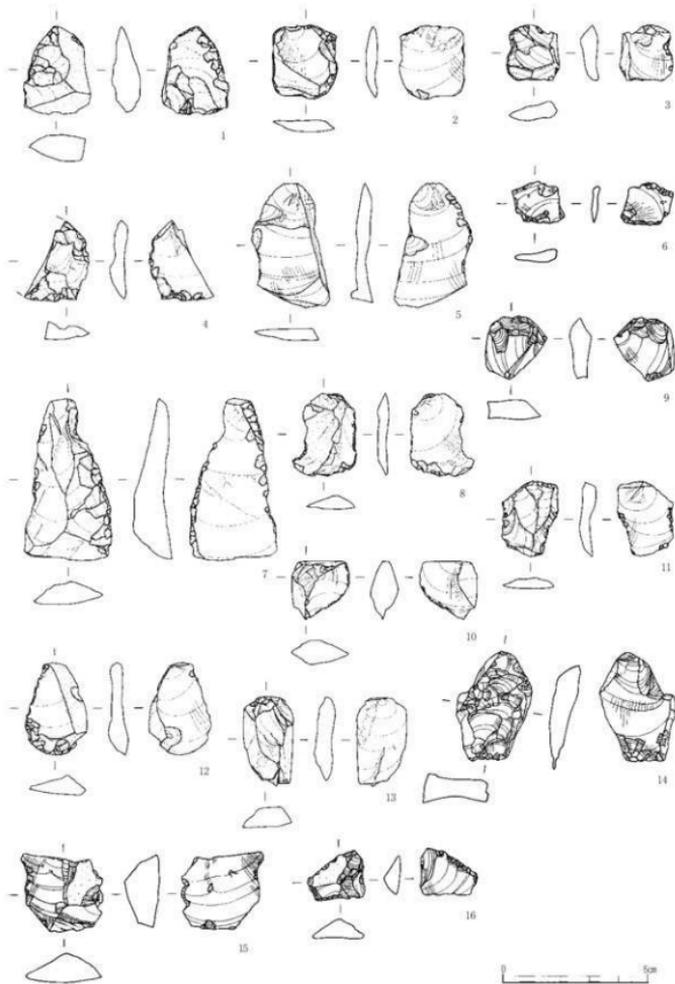
第238回 遺構外出土石器 (7)



第239図 遺構外出土石器(8)



第240图 遺構外出土石器(9)



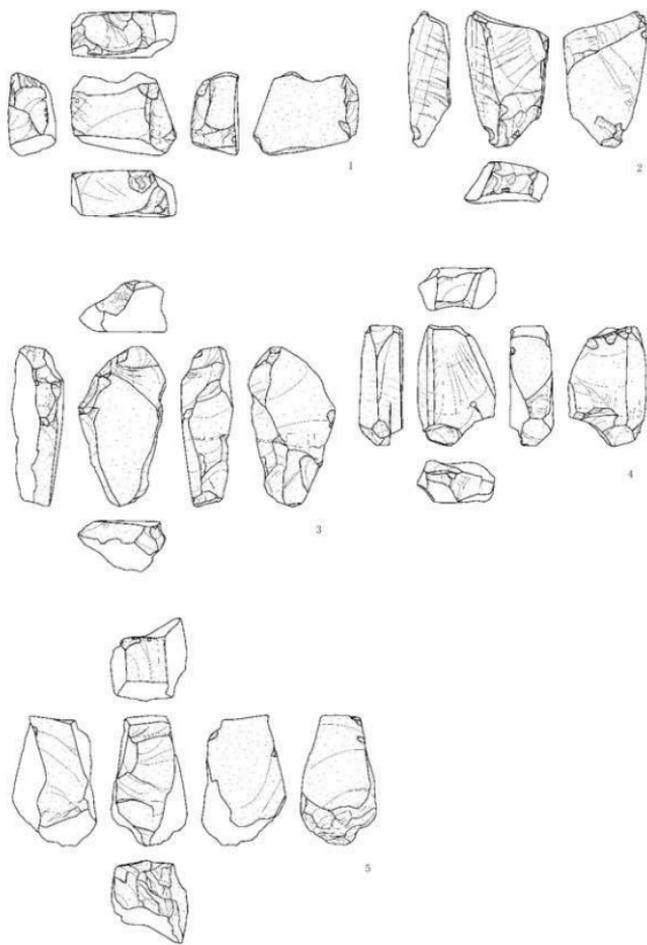
第241图 遺構外出土石器(10)



第242图 禮群外出土石器(11)



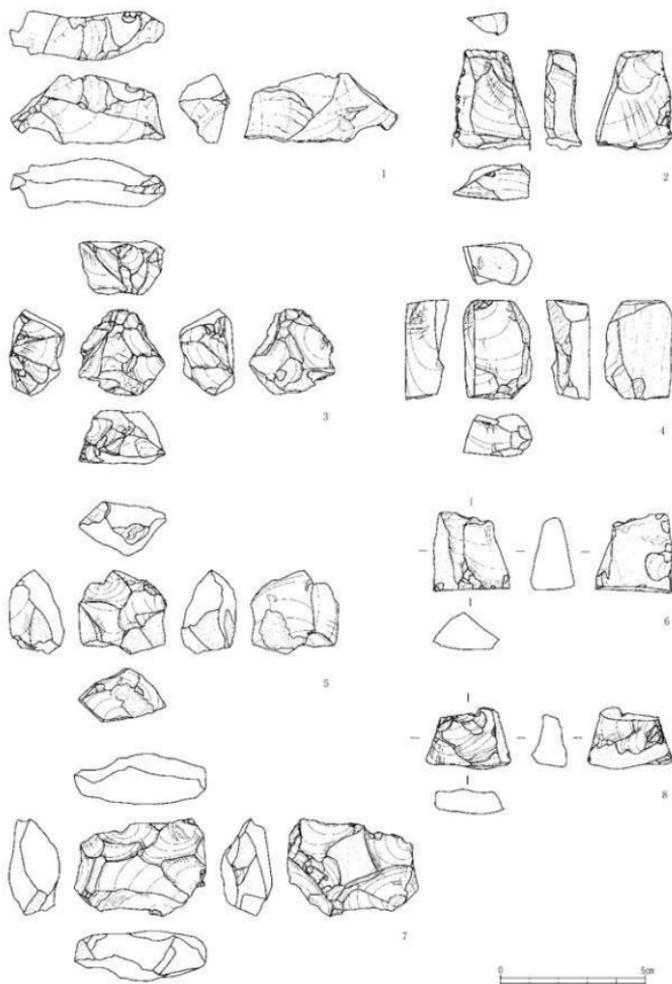
第243回 遺構外出土石器(12)



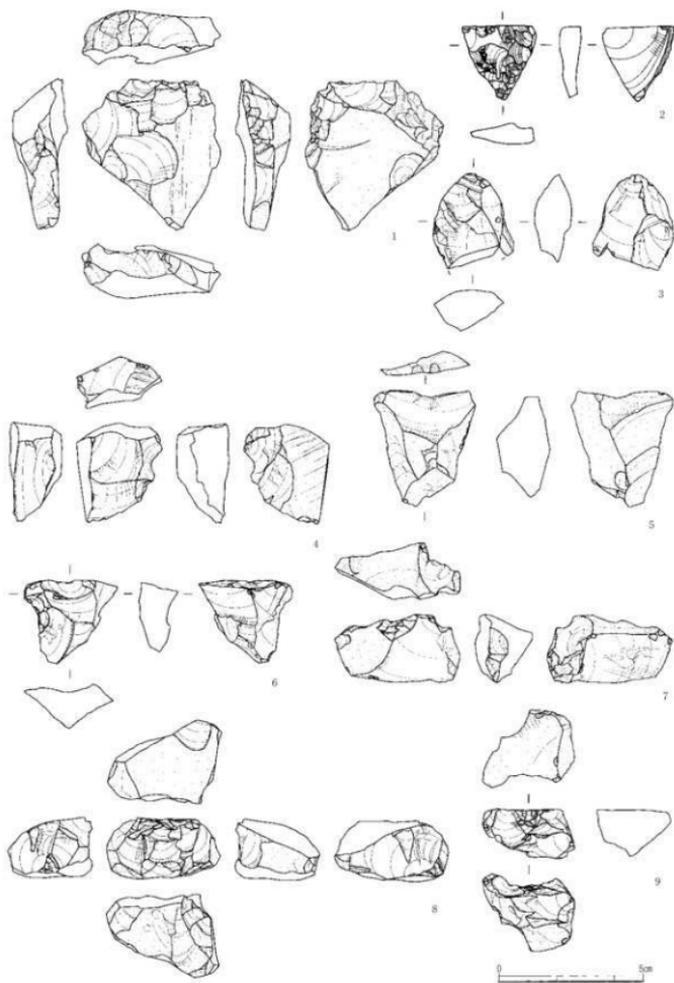
第244图 遺構外出土石器(13)



第245図 遺構外出土石器(14)



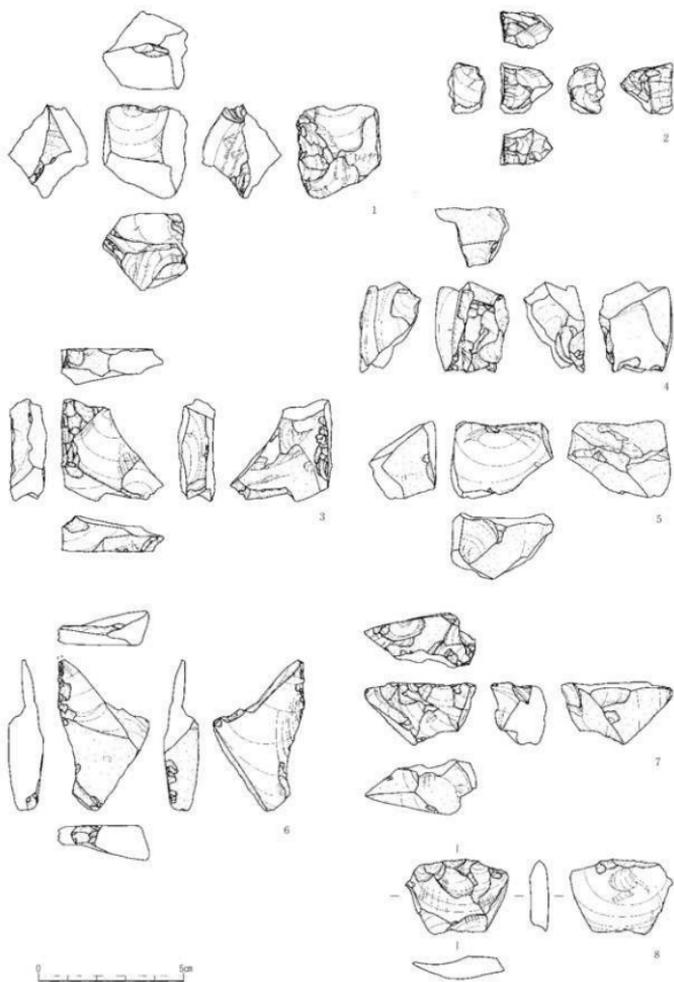
第246图 遺構外出土石器(15)



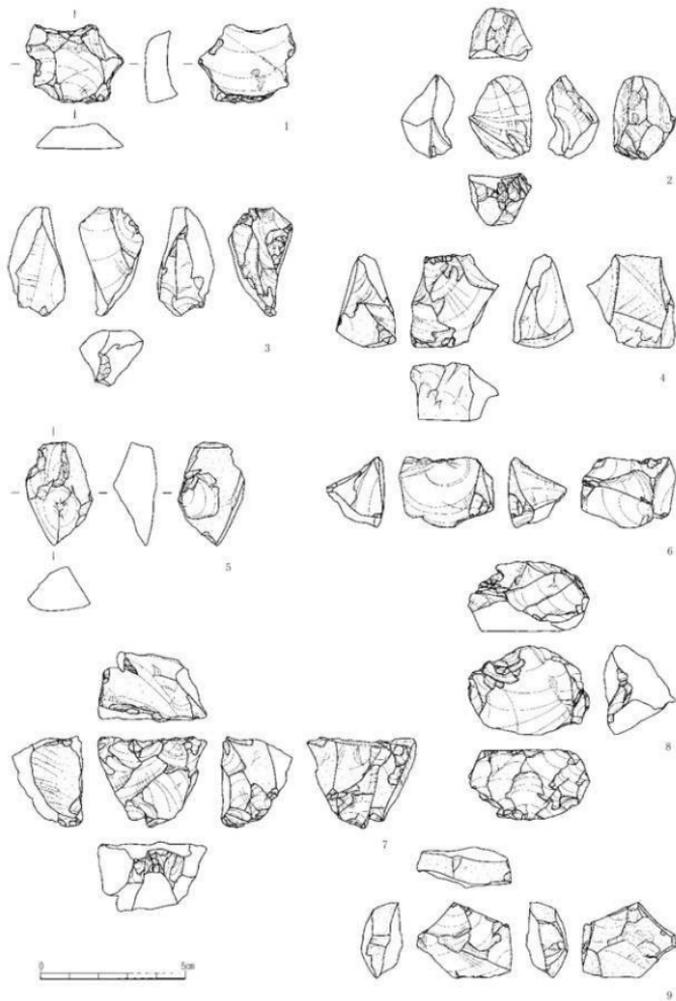
第247図 遺構外出土石器(16)



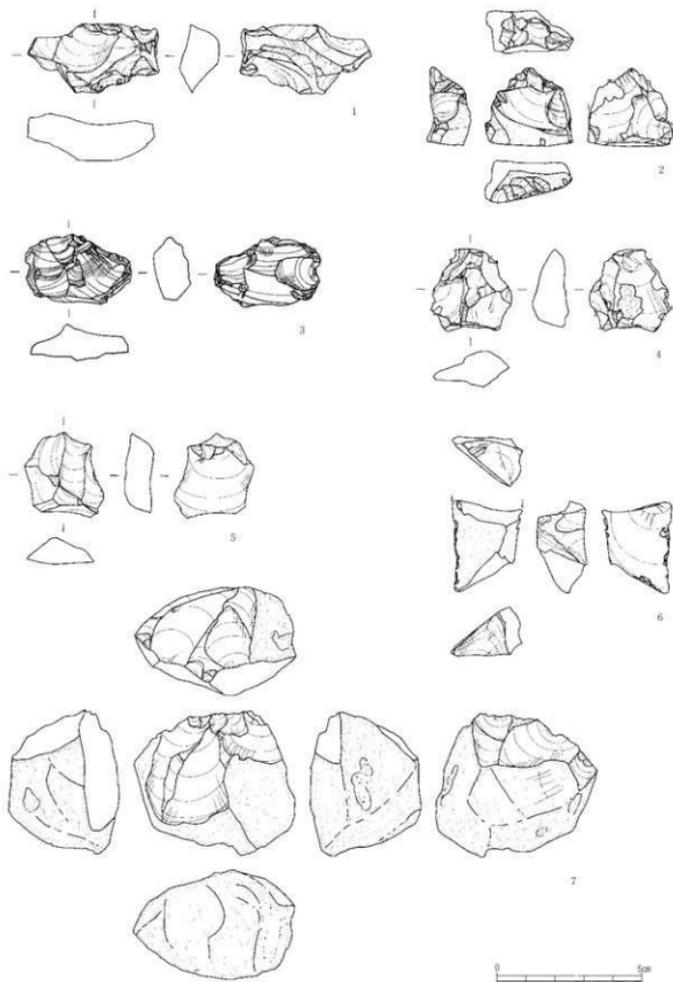
第248回 遺構外出土石器(17)



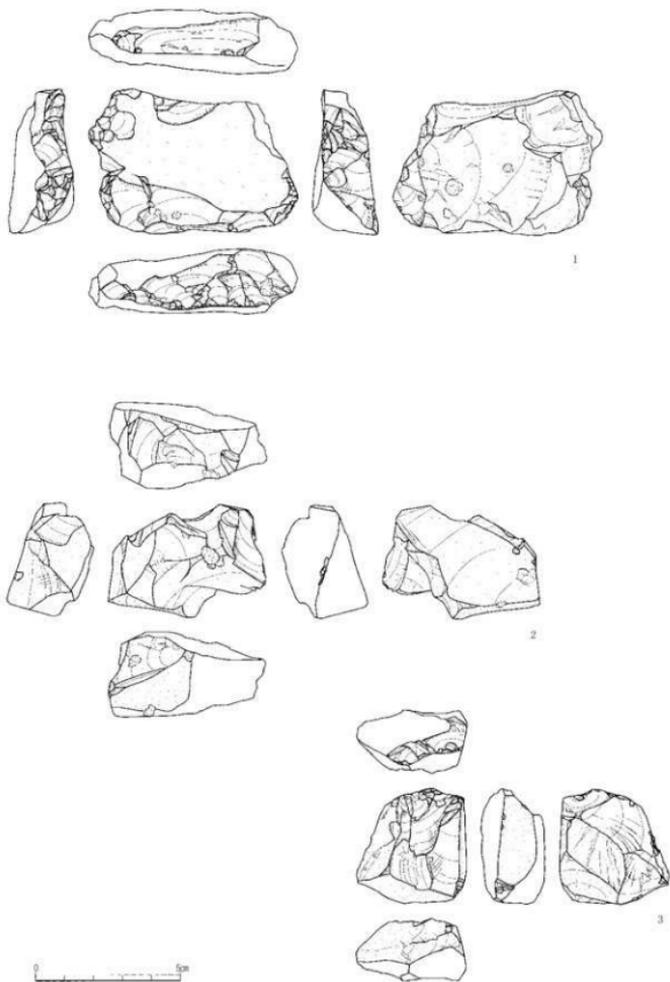
第249回 遺構外出土石器 (18)



第250回 遺構外出土石器(19)



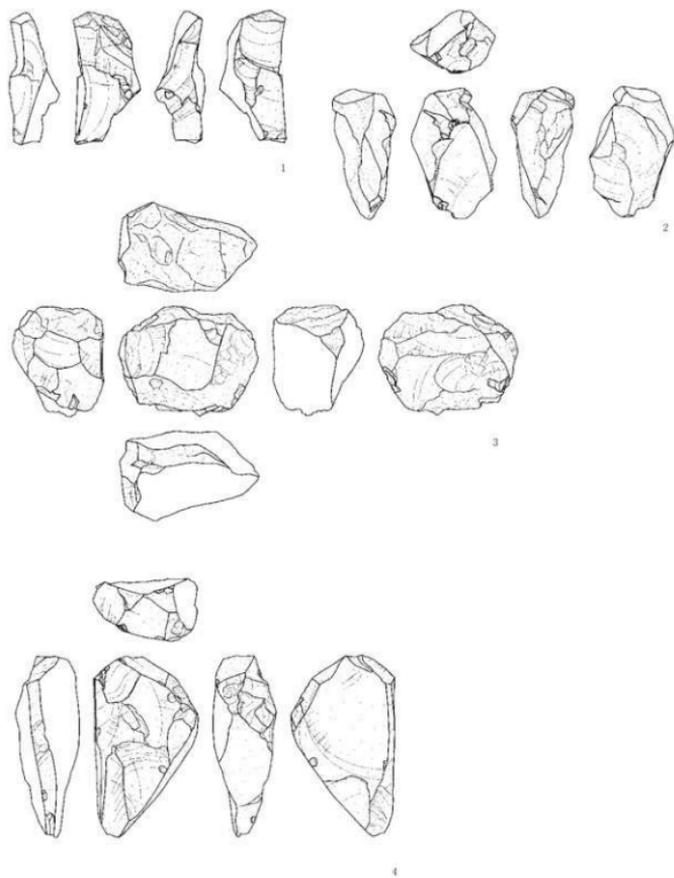
第251図 遺構外出土石器(20)



第252図 遺構外出土石器(21)



第253図 遺構外出土石器 (22)



第254图 遺構外出土石器 (23)

9. その他の遺構と遺物

本調査ではないものの、試掘調査時に検出され、埋戻された遺構の内、BF-6に検出された住居址(第256図)からは、床面が被熱によって一部赤色化した地点が検出され、鉄滓が出土した。これらの周囲からは、須恵器環や内黒土器の環、土師器小型甕等が破片となって出土し、環には「月」と読める墨書がみられた。

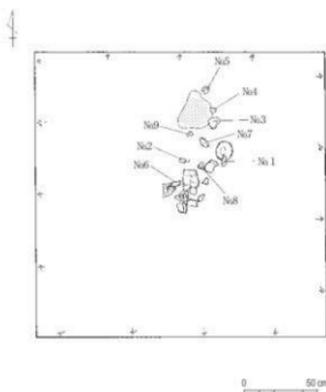
このような住居址内の出土状況から推定すると、小鍛冶遺構の可能性が高い。

出土した遺物からはおよそ7期から8期の住居址と想定された。

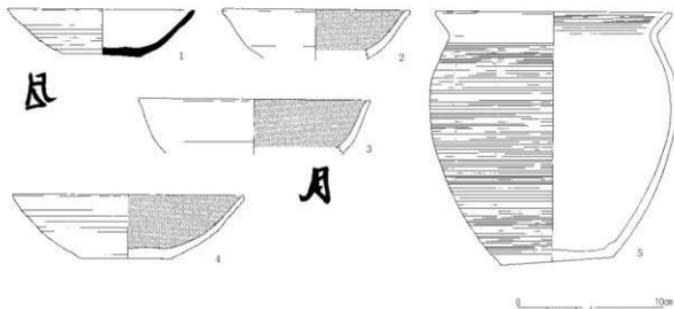
遺物(第256図)

1は須恵器環である。ほぼ定形であるが、白色を呈し、焼成不良であった。2-4は内黒土器である。2-3はそれぞれ破片からの復原であり、4は口縁部の一部と、底部のすべてが残存するのみの個体からの反転復原である。なお、1と4には「月」と読める墨書がみられる。5は小型甕である。1/2個体からの復原である。

そのほか、鉄滓も出土した。



第255図 BF-6 試掘グリッド遺物出土状況図



第256図 BF-6 試掘グリッド出土遺物

第V章 ま と め

1. 各時代の成果と課題

(1) 縄文時代

縄文時代早期では、押型文が出土している。そのほとんどが荒神山の麓にあたる北部調査区の礫が集中して出土した地点に集中していた。そのほか、条痕文系の土器片が多数出土したのをはじめ、繊維が混入した縄文を施文した土器も出土した。

この礫群付近を中心として出土した押型文を概観すると、以下の通りである。

第193図3は黒鉛入りのいわゆる沢式であり、そのほか黒鉛の混入は見られないものの、同系統と考えられる一群（第193図1・2、4～16）が存在するのをはじめ、立野式の山形文（第193図21～26、第194図1・2）や、口唇部にキザミや押型文を施文するタイプ（第194図18）もある。また、第194図17、19～25は口唇部に山型文を施文する、類例の少ないもので、大川式に平行する時期と考えられる。また、押型文に伴う網目状の縹糸文（第196図19）が出土しているほか、縄文を帯状に施文したタイプ（第196図20～23）も出土した。

第198図の破片では、頸部に無文部を設け、そこに縦位施文や、刺突文を充填しており、細久保2 a類とも考えられる。

その他、第199図1～11は細久保1 a類に類例を求めることができ、第207図～第208図5などは、楕円文が不規則に施文されていることから、細久保3類と似た類例の楕円文と考えられる。

そのほか、第204図1～16では異種併用の破片も存在する。

また、条痕文を伴う含繊維土器も見られた。

そのほか、中期の破片も出土していたが、早期の遺物が多数を占めていたことから、当該期の遺構と考えてよさそうである。一面に広がる礫と共に、土器片と黒曜石が散乱しており、この付近がどのような機能を果たしていたのか今後の検討課題である。なお、調査者の認識の甘さもあり、礫石器については現場で詳細な観察が行われておらず、ほとんど取り上げておくことができなかった。このため、石器の全体的な構成に偏りが生じてしまった可能性が高い。

黒曜石は石鏃や、石鎌・削器・搔器といった製品も出土しているが、石核も一定の割合で出土した。また、礫群中に黒曜石の集中箇所が2地点出土しているが、第1号ブロックは剥片と、小型の石核が集中していたが、第2号ブロックは母岩を打ち割ったままの様な状態で出土であった。2ヶ所については、意図的な集積と考えてよさそうであり、石器の加工を目的とした地点が存在していたことをうかがわせる資料となった。

中期では第37号住居址内から比較的多く出土した。遺物から縄文時代中期中葉の井戸尻期と考えられ、土偶の頸部や、足も出土していることから、住居廃絶後に土器片が投げ込まれたことをうかがわせた。

後期は遺物はほとんど出土しなかったが、南調査区で検出された礫群は測量図を観察するといくつかのまとまりが見られることから、配石墓であった可能性も捨てきれない。残念ながら調査時にその観点がなかったため、下層の発掘を行わずに調査を終了してしまっ。樋口五反田遺跡において配石墓が出土していることを考えればこの付近に存在する可能性もあり、反省しなければならない。

また、北区第24号住居址からは珪質頁岩製のポイントが出土した。これはいわゆる押出型ポイント（倉石広

太氏教示)と考えられる。出土した遺構が弥生時代の住居址であることから混入品と考えられるが、この付近から遺構は確認できなかったものの、縄文時代前期末葉から中期初頭の遺物が出土しており、当該期にこの遺跡に持ち込まれた可能性が高い。さらに、黒曜石製のポイントと考えられる破片も出土しており、押型文を伴った雑器との関連を考えていかななくてはならないだろう。

(2) 弥生時代

弥生時代は7基の住居址が出土した。これらの内3基が火災住居であり、第26号住居址のみが完掘することができた。この住居址の床からは8個体の土器が出土した。出土地点は住居址の短辺側の壁付近であり、特に埋炭炉奥に集中している。この地域では住居址内から出土する遺物の量が少なく、埋炭炉以外に器形の判明する個体が出土しないこともしばしばあるので、この住居址の8個体は比較的まとまった一括資料と言える。土器は甕が主体で、甕の口縁部付近が1個体出土したにすぎない。甕は大・中・小の3規格があり、それぞれに体部は丁寧にヘラミガキ調整を行ない、クシ描文を丁寧に施文する精製の土器と、粗いヘラミガキまたはその調整を行った形跡のない、粗雑な印象のクシ描文を施文する粗製の2種類が存在していたと考えられるが、残念ながら今回は中型の精製土器は出土しなかった。また、反対の短辺壁際からは、いわゆるハケ甕の上半部と、ヒサゴ甕が出土した。ヒサゴ甕はこの地域ではあまり類例を見ないため、今後の検討課題ではあるが、ハケ甕の出土は、諏訪から茅野にかけての、東信地域の土器様式の影響を受けた地域からも出土しており、地域間の相対的な時期を決定する手がかりとなりそうである。

なお、頸部が直立し、角度を持って折れ曲がる口縁部につながる甕も出土しているが、この甕はいわゆるハケ甕の器形に影響されている可能性もある。

第27・28号住居址は重複して出土した住居址である。断面観察によって、第28号住居址が第27号住居址によって切られていることが判明している。第27号住居址の遺物を見ると、大型の甕が、完形ではないがヘラミガキ調整を行ない、クシ描文を施文する精製タイプと、ヘラミガキ調整はみられるが、クシ描文が施文されていない甕に分けることができる。また、小型の甕においても、破片資料ではあるが、ヘラミガキ調整を行なった甕と、調整痕を持たず、クシ描文のみ施文された甕にわけることができそうである。なお、第28号7の甕のヘラミガキ調整は原体幅が広めで、1回のヘラミガキ調整の長さが短い。

同様に第28号住居址においても、大型の甕では精粗が見て取れ、中型の甕においても、破片ながらやはり精粗の2種類が存在する。

これらのうち、第30号7は外面に2段の波状文を施文するだけのシンプルな甕であり、内面には板状の工具を使用したのナデ調整が行われている。器形及び施文内容を見ると下伊那地方の土器との共通点も見られそうな土器である。なお、4も近似する調整痕をもつ甕と考えられるが、この個体には粗いヘラミガキ調整が行われている。

また、第27号住居址からは甕が破片で出土しており、外形でみると口縁部はすべて受け口状であった。しかし、製作方法は異なり、第28号10では外反した口縁部の上に粘土紐を乗せるようにして受け口を作り出しているのに対して、11は増部を包み込む様に貼り付けて成形している。また、第29号の口縁部増部はそのまま残し、下部に粘土紐を貼り付け口唇部を肥厚させている。甕はいずれの破片での出土であり、しかも器形全体を復原できる資料がないため、製作行程の違いが時期差なのか地域差なのか現段階では判断できかねている。

次に第29号住居址であるが、この住居址も火災住居址であり、南半分が調査区域外となってしまう、すべてを調査できたわけではないが、器形の判明する甕が出土した。全体的に断絶を複数伴うクシ描波状文をもつ土

器が主体を占める印象の住居址である。また、第33図1・5には、糜状文が2段施文されている。中でも多くの断絶を持つ波状文を口縁部上端部まで施文し、頸部に糜状文を伴うタイプは、伊那谷では存在しないことから、千曲川水系の土器の影響がうかがえる。

第30号住居址からはいわゆるハケ甕がほぼ器形に分かる状態で出土したが、それ以外では埴体と、小型の甕が器形をとどめて出土したにすぎない。埴体で使用されていた2個体は甕と考えられるが、器形が異なっており、第36図2は比較的幅の広い工具を使用した短い単位でのミガキ調整と、第36図3のような細い道具を使用している長い単位のミガキ調整の2種類が同時に存在していることを示している。ハケ甕は、第26号住居址から出土したよりもより体部の最大径が下がってきていることから、この住居址出土の個体の時期が、若干下る可能性はある。

今回の調査で出土した土器の文様をみると、甕に糜状文を施文している個体は第26号住居址と、第29号住居址であるが、第29号住居址は施文方法がこの地域の手法ではないので除外する。第26号住居址も糜状文は、多数連続して等間隔ではないことから後期でも新しい時期ととらえられそうである。器面全体にはハケ調整が見られ、その後にクシ描文およびヘラムガキ調整を行っている。

これらの中に1個体太い調整具を使用して短い単位でヘラムガキ調整を行っているものがある。このタイプが見られるようになった段階は明確にできないが、このころから出現した可能性も考えられる。

この後、糜状文は甕の施文から見られなくなり、壺に施文されるのみとなる。この時期の甕はクシ描文の施文に乱れが開始。ヘラムガキ調整も間隔があき、体部でもハケ調整を確認できるようになる。このような施文は第27号、第30号住居址の甕に見ることができる。また、第27号住居址の個体の中に内面を板状の工具でナデ調整を行う個体が見出し、第28号住居址ではその個体数が増加する。また、クシ描文のはほとんど施文されない個体も目立ち始めるといった土器の変遷をたどることができそうである。

今回の調査では後期の一時期の遺物と考えられるが、遺構からの出土個体数が少ない時期としては比較的恵まれた出土量であり、当地方の変遷の一端をみることであったと考えている。今後の検討材料となれば幸いである。

そのほか、周溝墓が2基出土している。これらの周溝墓は、樋口五反田遺跡を含めても、周溝の一边を共有するものがほとんどであり、第2次調査において、四隅を掘り込まないタイプが1例、第1次調査において単独で出土しているタイプが1例確認されたにすぎない。これらの内、第2号周溝墓からは鉄鋼が出土した。鉄鋼は、一部が破片となって出土したが、接合することはできなかった。また、断片の一部には布の付着も確認できた。この周溝墓の遺跡内での位置付けについては、今後検討を加えなければならないと考えている。

(3) 平安時代

平安時代の住居址が今回の調査で最も多く出土している。

時期としては長野自動車道の編年で、5期から14期まで断続的に営まれており、住居址の数は5期・6期・7期でそれぞれ7基・6基・8基と出土しており、住居址の数が最も多い時期である。その後は1～3基程度の出土数であり、急激に数を減らしている。このうち、4期～7期は比較的まとまって重複しながら出土している傾向があり、今回の調査では、第3号住居址周辺、第14号住居址周辺、第53号住居址周辺の3地点にその傾向がみられる。

出土遺物を見ると、遺物量の多かった住居址は第5号・第23号・第61号・第64号住居址であり、火災住居址である第64号住居址を除くと、時期は6～7期であった。これらのうち、第5号住居址と、第23号住居址では

第V章 まとめ

墨書土器がこの遺跡としては多く出土している。また、第23号住居址と第61号住居址は規模が大きく、墨書土器や鉄器が出土しており、第23号住居址では菰手石が21個、鉄器として鉄・鋤先や、刀子等も出土している。その他、第51号住居址は完掘していないが、緑釉陶器の破片や耳皿等が出土しており、これらは集落の中心的な住居址と考えられる。

また、第17号住居址と、第52号住居址からは帯金具が出土しているが、いずれも6期と考えられ、同時期に2基の住居址で帯金具を所有していたことになる。いずれも住居の規模は小型で、遺物の出土も少量であった。

(4) 中世

中世と考えられる遺構は土坑のみであった。これらの中には銭貨が出土しているものや、灰状の白色の堆積物が底付近から検出されている遺構もあり、総じて墓坑と考えてよさそうである。

樋口村の西部地域に関連する墓域と考えられるが、他に資料がないため、詳細を明確にできない。また、水田の下層から検出されたことから、これらの墓域は開田前にどこかの地へ移転したものと推察される。

また遺構外ではあるが、内耳土器が出土しており、戦国期にここにムラが存在していた可能性がある。

2. 科学的分析

今回、産地分析を実施したサンプルは、町教育委員会で抽出した黒曜石（剥片を含む）から、角張氏が実見の上抽出した30点を、沼津工業高等学校の望月明彦氏に依頼して分析したものである。

本来ならば考察も加えて掲載するべきではあろうが、今回は分析結果のみを掲載させていただいた。このため、望月氏の要望に沿うため、推定結果及び関連する図表を付編として掲載した。

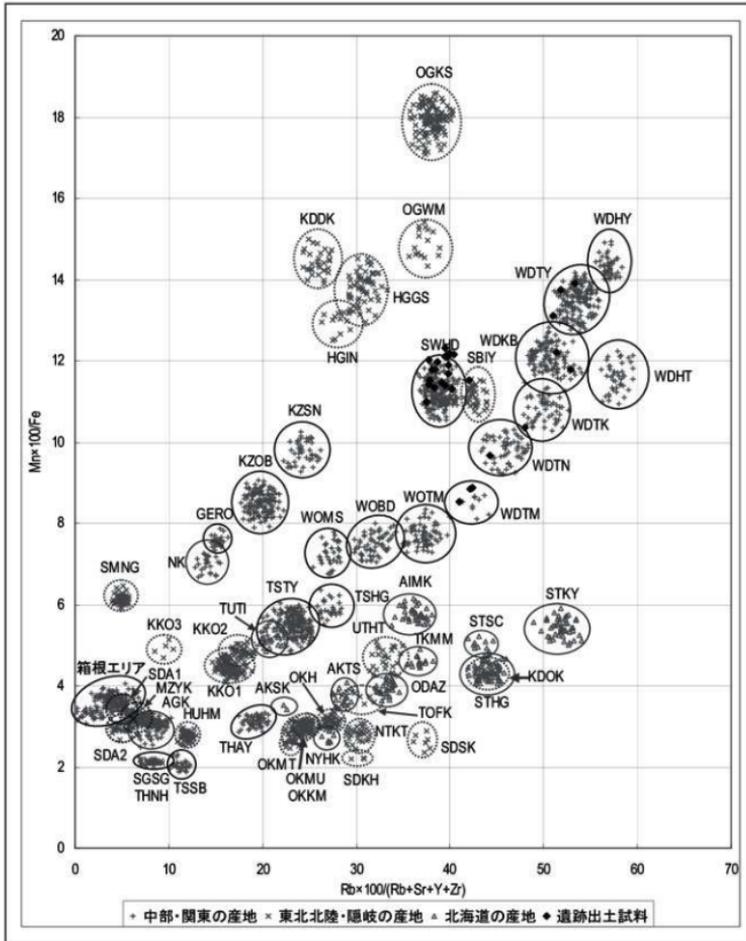
以上今回の調査についてまとめてきたが、担当者の実力不足によって必要な情報を失ってしまった部分もある。「一度破壊すると元には戻せない」事を再度肝に銘じ、調査に臨まなくてはならないと考えている。

末筆にはなりましたが、本報告書を刊行するまで、大変お世話になりました角張淳一氏、倉石広太氏、小平和夫氏、松井朗氏をはじめ、直接発掘調査に従事された皆様にお礼を申し上げ、まとめとします。

荒神山おんまわし遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果
判別図法・判別分析からの最終推定結果

研究室 年間通番	分析番号	遺物図番号	推定産地	写真図版
MK05-12644	KJY-1	第232図17	和田土屋橋北群	図版146-1
MK05-12645	KJY-2	第236図4	諏訪屋ヶ台群	図版146-2
MK05-12646	KJY-3	第232図18	和田小深沢群	図版146-3
MK05-12647	KJY-4	第226図1	和田土屋橋南群	図版146-4
MK05-12648	KJY-5	第234図8	和田鷹山群	図版146-5
MK05-12649	KJY-6	第233図4	諏訪屋ヶ台群	図版146-6
MK05-12650	KJY-7	第240図1	和田土屋橋南群	図版146-7
MK05-12651	KJY-8	第232図14	諏訪屋ヶ台群	図版146-8
MK05-12652	KJY-9	第232図19	諏訪屋ヶ台群	図版146-9
MK05-12653	KJY-10	第235図2	和田土屋橋南群	図版146-10
MK05-12654	KJY-11	第232図16	和田鷹山群	図版146-11
MK05-12655	KJY-12	第235図9	諏訪屋ヶ台群	図版146-12
MK05-12656	KJY-13	第234図14	諏訪屋ヶ台群	図版146-13
MK05-12657	KJY-14	第233図18	諏訪屋ヶ台群	図版146-14
MK05-12658	KJY-15	第235図5	諏訪屋ヶ台群	図版146-15
MK05-12659	KJY-16	第236図14	諏訪屋ヶ台群	図版146-16
MK05-12660	KJY-17	第232図10	諏訪屋ヶ台群	図版146-17
MK05-12661	KJY-18	第232図4	諏訪屋ヶ台群	図版146-18
MK05-12662	KJY-19	第232図8	和田土屋橋西群	図版146-19
MK05-12663	KJY-20	第232図5	和田鷹山群	図版146-20
MK05-12664	KJY-21	第232図17	諏訪屋ヶ台群	図版146-21
MK05-12665	KJY-22	第232図9	諏訪屋ヶ台群	図版146-22
MK05-12666	KJY-23	第234図10	諏訪屋ヶ台群	図版146-23
MK05-12667	KJY-24	第234図14	諏訪屋ヶ台群	図版146-24
MK05-12668	KJY-25	第234図9	諏訪屋ヶ台群	図版146-25
MK05-12669	KJY-26	第232図1	和田土屋橋北群	図版146-26
MK05-12670	KJY-27	第219図1	諏訪屋ヶ台群	図版146-27
MK05-12671	KJY-28	第219図2	諏訪屋ヶ台群	図版146-28
MK05-12672	KJY-29	第222図4	諏訪屋ヶ台群	図版146-29
MK05-12673	KJY-30	第232図18	諏訪屋ヶ台群	図版146-30

判別国 判別群	判別分析					
	第1候補産地			第2候補産地		
	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
WDTK	WDTK	7.76	0.8896	WDTN	12.16	0.1104
SWHD	SWHD	9	1	SBIY	88.09	0
WDKB	WDKB	19.02	0.9997	WDTY	35.89	0.0003
WDTM	WDTM	3.4	1	WDTN	32.13	0
WDTY	WDTY	9.86	0.9998	WDKB	26.05	0.0002
SWHD	SWHD	3.28	1	SBIY	65.59	0
WDTM	WDTM	3.03	1	WDTN	37.65	0
SWHD	SWHD	14.22	1	SBIY	104.26	0
SWHD	SWHD	4.24	1	SBIY	77.66	0
WDTM	WDTM	9.04	0.9982	WOTM	27.21	0.0018
WDTY	WDTY	7.5	0.999	WDHY	18.92	0.001
SWHD	SWHD	16.34	1	SBIY	97.11	0
SWHD	SWHD	4.29	1	SBIY	105.21	0
SWHD	SWHD	12.73	1	SBIY	104.78	0
SWHD	SWHD	4.76	1	WDTN	111.11	0
SWHD	SWHD	12.24	1	WDTN	82.38	0
SWHD	SWHD	2.59	1	SBIY	88.99	0
SWHD	SWHD	5.3	1	SBIY	83.41	0
WDTN	WDTN	5.32	1	WDTM	32.37	0
WDTY	WDTY	4.75	1	WDHY	33.1	0
SWHD	SWHD	16.82	1	SBIY	101.34	0
SWHD	SWHD	6.2	1	SBIY	104.22	0
SWHD	SWHD	10.68	1	SBIY	117.34	0
SWHD	SWHD	5.83	1	SBIY	69.52	0
SWHD	SWHD	22.39	1	SBIY	78.58	0
*WDKB	WDTK	22.92	1	WDHT	46.36	0
SWHD	SWHD	18.05	1	SBIY	119.12	0
SWHD	SWHD	15.42	1	SBIY	99.28	0
SWHD	SWHD	9.59	1	SBIY	75.52	0
SWHD	SWHD	17.89	1	SBIY	126.13	0



産地原石判別群 (SEIKO SEA-2110L 蛍光 X 線分析装置による)

都道府県	地図 No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地 (分析数)
北海道	1	白滝	八号沢群 黒曜の沢群		STHG STKY		糸石山山頂 (19)、八号沢露頭 (31)、八号沢 (79)、 黒曜の沢 (6)、観加林道 (4)
	2	上土幌	三股群		KSM		十三ノ沢 (16)
	3	釧戸	安住群		ODAZ		安住 (25)、清水ノ沢 (9)
	4	旭川	高砂台群 春光台群		AKTS AKSK		高砂台 (6)、雨船台 (5)、春光台 (5)
	5	名寄	布川群		NYHK		布川 (10)
	6	新十津川	須田群		STSD		須田 (6)
	7	赤井川	曲川群		AIMK		曲川 (25)、土木川 (15)
	8	豊浦	豊泉群		TUTI		豊泉 (16)
青森	9	木造	出来島群		KDDK		出来島海岸 (34)
	10	深浦	八森山群		HUHM		八森山公園 (8)、六角沢 (8)、岡崎滝 (40)
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群 脇本群		OGKS OGWM		金ヶ崎温泉 (37)、脇本海岸 (98) 脇本海岸 (16)
山形	12	羽黒	月山群 今野川群		HGGS HGIN		月山荘前 (30)、朝日町田代沢 (18)、獅子町中沢 (18) 今野川 (9)、大朝川 (5)
	13	新津	金津群		NTKT		金津 (29)
新潟	14	新発田	坂山群		SBIY		坂山牧場 (40)
栃木	15	高梁山	甘湯沢群 七尋沢群	高梁山1群 高梁山2群	THAY THNH	TKH1 TKH2	甘湯沢 (50)、板沢 (20) 七尋沢 (9)、自然の家 (9)
	長野	16	和田 (WD)	鷹山群	和田峠1群	WDTY	WDT1
小深沢群				和田峠2群	WDKB	WDT2	
土屋嶺北群				和田峠3群	WDTK	WDT3	
土屋嶺西群				和田峠4群	WDTN	WDT4	
土屋嶺南群				和田峠5群	WDTM	WDT5	
		芙蓉ライト群	WDHY				
		古峠群	WDHT				
和田 (WO)		ブドウ沢群	男女倉1群	WOB1	OMG1	ブドウ沢 (36)、ブドウ沢右岸 (18)、牧ヶ沢上 (33)、牧ヶ 沢下 (36)、高松沢 (40)	
		牧ヶ沢群	男女倉2群	WOMS	OMG2		
		高松沢群	男女倉3群	WOTM	OMG3		
17	諏訪	星ヶ台群	霧ヶ峰系	SWHD	KRM	星ヶ台第1地区 (36)、星ヶ台第2地区 (36)、星ヶ台 A (36)、星ヶ台 B (11)、水月公園 (36)、水月公園 (13)、 星ヶ台のりこし (36)	
18	蓼科	冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山 (33)、菱草峠 (36)、菱草峠東 (33)、洗ノ湯 (29)、 美し森 (4)、八ヶ岳7 (17)、八ヶ岳9 (18)、双子池 (34)	
		双子山群		TSHG		双子池 (26)	
		播鉢山群		TSSB		播鉢山 (31)、亀甲池 (8)	
神奈川	19		芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯 (34)
	20	箱根	畑宿群	畑宿	HNHJ	HTJ	畑宿 (71)
			黒岩橋群	箱根系 A 群	HNKI	HKNA	黒岩橋 (9)
			鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋 (30)
21		上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀 (18)	
静岡	22	天城	柏峠群	柏峠	AGKT	KSW	柏峠 (80)
			徳島高群	神津島1群	KZOB	KOZI	徳島高 (100)、長浜 (43)、沢尻湾 (8)
東京	23	神津島	砂輪崎群	神津島2群	KZSN	KOZZ	砂輪崎 (40)、長浜 (5)
			久見群		OKHM		久見バーライト中 (30)、久見採掘現場 (18)
島根	24	隠岐	箕浦群		ORKMU		箕浦海岸 (30)、加茂 (19)、岸浜 (35)
			柳群		ORKMT		柳地区 (16)
その他			NK 群		NK		中々原IG、5G (遺跡試料)、原石産地は未発見

佐々木繁喜氏提供試料 (まだ地図には入れていない)

青森	小泊	折屋内群	KDOK	小泊市折屋内 (8)	
	岩手	北上川	北上折居1群	KKO1	水沢市折居 (36)、花巻日形田ノ沢 (36)、雫石小赤沢 (22)
		北上折居2群	KKO2	水沢市折居 (23)、花巻日形田ノ沢 (8)、雫石小赤沢 (2)	
	北上折居3群	KKO3	水沢市折居 (5)		
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	宮崎町湯ノ倉 (54)	
	色麻	根岸群	SMNG	色麻町根岸 (48)	
	仙台	林保1群	SDA1	仙台市林保土蔵 (17)	
		林保2群	SDA2	仙台市林保土蔵 (35)	
	塩竈	塩竈群	SGSG	塩竈市塩竈漁港 (22)	



黒曜石産地地図

荒神山おんまわし遺跡出土黒曜石産地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0
	高松沢	WOTM	0	0
和田(WD)	美香ウイト	WDHY	0	0
	鷹山	WDTY	3	10
	小深沢	WDKB	1	3.33
	土屋橋北	WDTK	2	6.67
	土屋橋西	WDTN	1	3.33
	土屋橋南	WDTM	3	10
	古峠	WDHT	0	0
諏訪	星ヶ台	SWHD	20	66.67
蓼科	冷山	TSY	0	0
	反子山	TSHG	0	0
	播麻山	TSSB	0	0
天城	柏崎1	AGKT	0	0
箱根	畑原	HNHJ	0	0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0
	黒岩橋	HNKI	0	0
	上多賀	HNKT	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0
神津島	恩賜島	KZOB	0	0
	砂崎崎	KZSN	0	0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0
	七尋沢	THNH	0	0
新津	金津	NTKT	0	0
新発田	板山	SBFY	0	0
深浦	八森山	HUHM	0	0
本造	出来島	KDDK	0	0
男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0
	脇本	OGWM	0	0
羽黒	月山	HGGS	0	0
	今野川	HGIN	0	0
北上川	折居1群	KKO1	0	0
	折居2群	KKO2	0	0
	折居3群	KKO3	0	0
宮崎	海ノ倉	MZYK	0	0
仙台	秋保1群	SDA1	0	0
	秋保2群	SDA2	0	0
色麻	根岸	SMNG	0	0
塩竈	塩竈池群	SGSG	0	0
小泊	折腰内	KDOK	0	0
魚津	草月上野	UTHT	0	0
高岡	二上山	TOFK	0	0
佐渡	真光寺	SDSK	0	0
	金井二ヶ坂	SDKH	0	0
隠岐	久見	OKHM	0	0
	脚地区	OKMT	0	0
	箕浦	OKMU	0	0
白滝	8号沢	STHG	0	0
	黒曜の沢	STKY	0	0
	赤石山頂	STSC	0	0
赤井川	簡川	AJMK	0	0
豊浦	豊泉	TUTI	0	0
鹿戸	安住	ODAZ	0	0
十勝	三股	TKMM	0	0
名寄	柳川	NYHA	0	0
旭川	高砂台	AKTS	0	0
	春光台	AKSK	0	0
不明産地1	NK	NK	0	0
下呂石	GERO	GERO	0	0
合計			30	100
不可など				0
総計			30	

— 写真図版 —





遺跡遠景(1)



遺跡遠景(2)



第1次調査南区全景(1)



第1次調査南区全景(2)



第1次調査南区全景(3)



第1次調査北区全景(1)



第1次調査北区全景(2)



第1次調査北区ピット群



平成2年度調査区(1)



平成2年度調査区(2)



平成2年度調査区(3)



第3次調査南区(1)



第3次調査南区(2)



第3次調査北区(1)



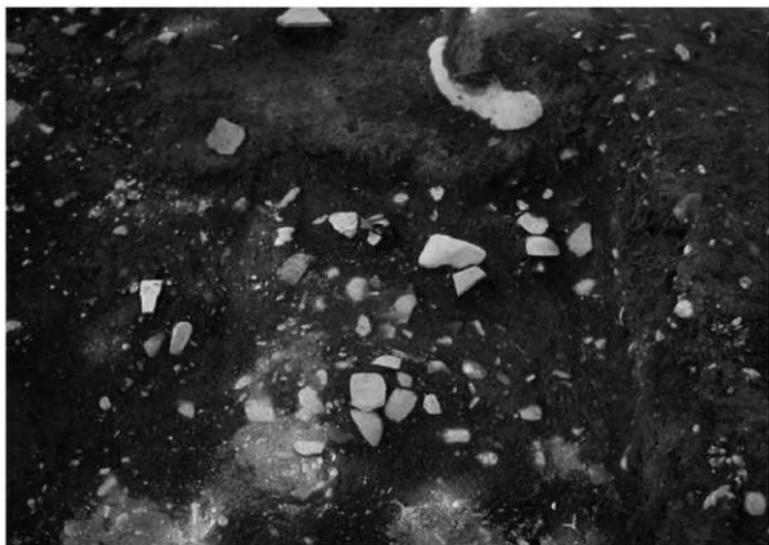
第3次調査北区(2)



第3次調査北区(3)



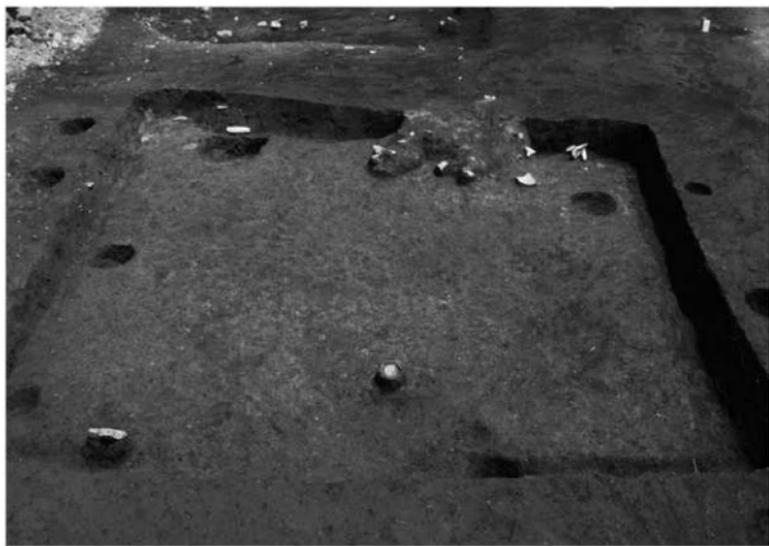
第3次調査北区(4)



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



第5号住居址



第6号住居址



第7号住居址



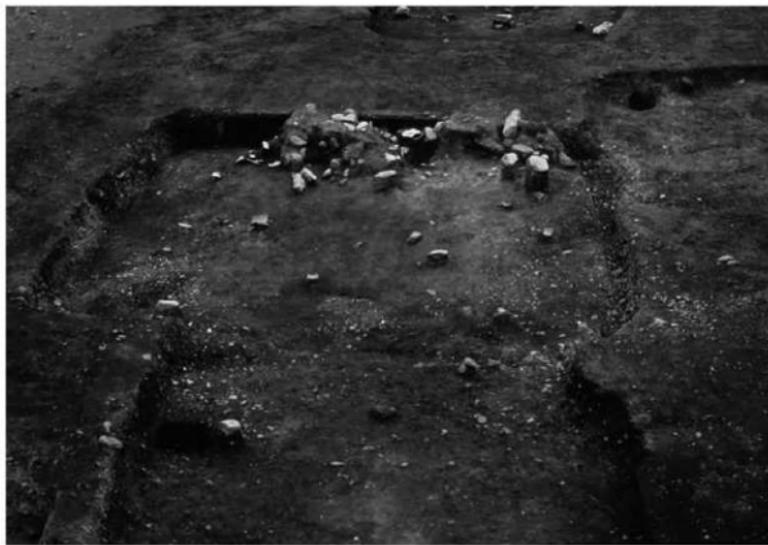
第8号住居址



第6·9号住居址



第13号住居址



第14号住居址



第15号住居址



第16号住居址



第17号住居址



第18号住居址



第19・20号住居址



第19号住居址



第20号住居址



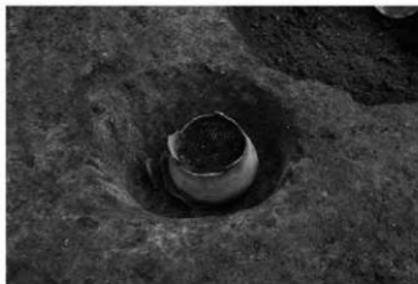
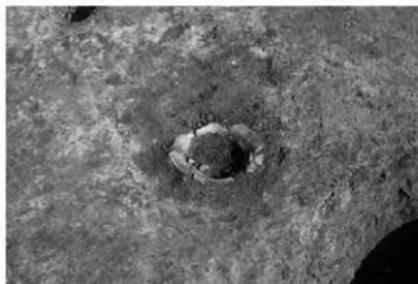
第21号住居址



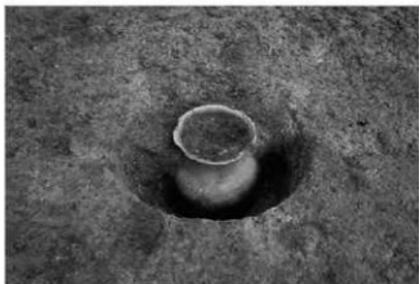
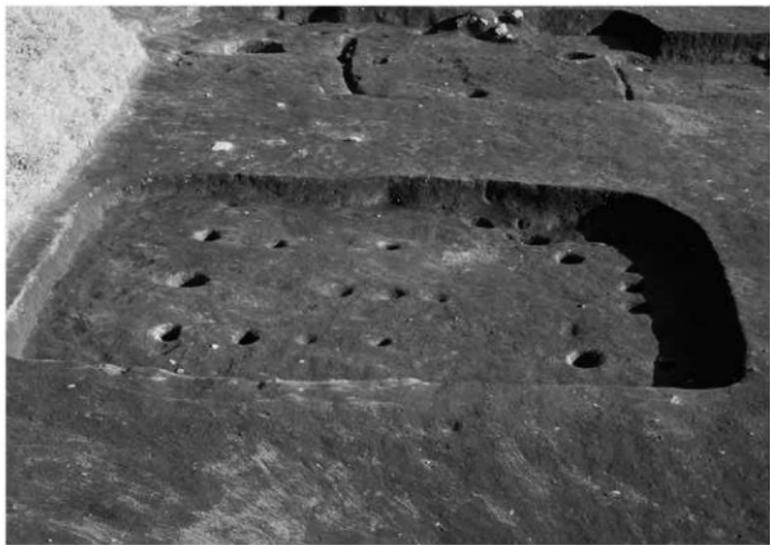
第23·24·34号住居址



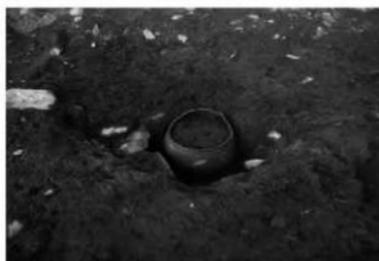
第23号住居址



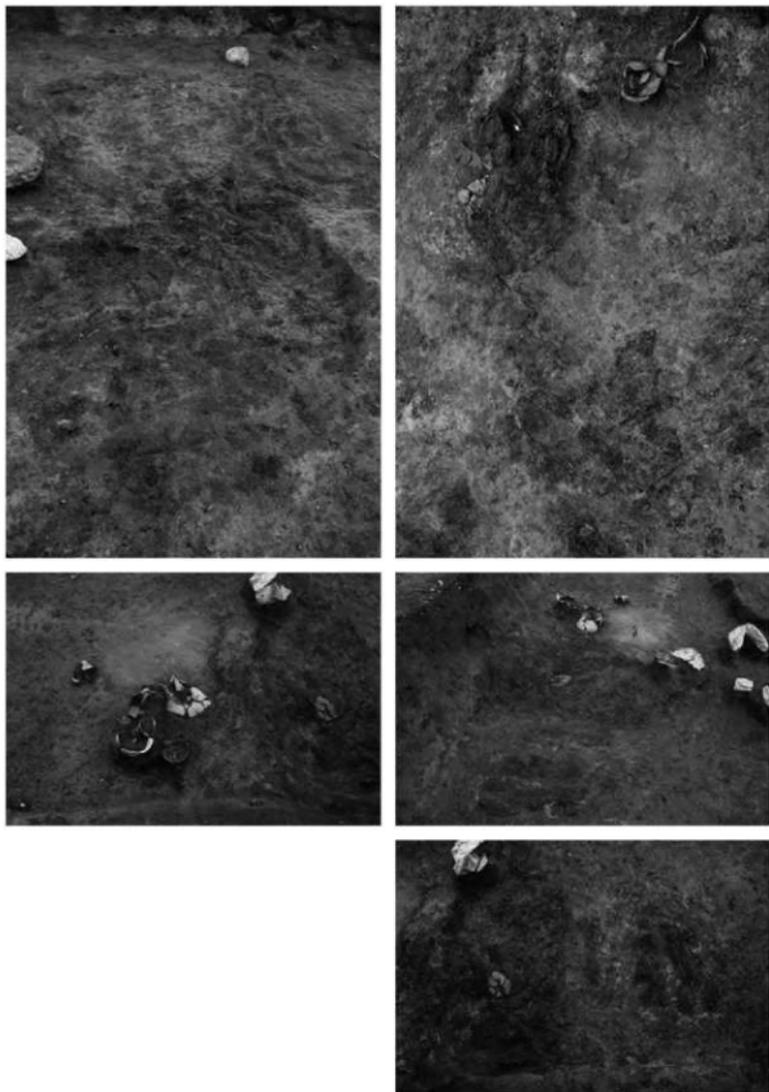
第24号住居址



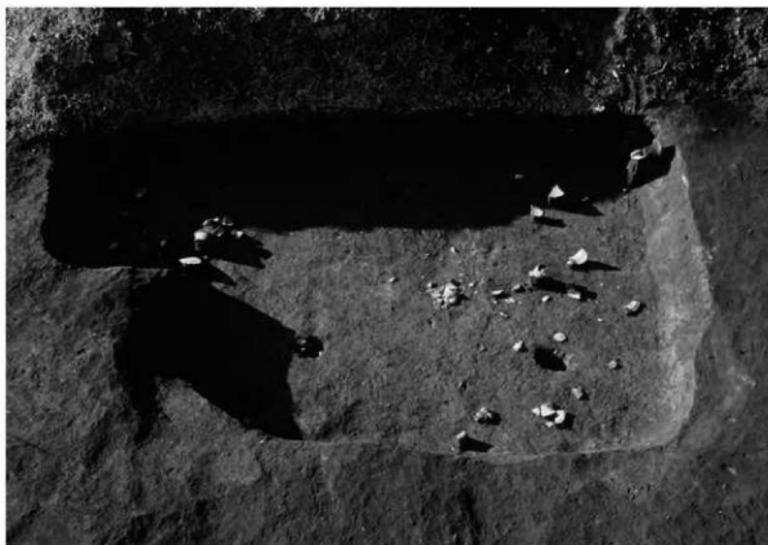
第25号住居址



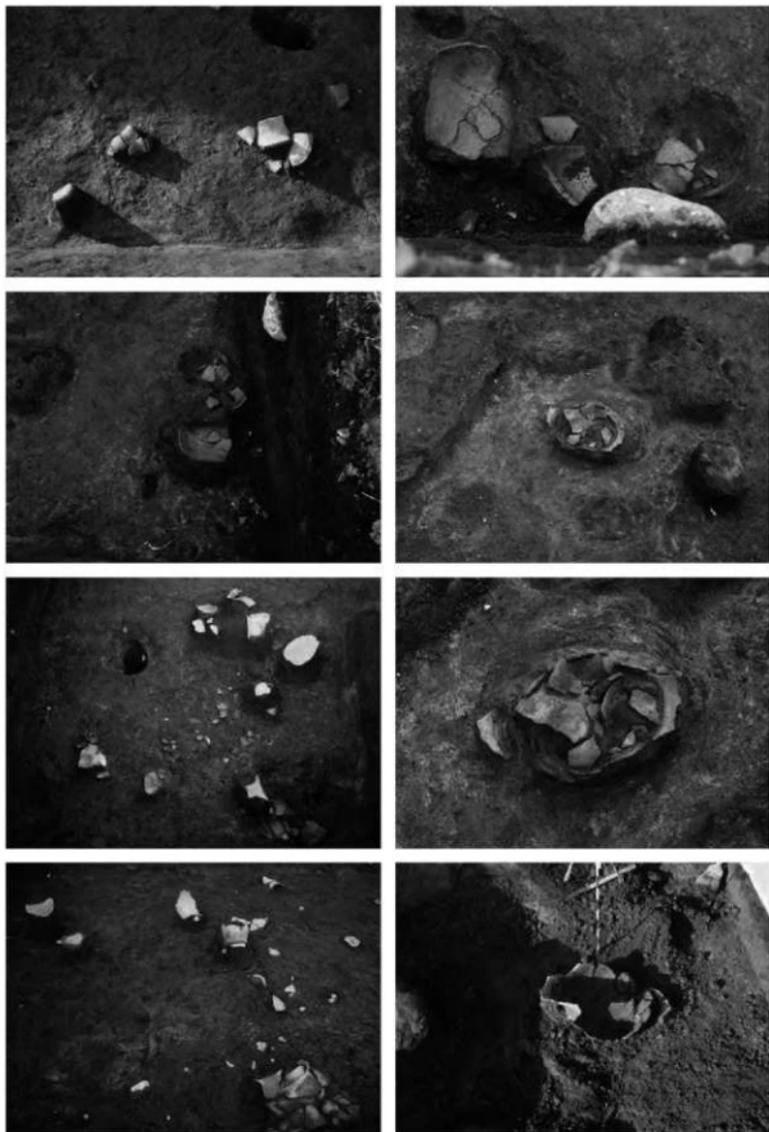
第26号住居址(1)



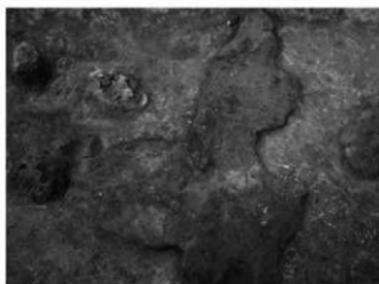
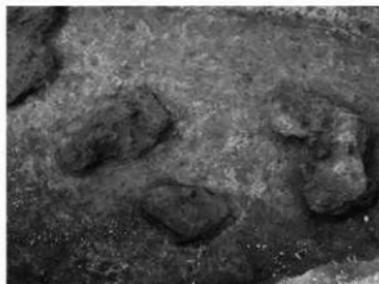
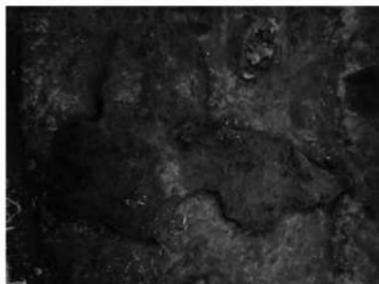
第26号住居址(2)



第27·28号住址(1)



第27·28号住居址(2)



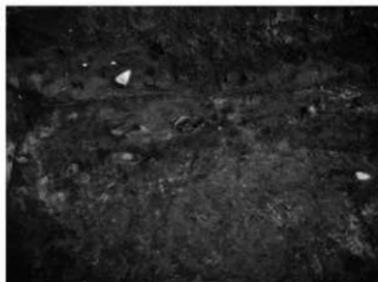
第27·28号住居址(3)



第29号住居址



第30号住居址(1)



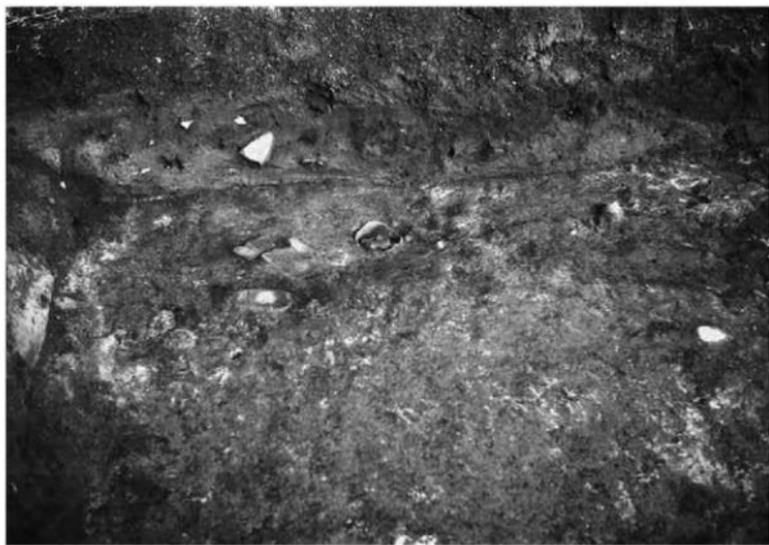
第30号住居址(2)



第30号住居址(3)



第31・32・33号住居址



第31号住居址



第32号住居址



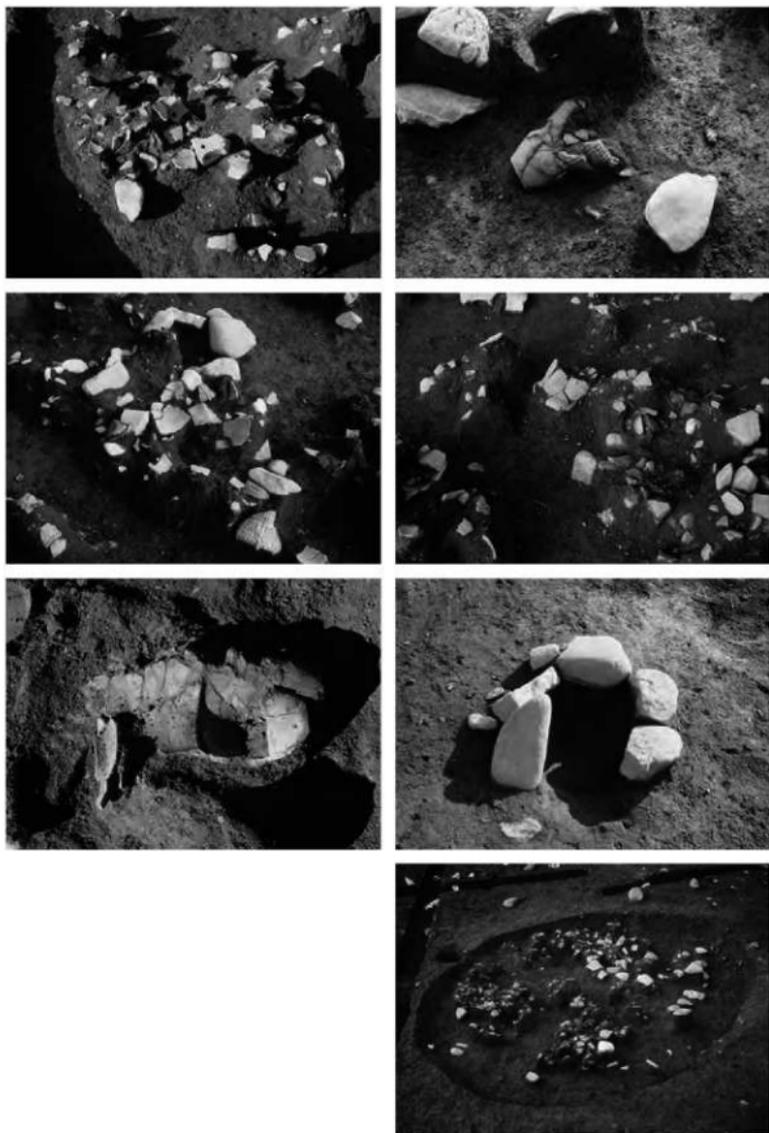
第34号住居址



第36号住居址



第37号住居址(1)



第37号住居址(2)



第38号住居址





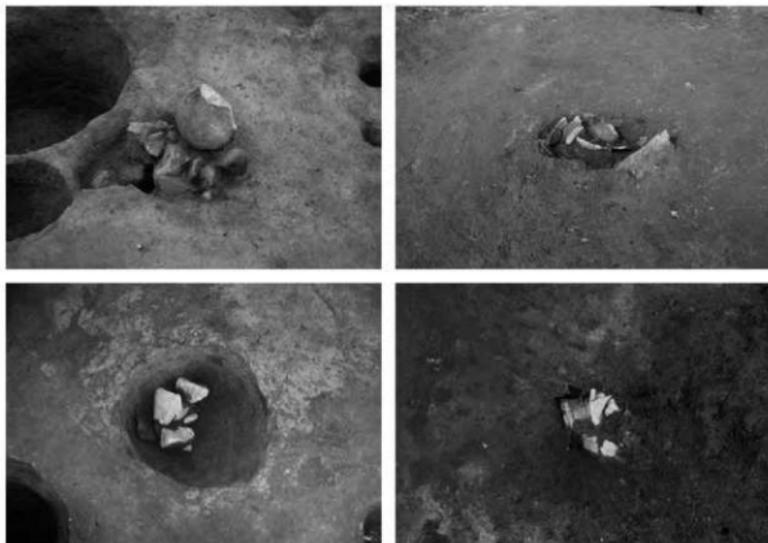
第40号住居址(1)



第41号住居址



第42号住居址(1)



第42号住居址(2)





第51号住居址



第52号住居址



第53号住居址



第54号住居址



第55号住居址



第55・56号住居址



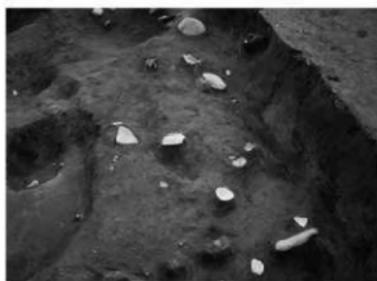
第56号住居址



第57号住居址



第57·61号住居址(1)



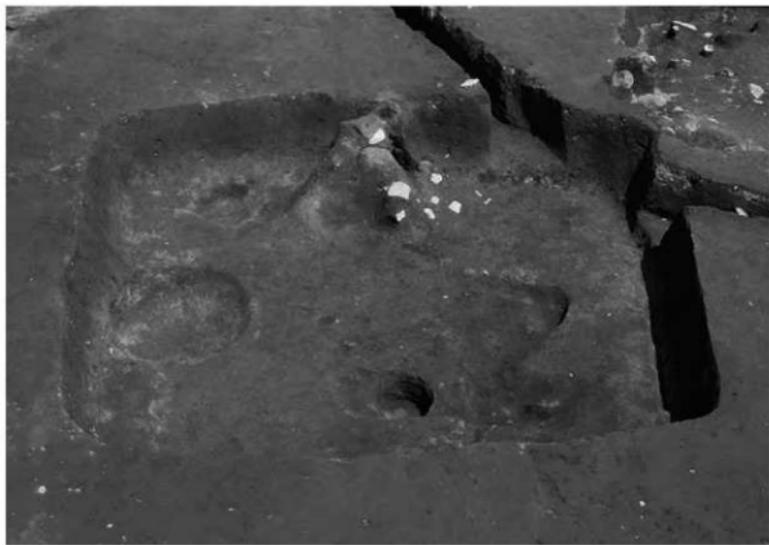
第57・61号住居址(2)



第58号住居址



第59号住居址



第60号住居址



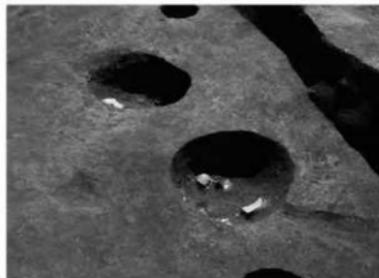
第62号住居址



第63号住居址



第64号住居址(1)



第64号住居址(2)



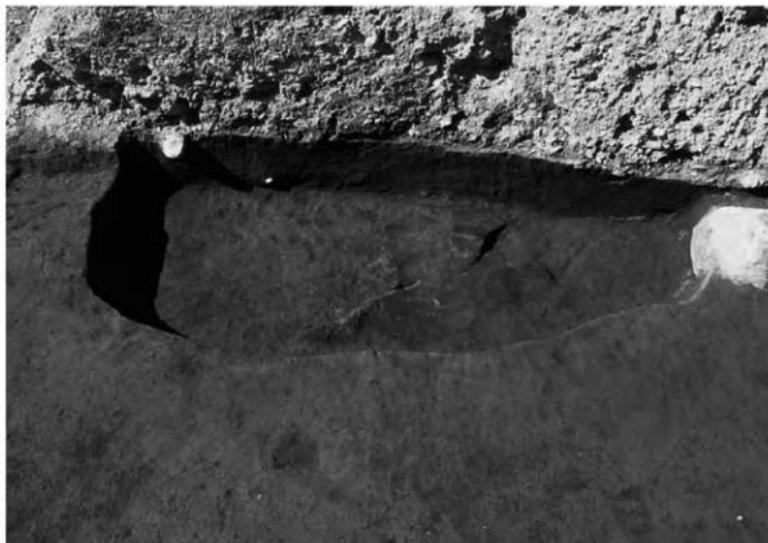
第65号住居址



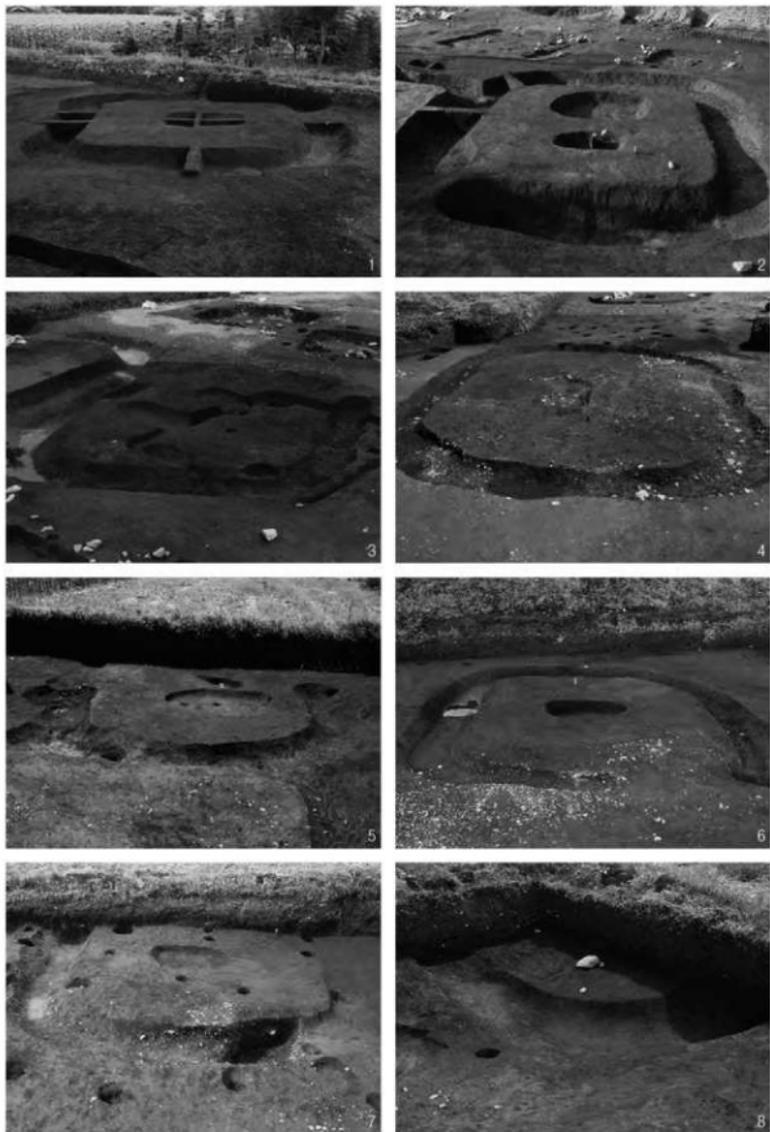
第66·67号住居址



第68号住居址



第69号住居址



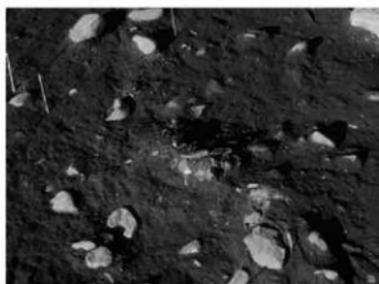
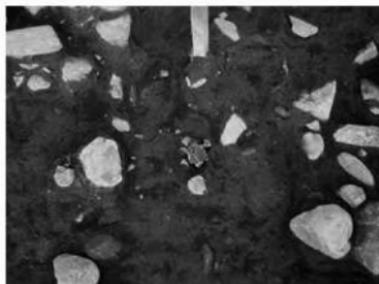
周溝墓(1:1周、2:2周、3:3周、4:4周、5:5周、6:6周、7:7周、8:8周)



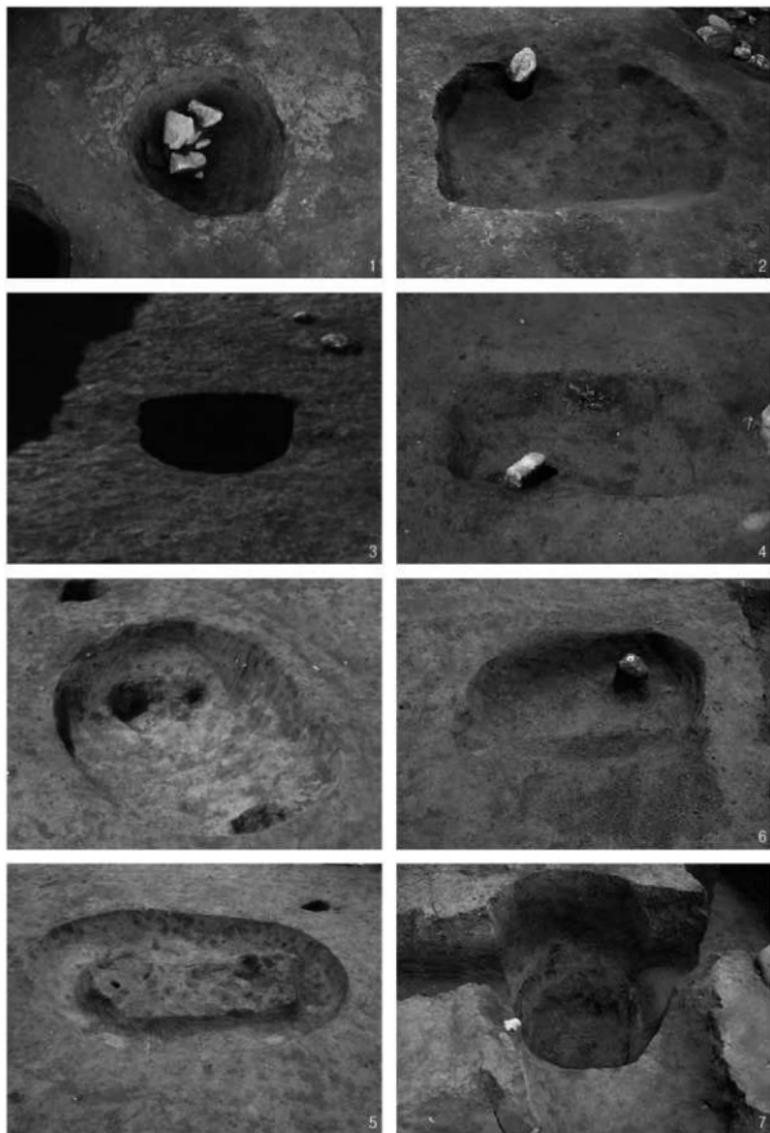
周溝墓・集石(1:9周、2:10周、3:15周、4:1集、5:3集、6:4集)



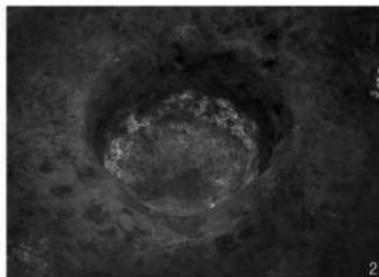
第1号裸群



第2号裸群



土坑(1)(1:42住内土坑、2:10土、3:11土、4:12土、5:16土、6:17土、7:6土)



土坑(2)(1:7土、2:14土)



第37号住居址(1)



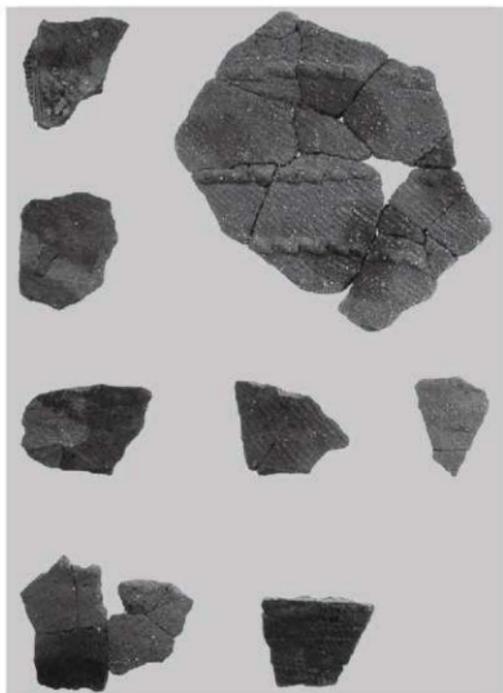
第37号住居址(2)



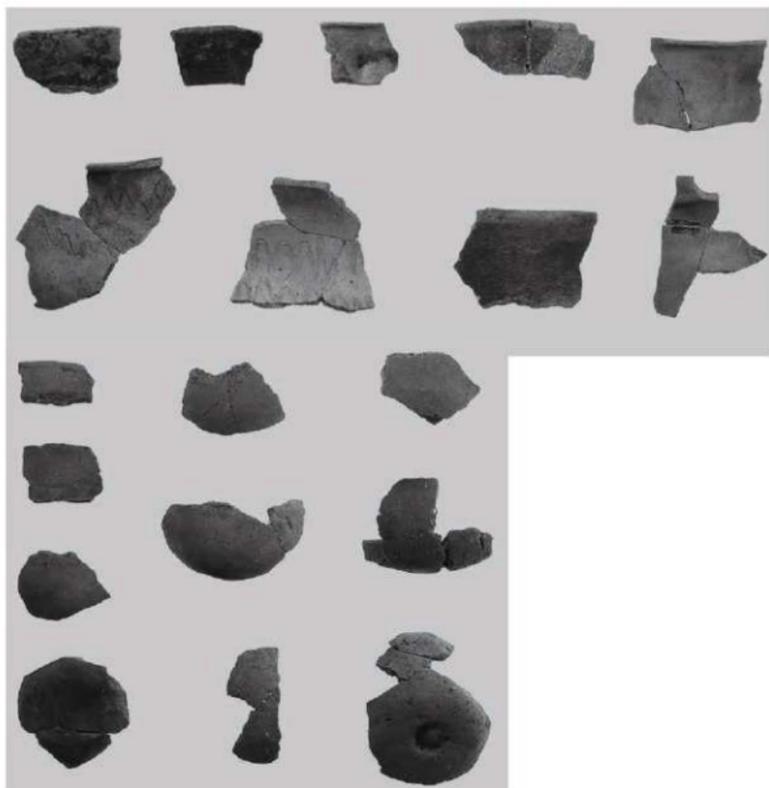
第37号住居址(3)

第42号住居址

第42号住居址付近出土縄文土器



第42号住居址



第24号住居址出土遺物(2)

第25号住居址出土遺物

I

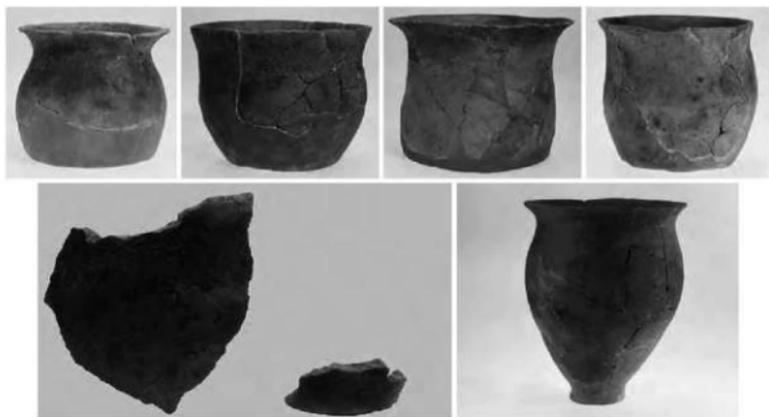
-



第26号住居址



第27号住居址



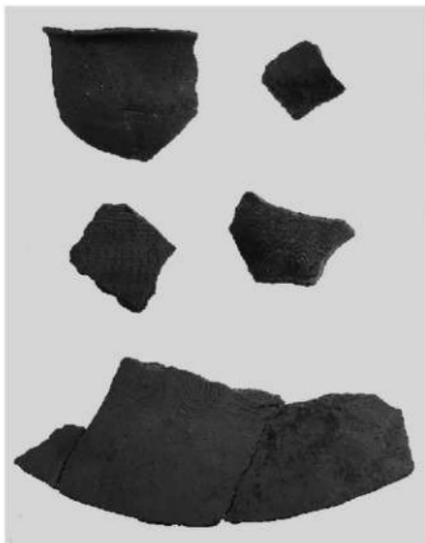
第28号住居址



第29号住居址



第30号住居址(1)



第30号住居址出土遺物(2)



第31号住居址出土遺物



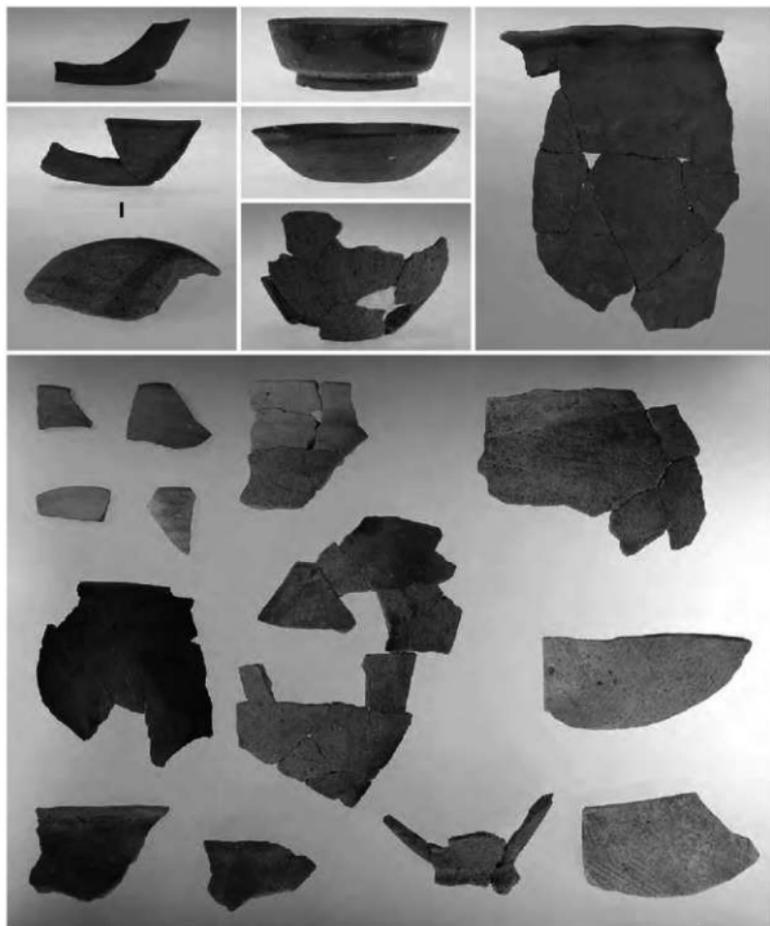
第32号住居址出土遺物



第2号周溝墓出土鉄銅



第1·2号住居址(1~7·13:1住、8~12:2住)



第3号住居址



第4号住居址

I

I

I



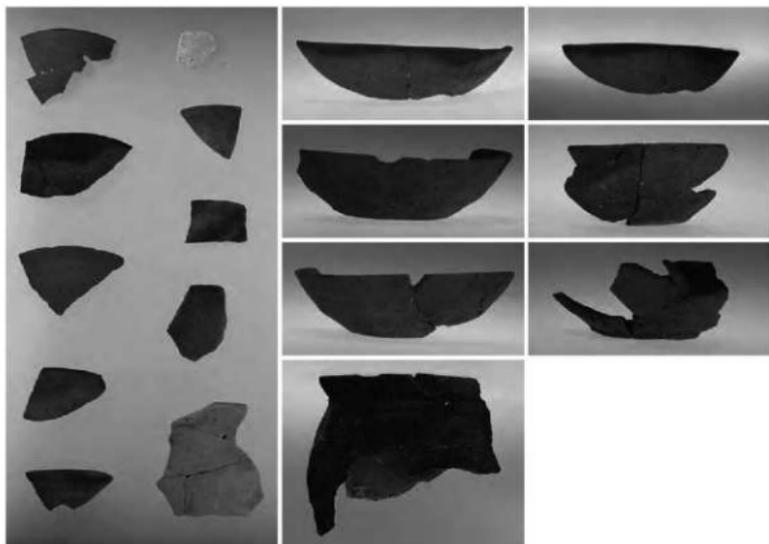
第5号住居址(1)



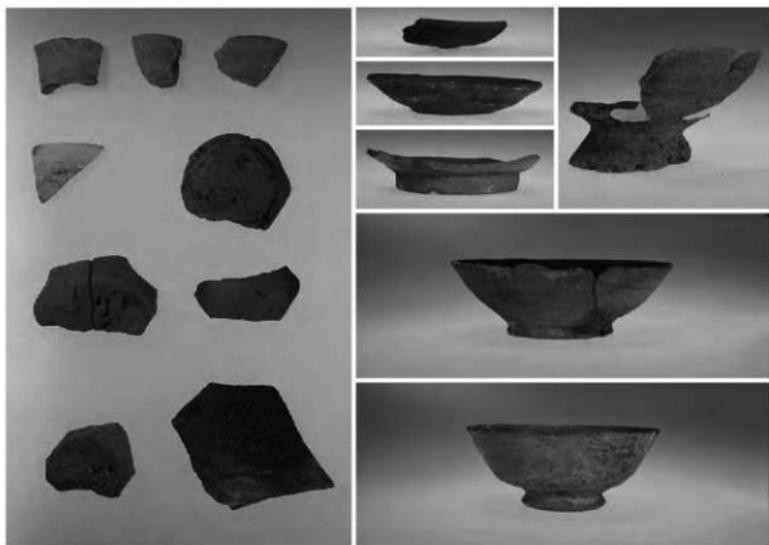
第5号住居址(2)



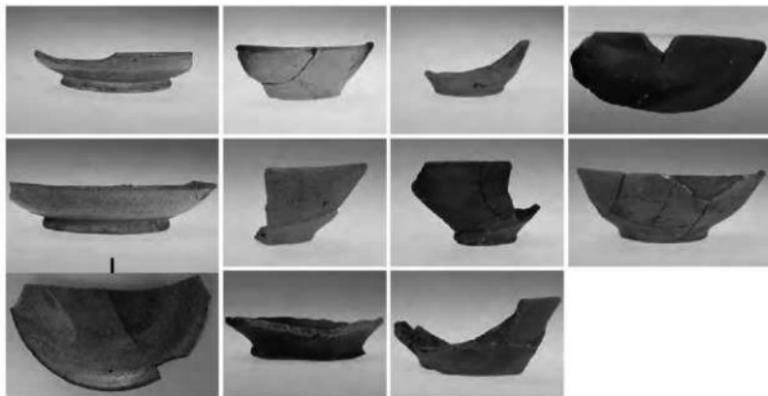
第5号住居址(3)



第6号住居址



第7号住居址



第8号住居址



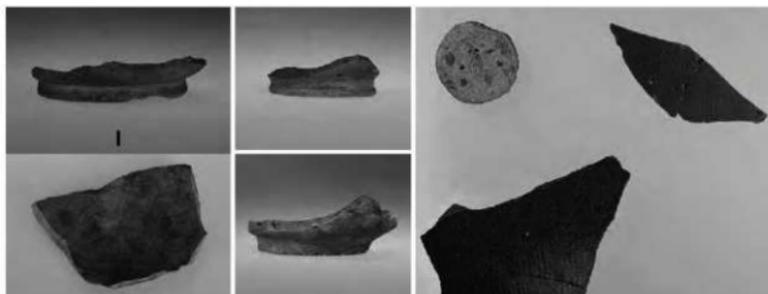
第9号住居址



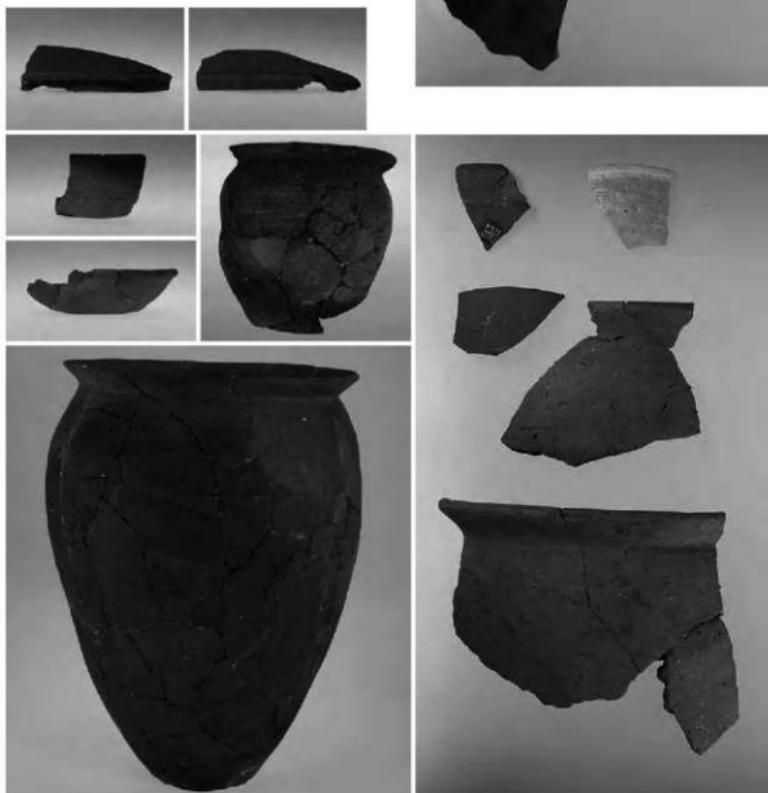
第13号住居址



第16・17・18号住居址 (1・2: 17住、3~5: 16住、6~12: 18住)



第19号住居址



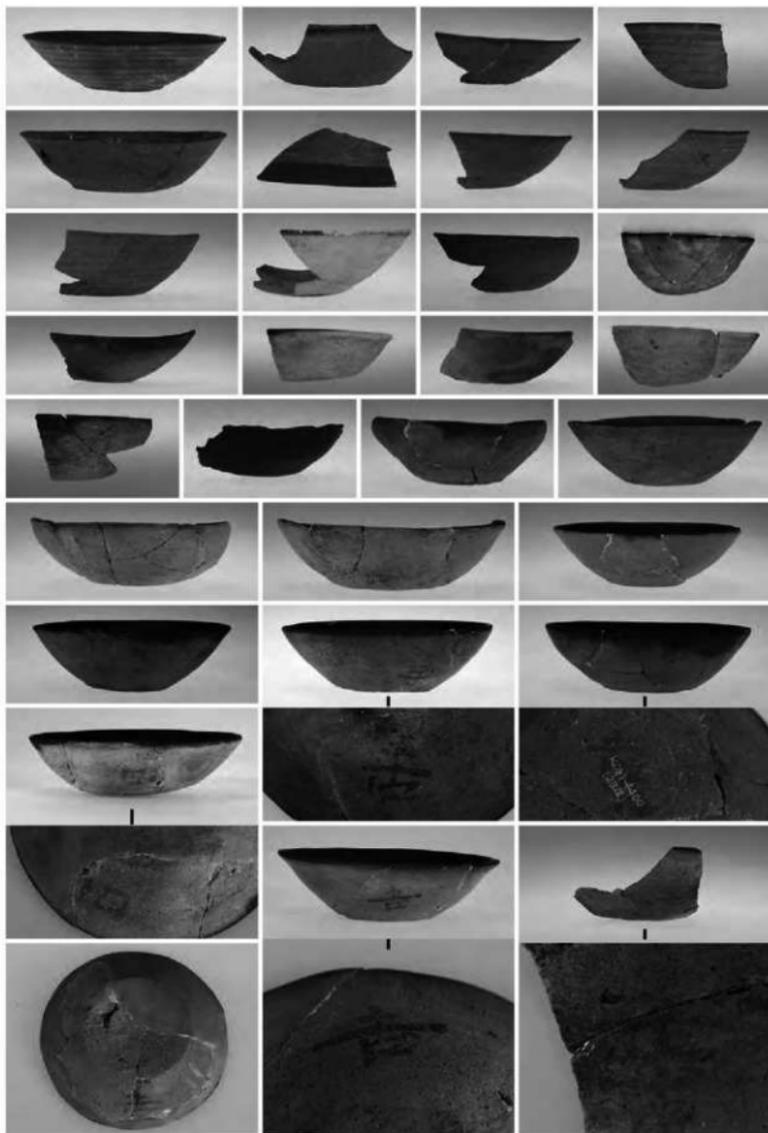
第20号住居址



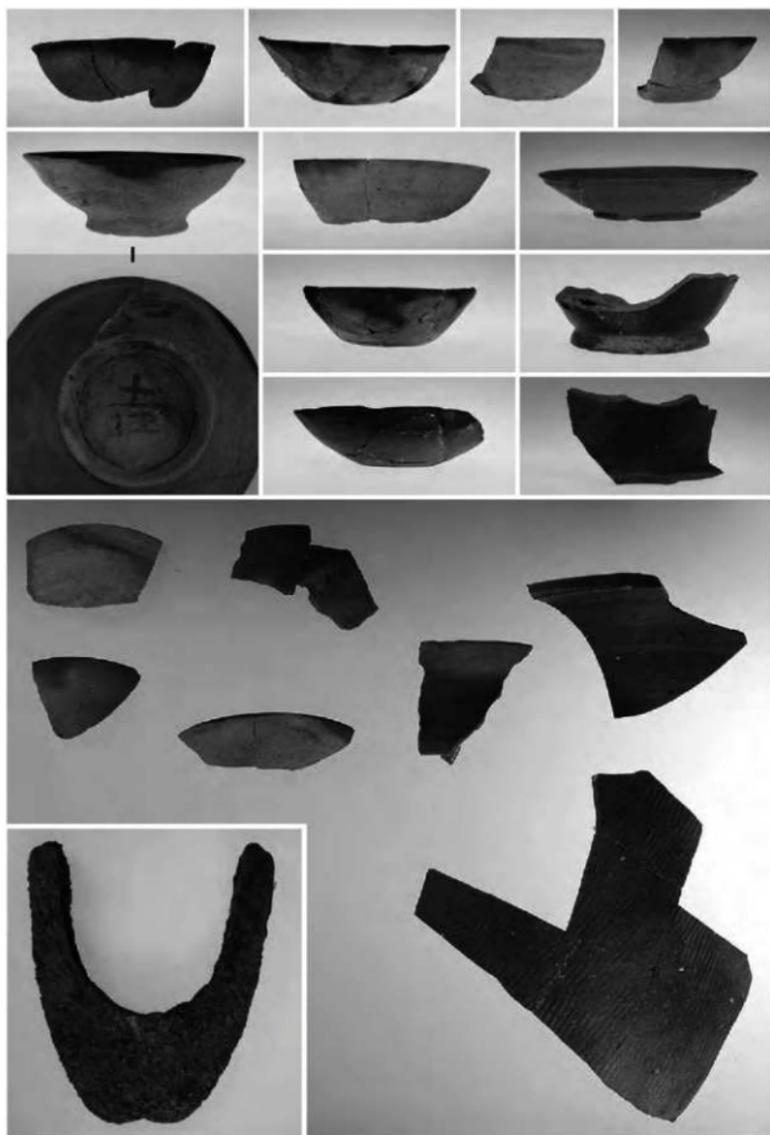
第21号住居址



第22号住居址



第23号住居址(1)



第23号住居址(2)



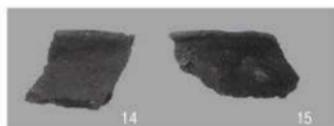
第23号住居址(3)

I

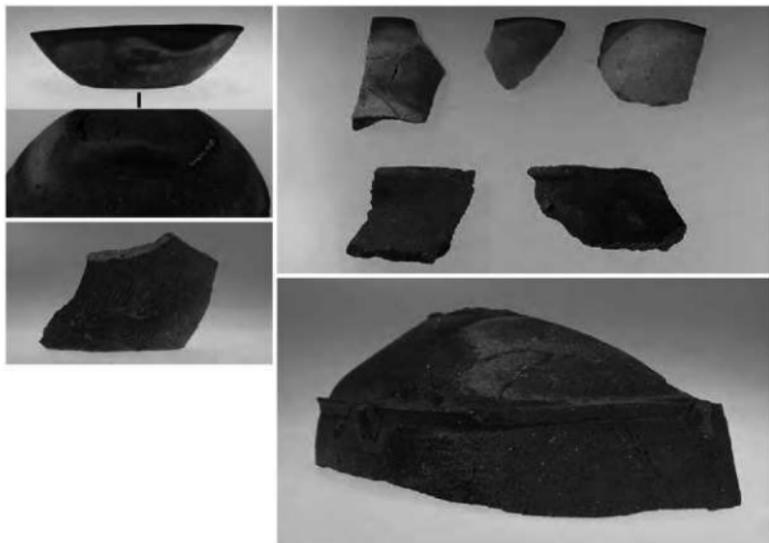
第32号住居址



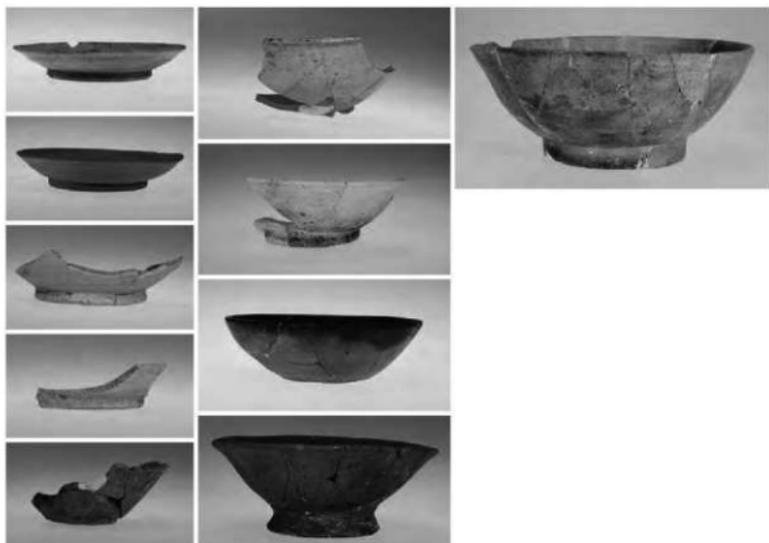
第33号住居址



第34·35·38号住居址(1~8:35住、9~12:34住、13~15:38住)



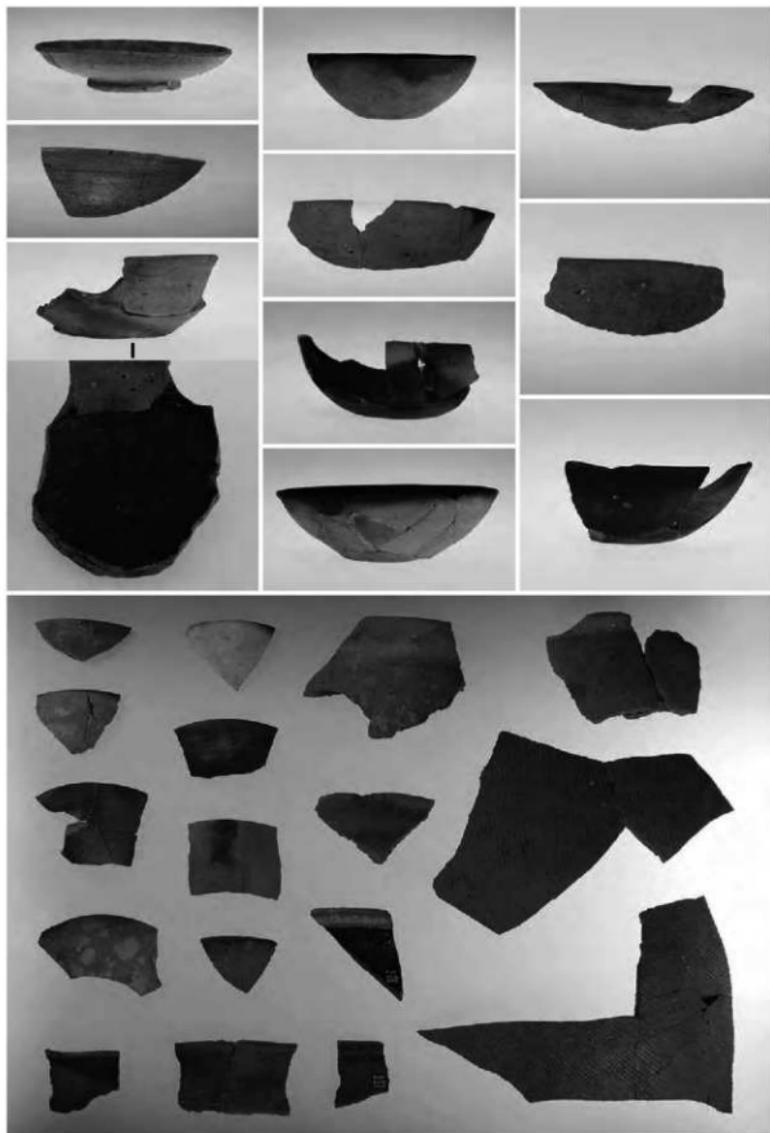
第36号住居址



第41号住居址(1)



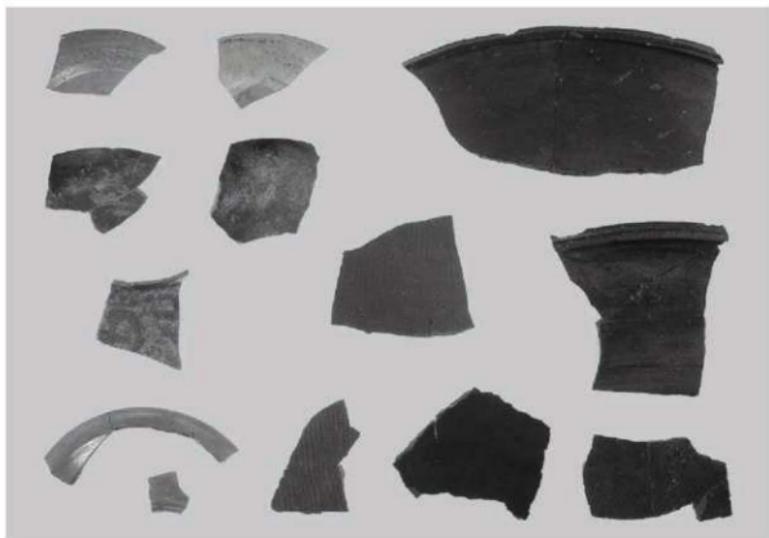
第41号住居址(2)



第42号住居址



住居址出土鉄器



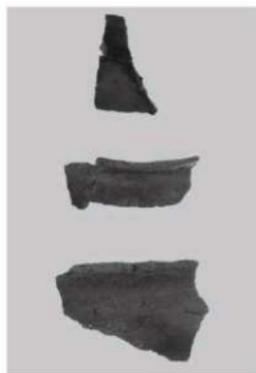
第51号住居址



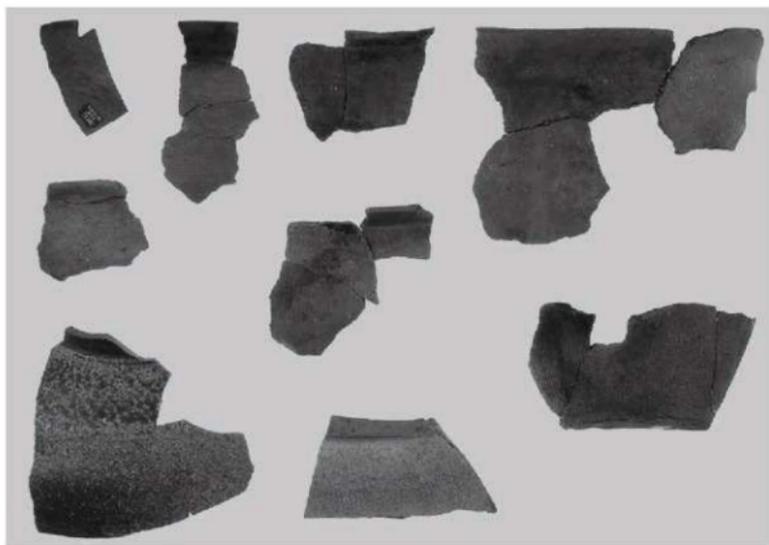
第52号住居址



第54号住居址



第55号住居址



第53号住居址

第56号住居址



第57号住居址



第59号住居址



第60号住居址



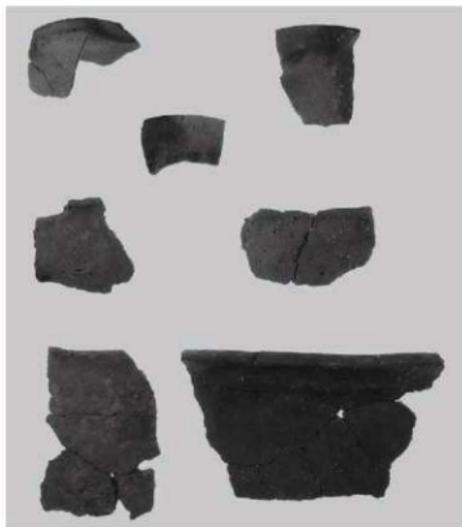
I

第61号住居址(1)

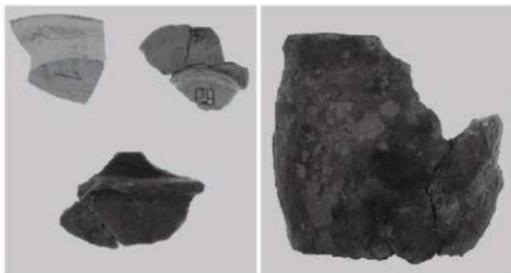
第62号住居址(1)



第61号住居址(2)



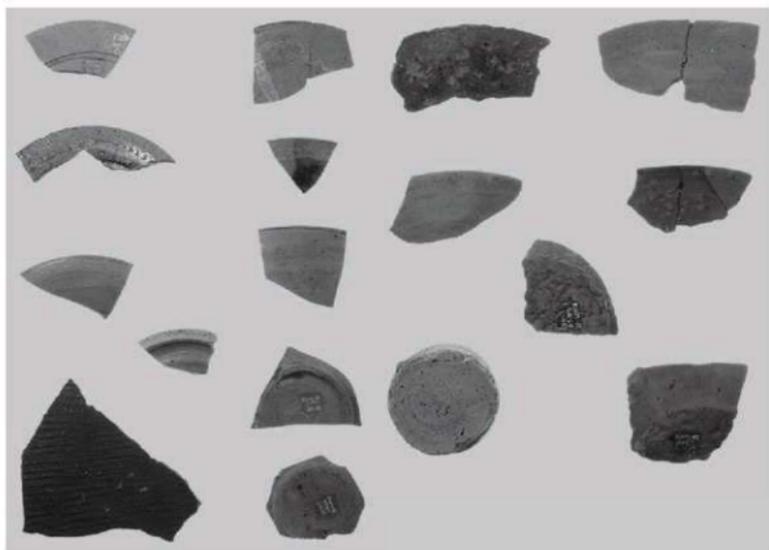
第62号住居址(2)



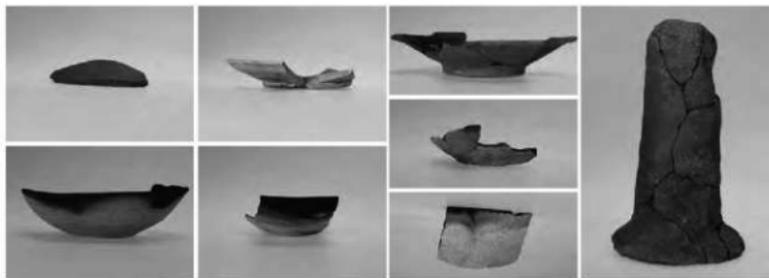
第63号住居址



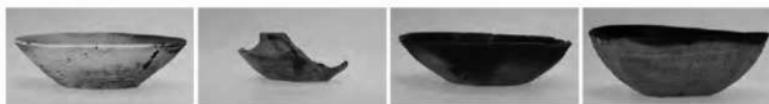
第64号住居址(1)



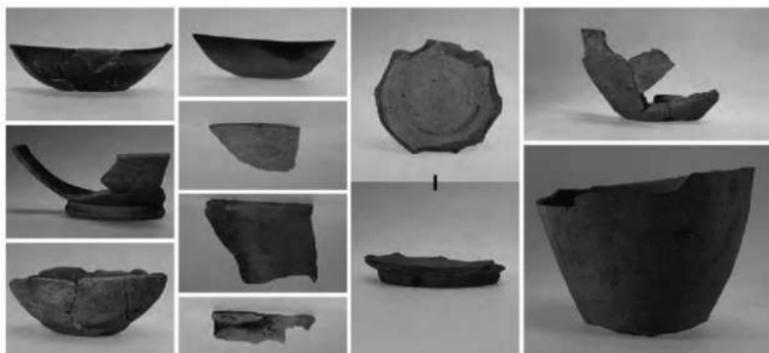
第64号住居址(2)



第65号住居址



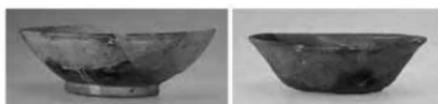
第66号住居址



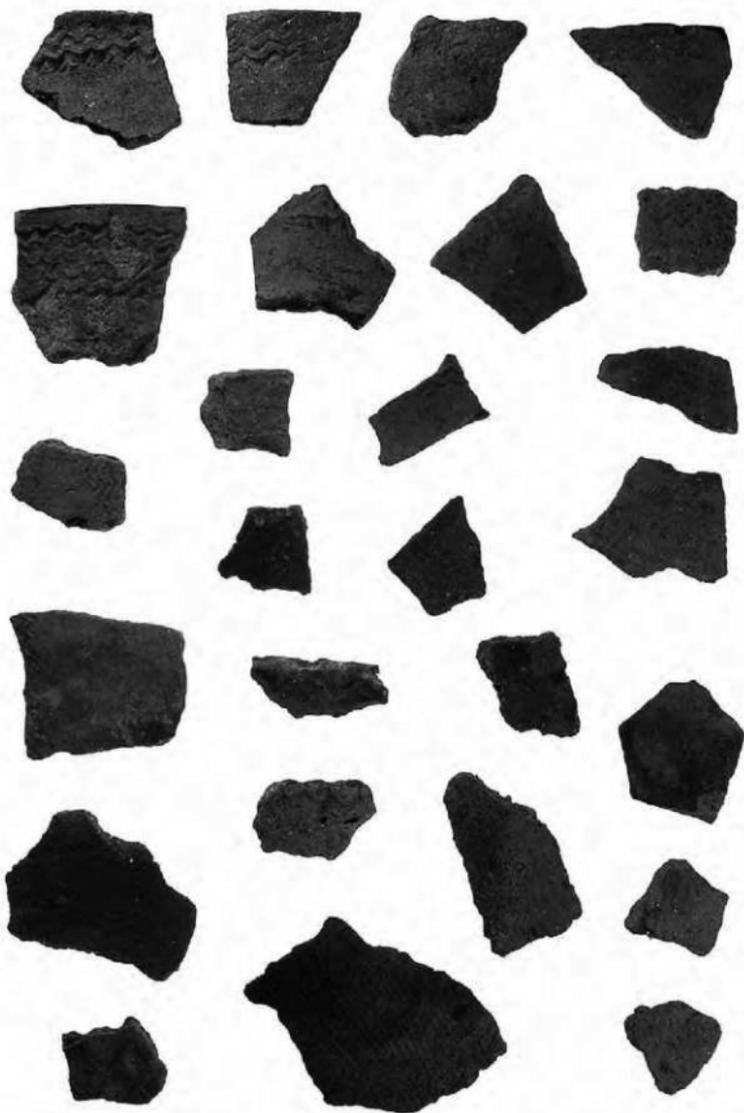
第67号住居址



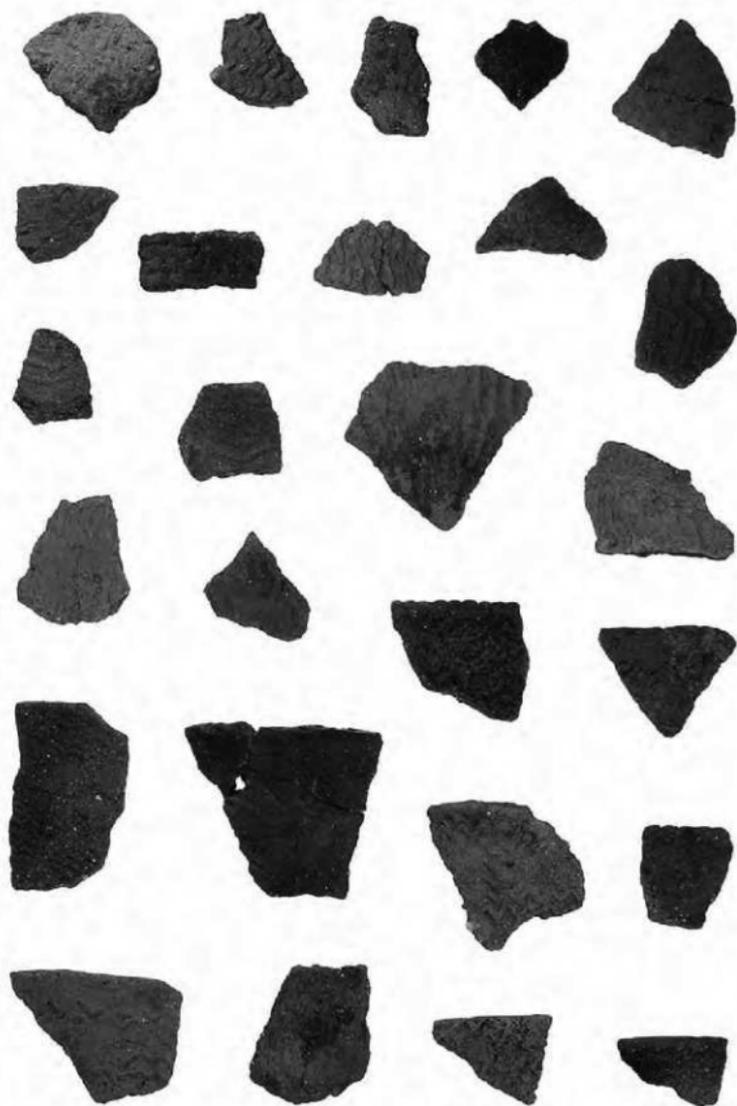
第68号住居址



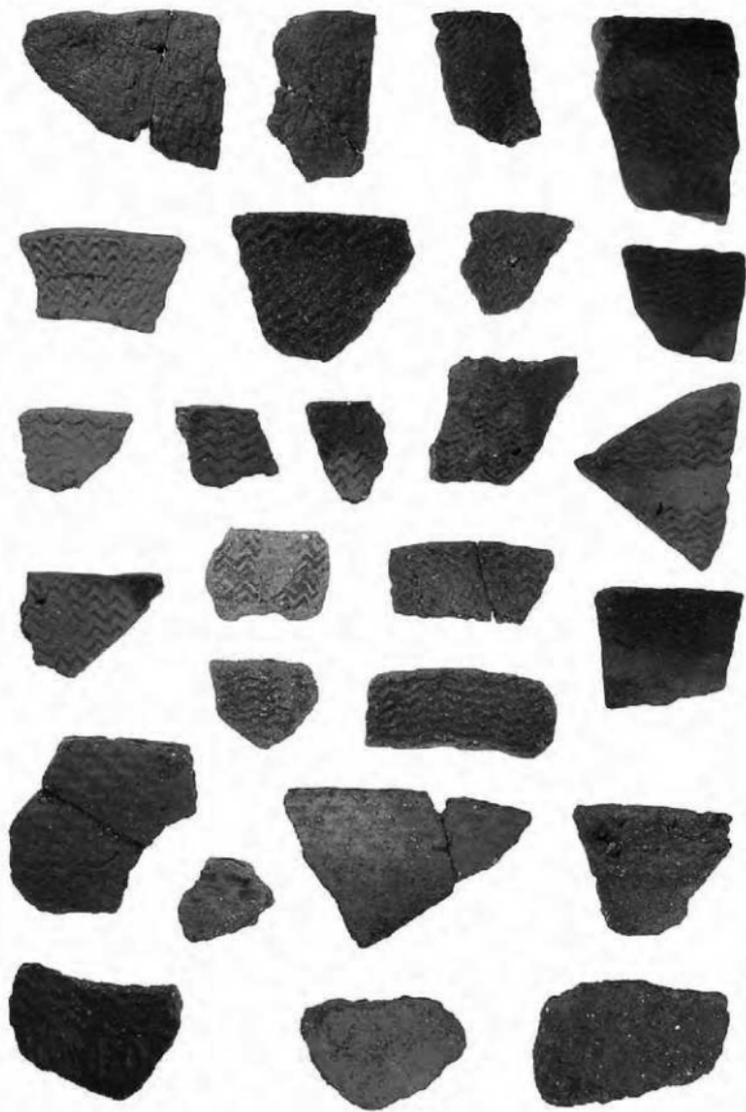
第69号住居址



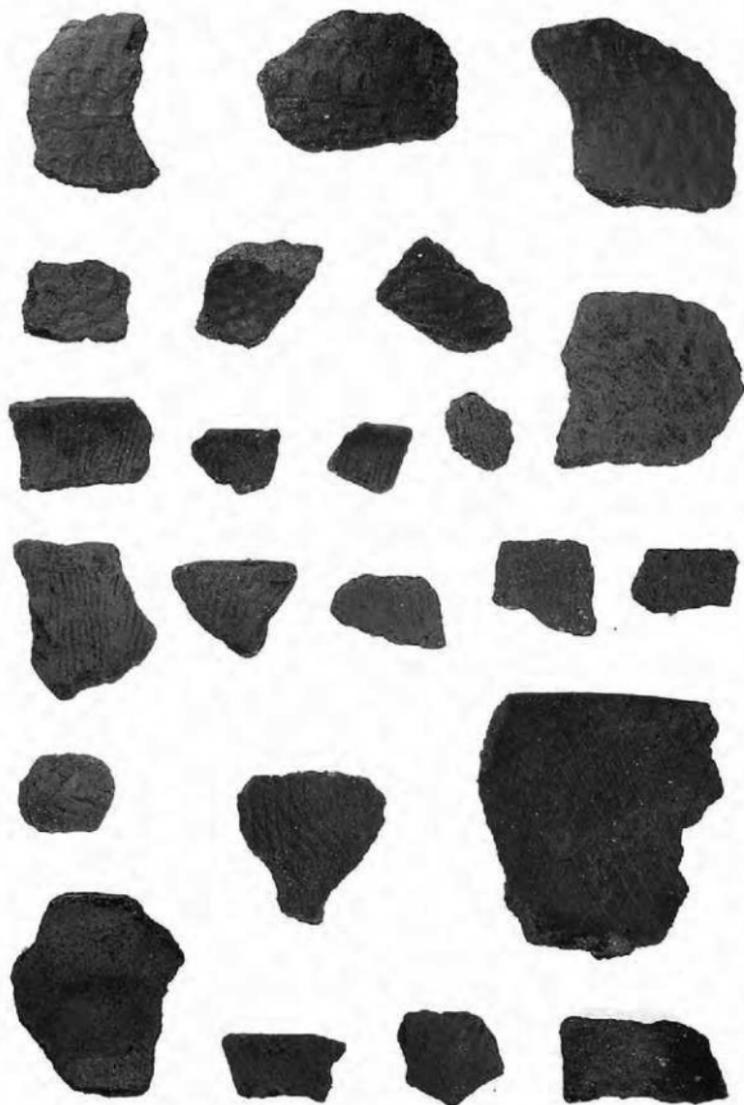
繩文時代早期土器(1)



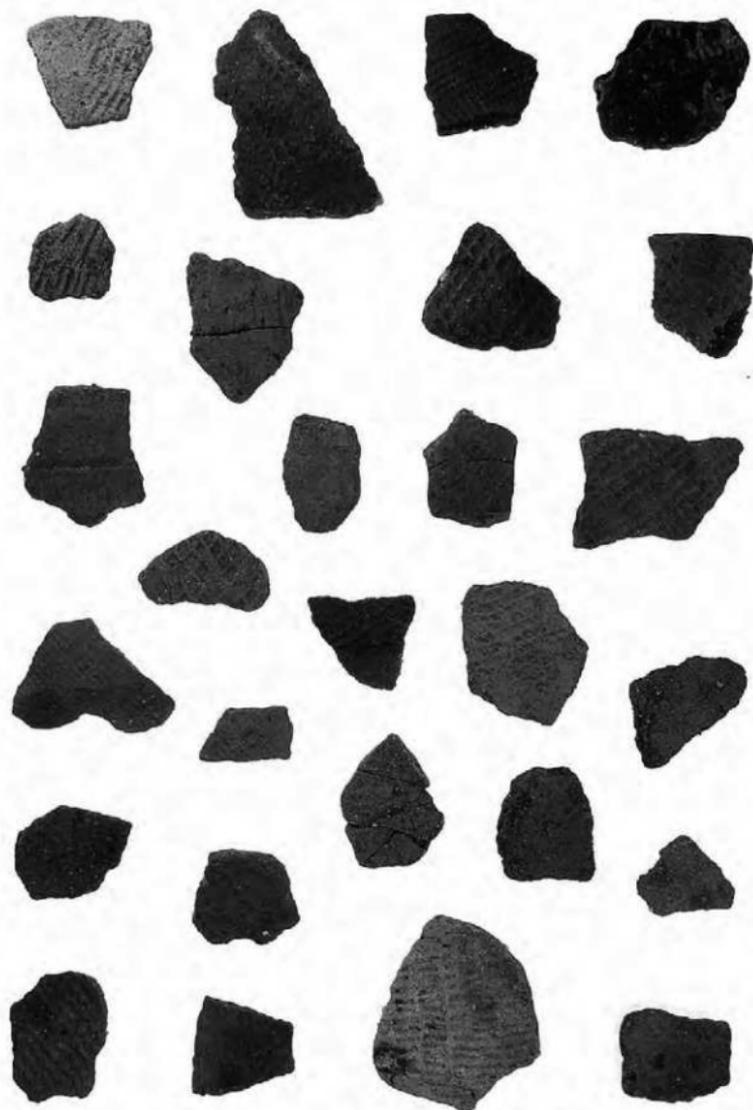
繩文時代早期土器(2)



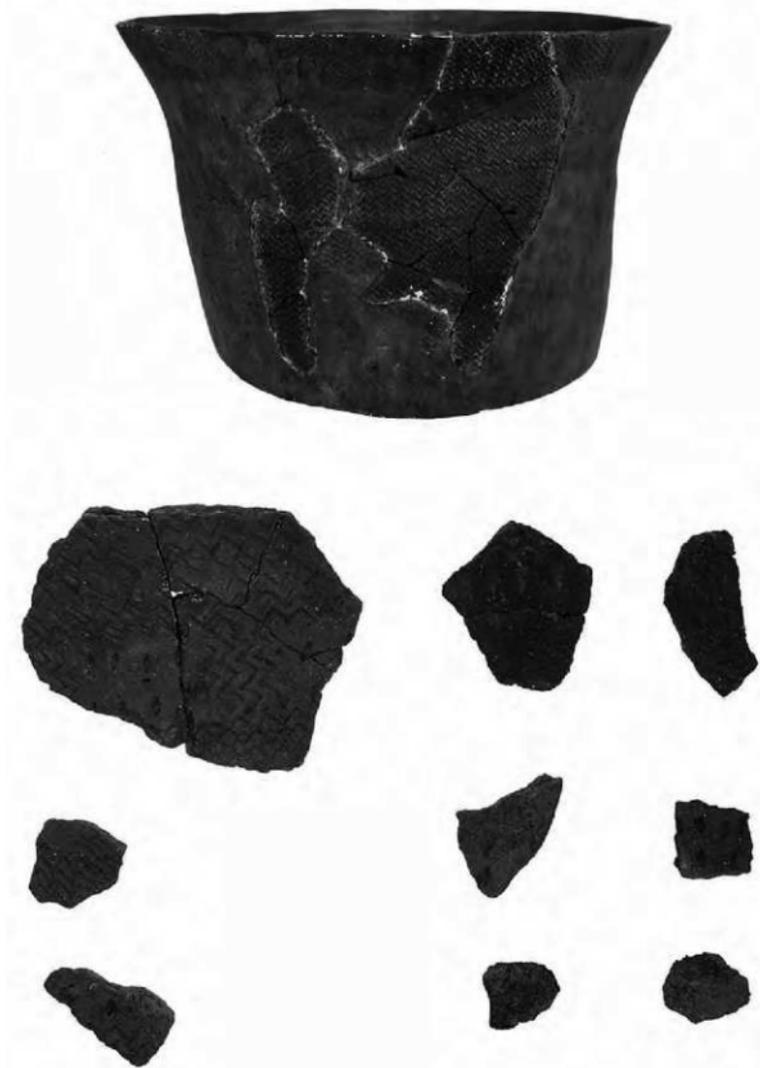
縄文時代早期土器(3)



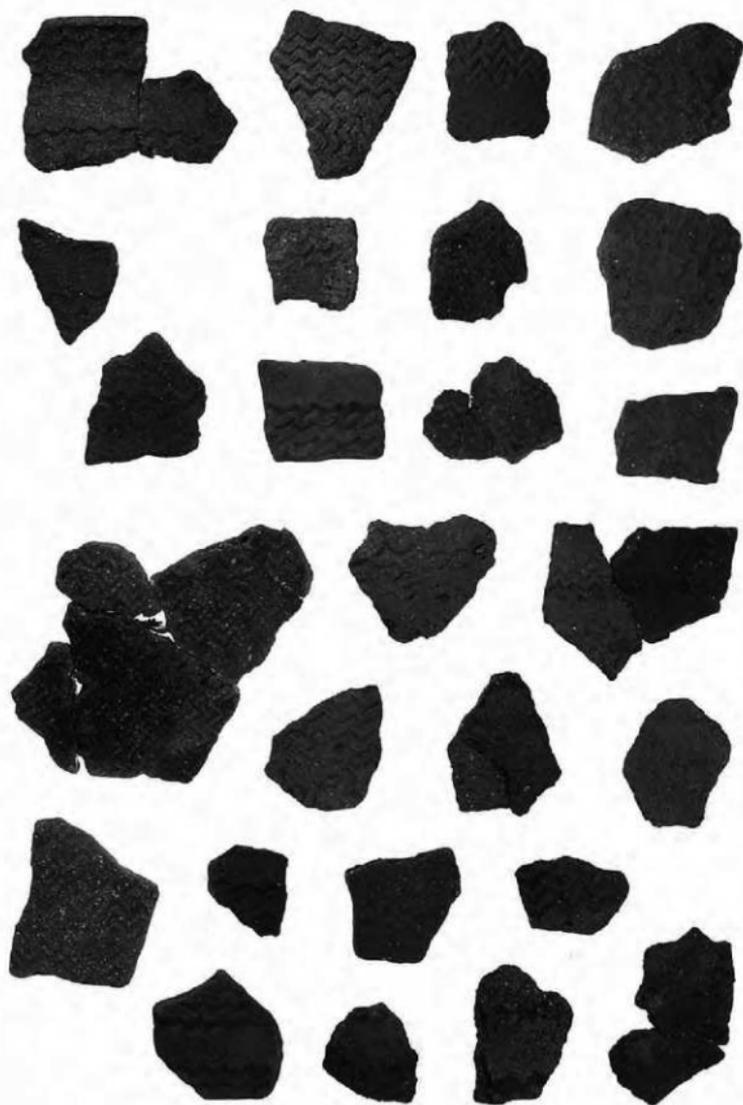
繩文時代早期土器(4)



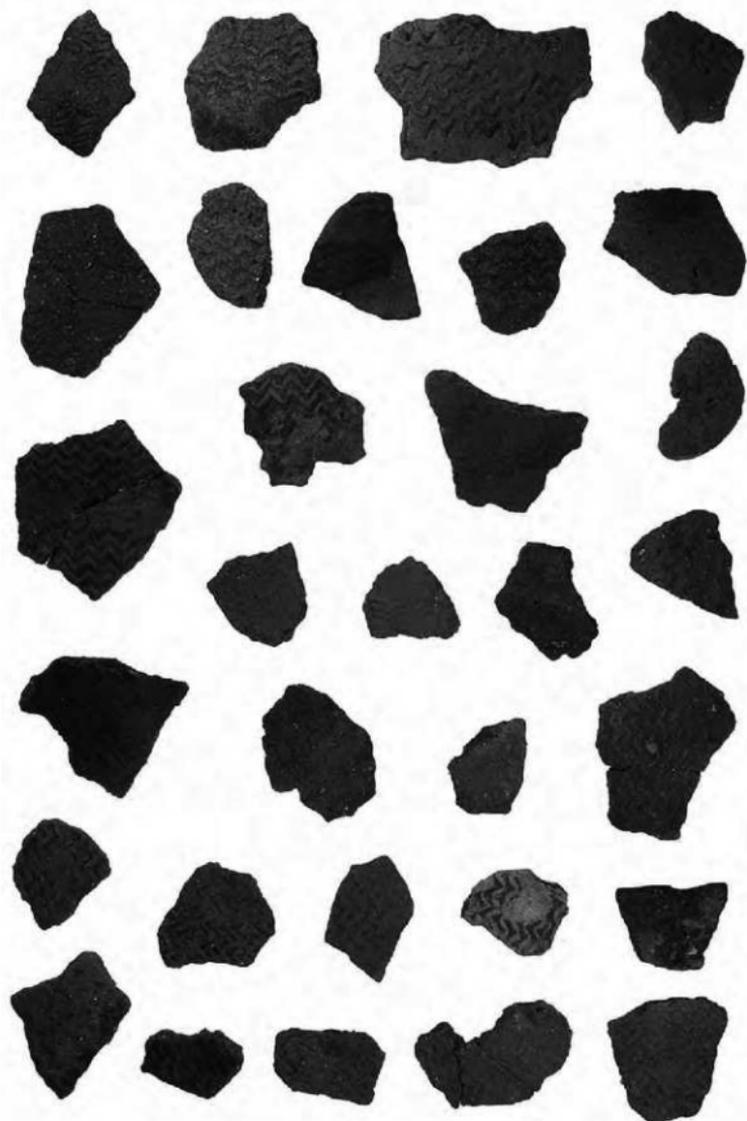
縄文時代早期土器(5)



縄文時代早期土器(6)



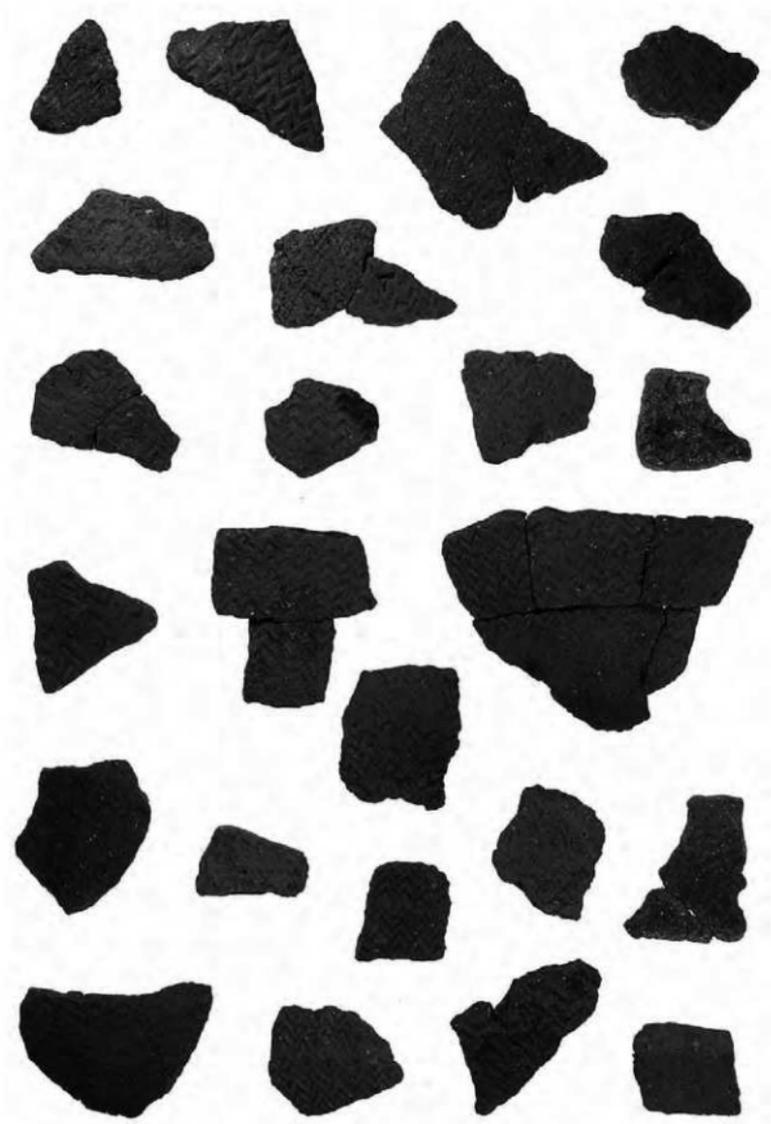
繩文時代早期土器(7)



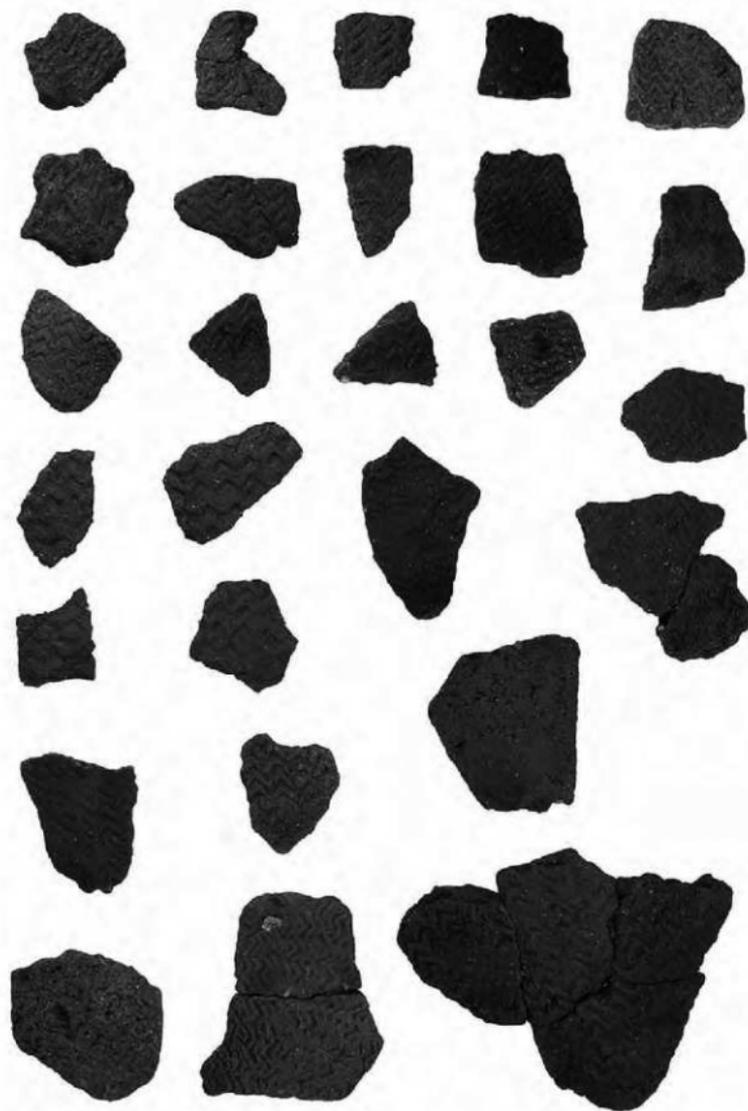
繩文時代早期土器(8)



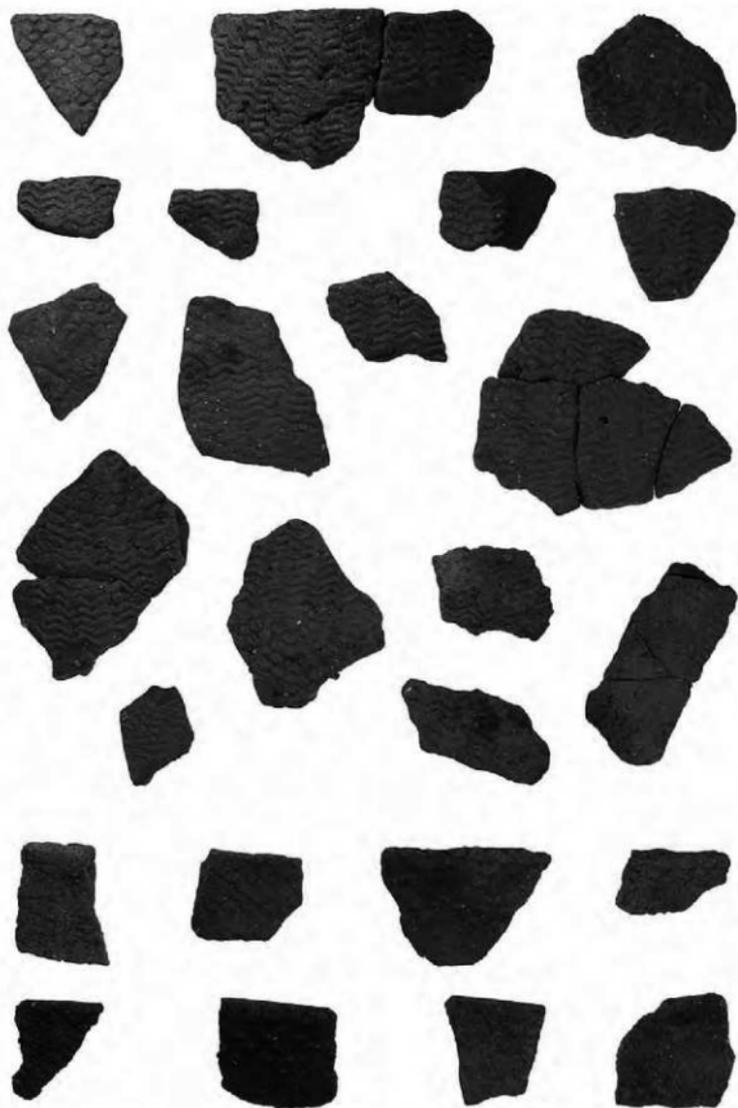
縄文時代早期土器(9)



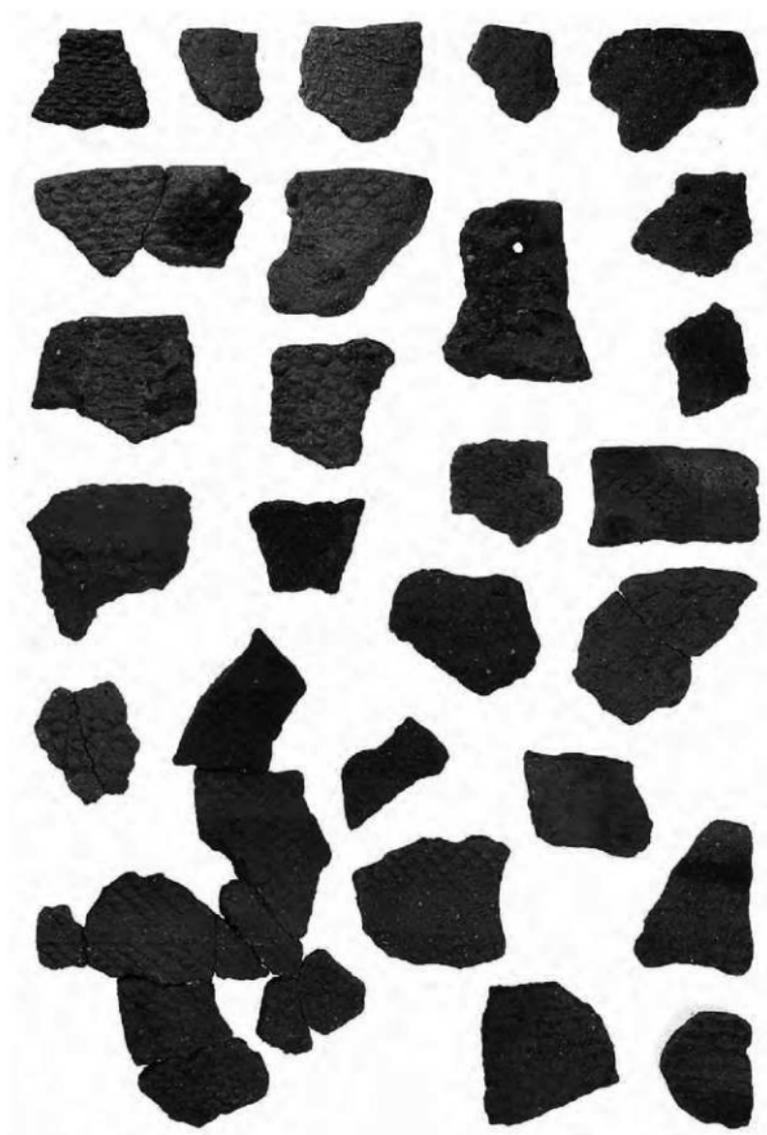
縄文時代早期土器(10)



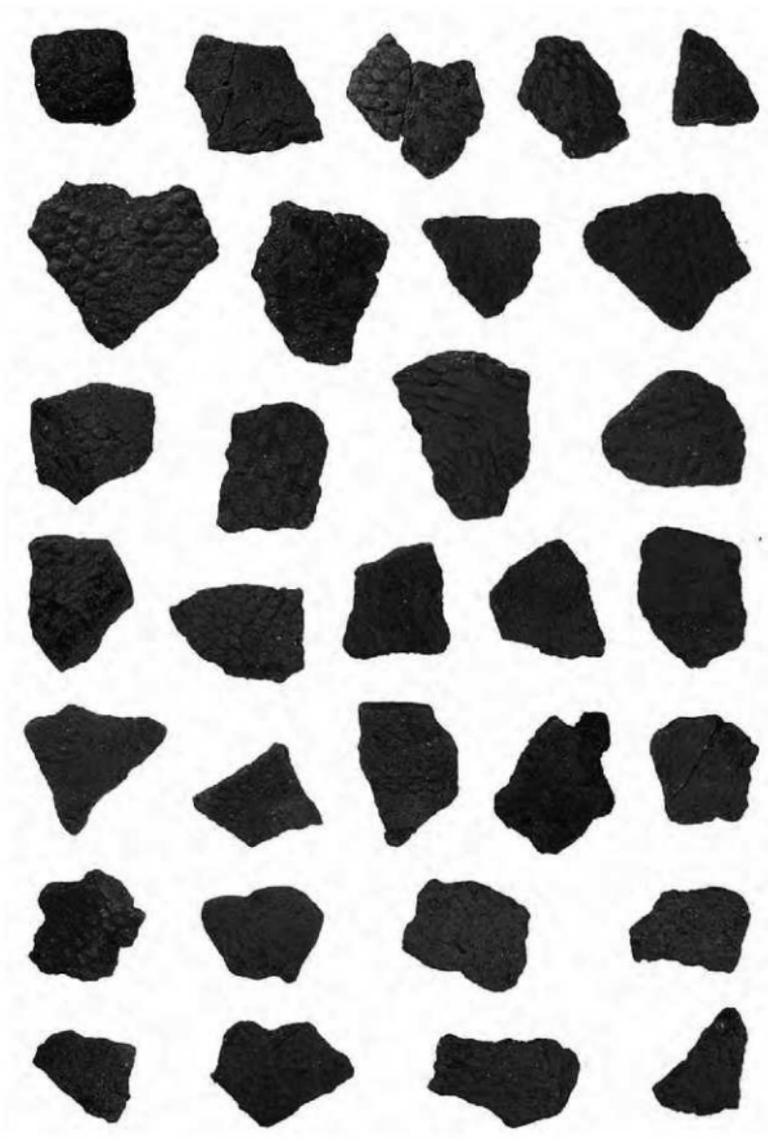
縄文時代早期土器(11)



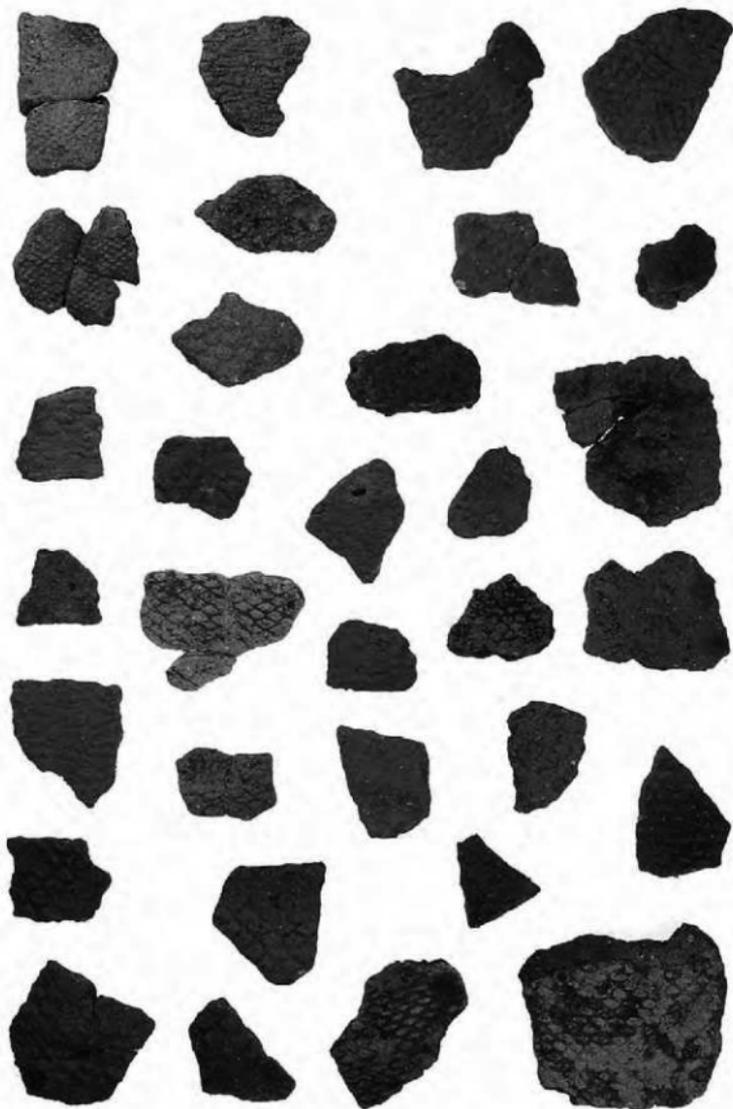
縄文時代早期土器(12)



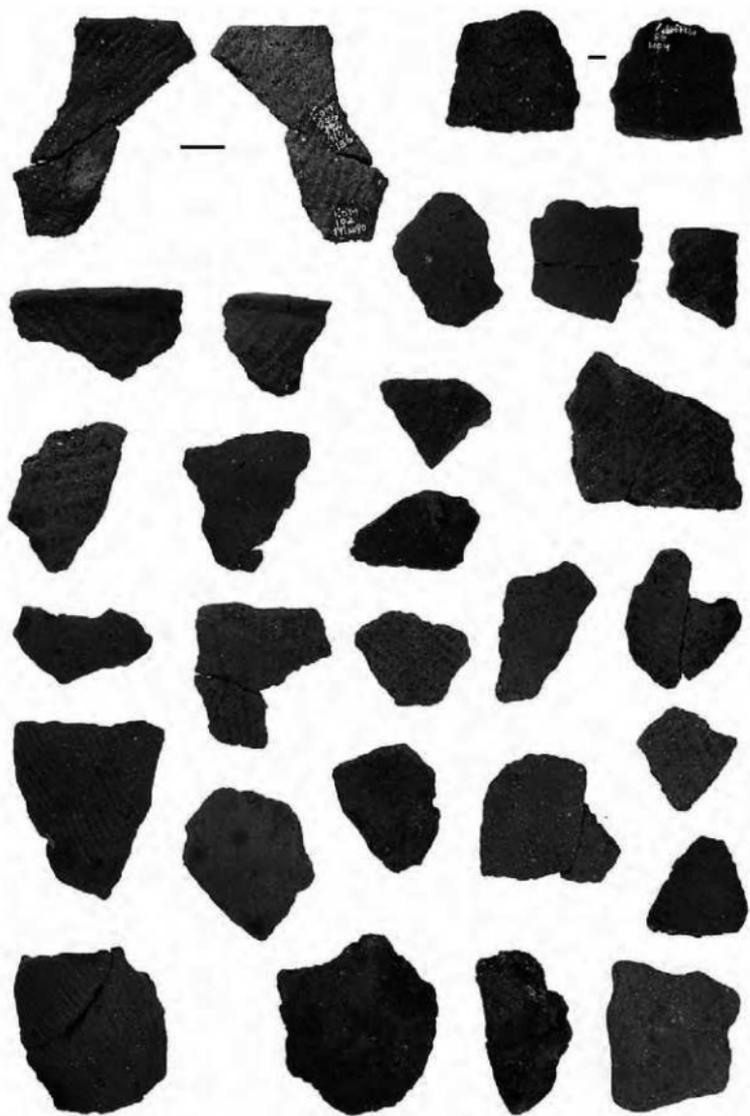
縄文時代早期土器(13)



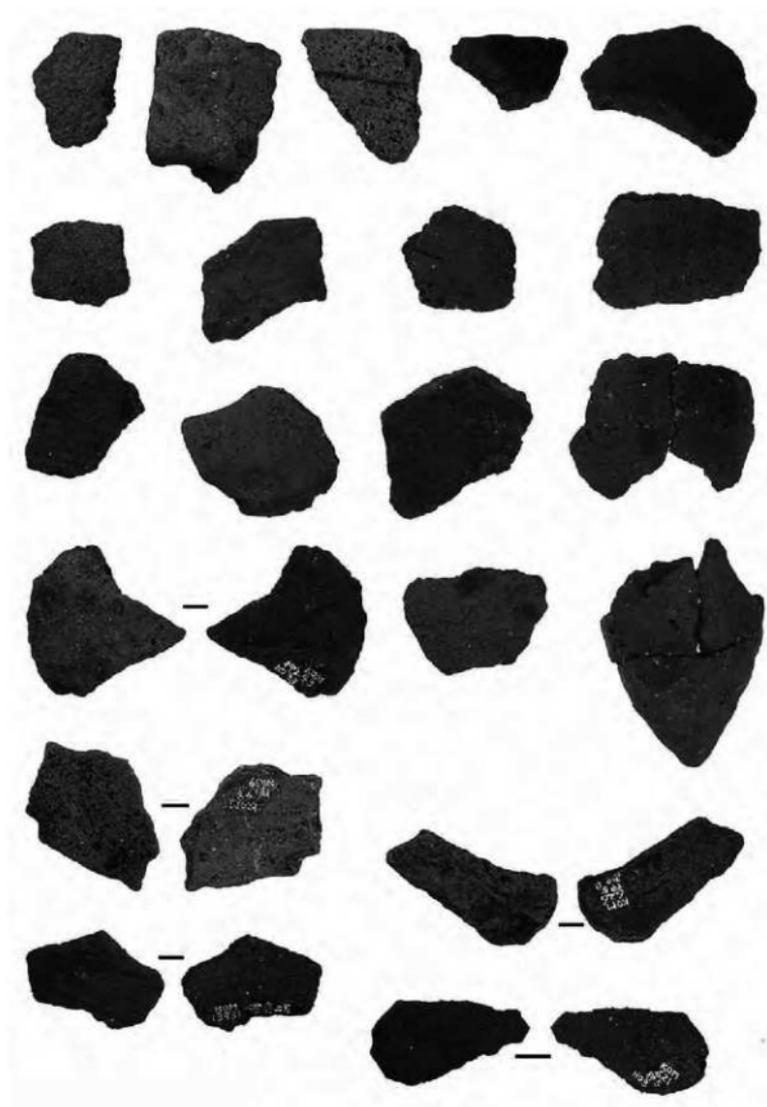
縄文時代早期土器(14)



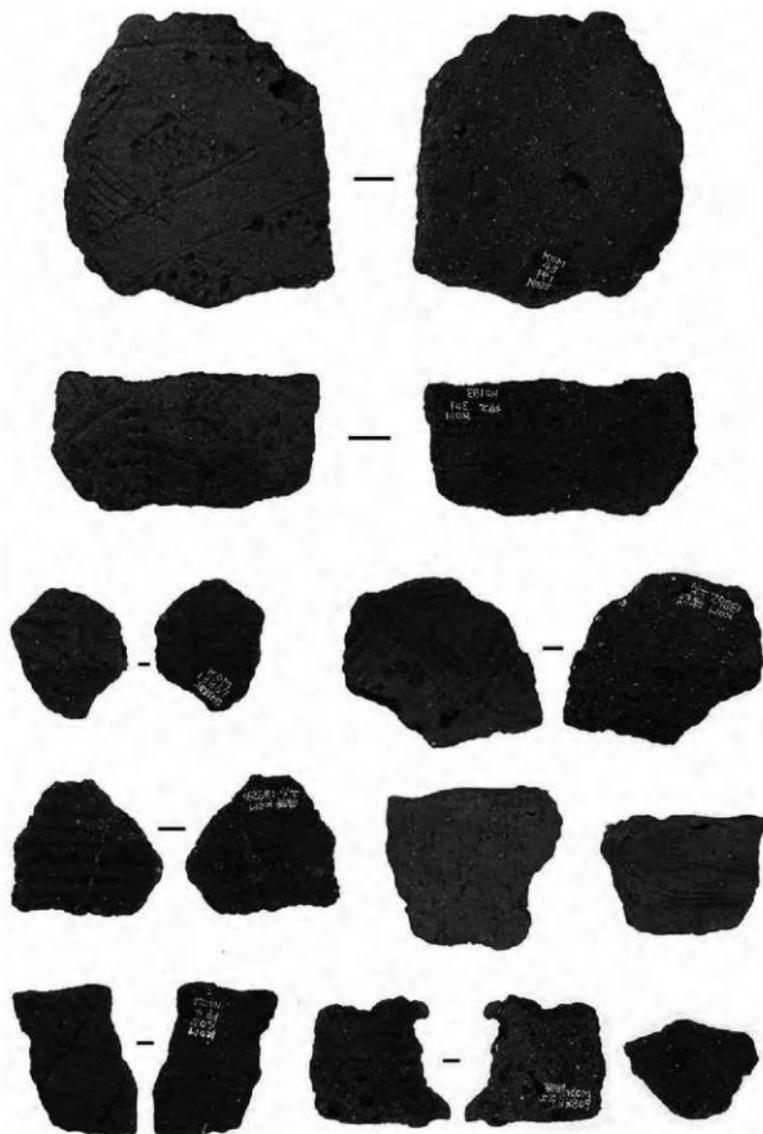
縄文時代早期土器(15)



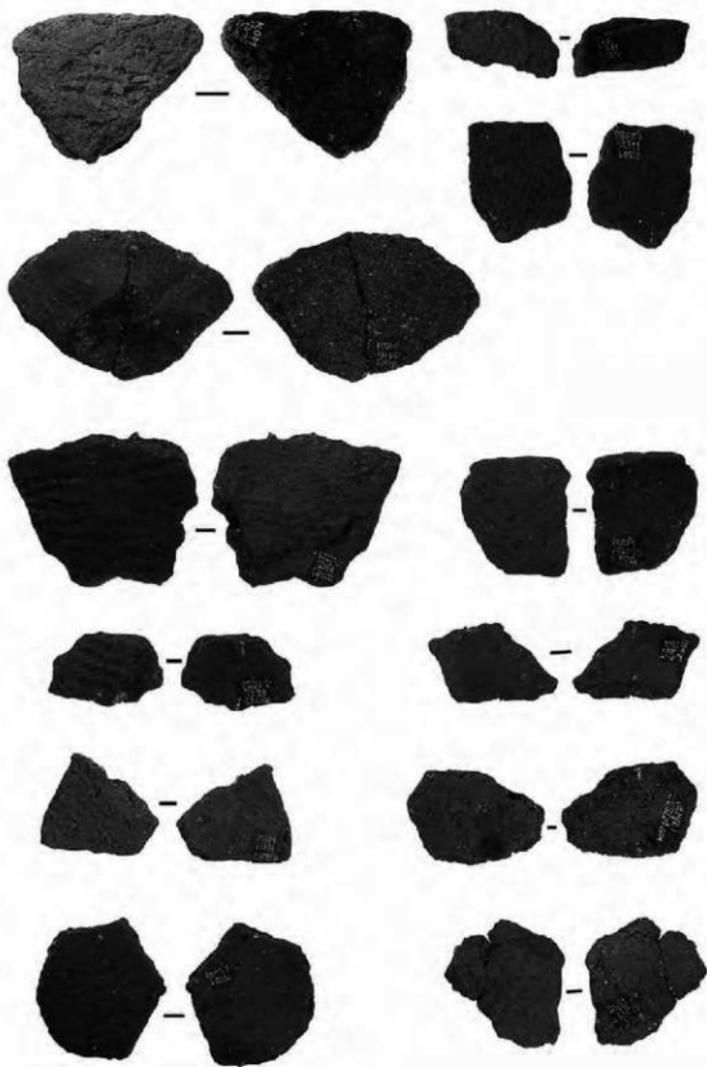
縄文時代早期土器(16)



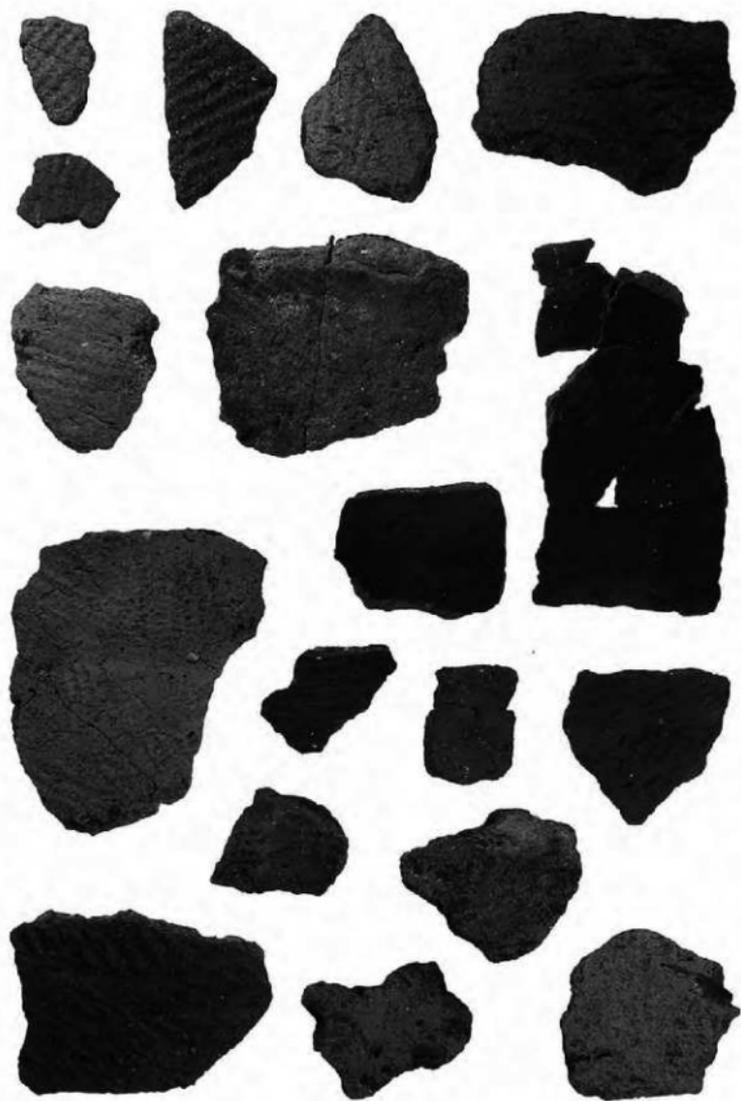
縄文時代早期土器(17)



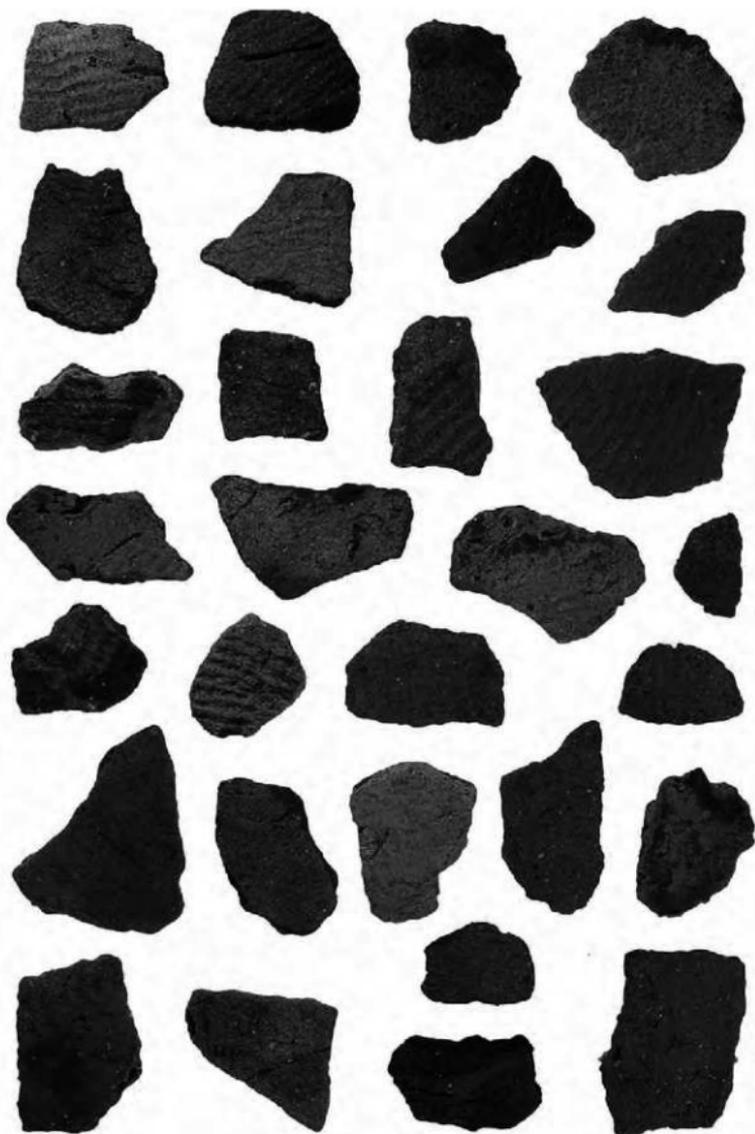
縄文時代早期土器(18)



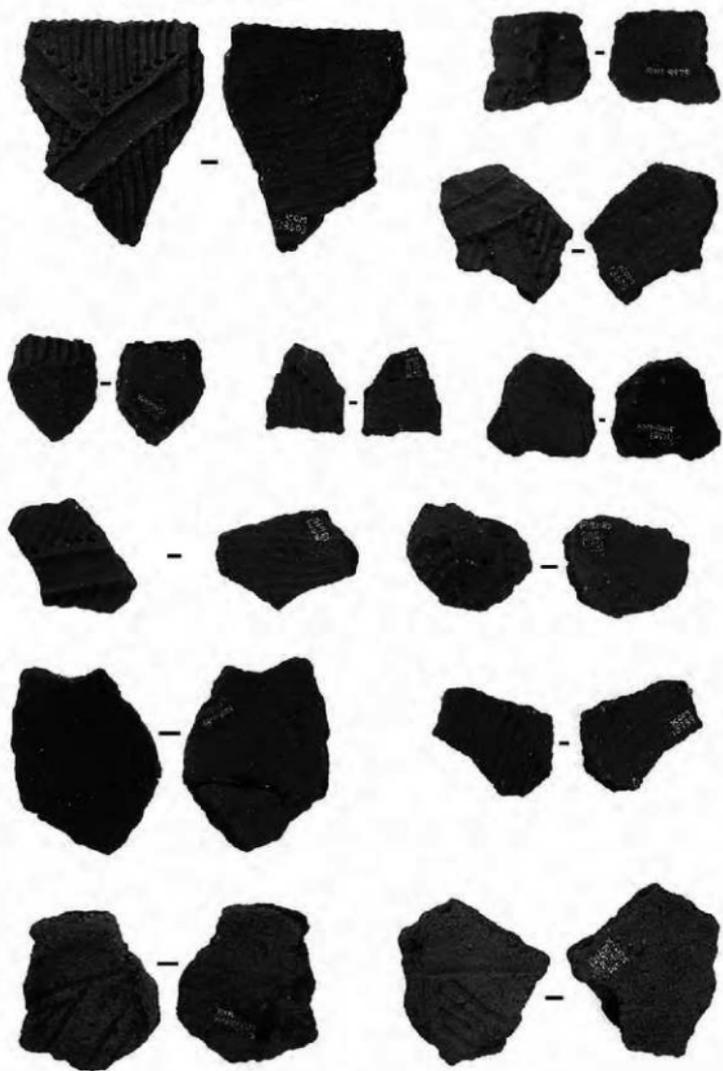
縄文時代早期土器(19)



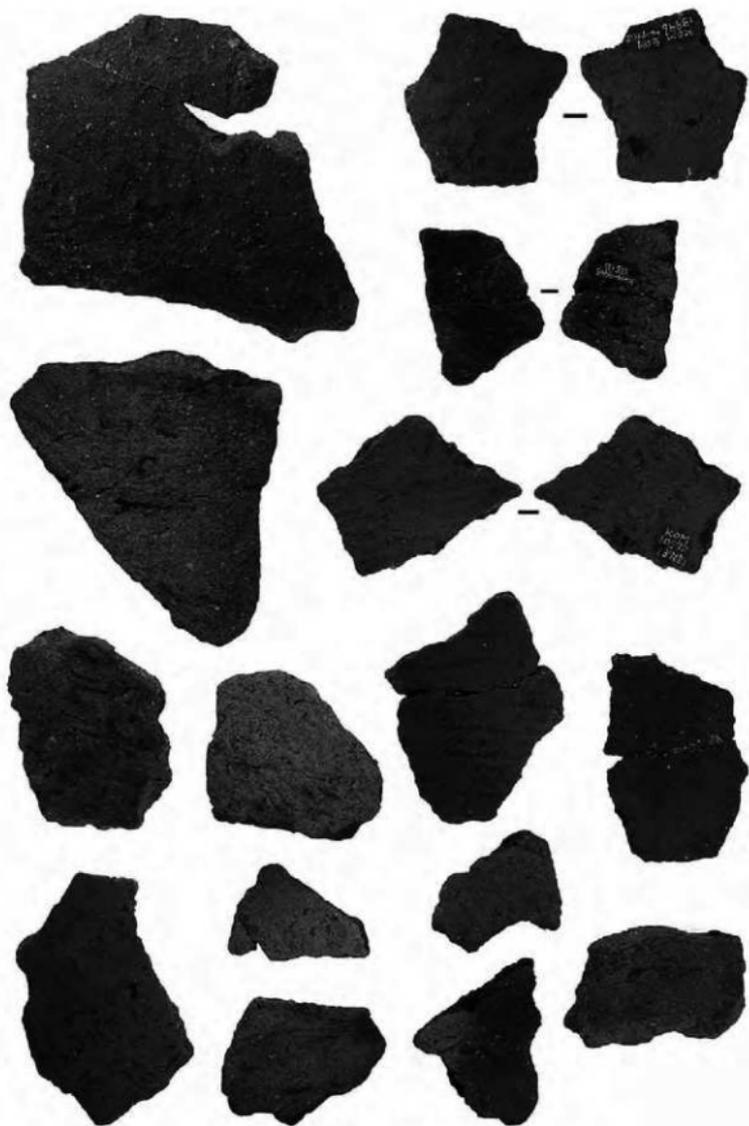
縄文時代早期土器(20)



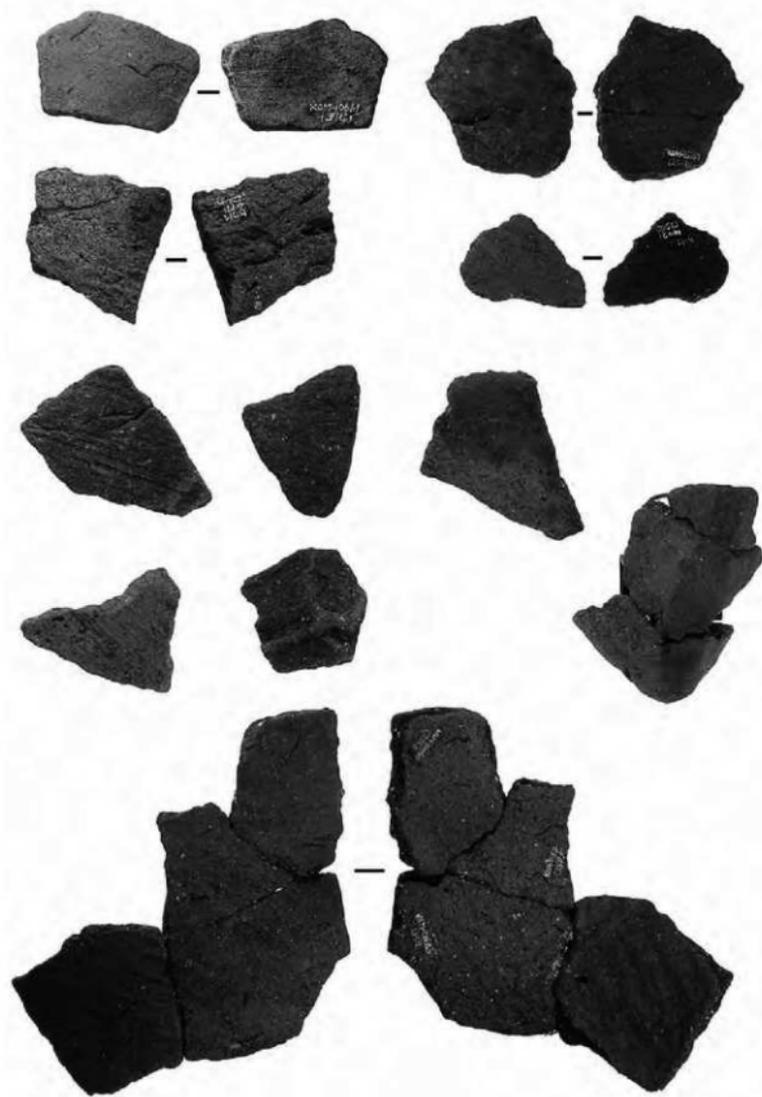
縄文時代早期土器(21)



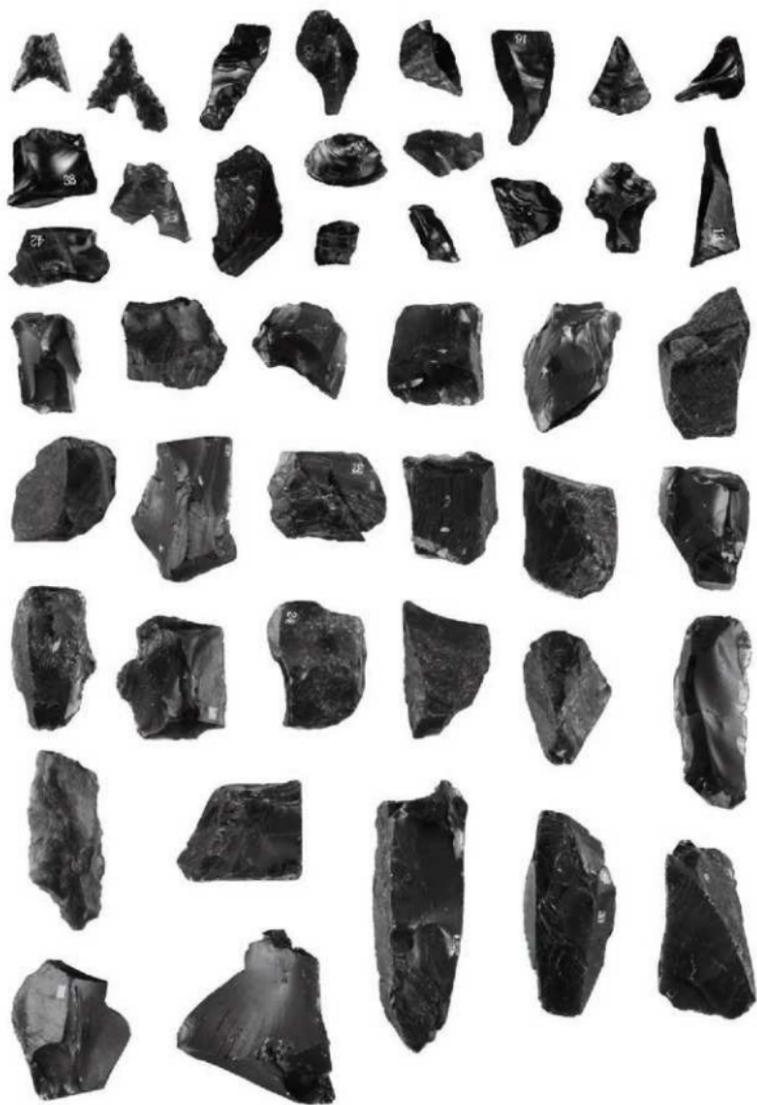
縄文時代早期土器(22)



縄文時代早期土器(23)



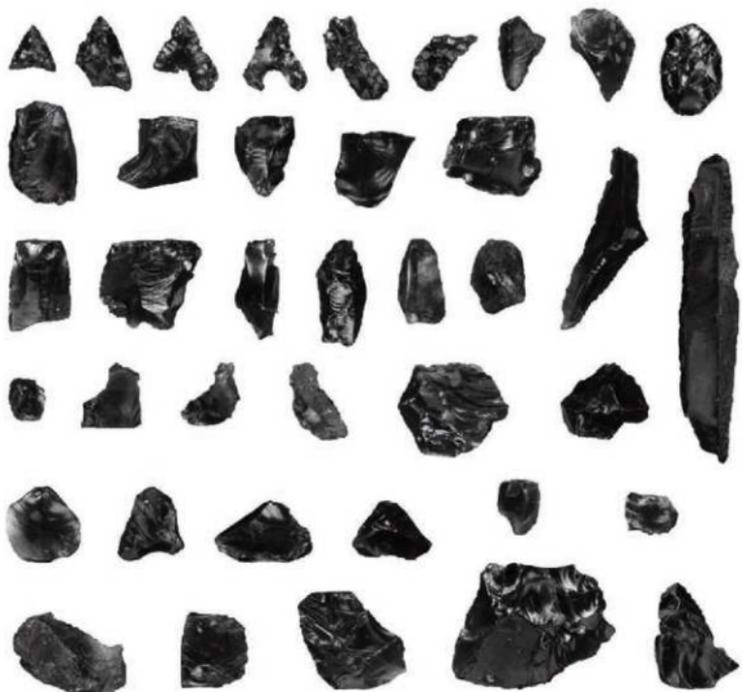
縄文時代早期土器(24)



第1号ブロック



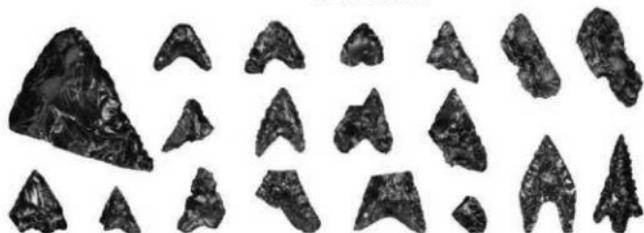
第2号ブロック



礫群出土石器(1)



裸群出土石器(2)



遺構外出土石器(1)



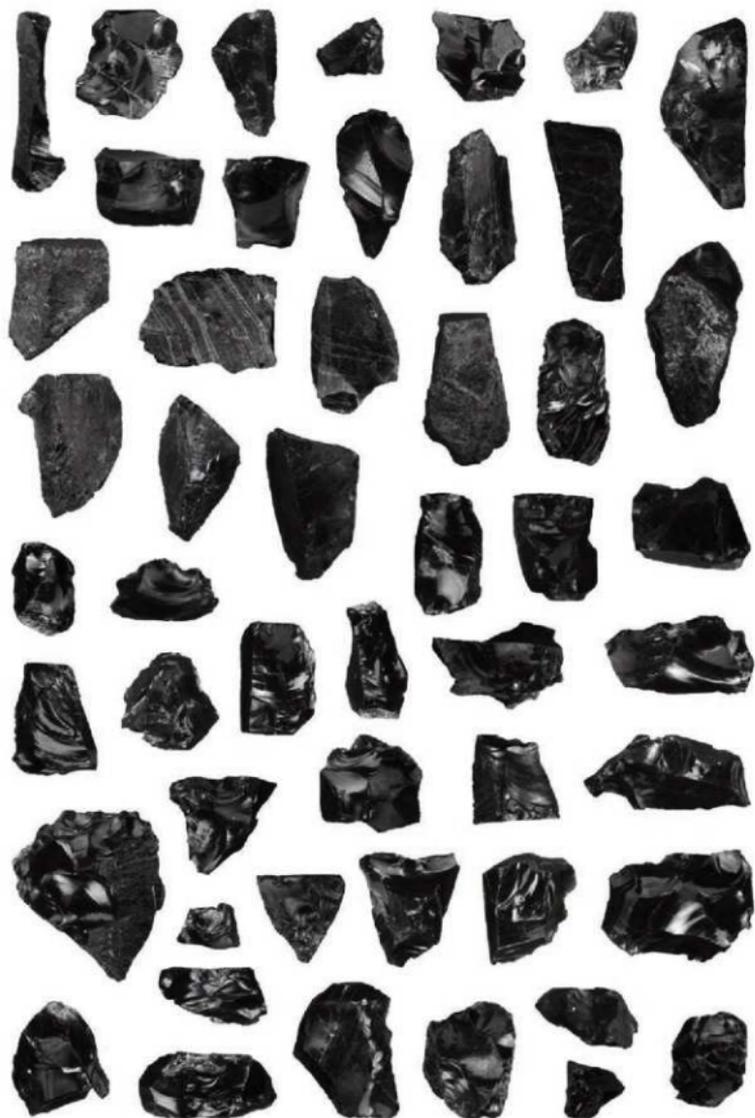
道槽外出土石器(2)



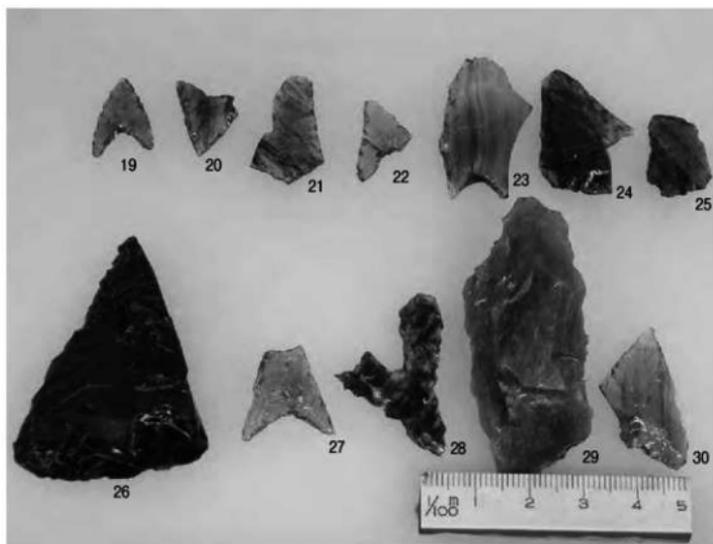
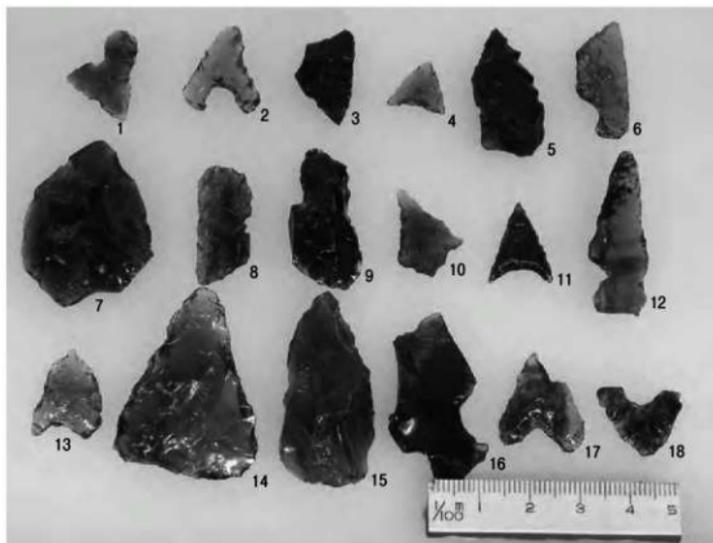
道橋外出土石器(3)



遺構外出土石器(5)



道槽外出土石器(4)



産地分析試料

報告書抄録

ふりがな	こうじんやまおんまわしいせき						
書名	荒神山おんまわし遺跡						
副書名	団体営土地改良総合整備事業樋口地区に先立つ緊急発掘調査						
著者名	福島 永						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 電話 (0266)41-1681						
発行年月日	平成24 (2012) 年3月30日						
所収遺跡名	所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
荒神山おんまわし遺跡	長野県上伊那郡辰野町大字樋口2161番地ほか	20382	66	35°57'52"	137°58'37"	19880615 } 19881228 19890612 } 19880809 19900527 } 19900912	3,200㎡
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	
荒神山おんまわし遺跡	集落址	縄文時代	住居址	1	縄文時代前期末葉・後期土器		
			集石	11	弥生時代前期・後期土器		
			集石炉	1	平安時代灰釉陶器・土師器		
			土坑(落し穴状土坑含む)	90	縄文時代石器		
	幕城	弥生時代	住居址	2	平安時代鉄器		
			土坑	2	中世陶磁器・内耳土器		
			平安時代	住居址	9		
不明	不明	中世	堅穴建物址	33			
		不明	溝址	2			
特記事項			不明	1			
			<p>縄文時代早期の立野式から横沢式にわたる押型文が出土した。そのほか、条痕文土器片も出土し、当該期の資料を提供できた。</p> <p>また、弥生時代後期の集落が発見され、これらの集落に伴うと考えられる方形周溝墓も出土し、弥生時代後期の集落構造の一端を示す資料を提供できた。</p> <p>平安時代では当該期を通して集落が形成されていたことが判明した。</p>				

荒神山おんまわし遺跡

団体営土地改良総合整備事業樋口地区に先立つ緊急発掘調査

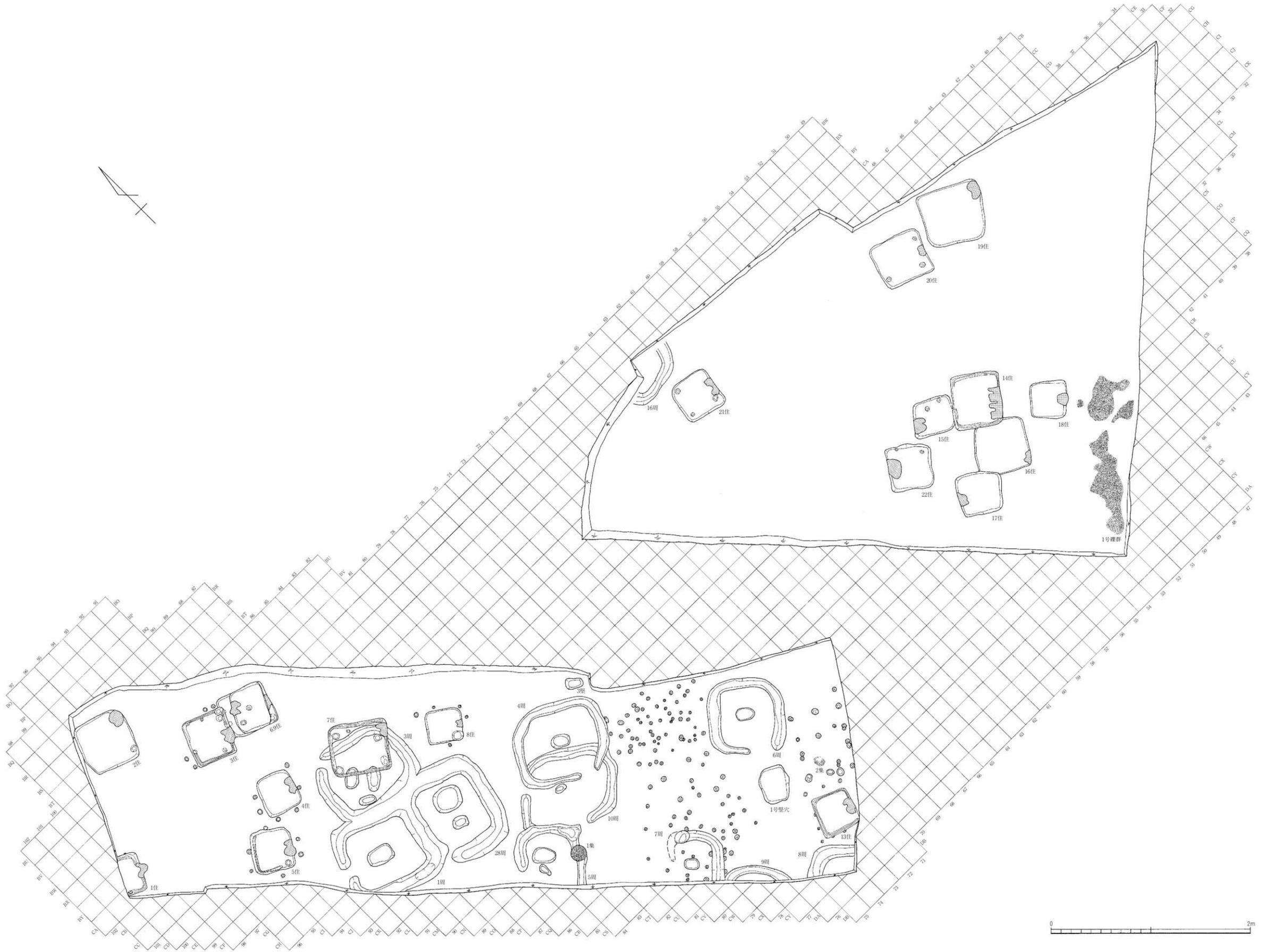
発行日 平成24年3月30日

編集 辰野町教育委員会

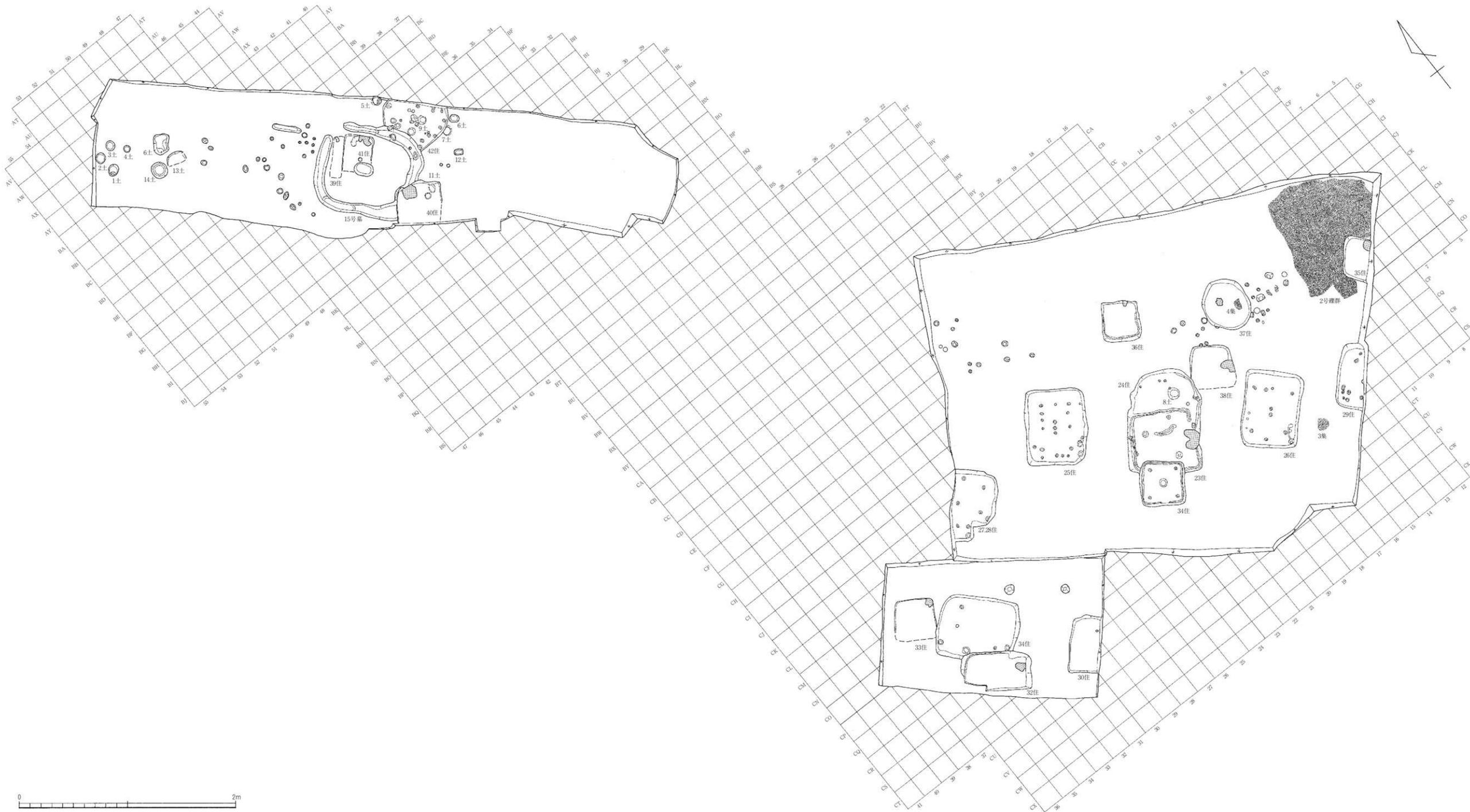
〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1
電話 0266(41)1111

印刷 鬼灯書籍株式会社

〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
電話 026(244)0235



付図1 荒神山おんまわし遺跡第1次調査南部調査区全体測量図 (S=1/200)



付図2 荒神山おんまわし遺跡第1次調査北部調査区全体測量図 (S=1/200)

